新潟県埋蔵文化財調査報告書　第236集

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅹ

二 反 割 遺 跡
延 命 寺 遺 跡 Ⅱ

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅹ

二反割遺跡（にたんわり）
延命寺遺跡Ⅱ（えんめいじ）

２０１２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道253号上越三和道路は、上越市寺と上越市三和区本郷を結ぶ地域高規格道路で、上越市から南魚沼市に至る一般国道253号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域振興快速道路は、上越地域と魚沼地域の交流を促進するとともに、北陸自動車道や関越自動車道と合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指しています。これにより、産業・経済・文化の広域的な交流が活発になり、地域の活性化を促進するものと期待されています。

本書は、この上越三和道路建設に先立ち、平成23年度に実施した二反割遺跡・延命寺遺跡Ⅱの発掘調査報告書です。

この調査で二反割遺跡は古墳時代、古代、中世の遺跡であることが明らかとなり、古墳時代は集落の縁辺部を、中世（12世紀）は集落の一部を調査しました。特に、中世の集落は規模の異なる掘立柱建物、倉庫、井戸、土坑で構成され、これを大規模な溝（堀）で区画する村の姿が明らかとなりました。また、遺跡のあった岡木集落は近世初期以降の集落ですが、この地域に古墳時代からの歴史があることが分かりました。

延命寺遺跡Ⅱでは古墳時代、飛鳥時代、奈良時代を調査しました。平成18・19年度の調査に照らし合わせると、飛鳥時代は集落の縁辺部の状況が、奈良時代は集落の周辺に広がる水田の姿が明らかとなりました。

これらの発掘調査で得られた成果や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深め、地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後に、この発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた上越市教育委員会並びに地元の方々、また、発掘調査から本書の作成まで、格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本書は、新潟県上越市三和区大字岡木字二反割 1,013 番地ほかに所在する二反割遺跡、上越市大字下野田字延命寺（市道諏訪上野田線下）に所在する延命寺遺跡の発掘調査記録である。『延命寺遺跡Ⅱ』は 2011（平成 23）年度に実施した第 2 次の発掘調査で、延命寺遺跡の 2 冊目の発掘調査報告書である。

2　この調査は、一般国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所（以下、国交省という）から新潟県教育委員会（以下、県教委という）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に調査を依頼した。

3　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社吉田建設（以下、吉田建設という）に委託して、2011（平成 23）年度に発掘調査を実施した。

4　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の注記は、二反割遺跡の略記号「11 ニタン」、延命寺遺跡Ⅱの略記号「11 エンメⅡ」にそれぞれ出土地点、遺構名、層位等を続けて記した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　掲載遺物の番号は、遺跡ごとに種別に関わらず、すべて通し番号とした。本文及び観察表、図面図版、写真図版の番号は、すべて一致している。

8　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付けた。また引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　自然科学分野にかかる分析は、下記の機関に委託して行い、了解を得て再編集した。

　二反割遺跡：放射性炭素年代測定、花粉分析、珪藻分析……株式会社古環境研究所

　延命寺遺跡Ⅱ：放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定……株式会社古環境研究所

10　遺構図・遺物実測図のトレース及び各種図版の作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。

11　本書の執筆は、細井佳浩（吉田建設埋蔵文化財部　主任調査員）、今井昭俊（吉田建設埋蔵文化財調査部　調査員）、髙橋保雄（埋文事業団調査課　課長代理）が当たり、編集は各執筆者が行い、髙橋が取りまとめた。なお原稿の一部は、山下　研（吉田建設埋蔵文化財調査部　調査員）が校正した。執筆分担は以下のとおりである。

　細井佳浩：第Ⅰ章 2B 2）、第Ⅲ章 4C 1）・5A・5B 1）・2）・3）a b・7A 1）・2）b、
　　第Ⅳ章 1・3・4・5A・5B 1）2）a c・7

　今井昭俊：第Ⅰ章 2B 1）、第Ⅱ章、第Ⅲ章 1・4A・4B・4C 2）a b c e・7A 2）a

　髙橋保雄：第Ⅰ章 1・2A・3、第Ⅲ章 2・3・4C 2）b d・5B 3）c d、第Ⅳ章 2・5B 2）b

　株式会社古環境研究所：第Ⅲ章 6、第Ⅳ章 6

12　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

　相羽重徳　　岡村郁栄　　中西　聡　　中村直人　　藤巻正信　　水澤幸一　　山本幸俊　　山川辰夫
　横山勝栄　　上越市下野田町内会　　上越市三和区岡木町内会　　上越市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 2
A　試掘・確認調査 …… 2
B　本発掘調査 …… 4

3　発掘調査体制と整理作業 …… 6
A　試掘・確認調査 …… 6
B　本発掘調査・整理作業 …… 6
C　整理作業の経過 …… 7

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境 …… 8

2　遺跡の分布と歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　二反割遺跡

1　遺跡の立地と周辺の微地形 …… 13

2　グリッドの設定 …… 14

3　基本層序 …… 14

4　遺　　構 …… 16
A　概　　要 …… 16
B　遺構の記述と表記方法 …… 16
C　遺構各説 …… 17

5　遺　　物 …… 23
A　概　　要 …… 23
B　遺物各説 …… 23

6　自然科学分析 …… 26
A　はじめに …… 26
B　試　　料 …… 26
C　放射性炭素年代測定 …… 27
D　花粉分析 …… 28
E　珪藻分析 …… 29
F　考察とまとめ …… 33

7　ま　と　め …… 35
A　遺構・遺物から見た遺跡の位置付け …… 35

第Ⅳ章　延命寺遺跡Ⅱ

1　遺跡の立地と周辺の微地形 …… 41

2　グリッドの設定 …… 42

3　基 本 層 序 …… 42

4　遺　　構 …… 43
　A　概　　要 …… 43
　B　記 述 方 法 …… 44
　C　遺 構 各 説 …… 44

5　遺　　物 …… 47
　A　概　　要 …… 47
　B　遺 物 各 説 …… 47

6　自然科学分析 …… 48
　A　はじめに …… 48
　B　試　　料 …… 48
　C　放射性炭素年代測定 …… 49
　D　樹 種 同 定 …… 50
　E　種 実 同 定 …… 54
　F　ま　と　め …… 55

7　ま　と　め …… 56
　A　遺構・遺物から見た遺跡の位置付け …… 56

《要　約》

《引用・参考文献》

《観察表》
　二反割遺跡　遺構観察表
　二反割遺跡　遺物観察表

挿 図 目 次

第１図　上越三和道路の予定路線と調査遺跡の位置… 1
第２図　二反割遺跡　試掘調査トレンチ位置図…… 2
第３図　延命寺遺跡　試掘・確認調査トレンチ位置図… 3
第４図　高田平野の地形分類図 …… 9
第５図　高田平野における古墳時代～中世の
　　主な遺跡分布 …… 11
第６図　二反割遺跡の位置と周辺の微地形…… 13
第７図　二反割遺跡　グリッド設定図 …… 14
第８図　二反割遺跡　基本層序 …… 15
第９図　遺構の平面形態と断面形態の分類…… 17
第10図　暦年較正結果 …… 27
第11図　二反割遺跡における花粉ダイアグラム…… 29
第12図　二反割遺跡の花粉・胞子…… 30
第13図　二反割遺跡における主要珪藻ダイアグラム… 31
第14図　二反割遺跡の珪藻…… 32
第15図　二反割遺跡　掘立柱建物の軸方位…… 37
第16図　二反割遺跡　遺構の時期別分類図…… 37
第17図　上越市内出土の柱状高台皿…… 39
第18図　延命寺遺跡の位置と周辺の微地形…… 41
第19図　延命寺遺跡　グリッド設定図 …… 42
第20図　延命寺遺跡Ⅱ　基本層序…… 43
第21図　暦年較正結果…… 49
第22図　延命寺遺跡Ⅱの木材（1）…… 51
第23図　延命寺遺跡Ⅱの木材（2）…… 52
第24図　延命寺遺跡Ⅱの種実…… 55
第25図　延命寺遺跡　水田跡概念図（左）と
　　出土した主な木製農具（右）…… 57

表　目　次

第１表　高田平野の古墳時代～中世の主な遺跡…… 10
第２表　センター杭及び主要グリッド杭の座標…… 14
第３表　測定試料及び処理…… 27
第４表　測定結果 …… 27
第５表　二反割遺跡における花粉分析結果…… 28
第６表　二反割遺跡における珪藻分析結果…… 31
第７表　二反割遺跡で推定される環境と植生 …… 33
第８表　上越市内出土の珠洲焼Ⅰ期の
　　片口鉢計測表…… 39
第９表　延命寺遺跡Ⅱ　試料一覧…… 49
第10表　測定結果 …… 49
第11表　延命寺遺跡Ⅱ　樹種同定結果 …… 50
第12表　延命寺遺跡Ⅱ　種実同定結果 …… 54
第13表　延命寺遺跡Ⅱ　種実計測値…… 54

図 版 目 次

【図面図版】
図版1　二反割遺跡　遺構全体図
図版2　二反割遺跡　遺構分割図１
図版3　二反割遺跡　遺構個別図１
図版4　二反割遺跡　遺構分割図２
図版5　二反割遺跡　遺構個別図２
図版6　二反割遺跡　遺構分割図３
図版7　二反割遺跡　遺構個別図３
図版8　二反割遺跡　遺構個別図４
図版9　二反割遺跡　遺構個別図５
図版10　二反割遺跡　遺構個別図６
図版11　二反割遺跡　遺構個別図７
図版12　二反割遺跡　遺構分割図４
図版13　二反割遺跡　遺構個別図８
図版14　二反割遺跡　遺構個別図９
図版15　二反割遺跡　遺物実測図１
図版16　二反割遺跡　遺物実測図２
図版17　二反割遺跡　遺物実測図３
図版18　延命寺遺跡　2006・2007・2011(平成18・19・23)年度遺構全体図（Ｘ層）
図版19　延命寺遺跡Ⅱ　遺構全体図（Ｘ層）
図版20　延命寺遺跡Ⅱ　遺構分割図（Ｘ層）
図版21　延命寺遺跡Ⅱ　遺構個別図（Ｘ層・Ⅸ層上面（1））
図版22　延命寺遺跡　2007・2011(平成19・23)年度遺構全体図（Ⅸ層上面）
図版23　延命寺遺跡Ⅱ　遺構全体図（Ⅸ層上面）
図版24　延命寺遺跡Ⅱ　遺構個別図（Ⅸ層上面（2））
図版25　延命寺遺跡Ⅱ　遺物実測図

【写真図版】
図版26　二反割遺跡　遺跡の位置
図版27　二反割遺跡　遺跡全景・遠景
図版28　二反割遺跡　基本層序・古墳時代の遺構・中世の遺構
図版29　二反割遺跡　SB126・127
図版30　二反割遺跡　SB261・262・263
図版31　二反割遺跡　SB262・263･124
図版32　二反割遺跡　SB125・井戸1
図版33　二反割遺跡　井戸2・土坑1
図版34　二反割遺跡　土坑2・性格不明遺構
図版35　二反割遺跡　SB121
図版36　二反割遺跡　SB122・123・井戸
図版37　二反割遺跡　古墳・奈良・平安時代の土器
図版 38　二反割遺跡　中世の土器・陶磁器（1）
図版 39　二反割遺跡　中世の土器・陶磁器（2）・土製品・石製品・金属製品
図版40　延命寺遺跡Ⅱ　遺跡の位置・遺跡全景
図版41　延命寺遺跡Ⅱ　遺跡近景・基本層序・土坑・水田跡・畦畔
図版 42　延命寺遺跡Ⅱ　遺跡近景・基本層序・下層完掘・ピット
図版43　延命寺遺跡Ⅱ　下層　ピット／上層　水田跡
図版44　延命寺遺跡Ⅱ　上層　水田跡・作業風景
図版 45　延命寺遺跡Ⅱ　土器・石製品・木製品

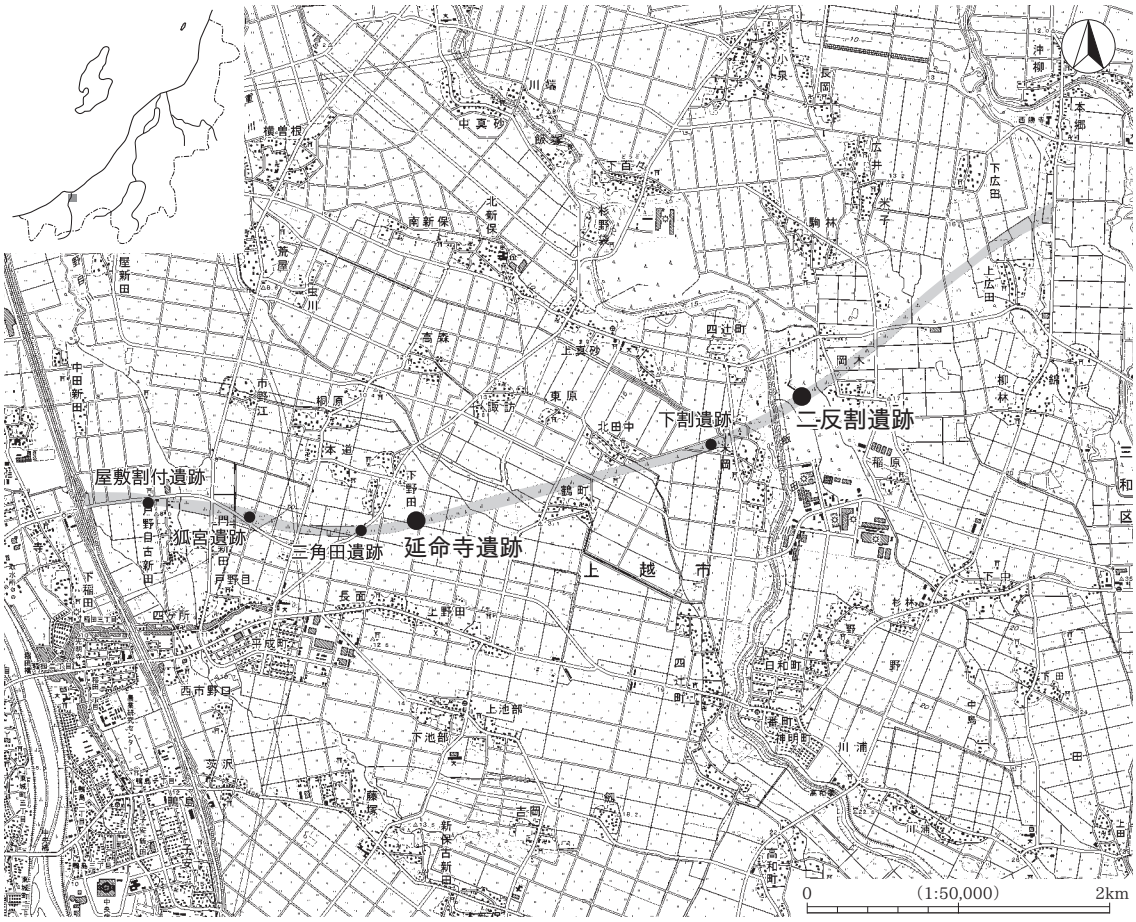
第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

上越魚沼地域振興快速道路（延長約 60km）は、上越市と南魚沼市を結び、両地方の交流を促進するとともに、高規格幹線道路の北陸自動車道と関越自動車道を合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成する地域高規格道路である。同道路の完成により上越～十日町～六日町間の通行時間は大幅に短縮され、日本海側と首都圏を結ぶ最短経路となり、広域的な交流が活発になるものと期待される。

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路の一部で、上越市寺～同市三和区本郷までの 7.4km 区間の道路である。上越地方拠点都市地域内の連携強化を図り、地域の活性化を促進することを目的としている。同道路は 1998（平成10）年度に整備区間に指定され、2000（平成 12）年度に都市計画道路に決定された。

これを受けて国交省は、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団は、2001（平成 13）年 4 月に計画予定地の上越市寺～同市三和区本郷の法線内を対象に分布調査を実施した。調査の結果、24 か所から主に古代・中世の遺物が採集されたため、ほぼ全域にわたり試掘・確認調査を行い、遺跡の有無を確認する必要があると報告した。



第 1 図　上越三和道路の予定路線と調査遺跡の位置

［国土地理院発行「高田東部」1：25,000 原図　平成 19 年発行］

2001（平成 13）年 3 月、国交省から試掘・確認調査の依頼を受けた県教委は、調査を埋文事業団に委託した。2002（平成 14）年 3 月、埋文事業団は上越市米岡地内から試掘調査を始め、同地内の北側に隣接する下割遺跡が、計画予定地内に広がることを明らかにした。さらに 2003（平成 15）年 5 ～ 7 月に埋文事業団は、上越市戸野目地内～米岡地内を対象に試掘・確認調査を実施した。この調査により、延命寺遺跡、清水田遺跡、三角田遺跡が新たに発見され、下割遺跡は範囲が拡大した。

延命寺遺跡ではこの後、2003（平成 15）年 12 月、2006（平成 18）年 6・8・12 月の確認調査を経て、市道諏訪上野田線を含む同線の西側 10,000m^2 の本発掘調査が必要とした。二反割遺跡は 2009（平成 21）年 4 月の試掘調査で見つかった遺跡である。遺跡は東側に未調査区があり、範囲は確定できなかったものの、遺跡の西側 2,200m^2 について本発掘調査が必要とした。

一方、上越三和道路予定地内の本発掘調査は、2002（平成 14）年度に下割遺跡から始められた。以後、工事工程に合わせ毎年度、本発掘調査が行われている。延命寺遺跡は 2006・2007（平成 18・19）年度の 2 か年にわたり発掘調査が行われ、市道諏訪上野田線下を除き終了した。同調査の発掘調査報告書は 2008（平成 20）年度に刊行されている。

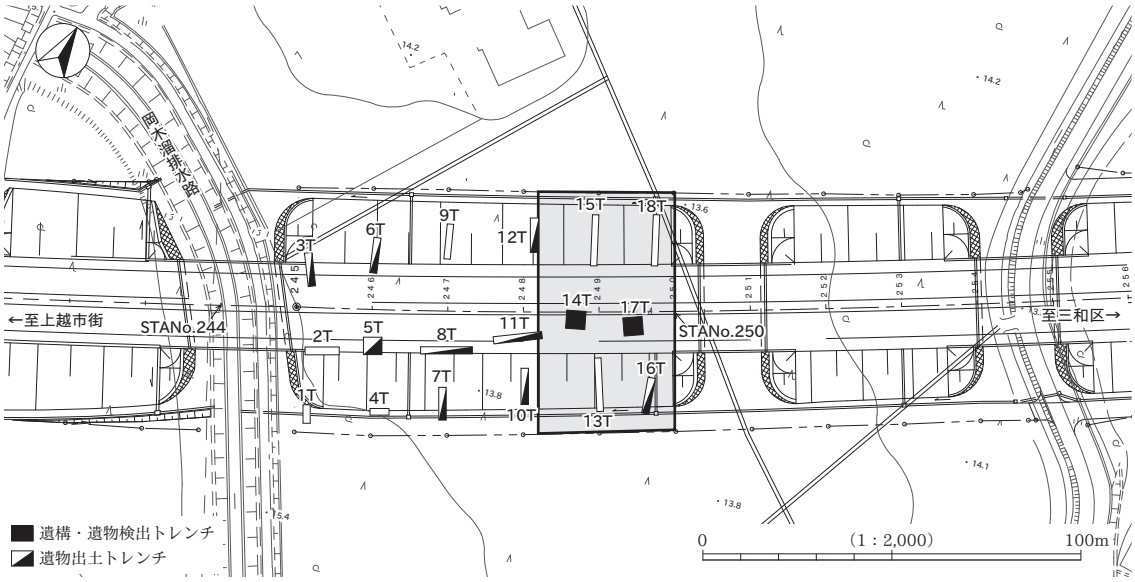
2010（平成 22）年 10 月、国交省、県教委、埋文事業団の調整会議で、国交省から延命寺遺跡、清水田遺跡、堂古遺跡、古屋敷割遺跡の本発掘調査の要望があり、この後、さらに協議を重ねた。2011（平成 23）年 3 月 15 日、国交省は県教委に延命寺遺跡（800m^2）、下割遺跡（2,800m^2）、二反割遺跡（2,200m^2）の本発掘調査を依頼（国北整高二調第 64 号）した。依頼を受けた県教委は、3 月 17 日、調査を埋文事業団に委託（教文第 1443 号の 2）した。埋文事業団は同年 4 月に下割遺跡、6 月に二反割遺跡、7 月に延命寺遺跡の本発掘調査を実施した。

2　調 査 の 経 過

A　試掘・確認調査

1）二 反 割 遺 跡（第 2 図）

県教委から委託を受け、2009（平成 21）年 4 月 15 ～ 24 日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は、



第 2 図　二反割遺跡　試掘調査トレンチ位置図（アミは本調査必要範囲）

岡木溜排水路の東、法線センター杭 STANo.244+15m ～ No.250 間である。調査対象面積 6,900m² に任意のトレンチを 18 か所設定した。トレンチは重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査により、地山漸移層までの層序は北側の一部に黒褐色土を確認したものの、大半は表土と地山が混じる層で構成され、明確な遺物包含層は検出できなかった。遺構は 14 トレンチ（以下、№Ｔとする）で土坑１基とピット２基、17T で土坑２基とピット５基を検出した。遺物は３･５～８･10～12･14･16･17T から土師器を主体に、須恵器が少量出土した。すべて表土（旧耕作土）からの出土で、細片で器形の分かるものは少なかったが、古墳時代と見られる土師器が出土した。したがって、11･12T を結んだ線の東側で、遺構を検出した 14･17T を含む STANo.250 までの 2,200m² を本発掘調査必要範囲とした。

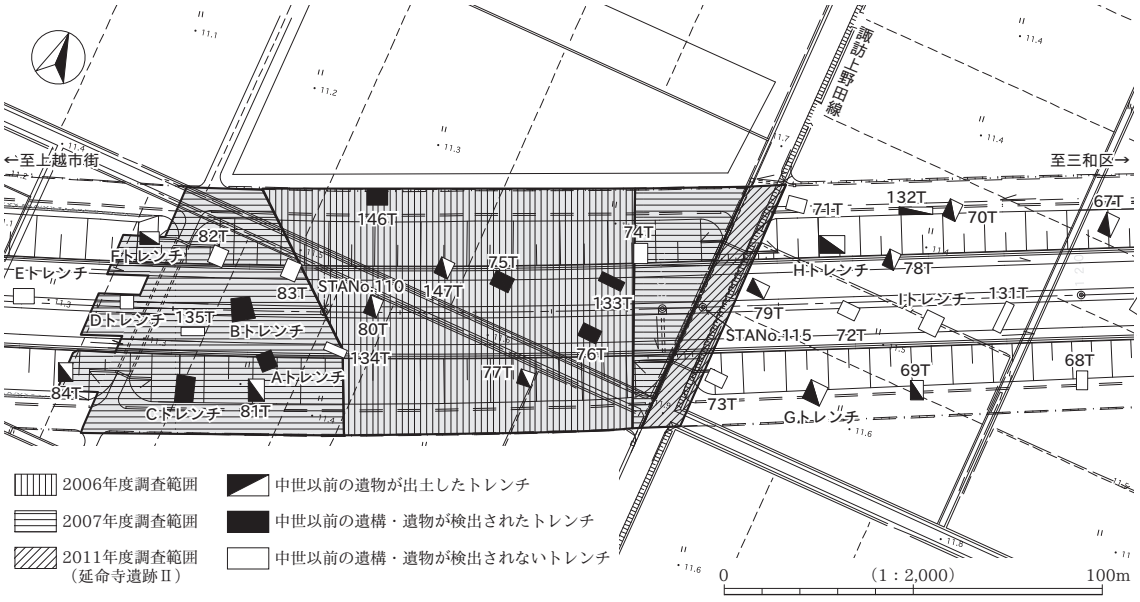
なお、STANo.250 から東側は用地交渉の関係から試掘調査ができなかった。したがって、今後の試掘調査で東側の本発掘調査範囲を明らかにすることとなった。

2）延 命 寺 遺 跡（第３図）

用地取得の関係や本発掘調査の状況から 2003・2006（平成 15・18）年度に行った。

2003（平成 15）年度

県教委から委託を受け、１回目は 2003（平成 15）年５月６日～６月 17 日、７月 15 日、２回目は 12 月 19 日に埋文事業団が実施した。１回目の調査対象範囲は、戸野目地内～米岡地内までの 167,000m² である。調査対象範囲に任意のトレンチを 141 か所設定し、重機及び人力による掘削･精査を行い、遺構･遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。調査により、清水田遺跡、延命寺遺跡、三角田遺跡が新たに発見され、下割遺跡の範囲が拡大した。延命寺遺跡については、現地表下 1.2m で古墳時代の遺物包含層が確認され､75T では土坑２基､76T では溝２条が検出された。遺物は古墳時代の土師器が主体で、多くのトレンチから出土したが、75・77T からやや多く出土した。これらの結果を踏まえ、遺構・遺物が検出された地点を中心に、まず 3,850m² を本発掘調査対象範囲とした。



第３図　延命寺遺跡　試掘・確認調査トレンチ位置図

（アミは本調査必要範囲。Ｊ・Ｋトレンチは調査範囲から東に離れているため、図示されていない）

2 回目は本発掘調査対象範囲の北西に隣接する未買収地の買収後に行った。トレンチは 2 か所（第 3 図 146・147T）であったが、現地表下 1m 前後で古墳時代、奈良時代の遺物包含層を確認し、146T で土坑 2 基を検出した。遺物は古墳時代中期～後期の土師器や奈良時代の須恵器が出土した。これにより 1,470m^2 を追加し、1 回目と合わせ本発掘調査必要範囲が 5,320m^2 に拡大した。

2006（平成 18）年度

本発掘調査を行ったところ、遺構・遺物の分布が濃厚で、本発掘調査必要範囲がさらに拡大することが明らかとなった。そこで埋文事業団は、6 月 26 日、8 月 25 日、12 月 4・5 日に確認調査を実施した。調査は 2003（平成 15）年度に本発掘調査必要範囲とした西側と東側であり、任意に A ～ K トレンチ（以下、記号 T とする）を設定した。これにより、A ～ CT では現地表下 1.5m 前後で古墳時代、奈良時代の遺物包含層を確認し、A・CT で溝 1 条、BT でピット 1 基を検出した。遺物は AT で土師器と木製品、B・CT で土師器が出土した。これ以外のトレンチでは古墳時代、奈良時代の遺物は出土せず、明確な遺物包含層は確認されなかった。したがって、西側は A ～ CT を含む 3,060m^2、東側は市道諏訪上野田線を含む範囲の 1,620m^2 を追加し、これまでと合わせ本発掘調査必要範囲が 10,000m^2 に拡大した。

B　本 発 掘 調 査

1）二 反 割 遺 跡

本発掘調査は、2011（平成 23）年 6 月 27 日～ 9 月 15 日まで実施した。調査対象面積は当初 2,200m^2 であったが、遺構の広がりが認められたか所は国交省と県教委の協議を経て拡張した。拡張面積の合計は 500m^2 で、最終的な調査面積は 2,700m^2 である。

6 月 27 日から重機による表土掘削を調査区南東部隅から開始した。現況が杉林であったために切り株が多く残っており、しかも地山まで 30cm ほどしかないため、重機で切り株を引っ掛けないよう慎重に行った。掘削中、遺物包含層からの遺物の出土は極めて希薄であったことから遺構検出面まで掘削した。また、土層確認用のベルトを法線センター杭に沿って残しながら作業を進めた。6 月 30 日から作業員を入れ、調査区の壁やベルトの整形、開渠の掘削を始めた。7 月上旬から本格的に遺構の検出作業を開始した。遺構検出作業では両刃ガマ、遺構掘削には竹ベラや移植ゴテを主に使用した。

調査区北西部隅では古墳時代の土器が多数出土したため、当初の調査区よりも範囲を西へ拡大した。この付近は古墳時代の遺物集中区と判明した。また調査区南東部隅では掘立柱建物を検出し、一部の柱穴が当初の調査区よりも東へ延びることが明らかとなった。このため、こちらも調査範囲を東へ拡大した。これにより 3 棟の掘立柱建物を検出した。以後、調査区南側を西に向かって調査を進めた。8 月中旬には調査区南側半分の調査を終了した。8 月下旬からは調査区北側の調査に入り、3F・4F グリッドで柱穴を多数検出した。

8 月 25 日、大雨により調査区北西部の一角が冠水したが、水中ポンプの排水で大事には至らなかった。8 月 26 日、翌日に控えた現場説明会のために、排水作業及び会場設営を行った。8 月 27 日、遺跡や出土品の公開を目的に現地説明会を開催した。地元及び周辺地域の人々を中心に 85 名の見学者が訪れた。9 月 12 日、県教委から終了確認を受けた。9 月 13 日、ラジコンヘリコプターによる空撮と高所作業車による撮影を実施し、同日、平面測量も終了した。以後、後片付け、現場事務所撤去作業を行い、9 月 15 日をもって二反割遺跡の調査を終了した。

2）延 命 寺 遺 跡

2006（平成 18）年度

4 月 28 日～ 11 月 24 日に面積 5,320m² を対象に実施した。調査により 7 世紀前葉～ 8 世紀の遺構・遺物が出土し、当期の集落であることが判明した。7 世紀（飛鳥時代）の遺構は竪穴建物 4 棟、平地建物 5 棟、井戸 3 基などである。竪穴建物は壁溝、さらにその外側に周溝を巡らすもので、低地に即した建物形態であった。平地建物には間隔を狭くして柱穴を設ける壁立ち式の構造のものが認められた。8 世紀（奈良時代）の遺構は掘立柱建物 3 棟、井戸 7 基、耕作溝などである。中でも盛土による整地層を伴う掘立柱建物が特筆された。また、木簡の削りくずや琴柱などの木製品や刀子などが出土したゴミ穴と思われる径 4m の土坑、木製祭祀具がまとまって出土した土坑などが注目された。

遺物は 7 世紀～ 8 世紀の土器が主体で、7 世紀の須恵器には杯、蓋、椀、提瓶などがある。また低湿地であることから、木製品も多く出土し、祭祀具、琴柱、火鑽臼･杵、櫛、糸巻き、農具など多種にわたった。このほか耳環、巡方、銅鈴などの金属製品や天平 8 年の紀年銘木簡や具注暦、出挙関係の木簡が注目された。

このことから 7 世紀は上越地方でも有力な集落、8 世紀は官衙との関連性がうかがえた。

2007（平成 19）年度

5 月 2 日～ 10 月 23 日に面積 3,924m² を対象に実施した。調査区は前年の調査区を拡大した東側と西側である。調査により、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の遺構・遺物を検出した。古墳時代の遺構は溝 2 条、土坑 1 基などであり、調査区の東側に偏在した。飛鳥時代の遺構は土坑 3 基、ピット 2 基と少なく、奈良時代の遺構が主体を占める。奈良時代の遺構は、掘立柱建物 3 棟、畑、水田などである。掘立柱建物の 2 棟は、2006（平成 18）年度調査のものと形態が共通し、ほかの 1 棟は倉庫と考えられるものである。調査区内では微高地に掘立柱建物が、その周辺には畑が位置し、東側の微高地背後の低地を水田として利用した土地利用の様子がうかがえた。遺物は奈良時代の土器を主体とするが、帯金具などの金属製品、琴柱、火鑽臼、農具などの木製品、木簡などが出土している。木簡は天平 7（735）年が記され、現存最古の田畑の売買に関する売券木簡が注目された。同木簡から郷里制下に書かれたことや地名の「野田村」の存在、「田領」という郡役人の存在など貴重な調査成果となった。

2006 年度の調査成果と合わせ、奈良時代の遺跡が郡衙の機能の一部を担った出先機関で、「田領」がいた可能性が高まった。なお、調査面積は最終的に 4,224m² となった。

2011（平成 23）年度

奈良時代の水田跡の調査、古墳～飛鳥時代の遺構面の調査の面積 800m² を 7 月 25 日～ 9 月 15 日まで実施した。調査範囲は北側と南側を矢板打設、東側と西側は安全勾配の法面とし、東側法尻部に排水を目的とする暗渠を設置した。盛土、表土は重機を用いて掘削した。人力による調査は、包含層掘削には大型の竹ベラを、遺構検出には両刃ガマを、遺構掘削には竹ベラ、移植ゴテを主に使用した。遺物の取り上げは 2m ごとの小グリッドを基本とし、遺構出土の遺物はこれに遺構名を付した。

7 月 25 日から重機による表土掘削を開始した。今回の調査では、2007（平成 19）年度調査の結果からⅨ層上面を検出面とする水田跡の畦畔が検出されることが予測されたため、重機掘削の際、Ⅴ層から下の砂層を慎重に掘り下げ、Ⅸ層がわずかに表出したところで止めた。7 月 27 日から人力による開渠掘削、西壁の整形を行う。8 月 3 日からⅨ層上面を検出面する水田跡の調査を始めた。粗砂、Ⅷ層の青灰色シルトを取り除いた結果、2007 年度に検出された北西－南東方向の小畦畔 2 条に続くものに加え、東西方向

の小畦畔、また、北側で小区画の水田跡を検出した。8 月 11 日に高所作業車から全体写真撮影、8 月 12 日に測量を行い、Ⅸ層上面の調査を終了した。

8 月 22 日から調査を再開し、包含層（Ⅸ層）の掘削を行う。8 月 25 日、大雨により法面の北東部分が決壊し、調査区東側の排水路から泥水とともに大量の土砂が調査区内に流入した。このため 9 月 2 日まで調査と並行して、法面の復旧と土砂の除去を行った。9 月 6 日からⅩ層を検出面とする遺構検出、9 月 8 日から遺構掘削を行う。9 月 13 日にラジコンヘリコプターの空撮及び高所作業車の撮影を行い、9 月 15 日に平面測量が終わり、調査を終了した。

3　発掘調査体制と整理作業

延命寺遺跡の試掘・確認調査、本発掘調査は多年度にわたるため、ここでは延命寺遺跡Ⅱに直接関係する調査体制と二反割遺跡の調査体制を記述する。

A　試掘・確認調査

遺跡名(年度)	二反割遺跡（2009（平成 21）年度）	延命寺遺跡（2006（平成 18）年度）
調査期間	2009 年 4 月 15 日～ 24 日	2006 年 6 月 26 日、8 月 25 日、12 月 4・5 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村正昭（事務局長）	波多俊二（事務局長）
管　　理	斎藤　栄（総務課長）	斎藤　栄（総務課長）
庶　　務	松原健二（　同　班長）	長谷川靖（　同　班長）
調査総括	藤巻正信（調査課長）	藤巻正信（調査課長）
調査指導		寺崎裕助（　同　課長代理）
調査担当	田海義正（　同　課長代理）	山崎忠良（　同　班長　）
調査職員	石川智紀（　同　主任調査員）	

B　本発掘調査・整理作業（2011（平成 23）年度）

調査期間	二反割遺跡：2011 年 6 月 27 日～ 9 月 15 日　延命寺遺跡Ⅱ：2011 年 7 月 25 日～ 9 月 15 日
整理期間	2011 年 9 月 16 日～ 2012 年 3 月 31 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村正昭（事務局長）
管　　理	今井　亘（総務課長）
庶　　務	伊藤　忍（　同　班長）
調査総括	北村　亮（調査課長）
調査担当	髙橋保雄（　同　課長代理）
支援組織	株式会社吉田建設
現場代理人	渋木宏人（埋蔵文化財調査部）
調　査　員	今井昭俊　　細井佳浩　　山下　研（以上、埋蔵文化財調査部）
補　助　員	鈴木ゆかり　本間智子　矢部千栄子　中村美智子　桜井美由貴（以上、埋蔵文化財調査部）

C　整理作業の経過

図面・写真の基礎整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場（現地事務所）と支援業者の整理室（以下、吉田建設巻整理室とする）で本発掘調査と並行して行った。調査終了後の９月中旬からは調査資料のすべてを吉田建設巻整理室に搬入し、整理作業を行った。主な作業は出土遺物の注記、接合・復元、実測･拓本、遺構写真の CD 化抽出、遺構図面の点検修正、遺構図面図版組み、遺構写真図版作成、遺物図面図版組み、遺物写真撮影、遺物写真図版組み等である。その後、遺構・遺物の観察表作成、原稿執筆、編集・校正、後片付けを行った。

二反割遺跡　炎天下での現地作業風景（7 月 20 日）

二反割遺跡　現地説明会（8 月 27 日）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

ここでは、二反割遺跡と延命寺遺跡Ⅱが所在する高田平野の地理的環境について、『第 171 集 狐宮遺跡』の「2 遺跡周辺の地理的環境」［桐原 2007］を一部修正・加筆して引用する。

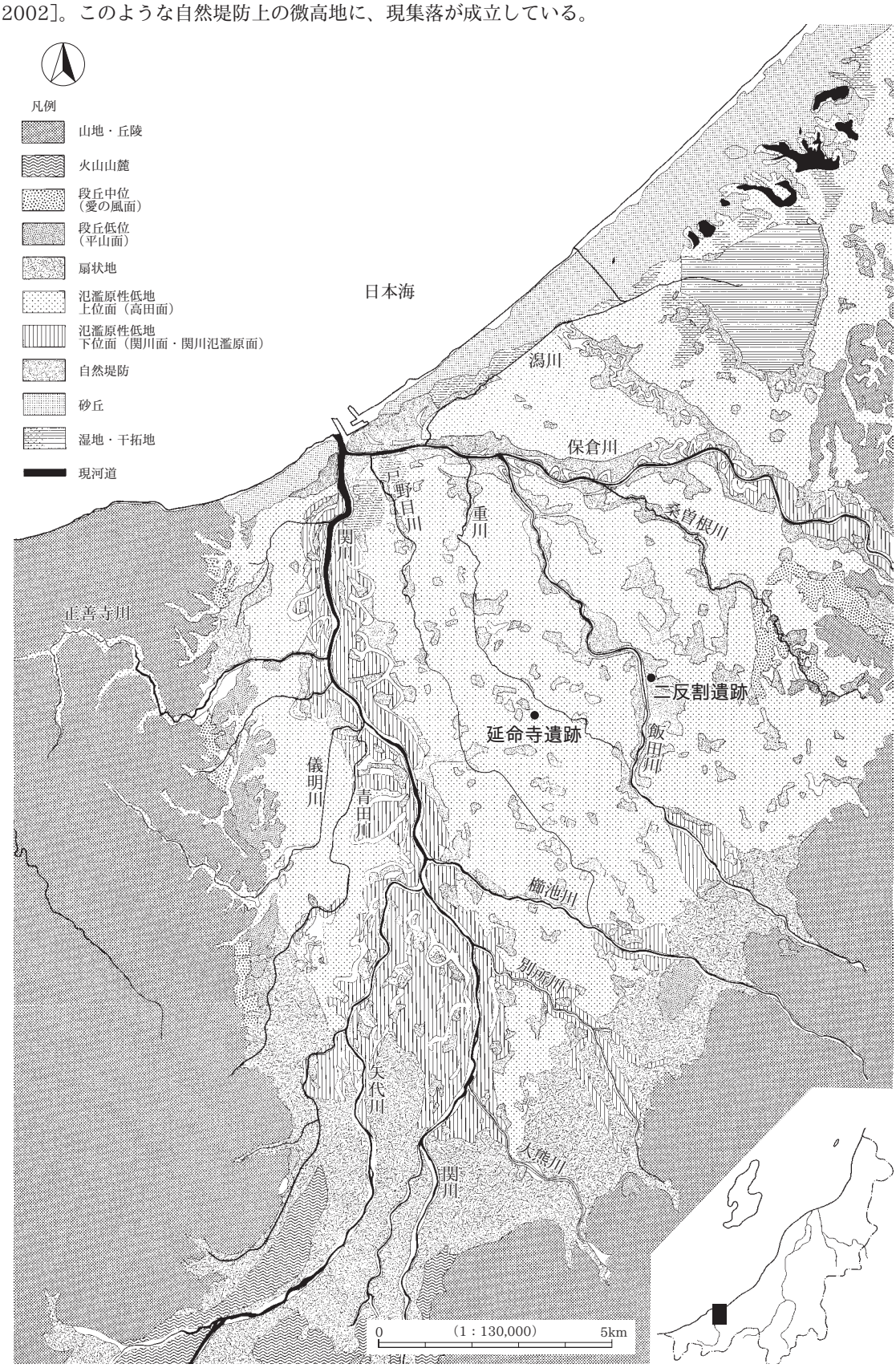
二反割遺跡と延命寺遺跡Ⅱが立地する高田平野は、新潟県南西部に位置する沖積平野である。その形状は、上越市五智、同市柿崎区竹鼻、同市三和区岡田、妙高市小出雲付近を頂点とする不等辺四角形におおむねなっている。北辺は、長さ約 20km にわたり潟町砂丘が発達し、海岸と平野を区画している。東辺から南東辺には、東頸城丘陵が広がり、柏崎平野・越後平野・十日町盆地・長野盆地と高田平野を隔てている。東頸城丘陵北端には、米山を主峰とする米山山地、南東部には信越国境をなす関田山脈、南端には斑尾山がそびえている。西辺には西頸城丘陵が広がっている。この丘陵は、海岸に沿って西方に延び、糸魚川市の平野部と高田平野とを隔てている。西頸城丘陵南方には西頸城山地が連なり、その北端には青田難波山、南端には主峰の火打山（2,462 m）がそびえている。さらに、その南には、富士火山帯の北端をなす、焼山（2,400 m）及び妙高山（2,454 m）の両火山がそびえ、平野南端は、妙高山の岩屑流、火砕流により形成された丘陵と接している。

平野には、これら周辺の山地・山脈、丘陵から多数の河川が流入している。平野最大の河川である関川は、火打山･妙高山及び長野県との境をなす高妻山･乙妻山の地域を水源とし、平野を西偏しながら北流し、日本海に注いでいる。途中、妙高山から白田切川・大田切川などが、西頸城山地から矢代川・青田川などが、西頸城丘陵から儀明川・正善寺川などが関川に合流する。また、東頸城丘陵や関田山脈からは、大熊川・別所川・櫛池川・飯田川・保倉川などの中小河川が関川に合流する。平野の北東部では、東頸城丘陵・米山山地を水源とする吉川・大出口川・柿崎川などが平野に流れ出し、直接日本海に注いでいる。

南東部から南西部にかけて、関川や矢代川をはじめ、大熊川・別所川・櫛池川・飯田川などにより形成された扇状地が発達している。

高田平野の地形面は、階段状であり、最も低い関川氾濫原面・関川面・最も高い高田面と２段の沖積段丘を形成している。二反割遺跡と延命寺遺跡をのせる高田面は、主に礫・砂・シルトの互層からなる高田層によって形成された堆積面であり、その分布は平野の大部分を占める。平野の中央部において高田面の表層地質や珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかになった［高田平原団体グループ 1962］。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなっている。平野に分布する遺跡の時代を検討した結果、高田面は古墳時代初頭から段丘化し始め、数回に及ぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている［高田平野団体研究グループ 1981、岡本 1999］。しかしながら、2005（平成 17）年度の狐宮遺跡の発掘調査で、縄文時代の草創期の石器や縄文時代後・晩期の土器が出土したことにより、少なくとも縄文時代の後半には人々が居住し得る環境が整っていた可能性があり、高田面の形成年代については再検討が必要であろう。飯田川と関川の間には、小規模な自然堤防が点在し、その分布は、一定の方向性をもって配列している。その配列に従って灌漑水路が通り、戸野目川・重川のような小河川が

流れているので、かつてはここに丘陵地から流れ出した川が流れていたのではないかと推察される［高野2002］。このような自然堤防上の微高地に、現集落が成立している。



第４図　高田平野の地形分類図

［『第 227 集　狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳ』より転載・一部修正］

2　遺跡の分布と歴史的環境

二反割遺跡（1）・延命寺遺跡Ⅱ（2）が立地する高田平野とその周辺に広がる古墳時代～中世の遺跡の主な分布は第5図に示す通りである。

古墳・飛鳥時代

高田平野には、古墳時代中・後期の群集墳が周縁の丘陵上を中心に多く分布する。南西部の関川左岸には、5世紀後半から6世紀にかけて造営された、黒田古墳群（3）･稲荷山古墳群（4）･天神堂古墳群（5）･などがある。これらの古墳は、少数の大型の円墳と多数の小型の円墳によって構成されており、木棺直葬の主体部を持つ［秦 2002］。

南東部の飯田川扇状地及び後背丘陵には、6世紀後半から7世紀中ごろにかけて造営された菅原古墳群（6）・水科古墳群（7）・宮口古墳群（8）・水吉古墳群（9）などがある。菅原古墳群には、県指定史跡である31号古墳が存在する。16号墳の玄室内部から刀子や直刀が出土している［秦ほか 2000］。水科古墳群と宮口古墳群は、同一集団によって造営された古墳群であると推定されている。規模は失われたものも含め100基近い数があったとされ、県内の群集墳では最大規模を誇る［小島 2004］。副葬品は宮口古墳群の11号古墳や26号古墳からは武具や馬具が出土し［秦ほか 1976］、水科古墳群の21号墳からは直刀や刀子などの刀剣類が出土した［金子ほか 1979］。

二反割遺跡から南東約1kmのところに稲原大野古墳群（10）が立地する。この古墳群は、5世紀後半から6世紀前半に造営されたとされ、大小16基の古墳で構成されている。個々の古墳は、円形の周溝のみを残すだけで中央部の墳丘は削平されている。主体部は不明であるが、おそらく木棺直葬とされる［秦 2002］。

古墳時代の集落遺跡は、前期に属すのが津倉田遺跡（11）・前田遺跡（12）・北割遺跡（13）・下割遺跡（14）などである。これらの遺跡は、平野中央部の沖積地に立地している［小島 2004］。中期の集落には、月岡遺跡（15）・北割遺跡・荒町南新田（16）などが挙げられるが、集落の遺跡数は極端に少なくなっている。荒町南新田遺跡では、古墳時代前期後半～中期の竪穴住居2棟と壁立式の平地建物1棟が自然流路の付近で検出されている［金内 2010］。後期では、関川流域で峪ノ上遺跡（17）・倉田遺跡（18）・杉明遺跡（19）宮ノ本遺跡（20）・荒町南新田遺跡などで、平野南東部の扇状地上に立地する。山畑遺跡（21）においては7世紀前半の竪穴住居が32棟検出され、什器が使用されていた当時の姿で出土している［小島 1979］。荒町南新田遺跡と北新田遺跡（22）の両遺跡は隣同士の遺跡であり、弥生時代後半から中世までの集落の変遷を知ることができる。7世紀前葉～中葉では、自然流路に沿うようにして22棟の竪穴

No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代
1	二反割遺跡	古墳・中世	12	前田遺跡	古墳・平安	23	岡嶺遺跡	古墳～飛鳥	34	御館跡	中世
2	延命寺遺跡	古墳～古代	13	北割遺跡	古墳	24	三角田遺跡	古代～近世	35	安国寺跡	中世
3	黒田古墳群	古墳	14	下割遺跡	古墳～中世	25	狐宮遺跡	古代	36	樋田遺跡	中世
4	稲荷山古墳群	古墳	15	月岡遺跡	古墳・古代	26	越前遺跡	古代	37	水久保遺跡	中世
5	天神堂古墳群	古墳	16	荒町南新田遺跡	弥生～中世	27	今池遺跡	奈良・平安	38	横曽根遺跡	中世
6	菅原古墳群	古墳	17	峪ノ上遺跡	飛鳥	28	本長者原廃寺遺跡	古代	39	仲田遺跡	中世
7	水科古墳群	古墳	18	倉田遺跡	奈良	29	子安遺跡	弥生～中世	40	用言寺遺跡	中世
8	宮口古墳群	古墳	19	杉明遺跡	飛鳥	30	下新町遺跡	奈良・平安	41	古屋敷割遺跡	平安～中世
9	水吉古墳群	古墳	20	宮ノ本遺跡	古墳	31	栗原遺跡	古代			
10	稲原大野古墳群	古墳	21	山畑遺跡	飛鳥	32	東沖遺跡	古代			
11	津倉田遺跡	古墳～奈良	22	北新田遺跡	弥生～中世	33	至徳寺遺跡	中世			

第1表　高田平野の古墳時代～中世の主な遺跡

第５図　高田平野における古墳時代～中世の主な遺跡分布

［国土地理院発行「高田平野東部」・「高田平野西部」・「柿崎」1：50,000 原図］

住居及び５棟の掘立柱建物が検出され、当該期の土器も多く出土した。かなり大規模な集落が営まれていたとうかがえる［金内 2008］。櫛池川流域では岡嶺遺跡（23）がある。岡嶺遺跡は菅原古墳群と同じ丘陵上に立地しており、造母集団の集落である可能性が指摘されている［秦 1990］。

奈良・平安時代

延命寺遺跡の周辺の遺跡は、三角田遺跡（24）・狐宮遺跡（25）・下割遺跡・越前遺跡（26）などがある。三角田遺跡では、8 世紀初頭に集落が営まれ始め、8 世紀中葉には一度廃絶してしまう。その後、8 世紀後半を中心に再び大規模な耕作域を持つ集落が営まれた［沢田ほか 2006］。狐宮遺跡は、9 世紀代を主体とする集落遺跡で、三角田遺跡と同様に建物群と耕作域がひとつのまとまりとして検出されている［飯坂ほか 2007］。下割遺跡は、8 世紀前葉から 10 世紀前葉にかけての集落遺跡である［野水ほか 2011］。延命寺遺跡・狐宮遺跡・三角田遺跡と同一線上に立地しているが、連続性は見られないことから当時の村の単位を表している可能性がある［飯坂ほか 2007］。越前遺跡では、自然流路に沿って計画的に配置された遺構が検出され、律令祭祀具や大量の墨書土器が出土したことから、公的機関または富裕層が関わった遺跡と推定される［笹澤 2003］。

越後の国府は、頸城郡に所在すると『和名類聚抄』に記されており、先学によって推定地がいくつか存在する。近年の発掘調査の結果、今池遺跡（27）の周辺が有力であり、付近の本長者原廃寺（28）が国分寺の推定地として有力視されている。今池遺跡周辺には、子安遺跡（29）や下新町遺跡（30）が立地する。前者は 9 世紀～ 10 世紀前半にかけて、この地域の中核遺跡である。後者は、規則的に配置された掘立柱建物が検出され「東家」や「物」などの記載のある墨書土器が出土した［坂井 1984］。頸城郡衙の所在も確定ではないが、有力なのは栗原遺跡（31）である。栗原遺跡は 8 世紀初頭～中葉の遺跡で関川と矢代川の間の段丘上に立地する。周辺の同時期の遺跡に月岡遺跡・倉田遺跡・東沖遺跡（32）がある。栗原遺跡では基壇跡や大型の掘立柱建物が検出され、「郡」と記された墨書土器や帯金具が出土した［坂井 1982、高橋 1984］。倉田遺跡では、倉庫と考えられる総柱建物が検出され、栗原遺跡出土の瓦片と同種の瓦片が出土したことから栗原遺跡と関連のある遺跡と推定されている［高橋 1996］。

中　　世

中世に入っても頸城地方には国府が依然として存在し、越後国の中心となっていた。その中枢は直江津であり、中世都市として発展する。中世の遺跡の立地は、この地域には守護所と考えられる至徳寺遺跡(33)、上杉氏の居館である御館跡（34）や安国寺跡（35）などが立地する［戸根 2003］。一方、中世の集落遺跡は樋田遺跡（36）・水久保遺跡（37）・子安遺跡などがある。これらの集落遺跡は溝が建物群を区画し、複数の屋敷地が集合して集落を形成している。横曽根Ⅰ遺跡（38）の場合は堀で区画されており、集落というより居館的性格を持つと考えられる［水澤 2003］。仲田遺跡（39）や用言寺遺跡（40）も集落遺跡であり、どちらも中世前期から後期に至る遺跡である。仲田遺跡では、集落の変遷を把握することができる［加藤ほか 2003］。用言寺遺跡では、居住域と生産域が一体的に検出され散村的な景観をうかがえる［加藤ほか 2006］。下割遺跡では、１辺 50 ～ 60m の区画溝によって屋敷地が囲まれており、それらが数個程度隣接することによって集落を形成している［山崎 2004］。13 世紀からの集村化傾向の一端を表している。荒町南新田遺跡では、掘立柱建物が 40 棟・井戸 40 基などが検出されており、非常に大規模な集落跡が検出されている。古屋敷遺跡（41）では総柱建物 2 棟及び側柱建物が 9 棟検出されており、東西棟と南北棟に分かれている［近江屋 2003］。この傾向は二反割遺跡にも見られる。

第Ⅲ章　二 反 割 遺 跡

1　遺跡の立地と周辺の微地形（第６図）

二反割遺跡は高田平野の中央部に位置し、飯田川が形成した自然堤防の右岸に立地している。現在の地表で標高は約 15m を測る。調査区の現況は杉林となっており、西へ約 200m 行くと飯田川が流れている。本遺跡から西へ約 1km には下割遺跡が立地しており、東へ約 300m には岡木集落が立地する。

現在の地表面から約 30cm 下で、古墳時代及び中世の遺構を検出した。遺構検出面の標高は、14.3 ～ 14.8m である。調査区の南側の標高が一番高くなっており、北側に向かうにつれて徐々に低くなる傾向が認められた。

飯田川の自然堤防は、古代から周辺地域よりも標高が高いとされる。二反割遺跡から南東約 1km に位置する稲原大野古墳群では、平安時代の小海進期の堆積物が全く埋積していない。それに対して、下割遺跡で検出された飯田川の旧河川は、小海進の堆積物によって埋没した。また、南東部丘陵沿いの水科古墳群や宮口古墳群の高田面に築かれた古墳も同様に埋没している。このことから、飯田川が形成したとされる自然堤防の大きさをうかがい知ることができる［高野 2002］。

第６図　二反割遺跡の位置と周辺の微地形

［上越市役所発行「上越市街図」、三和区総合事務所発行「三和区全図」1：10,000 原図］

2 グリッドの設定（第７図）

調査区の現況はほぼ平坦な地形で、法線は真北方向から大きくずれるが、グリッドは真北方向を基準に設定した。基準となるラインは、調査区をカバーできる範囲で任意に設定した。南北方向の縦軸は調査区の西側を１列グリッド、縦軸に直交する東西方向の横軸は調査区の南側をＡ列グリッドとした。以下、縦軸は東に 10m ごとに２・３・４・・・の算用数字で、横軸は北に 10m ごとにＢ・Ｃ・Ｄ・・・のアルファベットを付し、10m 四方を大グリッドとした。大グリッド名は、縦軸と横軸を組み合わせ、例えば「1A・2B・3C・・・」のように表示した。しかし、グリッド設定後に調査範囲が西に拡大したため、１列グリッドの西に０列グリッドを付け足した。

小グリッドは大グリッドをさらに 2m 方眼に分割し、25 区分した。小グリッド名は北西隅を１（基点）北東隅を 5、南西隅を 21、南東隅を 25 になるような算用数字順とした。これを大グリッドと組み合わせ、例えば「1A1・2B12・3C25・・・」のように表示した。

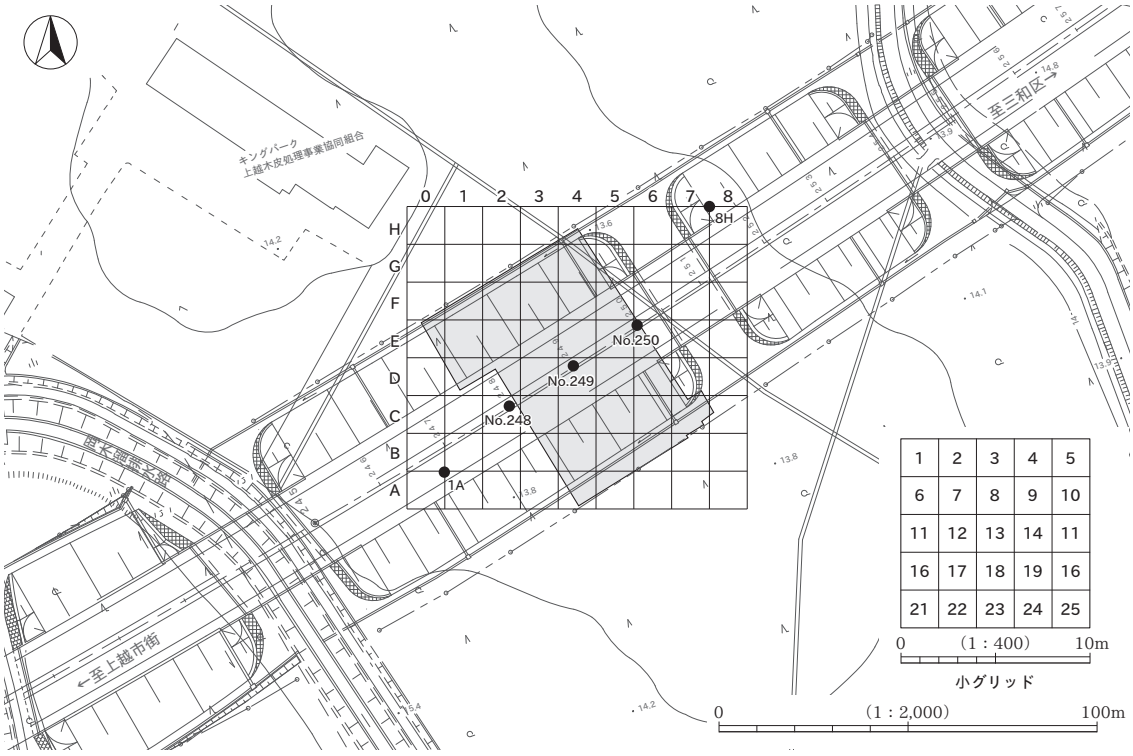
なお、主要な法線センター杭とグリッド杭の座標は、第２表に示した。

地点名	世界測地系	
	X 座標	Y 座標
STA No.248	126058.4896	-15794.1226
STA No.249	126069.0813	-15777.1582
STA No.250	126079.7675	-15760.2528
1A 杭	126040.6606	-15810.9632
8H 杭	126110.6602	-15740.9656

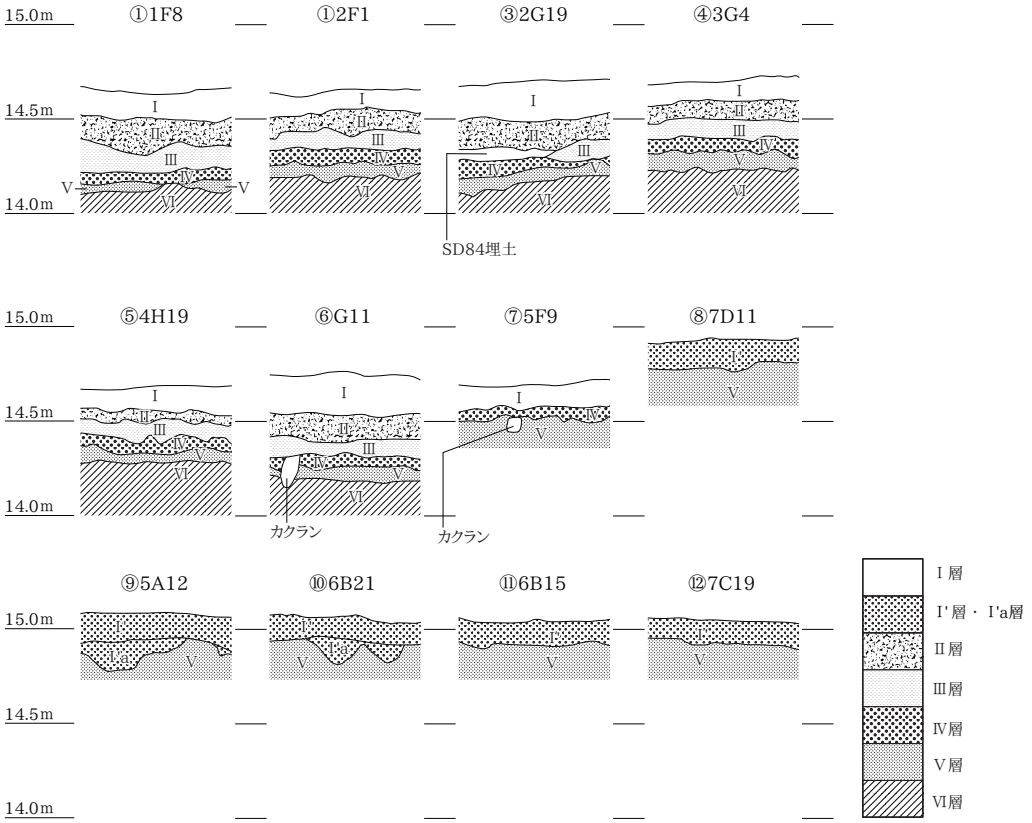
第２表　センター杭及び主要グリッド杭の座標
（世界測地系）

3 基　本　層　序（第８図）

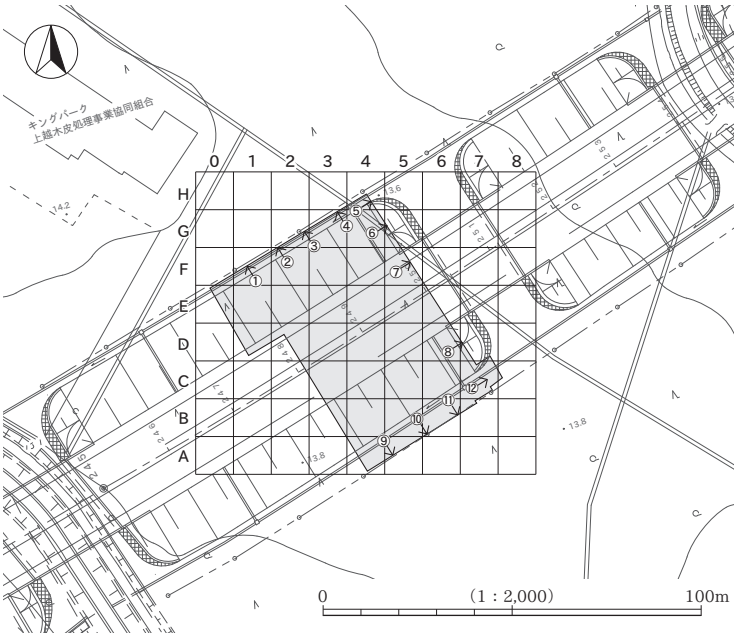
既述のように二反割遺跡は、遺跡の西側を北流する飯田川の自然堤防上に立地している。現況は杉林で、ほぼ平坦な地形であった。しかし、明治期の土地更正図では大半が畑として利用されており、少なくとも



第７図　二反割遺跡　グリッド設定図（アミは本調査範囲）



江戸時代から畑作が行われていた可能性が高い。畑作は昭和40～50年代ころまで行われ、その後、杉が植林されたという[1)]。試掘調査の結果を見ると、調査区の南側2/3は表土層（畑耕作土）の下が地山で、遺物包含層は見られなかった。本発掘調査の基本層序を見ても同様に調査区の南側2/3は、遺物包含層と考えられるⅡ層・Ⅲ層は見られず、畑耕作により削平されたものと思われる。しかし、北側の1/3は遺物包含層が残っていた。したがって、畑耕作以前の旧地形は、南から北に、東から西に向かいいくらか標高を下げる地形だったものと推定できる。



第８図　二反割遺跡　基本層序

以下、基本層序Ⅰ～Ⅵ層を説明する。なお、土色は『新版標準土色帖』［農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所2001］を使用した。

1）岡木町内会長　山川辰夫氏の御教示による。

Ⅰ　層　10YR3/4　暗褐色シルト。表土層（近世以降の畑耕作土でⅤ層の混入が少ないもの）。

Ⅰ'　層　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト。表土層（近世以降の畑耕作土でⅤ層の混入が多いもの）。

Ⅰ'a 層　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト。Ⅰ層とⅤ層の混合土（近世以降の畑耕作に伴う痕跡）。Ⅴ層が少ブロック状に混入する。

Ⅱ　層　10YR3/3　暗褐色シルト。中世の遺構埋土はⅡ層に近似することから、中世の遺物包含層と考えられる。ただし、遺物は極めて希薄であった。

Ⅲ　層　10YR3/1　黒褐色シルト。古墳時代の遺物が含まれる（古墳時代遺物包含層）。

Ⅳ　層　10YR4/4 ～ 4/6　褐色シルト（地山漸移層）。

Ⅴ　層　10YR5/6 ～ 5/8　黄褐色シルト（地山）。

Ⅵ　層　10YR7/2　にぶい黄褐色砂質シルト（地山）。

なお、Ⅰ～Ⅲ層には炭化粒が少量含まれる。

4　遺　　構

A　概　　要

本遺跡では、古墳時代と中世の遺構を検出した。古墳時代の遺構は、調査区の北西部で土坑 1 基、溝状の落ち込み 2 か所を検出した。遺構、遺物の検出状況から集落の縁辺部と考えられ、遺跡は北の方に延びていくものと思われる。出土遺物から、古墳時代中期～後期の集落と推定される。中世の遺構は、掘立柱建物 10 棟、井戸 5 基、溝 2 条、土坑 8 基、性格不明遺構 1 基、ピット多数を検出した。出土遺物から 12 世紀の集落と推定する。ピットが集中して検出された 3F・4F グリッド以外では、遺構が希薄になっているか所が多く見られた。調査区の南東では調査区外から柱穴を検出し、掘立柱建物を構成していることから調査区の東へ広がるものと推定する。

明治期の土地更正図によると、本遺跡一帯は畑耕作地としている。1946（昭和 21）年に米軍によって撮影された空中写真にも畑耕作地として利用していた様相が見て取れる。このため、調査区の多くに耕作溝の痕跡が認められた。

B　遺構の記述と表記方法

遺構の説明は、本文・観察表・図面図版、写真図版を用いた。

遺 構 名　遺構の種別ごとに略号を用い、番号は遺構検出の段階で検出順に通し番号を付けた。遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、P：ピット、SX：性格不明遺構、

調査の過程において、遺構番号の欠番が生じている。

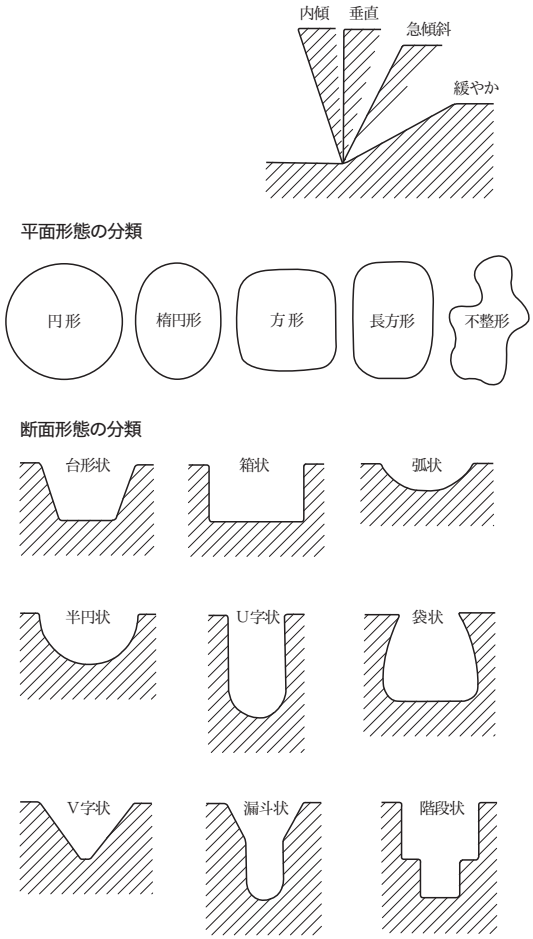
本　　文　遺構の形状・計測値は、遺構検出面での数値である。掘立柱建物は、柱間の多い方を原則として桁行とし、少ない方を梁行とした。ただし、柱間が同数の場合は長さの長い方を桁行とした。建物の主軸方向は、南北方向に対する建物軸の傾きを示している。

遺構観察表　遺構の種別ごとに観察項目を設けて記載した。また、遺構の平面形及び断面形の記載に際して、和泉 A 遺跡の遺構の形状分類等［荒川・加藤 1999］に準拠し統一を図った。

図面図版　遺構全体図・遺構分割図・主要な遺構の個別図で構成している。図面の縮尺は、遺構全体図を

1/300、遺構分割図を 1/150 で掲載した。遺構個別図に関しては、断面図は 1/40 で統一しているが、溝の断面図のみ例外として 1/50 で表した。掘立柱建物の平面図及びエレベーション図は 1/80 で掲載した。土層断面図の色調は、『新版標準土色帖』［農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 2001］に準拠した。

写真図版　現地では状況に応じて、検出状況、遺構断面、遺物出土状況、完掘写真などの撮影を行った。ここでは、本文記載遺構並びに遺構出土状況を中心に選択して掲載した。



第 9 図　遺構の平面形態と断面形態の分類
（［荒川・加藤 1999］を転載）

C　遺　構　各　説

1）古墳時代の遺構

古墳時代の遺構・遺物を検出した範囲は、調査区北西部の 1E・1F・2E・2F にほぼ限られる（図版 1・2・27）。遺構検出は中世の遺構と同じⅣ層で行った。標高は 14.2 ～ 14.4m で、調査区北西隅と中世の SD84 の西側が高く、その間の南北が低くなっている。遺構としたのは土坑 1 基であったが、土器を多く出土した浅い溝状の落ち込みが 2 か所で認められた。SX101 とした溝状の落ち込みは、南西－北東方向を直線状に流れている。幅 3.4 ～ 4.4m、長さ 11m で、北東側は SD84 に切られ、南西側は途切れている。深さ 14 ～ 24cm で、黒褐色土の 1 層とにぶい黄褐色土の 2 層が堆積する。SX102 は SX101 の西にあり、西から南にかけて立ち上がりが認められる。この立ち上がりを含めた東西 4.8m、南北 7.4m の範囲には黒褐色土などが 20 ～ 30cm 堆積していて、その中から古墳時代中期～後期の土師器が多く出土した。SX101 と SX102 は本来同一の落ち込みで、調査区内を蛇行して北へ延びていたと考えられる。中世以降の開発などにより、双方の間の土が削り取られたと思われる。

a　土　　坑

SK108（図版 2・3・28）

調査区北西部の 1E15・20 に位置する。平面形は楕円形で、長径 124cm、短径 86cm、深さ 14cm、断面形は弧状である。埋土は単層で、黄褐色土を多量に含む黒褐色土である。遺物は古墳時代中期頃の土師器高杯の杯部小片が 1 点出土した。埋土と出土土器から古墳時代中期頃の所産と考えられる。

2）中 世 の 遺 構

a 掘 立 柱 建 物

SB121（図版 12・13・35）

調査区南東部の 7C に位置する。規模は桁行 3 間（8.2m）、梁行 3 間（6.1m）の総柱建物で、床面積は約 50.0m² である。ただし床面積は、南東部隅にピットがあると仮定した場合の数値である。また、調査区の南東隅に位置するため、桁行、梁行とも調査区外へさらに延伸する可能性がある。主軸は南北方向を向き、N-4°-E となっている。柱間は桁行方向で 2.0 ～ 3.2m、梁行方向で 1.7 ～ 2.2m である。桁行方向は梁行方向に比べ 1m 程長い。また、桁行方向では北側 2 間は約 3.1m であるのに対し、南側 1 間分は約 2.1m と短く、梁行方向では東側 2 間は約 2.2m であるのに対し、西側 1 間分は約 1.7m と短いことが指摘できる。検出できた 15 基のピットの平面形は円形、または楕円形を呈し、径が 45 ～ 80cm である。断面形はおおむね U 字状を呈し、深さ 32 ～ 80cm である。P55・P56 を除くすべてのピットで柱の当たりを確認した。いずれも当たりはほぼ円形で、灰白色を呈して固くしまり、黒褐色土をマーブル状に少量含む。外周には鉄分によるものと考えられる橙色土がリング状に観察できるものが多い。径は 13 ～ 23cm で、19cm 前後のものが中心である。また、当たりはピットの底面中央付近で確認でき、壁際にあるものはほぼない。SB121 は SB122、SB123 と重複するが、P59 は SB122 の P57 に切られ、P10 は SB123 の P34 に切られる。したがって、重複する 3 棟の建物の中では、SB121 が最も古い。

遺物は P17 から珠洲焼の甕の体部片が 1 点(38)、P59 から珠洲焼の甕の口縁部が 2 点(29･30)出土した。29･30 は埋土の上部で内面を上に向け逆 L 字状に並んで出土した。珠洲焼編年 I 期に位置付けられる［吉岡 1994］。

SB122（図版 12・14・36）

調査区南東部の 7C に位置する。規模は桁行 4 間（7.5m）、梁行 2 間（4.2m）の側柱建物で、床面積は約 31.5m² である。主軸は東西方向を向き、N-85°-W となっている。柱間は桁行方向で 1.3 ～ 2.3m、梁行方向で 1.6 ～ 2.3m である。南側桁行の P77 は柱筋からややずれるため柱穴からは外したが、SB122 の柱穴を構成する可能性もある。また、P56 は掘形にテラス状の部分を持ち、この部分に柱を置いていたと推測できることから、SB121 と重複して使用している。建物は 11 基のピットで構成されており、平面形は円形を呈し、径が 26 ～ 65cm である。断面形はおおむね U 字状を呈し、深さ 13 ～ 90cm である。P15・P38・P53・P74 ～ P76 の 6 基のピットに、柱の当たりがあることを確認した。いずれも当たりはほぼ円形で、灰白色を呈して固くしまり、黒褐色土をマーブル状に少量含む。外周には鉄分によるものと考えられる橙色土がリング状に観察できるものが多い。径は 7 ～ 15cm で、13cm 前後のものが中心である。また、当たりはピットの底面中央付近で確認でき、壁際にあるものはほぼない。P57 が SB121 の P59 を切ることから相対的に新しい。また、南には主軸がほぼ並行する SB123 がある。なお、SB123 もピットの切り合いから SB121 より新しいことが明らかである。

SB123（図版 12・14・36）

調査区南東部の 7C に位置する。規模は、桁行 2 間（4.1m）、梁行 2 間（3.7m）の総柱建物で床面積は約 15.2m² である。ただし床面積は、南東部隅と北東部隅にピットがあると仮定した場合の数値である。また、調査区の南東隅に位置するため、梁行が調査区外へさらに延伸する可能性がある。主軸は東西方向を向き、N-84°-W となっている。柱間は桁行方向で 1.7 ～ 2.5m、梁行 1.7 ～ 1.9m である。検出で

きた 7 基のピットの平面形は円形を呈し、径が 24 ～ 41cm である。断面形はＵ字状を呈し、深さが 18 ～ 93cm である。P33・P34・P35 の 3 基のピットに、柱の当たりがあることを確認した。いずれも当たりはほぼ円形で、灰白色を呈して固くしまり、黒褐色土をマーブル状に少量含む。外周には鉄分によるものと考えられる橙色土がリング状に観察できるものが多い。径は 13 ～ 16cm で、ピットの底面中央付近で確認でき、P33 のみ北側の壁際に確認した。P34 が SB121 の P10 を切ることから相対的に新しい。また、北には主軸がほぼ並行する SB122 があるが新旧関係は不明である。P31 から土師器皿（39）の底部片が出土した。

SB124（図版 6・9・31）

調査区北東部の 5F に位置する。規模は、桁行 2 間（3.3m）、梁行 1 間（1.8m）の側柱建物で、床面積は約 5.9m² である。南西隅には SE3 と重複したピットが存在した可能性が高いものの検出できなかった。主軸は南北方向を向き、N-9°-W となっている。柱間は 1.6 ～ 1.8m を測る。検出できた 5 基のピットの平面形は円形を呈し、径が 20 ～ 31cm である。断面形はＵ字状を呈し、深さ 24 ～ 50cm である。当たりは認められなかった。

SB125（図版 6・9・32）

調査区中央部からやや東の 5E･D に位置する。規模は､桁行 2 間(3.8m)､梁行 2 間(3.1m)の総柱建物で、床面積は 11.8m² である。主軸は東西方向を向き、N-82°-E となっている。柱間は 1.5 ～ 2.0m を測る。建物は 8 基のピットで構成されており、北側の桁行では中央のピットを検出できなかった。ピットの平面形は円形を呈し、径が 18 ～ 30cm である。断面形はＵ字状を呈し、深さ 6 ～ 68cm である。当たりは認められなかった。SK23 や SK44 と重複するが新旧関係は不明である。SK1･SK2･SK30 が隣接する。

SB126（図版 4・5・6・29）

調査区中央部の 4D に位置する。規模は、桁行 3 間（5.0m）、梁行 2 間（2.4m）で、南の妻と東の平に廂が付く二面廂付建物である。廂部を含めると桁行 4 間（5.9m）、梁行 3 間（3.3m）になる。主軸方向は南北方向を向き、N-3°-E となっている。身舎の床面積は 12.0m² である。身舎の柱間は 1.0 ～ 2.4m を測る。廂は身舎から 1.0m 前後の距離をとって備え付けられており、東側の廂は長さが北から平 2 間分しかないのが特徴である。建物は 15 基のピットで構成されており、平面形は円形を呈し、径が 18 ～ 30cm である。断面形はＵ字状または半円状を呈し､深さが 10 ～ 60cm である。当たりは認められない。本遺構から西へ約 3m には SB127 があり、主軸がほぼ並行する。

SB127（図版 4・5・6・29）

調査区中央部の 4D に位置する。規模は、桁行 2 間（4.1m）、梁行 1 間（1.9m）で、南北の妻と西の平に廂が付く三面廂付建物である。廂部を含めると桁行 4 間（6.0m）、梁行 2 間（3.0m）になる。主軸方向は隣接する SB126 とほぼ並行して南北方向を向き、N-4°-E となっている。身舎の床面積は、7.8m² である。身舎の柱間は 1.9 ～ 2.1m を測る。廂は身舎から 1m 前後距離をとって備え付けられている。建物は 13 基のピットで構成されており、平面形はほぼ円形を呈し、径が 22 ～ 36cm である。断面形はＵ字状を呈し、深さが 9 ～ 28cm である。当たりは認められなかった。両桁行の中央 P158・P166 の 2 基のみ柱筋から西へ若干のズレが認められる。

SB261（図版 6・7・30）

調査区北部の 3F・4F に位置する。規模は、桁行 5 間（9.5m）、4 間（7.7m）の総柱建物である。主軸方向は東西方向を向き､N-84°-W となっている。床面積は 73.2m² である。柱間は 1.3 ～ 2.4m を測る。

建物は28基のピットで構成されており、平面形は円形または楕円形を呈し、径が22～57cmである。断面形はほとんどがU字状を呈し、深さが11～49cmである。南東部隅の建物群に比べ掘形は小型で浅く、当たりも認められなかった。SB262と重複しているが、新旧関係は不明である。遺物は、P203から土師器皿（40）が1点出土している。

SB262（図版6・8・30・31）

調査区北部の3F・4E・4Fに位置する。規模は、桁行4間（7.5m）、梁行3間（5.8m）で、西の妻と北の平に廂が付く二面廂付建物である。廂部を含めると桁行5間（9.6m）、梁行4間（7.9m）となる。主軸方向は東西方向を向き、N-79°-Wとなっている。身舎の床面積は43.5m²である。身舎の柱間は1.1～2.4mを測る。廂は身舎から2m前後距離をとって備え付けられている。建物は21基のピットで構成されており、平面形は円形または楕円形を呈し、径が20～41cmである。断面形はほとんどがU字状を呈し、深さが10～44cmである。当たりは認められなかった。P133はSB263を構成するP132に切られることから、相対的に古いことが指摘できるが、重複するほかの遺構のSE121・SE169、SB261との新旧関係は不明である。遺物は、P199から砥石（58）が出土している。

SB263（図版6・9・30・31）

調査区北部の4Fに位置する。規模は、桁行2間（4.3m）、梁行1間（2.0m）で東の平に廂が付く、一面廂付建物である。廂部を含めると梁行が2間（3.1m）となる。主軸方向は南北方向を向き、N-10°-Eとなっている。身舎の床面積は8.6m²である。身舎の柱間は0.8～2.2mを測る。建物は9基のピットで構成されており、平面形は円形を呈し径が19～36cmである。断面はU字状を呈し深さが11～35cmである。当たりは認められなかった。P132がSB262を構成するP133を切ることから、SB263がSB262より新しい建物である。

b 井　　戸

SE3（図版6・10・32）

調査区東部の5E3・4に位置する素掘りの井戸である。SK111と隣接する。SB124と重複関係にあった可能性があるものの、新旧関係は不明である。平面形は円形で、径191cm、深さ174cmを測る。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ水平なことから断面形は箱状である。埋土は5層に分層でき、1～3層は土師質土器の細片を含む暗褐色シルト。4層はⅢ層に近似した暗褐色土を筋状に含む。ややオーバーハング気味に3層の上に堆積していることから崩落土と思われる。5層は、4層よりも砂質が強くなっている。堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は珠洲焼の片口鉢(31)の破片が1～4層で出土している。1層から出土した破片とそれ以下の層から出土した破片が接合することから、人為的に埋めた可能性もある。また、SD84から出土した珠洲焼の破片とも接合した。珠洲焼編年Ⅰ期に位置付けられる。

SE79（図版12・14・36）

調査区南東部の壁際7B6・7・11・12に位置する素掘りの井戸である。平面形は壁面での検出のため定かではないが、円形と思われる。径226cm、深さ155cmを測る。断面形はおおむねU字状を呈する。埋土は木根により一部壊されているが、おおむねレンズ状に堆積している。5層がⅤ層に近似した土であることから崩落土と思われる。

SE83（図版4・6・10・33）

調査区中央部やや西寄りの4D17・22に位置する素掘りの井戸である。北側はSB127に接するが、

新旧関係は不明である。また東へ 2.5m で SB126、南西へ 5m で SD84 が存在する。検出面はⅠ層直下のⅤ層である。平面形は楕円形で、長径 194cm、短径 162cm、深さ 164cm を測る。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、一部抉れる部分も見られるが、断面形はおおむね箱状を呈する。埋土は断面写真の撮影直前に崩落したため、断面写真・図の全体は掲載できないが、中層～下層はⅤ・Ⅵ層の崩落土で占められ、上層はⅡ層に近似した土が堆積していた。上層は堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は埋土上層から中世土師器皿（37）、埋土から礫 3 点（100g）が出土している。所属時期は出土土器や周囲の遺構との関係から 12 世紀代と推定される。

SE110（図版 6・10・32）

調査区中央部やや西寄りの 4D17・22 に位置する素掘りの井戸である。北側は SB262 に重複するが、新旧関係は不明である。また北へ 0.2m で SB261、北東へ 1m で SB253、西へ 2.5m で SE169 が存在する。検出面はⅠ層直下のⅤ層である。平面形は円形で、径 230cm、深さ 164cm を測る。側壁は急傾斜に立ち上がり、抉れや凹凸も見られるが、断面形はおおむね台形状を呈する。埋土は中層～下層はⅤ・Ⅵ層の崩落土で占められ、上層はⅡ・Ⅲ層に近似した土が堆積していた。上層は堆積状況から自然堆積と思われる。遺物は埋土上層から被熱礫 2 点（1.99kg）、埋土下層から被熱礫 7 点（6.77kg）が出土している。所属時期は周囲の遺構との関係から 12 世紀代と推定される。

SE169（図版 6・10・33）

調査区中央部やや西寄りの 3E4・5、3F24・25 に位置する素掘りの井戸である。北側は SB262 に重複するが、新旧関係は不明である。また北へ 0.1m で SB261、東へ 2.5m で SE110 が存在する。検出面はⅠ層直下のⅤ層である。平面形は円形で、径 208cm、深さ 152cm を測る。側壁は急傾斜に立ち上がり、断面形 U 字状を呈する。埋土は、3 層以下は堆積状況から自然堆積と思われ、2 層がⅡ層・Ⅲ層に近似した土であることから崩落土と思われる。1 層は堆積の乱れから人為的に埋められたものと推測する。

遺物は白磁瓶（34）、土師質土器皿（35・37）が出土している。所属時期は出土遺物や周囲の遺構との関係から 12 世紀代と推定される。

c　土　　坑

SK1（図版 6・11・33）

調査区東部の 5E25 に位置し、SB125 と SK44 が隣接する。SK2 と重複し、北部を 3 分の 1 ほど切られる。平面形は楕円形と推測され、長径 77cm 以上、短径 71cm、深さ 21cm、断面形は弧状と推測する。埋土は 2 層に分層でき、上層は、多量の黒褐色シルトブロックと少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルトである。下層は、黒褐色土ブロックを少量含むにぶい黄褐色シルトである。

SK2（図版 6・11・33）

調査区東部の 5E20・25 に位置し、SB125 と SK44 が隣接する。SK1 と重複し、SK1 の北部を 3 分の 1 ほど切る。平面形は楕円形で、長径 134cm、短径 82cm、深さ 7cm、断面形は弧状である。埋土は単層で、多量の黄褐色シルトと少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルトである。

SK30（図版 6・11・33）

調査区東部の 5D2・5E22 に位置する。平面形は楕円形で長径 233cm、短径 78cm、深さ 15cm、断面形は弧状である。埋土は単層で、褐色土ブロック、炭化物、土師質土器の細片を多量に含む暗褐色シルトである。遺物は土師質土器の細片が出土した。

SK44（図版 6・11・34）

調査区東部の 5E19・20・24・25 に位置し、SK1 と SK2 が隣接する。SB125 と重複するが新旧関係は不明である。平面形は木根により一部壊されているがおおむね楕円形で、長径 236cm、短径 160cm、深さ 34cm を測る。断面形は階段状である。埋土は 3 層に分層でき、1 層は少量の炭化物を含む暗褐色土である。2 層は黄褐色シルトブロックを多量に含む暗褐色シルトで、3 層は暗褐色シルトである。すべての層で、土師質土器の細片を含む。遺物は土師質土器の細片が出土した。

SK111（図版 6・11・34）

調査区東部の 5F18・23 に位置し、SB124 と SE3 に隣接する。平面形は楕円形で、長径 200cm、短径 80cm、深さ 22cm、断面形は弧状である。埋土は 2 層に分層でき、1 層は黒褐色シルト、炭化物、黄褐色シルトを多量に含む明黄褐色シルトである。2 層は炭化物を少量含む黄橙色シルトである。

SK255（図版 6・11・34）

調査区中央部やや西寄りの 3E18・23・24 に位置する。平面形は楕円形で、長径 255cm、短径 148、深さ 40cm、断面形は台形状である。埋土は単層で、黄褐色シルトと炭化物を多量に含むにぶい黄褐色シルトである。

d　溝

SD84（図版 2・3・4・27・28）

2G ～ 3D ～ 4A グリッドにかけて位置し、調査区の西側を南北に縦断する溝である。検出面は土層断面を見る限り、Ⅱ層下部から掘り込まれている。長さ 65m 以上、幅 5.21m、深さ 2.02m を測る。溝方向は 4A ～ 3D にかけては N–29°–W、3D ～ 2F にかけては N–17°–W、2F ～ 2G にかけては N–10°–W となり、北西から北に徐々に向きを変える。断面形は 4A ～ 2E・3E まではＶ字状ないしは台形状、これ以北は半円状を呈する。側壁は凹凸があるものの、直線状ないしは緩い弧状を呈し、土止め等の痕跡は認められなかった。埋土はⅡ層下部から掘り込まれていることから、Ⅱ層に近似した土が多く見られるものの、下層～底面にかけては鉄分や炭化物が多く含まれるシルト～粘土が主体である。また下層や壁面近くではⅤ層の崩落土が多く堆積し、中層～上層ではⅡ層近似の土が堆積していた。埋土の多くは基本的にレンズ状に堆積することから自然堆積と推定される。

遺物は古墳時代の土師器高杯（17）、古代の須恵器杯身（18）･壺（19）･甕（20･21･26 ～ 28）･杯蓋（22）･有台杯（23 ～ 25）、中世の珠洲焼壺（32・49・50）・甕（43・44）・片口鉢（31・45 ～ 48）、白磁椀（41・42）、土師質土器皿（51・52）、石製品敲石（54 ～ 56）・砥石（57）、鉄製品（59）が出土している。このほか被熱礫を多く含む礫 159 点（55.755kg）が出土している。出土状況は埋土下層～底面にかけては少なく、中層～上層に伴うものが多い。したがって、下層～底面にかけては比較的短期間に埋まったものと判断できる。遺構の所属時期は中世の珠洲焼、白磁、土師質土器から珠洲焼編年Ⅰ期と推定される。

底面直上土（図版 3–SD84・SPe–e' 埋土 8 層）の珪藻分析の結果では、止水性の池状で、水位の変化や多少の流れ込みがある不安定な水位の浅い水域と見なされた。さらに花粉分析ではサジオモダカ属やタデ属サナエタデ節、イネ科などの水生植物が繁茂することが示唆された。また、発掘調査時の所見でも下層～底面にかけての埋土には鉄分や炭化物の沈着が多く見られたことや、土止め等の施設が見られないことから流水の溝でないことが推定できた。したがって、SD84 の性格は用水のように水を流す施設でなく、水の流れない不安定な水位の浅い堀（溝）と考えられる。集落のはずれという遺跡内での位置関係から、集

落の内と外を区画する堀（溝）と考えている。

SD260（図版 2・3・28）

調査区北部の中央壁際の 3G11・16・17 に位置する直線状の小溝で、北側は調査区外に延びる。南西へ 4.5m で SD84 が存在する。検出面はⅤ層面であり、掘り込み面は調査区境の壁際を観察したが明らかにできなかった。長さ 2.2m、幅 13cm、深さ 5cm を測り、断面形は弧状を呈する。溝方向は N–27°–W となる。埋土は炭化物やⅤ層を多量に含む黒褐色の単層である。遺物は埋土から土師器小片 1 点が出土している。所属時期は中世の遺構としたが、埋土がⅢ層に近似することから古墳時代の可能性もある。

e 性格不明遺構

SX130（図版 6・11・34）

調査区北部の 3G9・14・15 に位置する。平面形は楕円形で、長径 334cm、短径 220cm、深さ 18cm、断面形は弧状である。埋土は単層で、黒褐色シルトブロック、炭化物、土師質土器の細片を多量に含む灰黄褐色シルトである。

5　遺　　物

A　概　　要

出土した遺物には土器･石製品･金属製品がある。遺物の年代は古墳時代（5 ～ 6 世紀）、古代（8 ～ 9 世紀）、中世（12 世紀）にまとまる。出土量は平箱で 10 箱である。出土土器のグリッド別点数は、1F で 704 点、1E で 354 点、0E で 344 点、1D・2D ～ F・3B ～ G・4A ～ D・5D ～ F・7C で 1 点以上 100 点未満である。時代別では、古墳時代が調査区北西部の SX101・SX102 とその周辺から、古代が中世の堀である SD84 の埋土中から、中世が SD84 とその東側の掘立柱建物のピット、井戸、土坑から主に出土した。

以下では時代別に説明する。なお、各土器の出土地点、法量、胎土、調整・文様、付着物は土器観察表に示した（66p）。ただし、多くが破片資料であることや古墳時代の土器は状態が悪かったことから、法量は推定値が多く、調整等は不明なものが多い。

B　遺　物　各　説

1）古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は土師器・須恵器を報告する。分布は、土師器が調査区北西隅の SX102 からやや多く出土し、SX101 や SD84 の埋土中から少量、須恵器は SD84 の埋土中からごく少量出土した。

a　土　師　器（図版 15・37–1 ～ 17）

1 は SX101 出土の壺である。体部まで含む多くの同一個体の破片が一か所にまとまって出土した（図版 28）が、接合がほとんどできず、口頸部のみ図示した。二重口縁壺と考えられる。内外面とも器面の剥離や剥落が著しく調整不明である。

2 ～ 14 は SX102 出土である。2・3 は同一個体の壺である。1 と同様、同一個体の破片が多く出土したが、器形全体がわかるまでには復元できなかった。口縁部が短い広口壺である。外面と口縁部内面は、被熱による器面の剥離や剥落が顕著で調整不明であるが、内面の底部付近は状態がよく、ハケ目のような

ナデ、ケズリのようなナデ・ヘラナデ調整が見られる。4 は甕で、口縁部が「く」の字状で端部が丸い。6 は壺である。弱く外傾する口縁部にやや扁平な球形の体部が付くもので、外面と口縁部内面に赤彩を施す。5 は高杯で、互いに接しない複数の破片から図上で復元した。平坦な底部と外傾する口縁部からなる杯部に、「ハ」の字状に開く脚部が付くものである。7 ～ 9 は高杯の柱状、中空の脚部で、裾部から屈曲して外側へ開くものである。10 は小型器台の脚部である。以上は古墳時代中期前半頃のものと考えられる。11 は壺の口縁部片で、端部近くに段を持つ。12 は甕の口縁部片で、緩く外反する。13 は須恵器を模倣した杯身である。口縁部はやや内傾し、口縁部と体部の境に段を持つ。内外面ともミガキ調整で、内面と口縁部外面に黒色処理を施す。14 は底部有孔の鉢と考えられる。底径 5.6cm の平底の中央に、推定で直径 8mm の筒口を穿つ。以上は古墳時代中期後半から後期前半頃のものと考えられるが、上記の 2 ～ 10 を含め、破片が小さいものなどは時期が前後する可能性がある。

15・16 は遺構外、17 は SD84 出土である。15 は杯身である。外反する長い口縁部と扁平の体部からなる器形と考えられる。内外面ともミガキ調整で、内面に黒色処理を施す。16 は鉢の体部から底部で、細かく砕けた状態で出土した。器面の摩耗がひどく調整は不明である。17 は高杯の脚部である。16 は古墳時代中期、15・17 は後期のものと考えられる。

b 須　恵　器（図版 15・37–18 ～ 21）

18 ～ 21 は SD84 出土である。18 は杯身の口縁部小片で、内傾気味に反って立ち上がる。器厚は薄い。19 は壺の体部と考えられる。外面は上部がカキ目、以下タタキ・ロクロナデ、内面はロクロナデ調整である。20 は甕の体部片である。外面はタタキ、内面は同心円文である。21 は甕の体部片で、割れ口が研磨されている。以上は古墳時代後期頃のものと考えられる。

2）古 代 の 遺 物（図版 15・37–22 ～ 28）

古代の遺物は須恵器を報告する。古代の須恵器はほとんどが SD84 からの出土であるが、中世の井戸やピットからもわずかに出土している。出土量は少ない。

22 ～ 28 は SD84 出土である。22 は杯蓋で、口縁端部は短く外反する。23 は有台杯と考えられる口縁部～体部片である。24・25 は有台杯の体部下部～底部で、高台は内端接地である。26・27 は甕の口縁部片である。26 は胎土に砂礫を多量に含み、外面は灰色、内面は暗赤灰色を呈する。27 は残存か所の内外面に自然釉がかかる。28 は甕の体部片である。外面はタタキ、内面は同心円文である。なお、27・28 は割れ口が研磨されている。以上は 8 ～ 9 世紀のものと考えられる。

3）中 世 の 遺 物

a 土器・陶磁器（図版 16・17・38・39–29 ～ 52）

中世の土器・陶磁器は、SD84 とその東側の掘立柱建物のピットや土坑から出土した。ここでは遺構別に説明する [1)]。

SB121（図版 16・38–29・30・38）

29・30 は P59 出土の珠洲焼甕で、別個体である。2 点とも破片からの図上復元であるが、推定で口径

1） 器種名、時期等については水澤幸一氏、春日真実氏の御教示を得た。

40cm ほどの中甕と考えられる。口縁形態は 29 が端部の先端を水平に挽き出し、30 が端部を鋭く外屈、垂下させる。珠洲焼Ⅰ期［吉岡 1994］である。38 は P17 出土の珠洲焼甕の体部片で、外面に弱い稜が認められる。内面は点状剥離が顕著である。P55 からは土師質土器皿と思われる小片が出土したが図示できなかった。

SB123（図版 16・38–39）

39 は P31 出土のロクロ成形による土師質土器皿の底部片である。内面に沈線状の細い凹線が 2 本見られる。

SB261（図版 16・38–40）

40 は P203 出土で、土師質土器皿と考えられる。器面の摩耗が著しく調整不明である。胎土には赤褐色粒子を多量に含む。12 世紀前半頃のものと考えられる。

SE3（図版 16・38–31・32）

31 は珠洲焼の片口鉢で、破片の一部は SD84 からも出土している。口径 28.6cm、底径 9.9cm、高さ 12.9cm である。口縁形態は外傾口縁で、端部は面をとって方頭に仕上げている。内面に卸し目が認められず、底部の切り離しは静止糸切りである。珠洲焼Ⅰ期である。32 は珠洲焼の壺Ｒ種［吉岡 1994］で、SD84 からも破片が出土している。外面はロクロナデ後底部付近がケズリ状のナデ調整、内面はロクロナデ調整で、部分的に指ナデが認められる。底部の切り離しは回転糸切りである。

SE83（図版 16・38–37）

37 はロクロ成形による土師質土器皿である。口縁部が逆「ハ」字状に反り気味に開き、底部が柱状高台となる。胎土には赤褐色粒子を多く含む。12 世紀前半頃のものと考えられる。

SE169（図版 16・38–34 ～ 36）

34 は白磁の瓶と考えられる体部小片である。35・36 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。35・36 は 12 世紀後半頃のものと考えられる。

SK44（図版 16・38–33）

33 は珠洲焼甕、あるいは壺の体部小片で、内面は大部分が破砕している。

SD84（図版 16・17・38・39–41 ～ 52）

本遺構からは白磁 2 点、珠洲焼 73 点、土師質土器 16 点が出土した。白磁は調査区南側の 4A15 から、珠洲焼、土師質土器は集中して出土した場所はなく遺構全体に散在し、層位的にも上～下層から出土した。

41・42 は白磁椀で、41 は口縁部、42 は底部である。43 ～ 50 は珠洲焼である。43・44 は甕の体部である。45 ～ 48 は片口鉢の口縁～体部片で、いずれも内面に卸し目が認められない。45 は外傾口縁で、端部は面を取り方頭となる。46・47 は同一個体と考えられる。端部がやや丸く、器厚が比較的薄い。48 は内端が嘴頭状に突出した外傾口縁である。45 ～ 48 は珠洲焼Ⅰ期である。49 は壺類、あるいは瓶類の体部と考えられる小片である。残存する肩部には突体状の貼付文と何かがはがれた痕跡が認められる。その部分には環状把手があった可能性がある。また、体部外面には櫛歯波状文が施される。50 は壺と考えられる体部小片である。器厚が比較的薄く、内面はナデ調整である。色調は外面が暗紫灰色、内面が灰色を呈する。51・52 はロクロ成形による土師質土器皿である。

そのほか、SK23・SB124（P112）・SB262（P137）からも中世の土師質土器皿と思われる小片が出土したが図示できなかった。

b　土　　製　　品（図版 17・39–53）

53 は SB123 の P31 出土で、土師質土器皿の底部を円盤状に加工したものである。直径 4.0cm、厚さ 0.8cm である。

c　石　　製　　品（図版 17・39–54 ～ 58）

敲石 3 点、砥石 2 点の計 5 点が出土している。いずれも遺構からの出土で、58 の SB262（P199）以外、SD84 の埋土からである。54 ～ 56 は敲石で、両端及び側面に敲打痕が認められる。特に両端は使用の頻度が高いためか、平坦面を作り出している。また敲打時の衝撃によるものか端部から側面の一部が剥落している。素材はいずれも安山岩で、54・55 が長大な礫、56 が球状の礫と考えられる。

57 は下端を欠損するが、正裏面と 3 側面に砥面が見られ、擦痕も明瞭に認められる。所々に敲打痕も見られることから台石様にも使用された可能性が高い。素材は凝灰岩の角礫と考えられる。大きさや敲打痕から置砥石や台石様として用いられたものと思われる。58 は下端を欠損するが、正裏面と右側面に砥面が見られる。素材は砂岩の扁平礫と考えられる。大きさから置砥石として用いられたものと思われる。ただし、SB262–P199 の埋土下層で平の状態で出土したことから、柱穴の礎盤（石）に転用された可能性もある。

これらの敲石や砥石は、伴出土器や遺構の存続時期から 12 世紀代の所産と考えられる。

d　鉄　　製　　品（図版 17・39–59）

1 点のみの出土である。長さ 3.30cm、幅 4.75cm、厚さ 0.72cm、重さ 13.9cm を測る鋳造品の破片である。上縁は折れているが、これ以外の周縁は不明であり、製品あるいは素材か否かの判断も明らかでない。SD84 の埋土中層からの出土で、伴出土器や遺構の存続時期から 12 世紀代の所産と考えられる。

6　自然科学分析

A　は　じ　め　に

二反割遺跡の発掘調査では、古墳時代や中世（鎌倉時代）の掘立柱建物、井戸、溝（堀）、土坑、ピットなどが検出された。溝（SD84）は、長さ 65m、幅 5m、深さ 2m の大規模なもので、集落の内と外を区画する溝（堀）と考えられている。本報告では、12 世紀後半頃の堀（SD84）の最下層の炭化物を対象として、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行い、集落の年代を推定する。また、同堆積物の花粉分析と珪藻分析を実施し、集落周辺の環境と堀の環境復元を行い、その性格を知る基礎資料を供出し、自然科学的見地から考察を加える。

B　試　　料

試料は、SD84（堀）の SPe–e' の埋土 8 層（最下層）から採取された堆積物 1 点であり、有機物や炭を含む茶褐色シルトである。年代測定は堆積物中から抽出した炭化物を、花粉分析と珪藻分析は堆積物を分析試料とした。

C　放射性炭素年代測定

1）方　　法

測定試料の情報、調製データは第３表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

試料名	対象物	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SD84（堀）最下層	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS

※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

第３表　測定試料及び処理

2）測　定　結　果

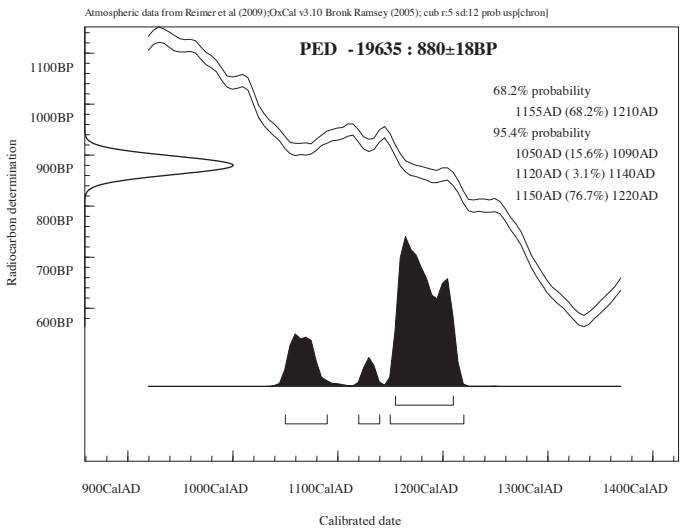
第４表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第 10 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

試料名	測定 No.（PED）	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（年 BP ± 1 σ）	^{14}C 年代（年 BP ± 1 σ）	暦年代（西暦）1 σ（68.2%確率）	暦年代（西暦）2 σ（95.4%確率）
No.1	19635	−11.53 ± 0.14	880 ± 18	880 ± 20	AD1155–1210（68.2%）	AD1050–1090（15.6%） AD1120–1140（ 3.1%） AD1150–1220（76.7%）

BP：Before Physics（Present），AD：紀元後

第４表　測定結果

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal 3.10（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第 10 図　暦年較正結果

3）所　　見

加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定の結果、SD84（堀）の９層（最下層）から出土した炭化材では、880 ± 20 年 BP（2 σの暦年代で AD1050 ～ 1090，AD1120 ～ 1140，AD1150 ～ 1220 年）の年代値が得られた。

D　花　粉　分　析

1）方　　法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

①　試料から 1cm^3 を採量

②　0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎

③　水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

④　25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

⑤　水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）

⑥　再び氷酢酸を加えて水洗処理

⑦　沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

⑧　検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節及び種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この分析処理を施すとクスノキ科の花粉は分解し検出されない。

2）結　　果

a　分　類　群

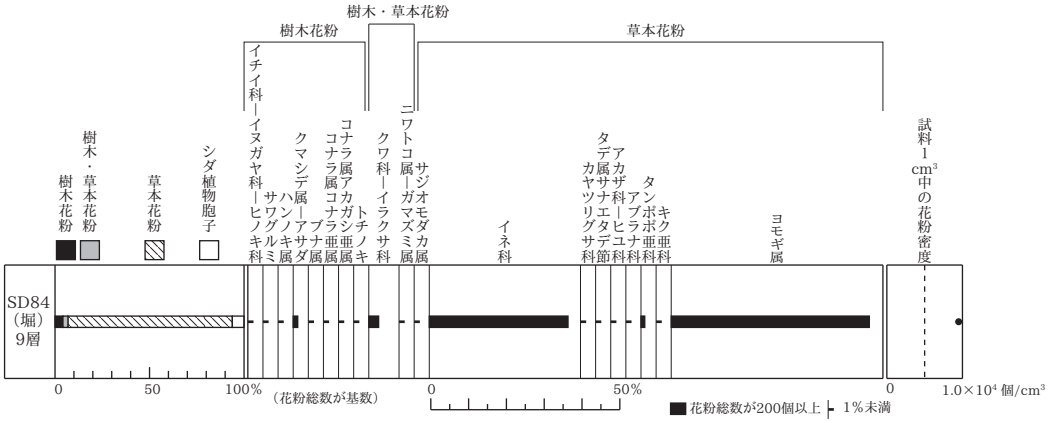
出現した分類群は、樹木花粉 8、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 9、シダ植物胞子 2 形態の計 21 である。これらの学名と和名及び粒数を第 5 表に示し、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 11 図に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を第 12 図に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、ブナ属、コナ

分類群		SD84（堀）
学名	和名	9 層（最下層）
Arboreal pollen	樹木花粉	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	3
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	2
Alnus	ハンノキ属	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属 - アサダ	6
Fagus	ブナ属	3
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	3
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1
Aesculus turbinata	トチノキ	3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Moraceae-Urticaceae	クワ科—イラクサ科	13
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属—ガマズミ属	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Alisma	サジオモダカ属	1
Gramineae	イネ科	183
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	3
Cruciferae	アブラナ科	3
Lactucoideae	タンポポ亜科	5
Asteroideae	キク亜科	2
Artemisia	ヨモギ属	261
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	31
Trilate type spore	三条溝胞子	2
Arboreal pollen	樹木花粉	22
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	14
Nonarboreal pollen	草本花粉	462
Total pollen	花粉総数	498
Pollen frequencies of 1cm^3	試料 1cm^3 中の花粉密度	9.5×10^3
Unknown pollen	未同定花粉	7
Fern spore	シダ植物胞子	33
Helminth eggs	寄生虫卵	（－）
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	（－）
Charcoal fragments	微細炭化物	（＋）

第 5 表　二反割遺跡における花粉分析結果



第 11 図　二反割遺跡における花粉ダイアグラム

ラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

b　花粉群集の特徴

樹木花粉から草本花粉の占める割合が高く約 85%を占める。草本花粉のヨモギ属とイネ科が優占し、タンポポ亜科などが低率に伴われる。ほかにクワ科－イラクサ科が出現し、サジオモダカ属やタデ属サナエタデ節の水生植物が伴われる。樹木花粉ではクマシデ属－アサダが低率に出現する。花粉密度はやや低い。

3）花粉分析から推定される植生と環境

優占するヨモギ属はやや乾燥した環境を好み、イネ科は多様な環境に生育する種類を含むが、いずれも人為改変地及びその周辺に生育する草本である。SD84（堀）の周囲はこれらヨモギ属やイネ科が主に繁茂する乾燥した環境であった。なお、高木の樹木は周囲に生育しておらず、二次林性のクマシデ属－アサダの樹木が多少生育していたと推定される。クワ科－イラクサ科もカラムシやカナムグラなどの路傍や荒れ地に生育する草本と考えられる。サジオモダカ属やタデ属サナエタデ節、イネ科の水生植物が検出されていることから、SD84（堀）はこれらが生育し、浅い水域を呈していたと推定される。

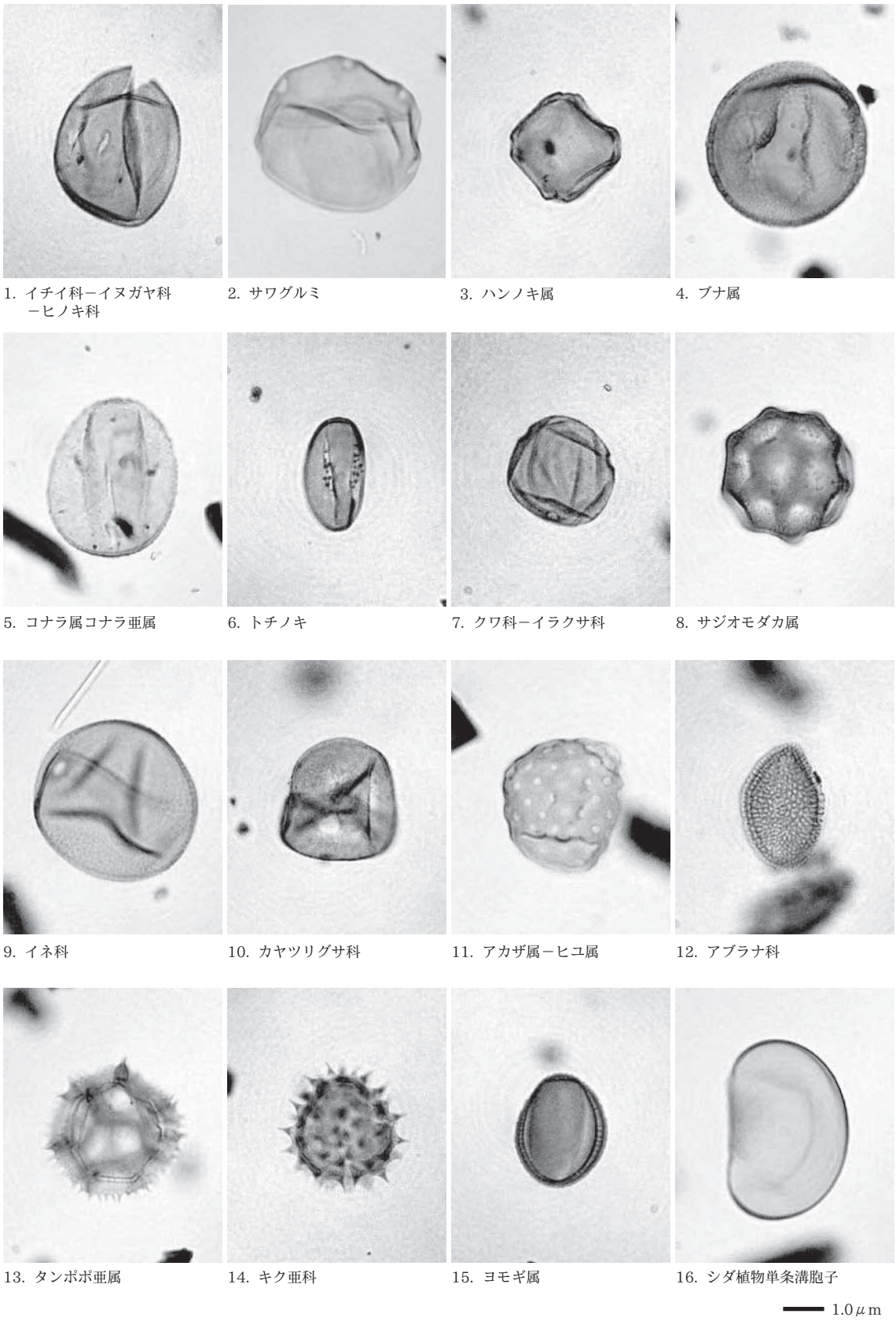
E　珪　藻　分　析

1）方　　法

珪藻の抽出と同定は以下の手順で行った。

①　試料から 1cm³ を採量

②　10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置



第 12 図　二反割遺跡の花粉・胞子

③　上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5 ～ 6 回）

④　残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

⑤　マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

⑥　検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ～ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

2）結　　果

a 分　類　群

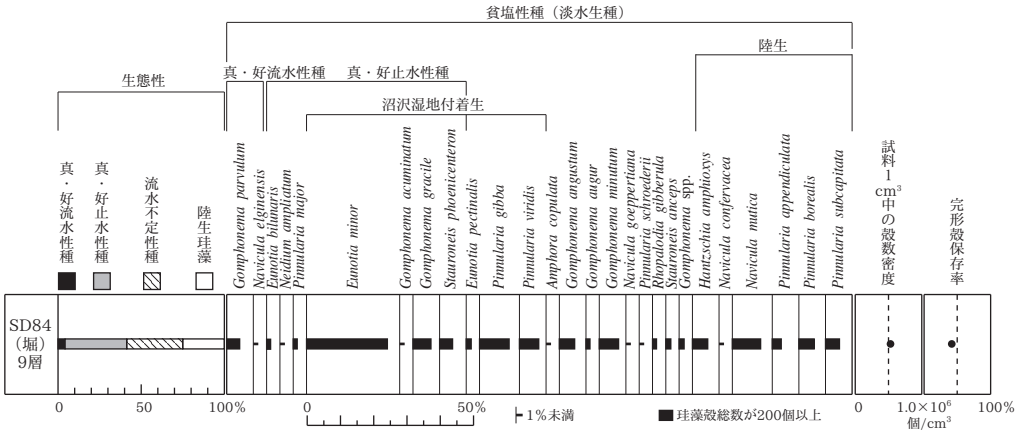
試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）27 分類群である。破片の計数は、基本的に中心域を有するものとし、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。第 6 表に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第 13 図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は［Lowe1974］や［渡辺 2005］等の記載により、陸生珪藻は［小杉 1986］による。環境指標種群は海水生種から汽水生種は［小杉 1988］により、淡水生種は［安藤 1990］による。主要な分類群については顕微鏡写真を第 14 図に示した。以下に出現した分類群を記載する。

分類群	SD84（堀） 9 層（最下層）
貧塩性種（淡水生種）	
Amphora copulata	1
Eunotia bilunaris	3
Eunotia minor	63
Eunotia pectinalis	4
Gomphonema acuminatum	1
Gomphonema angustum	12
Gomphonema augur	3
Gomphonema gracile	14
Gomphonema minutum	15
Gomphonema parvulum	10
Gomphonema spp.	4
Hantzschia amphioxys	12
Navicula confervacea	1
Navicula elginensis	1
Navicula goeppertiana	2
Navicula mutica	22
Neidium ampliatum	2
Pinnularia appendiculata	7
Pinnularia borealis	12
Pinnularia gibba	23
Pinnularia major	3
Pinnularia schroederii	1
Pinnularia subcapitata	11
Pinnularia viridis	15
Rhopalodia gibberula	3
Stauroneis anceps	4
Stauroneis phoenicenteron	10
合　計	259
未同定	8
破片	357
試料 1cm^3 中の殻数密度	5.3×10^4
完形殻保存率（%）	42.8

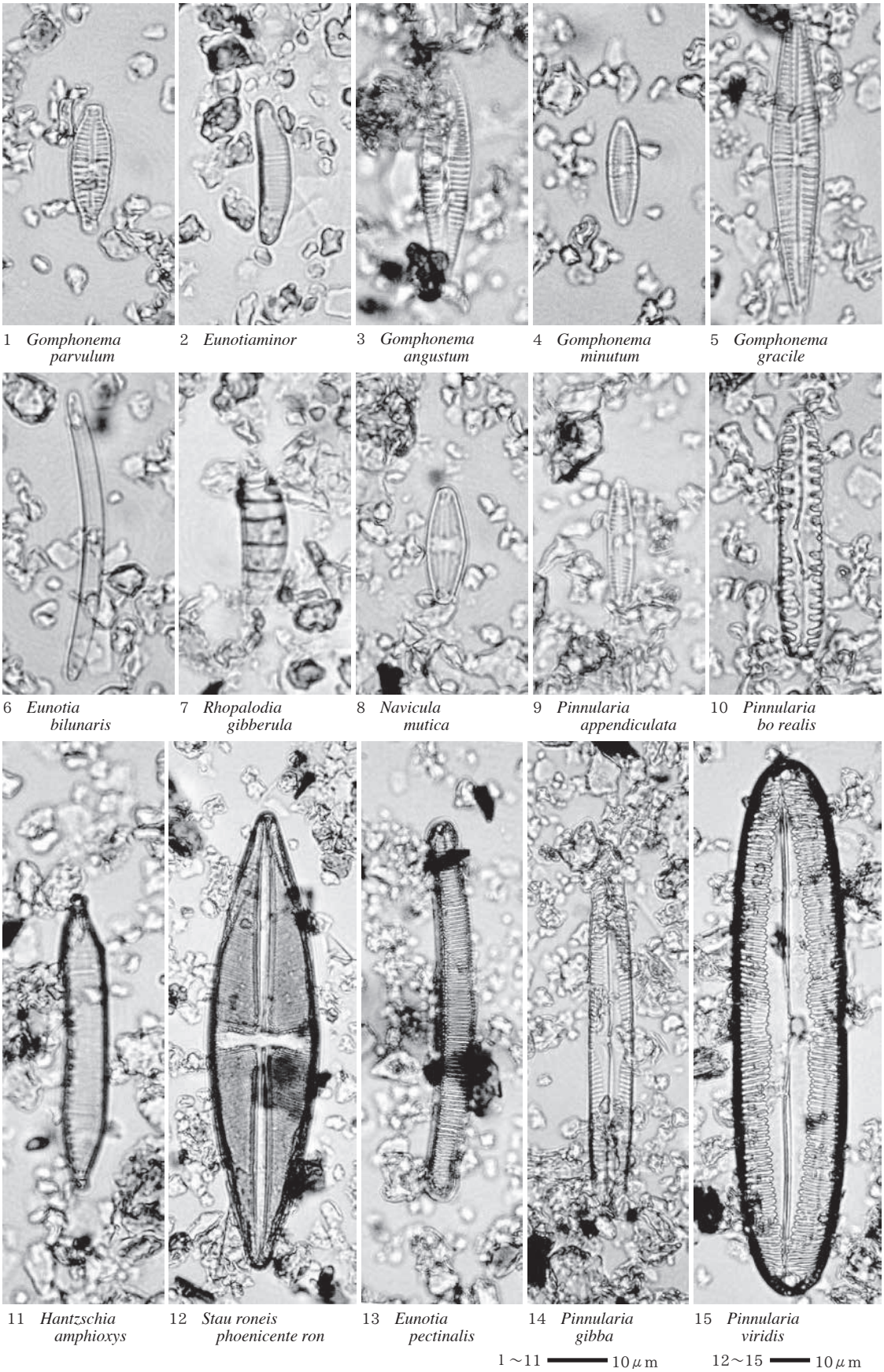
第 6 表　二反割遺跡における珪藻分析結果

〔貧塩性種〕

Amphora copulata、*Eunotia bilunaris*、*Eunotia minor*、*Eunotia pectinalis*、*Gomphonema acuminatum*、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema augur*、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema* spp.、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*Navicula elginensis*、*Navicula goeppertiana*、*Navicula mutica*、*Neidium ampliatum*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia major*、*Pinnularia schroederii*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia viridis*、*Rhopalodia gibberula*、*Stauroneis anceps*、*Stauroneis phoenicenteron*



第 13 図　二反割遺跡における主要珪藻ダイアグラム



第 14 図　二反割遺跡の珪藻

b　珪藻群集の特徴

珪藻密度は低く、貧塩性種（淡水生種）で占められる。真・好止水性種が約 35%、流水不定性種が約 35%、陸生珪藻が約 25%を占める。真・好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が優占し、*Gomphonema gracile*、*Stauroneis phoenicenteron*、流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis* が伴われる。ほかに流水不定性種では、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema minutum* も比較的多い。陸生珪藻では、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia appendiculata* などが出現する。

c　珪藻分析から推定される環境

真・好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が優占し *Gomphonema gracile*、*Stauroneis phoenicenteron*、が伴われ、止水性の沼沢湿地が主要な環境であったとみなされる。*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis* の流水不定性種で沼沢湿地付着生種、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema minutum* の流水不定性種が出現し、流水性の曖昧な沼沢湿地の環境も分布していた。付着生種が多いことから、水生植物が繁茂していたと考えられる。また、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia appendiculata* などの陸生珪藻も出現し、水域が陸と接する湿ったところもあった。

F　考察とまとめ

SD84（堀）の 9 層（最下層）について放射性炭素年代測定、花粉分析及び珪藻分析を行い、堀の年代、堆積環境と周辺植生について検討し、その結果を第 7 表にまとめた。

SD84（堀）9 層			SD84（堀）の環境	周囲の植生
年代	主要花粉	主要珪藻		
880 ± 20 年 BP	ヨモギ属 イネ科	*Eunotia minor*	サジオモダカ属・タデ属サナエタデ節・イネ科の水生植物が繁茂するやや不安定な浅い水域	ヨモギ属・イネ科を主にのクワ科－イラクサ科・タンポポ亜科の繁茂する乾燥した草地　二次林性のクマシデ属－アサダ低木の生育
	クワ科－イラクサ科 タンポポ亜科 サジオモダカ属 タデ属サナエタデ節 クマシデ属－アサダ	*Gomphonema gracile* *Pinnularia gibba* *Gomphonema angustum* *Navicula mutica*		

第 7 表　二反割遺跡で推定される環境と植生

1）SD84（堀）の年代

SD84（堀）の 9 層（最下層）から出土した炭化物は、880 ± 20 年 BP（2 σの暦年代で AD1050 ～ 1090，AD1120 ～ 1140，AD1150 ～ 1220 年）の年代値であった。出土した遺物等から想定された年代は 12 世紀後半頃とされていたが、年代測定の結果はこれにほぼ符合する。

2）SD84（堀）周囲の環境・植生

乾燥を好むヨモギ属とイネ科の花粉が優占することから、周囲は主にこれらの草本が繁茂し、乾燥した人為的環境であったと考えられる。高木は分布せず、クマシデ属－アサダの二次林性の低木が若干生育していたと推定される。カラムシやカナムグラなどの放棄地に生育する草本も生育していた。集落域や畑地などの人為地の環境が考えられるが、明らかな栽培植物が検出されておらず、集落の縁辺などのやや放置

された開けた草地の環境が推定される。

3）SD84（堀）の環境

珪藻分析の結果では、止水性の沼沢湿地を示唆する付着生種の Eunotia　minor が優占することから、SD84（堀）は止水性の浅い池状の水域であり、水生植物の繁茂が示唆される。流水不定性種や陸生珪藻、流水性種も生育しており、水位の変化や多少の流れ込みがあったとみなされる。花粉分析からサジオモダカ属やタデ属サナエタデ節、イネ科などの水生植物の生育が示唆される。

参 考 文 献

Bronk Ramsey C.　1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon,37（2）,425-430.

Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）, 355-363.

Paula J Reimer et al.,　2004　IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

尾嵜大真　2005　「INTCAL98 から IntCal04 へ」『学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア No.3 －炭素年代測定による高精度編年体系の構築－』14-15.

中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

中村　純　1967　『花粉分析』 古今書院　p.82-102.

島倉巳三郎　1973　「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集』60p.

中村　純　1980　「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録　第 13 集』91p.

中村　純　1974　「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究　13』p.187-193.

中村　純　1977　「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学　第 10 号』p.21-30.

金原正明　1993　花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第 10 巻　古代資料研究の方法』 角川書店 p.248-262.

Hustedt,F.　1937-1938　Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl. 15, p.131-506.

Lowe,R.L.　1974　Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot　1986-1991　Bacillariophyceae・1-4.

Asai,K.&,Watanabe,T.　1995　Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理　42』p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示　1991　「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌　6』p.23-45.

小杉正人　1986　「陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究　第 1 号』植生史研究会　p.29-44.

渡辺仁治　2005　『淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo, pH 耐性能』 内田老鶴圃　666p

7　ま　と　め

A　遺構・遺物から見た遺跡の位置付け

1）古　墳　時　代

古墳時代の遺構・遺物の検出は、調査区北西部にほぼ限定された。遺構は土坑 1 基のみで、そのほか、土器を多く含む自然の落ち込みを 2 か所で検出した。

土器は、中期から後期頃のものが SX102 からやや多く、SX101 や SD84 の覆土中から少量出土した（図版 15）。古墳時代中期の土器は、川村浩司氏による上越市関川右岸下流域編年の 8 ～ 10 段階［川村 2000］頃に位置付けられる。この段階の本遺跡周辺の主な遺跡としては、上越市下割遺跡［山崎ほか 2004］、同北割遺跡［品田 2003］、同中島廻り遺跡［川村・笹沢ほか 2003］などがある。

後期は、土師器と須恵器が少量出土した。土師器には、いわゆる黒色土器があり、13 は当時の須恵器杯身を模倣したものである。口縁部が比較的高いので、後期でも前半頃のものと思われる。須恵器は杯身、壺、甕の小片を図示した。杯身 18 は小片であるが、後期後半頃のもと思われる。現上越市域での古墳時代の須恵器（以下では、基本的に 5 ～ 6 世紀代のものを古墳時代の須恵器とする。）は、7 世紀代を含めた頸城古墳群の出土例は古くから知られていたが、昭和 50 年代から始まった初期の集成［坂井 1983・吉岡 1984 など］では、集落跡からの出土例が示されなかった。平成に入り、北割遺跡や一之口遺跡の出土例が示されて以降は古墳、集落跡とも少しずつ出土例が増えている。本遺跡周辺で古墳時代の須恵器が出土した主な遺跡としては、上越市中島廻り遺跡（5c 後～ 6c 後）、同今池遺跡（5c 後）［滝沢 2003］、同黒田古墳群（5c 後）［尾崎 2002］、同板倉区南原遺跡（5c 後）［大平 2001］、同柿崎区新保遺跡（6c 前）［石川ほか 2001］、同北割遺跡（6c 前）、同延命寺遺跡（6c 前）［山崎ほか 2008］、同一之口遺跡（6c 後）［鈴木・春日ほか 1994］、妙高市万五郎古墳（6c 後）［新潟県 1983］などがある。当時の頸城地域、さらには県内全体でも須恵器窯は存在せず、畿内の陶邑窯産や東海地方の窯産が流入していたとされる。また、6 世紀前半頃から石川県の南加賀窯産のものが加賀をはじめ、能登、越中、越後、出羽へと広く流通したことが指摘されており［望月 2009］、上越市域にも恐らく流入していたと思われる。

本遺跡周辺の古墳は、現上越市の南東部、飯田川や櫛池川に面する扇状地上などに、北から観音山墳墓群［北澤 2009］、稲原大野古墳群、水吉古墳群、水科古墳群、宮口古墳群、高士古墳群、北方古墳群、菅原古墳群がある（第 5 図）。稲原大野古墳群は、本遺跡の南東 1km に位置する自然堤防上に築かれた群集墳で、5 世紀後半～ 6 世紀前半の築造とされる［秦ほか 2002］。菅原古墳群内にある前方後円墳の菅原神社古墳（菅原 31 号墳）は 6 世紀中葉前後の築造とされる［小黒 1999］。宮口・水科古墳群や高士古墳群は 6 世紀後半に築造が開始されたと考えられている［小黒 1999］。

小林昌二氏は、6 世紀代に誕生した久比岐国造の本拠地は黒田古墳群のある辺りの関川左岸とし、清里区の物部神社や菅原神社古墳、宮口・水科古墳群のある辺りは『和名抄』の物部郷にあたり、ここに 6 世紀後半頃に物部氏が東山道方面から進出してきたと推定するなど、文献史学の立場から 6 世紀代の上越市域について度々言及している［小林 1996 等］。合併した上越市の 6 世紀前後の歴史について、古墳、集落、遺物、文献から総合的に検討されることが望まれる。

2）中　　世

a 遺構について

本遺跡で検出した中世の遺構は、掘立柱建物が10棟・井戸5基・土坑8基・溝2条・性格不明遺構1基である。遺構の分布として、調査区の西端をやや弧を描きながら南北に縦断するSD84があり、このSD84を境として全遺構を東側で検出した。SD84は珪藻分析の結果（第Ⅲ章6参照）、水は流れていないことから集落の内と外を区画する堀（溝）と考えている。遺跡は出土遺物から12世紀と見られる。遺物同士に大きな時期差が見られないことから、12世紀を通して営まれた存続期間が短い集落であったと思われる。

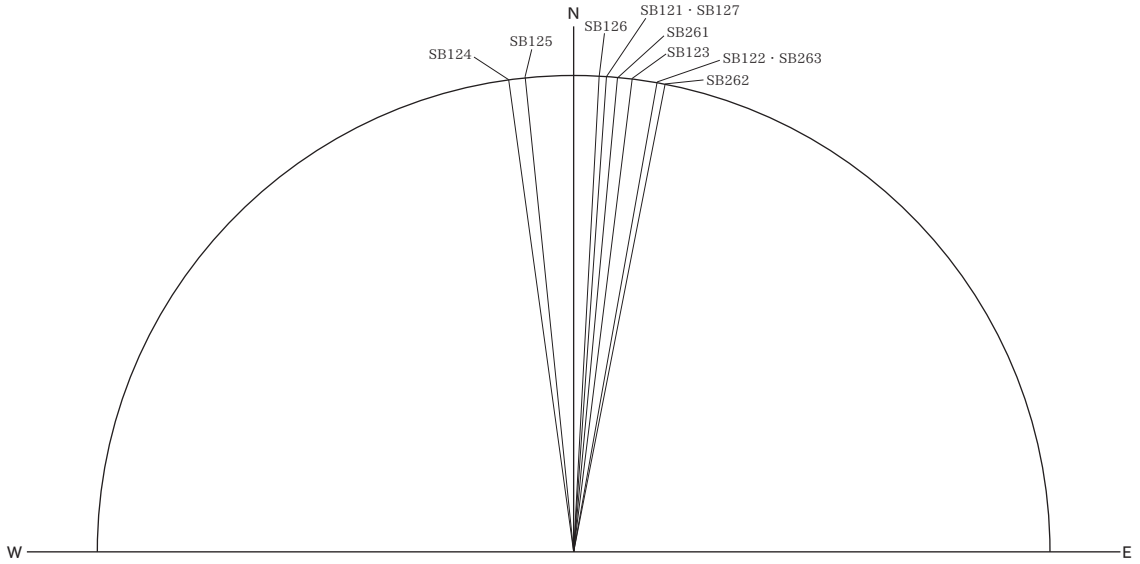
掘立柱建物には重複関係が見られ、短期間の存続であったものの建て替えを行ったと推測する。調査区中央部のSB261～263と、調査区南東部のSB121～123がそれぞれ重複しており、少なくとも2回の建て替えまたは3期に分かれる。

出土遺物から時期が明らかな建物は、SB121で12世紀前半である。したがって、SB121を切るSB122・SB123は12世紀後半の建物に当たると推測する。

建物の軸方位を調べて見ると、大きく分けて3つのグループに分かれた（第15図）。まずSB121・126・127・261のグループである。これらは同軸方向を向いているため、同時期の可能性がある。ただSB127はSE83と重複しているため若干の時期差の可能性もある。しかし、並行するSB126と同軸方向を向くことや建物の規模が近似することから、大きな時期差はないと考えられる。次にSB122・123・262・263のグループである。これらもほぼ同軸方向を向くことから、同時期に存在していた可能性があるが、SB263はSB262を切るため相対的に新しい建物といえる。このグループの建物は、SB122・123が12世紀前半に比定されるSB121を切っていることから12世紀後半と考える。最後にSB124・125の2棟である。上記の2グループと異なり西方向に軸を持つグループである。両遺構から時期を示す出土遺物はない。SB124が12世紀後半に比定されるSE3と重複関係にあるが新旧関係は不明である。しかし、周囲の遺構や出土遺物との関係から12世紀代の建物であると推測する。

検出された掘立柱建物には、もうひとつ特徴が見られる。それは、柱の当たりの有無である。柱の当たりは、柱の自重と建物の荷重が柱にかかって生じた圧痕や変色した部分であると考えられている［独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2010］。今回の調査で、調査区南東部隅で検出した3棟の掘立柱建物を構成する柱穴には、大小関わらず柱の当たりを確認することができた。SB121の当たりの径は20cm前後で、残りの2棟の当たりの径は15cm前後であった。このことから、SB121は20cm前後の柱を、SB122・123は15cm前後の柱を使って建てられていたと思われる。特に、SB121は掘形がほかのどの掘立柱建物よりも大きく深く掘られていたことから、建物の用途を異にしていたことがうかがえる。これに対して、調査区中央部にある掘立柱建物には柱の当たりを確認することは出来なかった。SB261はSB121と同じ総柱建物であるにも関わらず、掘形は小さく、深さも浅かった。どちらかと言えば、B122・123を構成する柱穴に近いものであった。ほかの中央部の掘立柱建物を構成する柱穴もこれに近い。しかし、SB122・123にも当たりが見られたことから、南東部の3棟の掘立柱建物は倉庫であった可能性がある。

また掘立柱建物付近では多くの場合、井戸または土坑を検出した。これらの遺構は、掘立柱建物に伴う可能性が考えられる。なかでもSK30・111は主軸方向や周辺の掘立柱建物との位置関係から、SK30は



第 15 図　二反割遺跡　掘立柱建物の軸方位

第 16 図　二反割遺跡　遺構の時期別分類図

SB125 に、SK111 は SB124 に伴うものと考えられる。規模は前者が長径 233cm、短径 78cm、深さ 20cm で、後者が長径 200cm、短径 80cm、深さが 22cm となっている。どちらも建物の西側に 1.5m ほどの距離で隣接している。SK30 の埋土には多量の炭化物と土師質土器の細片が含まれていた。このような遺構の類例は、富山県梅原胡摩堂遺跡［島田 1994］と同県臼谷岡ノ城北遺跡［山森 1992］で見られた。梅原胡摩堂遺跡で検出された SZ119 は溝を挟んで建物に隣接しており、規模は長径 180cm、短径 90cm、深さ 20cm で、木棺の痕跡は見られないものの、副葬品と思われる土師質土器が 5 点出土している。富山県臼谷岡ノ城北遺跡で検出された SK8 は SB1 の西 1.5m に位置し、建物の南北軸方向と長軸方向が同じである。規模は長径 180cm、短径 90cm、深さ 20cm で、土師質土器の小皿が 3 点出土している。どちらも土坑墓として報告されているが、このような立地傾向にある土坑は屋敷墓の可能性があることを指摘している［島田 1994］。

屋敷墓とは、屋敷地の内部や隣接した場所で 1 ～ 2 基で検出される[1] ものである。その出現は、西日本を中心として 11 世紀中頃からと考えられており、12 世紀後半から 13 世紀後半に最盛期を迎える。しかし、東日本への普及の度合いは低く、検出例は少ない［狭川 2011］。本遺跡の土坑 2 基からは、土坑墓と断定できる出土遺物は認められなかったものの立地や規模が近似するため、その可能性を示唆しておきたい。

今回の調査によって、当該地域の 12 世紀における中世集落の様相の一端が垣間見られた。集落は、堀（溝）により区画され、その内側に建物が井戸や時には土坑を伴っていた。また、SE169 から白磁瓶の体部片が出土していること、大規模な総柱建物の周りに小規模な掘立柱建物が立地すること、南東部では倉庫として利用していたと考えられる総柱建物が存在するなどから、一般農民だけではなく有力者（名主層・村落領主）の存在が考えられる。今回の調査で見つかった中世の集落は調査区外の東へと広がるものと見られ全体像は明らかでない。今後の調査にゆだねたい。

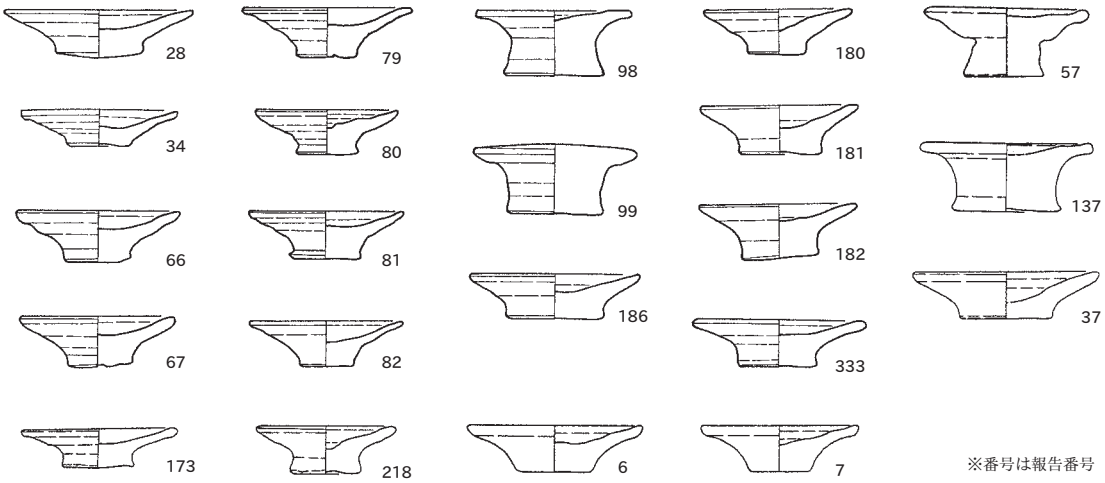
b　土器・陶磁器について（第 17 図・第 8 表）

中世は、白磁椀・瓶、珠洲焼甕・壺・片口鉢、土師質土器皿が掘立柱建物・井戸・堀などから少量出土した（図版 15 ～ 17・38・39）。珠洲焼は I 期［吉岡 1994］に、土師質土器皿は 12 世紀前半から後半におおむね位置付けられそうである。以下では、土師質土器皿と珠洲焼片口鉢について若干考察したい。

本遺跡出土の土師質土器皿で図示し得たものは、ロクロ成形のものがほとんどであった。本遺跡周辺の上越市至徳寺遺跡［水澤・鶴巻 2003］では、12 世紀後半からロクロ成形のものが減り、手捏成形のものが主体となるという。

SE83 出土の土師質土器皿 37 は、口縁部が逆「ハ」字状に反り気味に開き、下部に低い柱状高台が付くものである。周辺では上越市至徳寺遺跡、同鉄砲町遺跡［横田ほか 1995］、同海道遺跡［高橋 2005］、同木田遺跡［北村 2001］、同吉川区寺町遺跡［秦ほか 1994］、同三和区法花廃寺［秦・坂井 1990］、同牧区宮口古墳群 26 号墳［秦ほか 1976］から柱状高台の土師質土器皿が出土している。至徳寺遺跡出土の柱状高台皿は、第 188 号遺構出土（28）・第 476 号遺構出土（34）が 11 世紀前半代に、第 190 号遺構出土（66・67）・第 107 号遺構出土（79 ～ 82）・第 48 号遺構出土（98）・第 440 号遺構出土（99）は 11 世紀後半に、第 222 号遺構出土（180 ～ 182）・第 566 号遺構出土（186）が 12 世紀前半に、G 区土器溜 1 出土（333）

1） 屋敷墓については、水澤幸一氏の御教示を得た。



28. 至徳寺 188 号遺構　34. 同 476 号遺構　66・67. 同 190 号遺構　79 ～ 82. 同 107 号遺構　98. 同 48 号遺構　99. 同 440 号遺構
180 ～ 182. 同 222 号遺構　186. 同 566 号遺構　333. 同 G 区土器溜 1　173. 鉄砲町 SE54　218. 同 SE31　6・7. 法花廃寺
57. 木田 SD279　137. 海道 SE420　37. 二反割 SE83（s=1/4）

第 17 図　上越市内出土の柱状高台皿

番号	報告番号	所在地	遺跡名	遺構名	法量（cm）				型体指数		口縁形態	底部糸切り	出典	時期
					器高	口径	底径	口厚	高口	底口				
1	図 16–31	上越市三和区岡木	二反割遺跡	SE3・SD84	12.9	28.6	9.9	0.9	45	35	b	静止	本稿	Ⅰ期
2	図 17–45	上越市三和区岡木	二反割遺跡	SD84		28.2		1.2			b		本稿	Ⅰ期
3	図 17–46	上越市三和区岡木	二反割遺跡	SD84		29		0.6			e		本稿	Ⅰ期
4	図 17–47	上越市三和区岡木	二反割遺跡	SD84		27.1		0.7			e		本稿	Ⅰ期
5	図 17–48	上越市三和区岡木	二反割遺跡	SD84		25.6		0.8			a		本稿	Ⅰ期
6	図 1–18	上越市三和区錦	伝十万寺塚群	9 号塚	7	21	11	0.6	33	52	b	静止	秦ほか 2002	13世紀前半
7	図 1–21	上越市三和区島倉	西山遺跡		7.5	21	10.3	0.7	36	49	b	静止	秦ほか 2002	13世紀前半
8	図 82–316	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡			21.1		0.6			b		北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
9	図 82–317	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡			16.7		0.9			e		北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
10	図 82–318	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡		7.2	18	6.8	0.8	40	38	a	静止	北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
11	図 82–319	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡		6.7	22.3	5.7	0.6	30	27	b	静止	北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
12	図 82–320	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡		7.3	16.1	8.2	0.7	45	51	a		北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
13	図 82–321	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡			19.2	9	0.7		47	c		北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
14	図 82–323	上越市柿崎区柿崎	木崎山遺跡			20		0.8			b		北村・高橋ほか 1992	Ⅰ期
15	462	上越市吉川区河沢	河沢塚遺跡		12.5	32.4	12	0.8	39	37	b		吉岡 1994	Ⅰ期
16	図 38–66	上越市板倉区熊川	仲田遺跡	SD116		29.7		1.2			b		加藤ほか 2003	Ⅰ期
17	図 38–69	上越市板倉区熊川	仲田遺跡	SD201		28.6		0.8			b		加藤ほか 2003	Ⅰ期
18	図 39–90	上越市板倉区熊川	仲田遺跡	SE123		28		1			c		加藤ほか 2003	Ⅰ期
19	図 39–91	上越市板倉区熊川	仲田遺跡	SE123		22.8		0.8			b		加藤ほか 2003	Ⅰ期
20	図 39–100	上越市板倉区熊川	仲田遺跡	SE19		26.2		1.2			b		加藤ほか 2003	Ⅰ期
21	図 39–102	上越市板倉区熊川	仲田遺跡	SE141		30.7		0.7			c		加藤ほか 2003	Ⅰ期
22	図 42–275	上越市東雲町	至徳寺遺跡	第 493 号遺構		22.4		0.6			a		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
23	図 43–307	上越市東雲町	至徳寺遺跡	第 51 号遺構		23.4		0.7			a		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ３期
24	図 46–378	上越市東雲町	至徳寺遺跡	第 55 号遺構			11.3						水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
25	図 47–416	上越市東雲町	至徳寺遺跡	第 634 号遺構		27.8		0.7			a		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
26	図 47–428	上越市東雲町	至徳寺遺跡	第 636 号遺構		22.4		0.6			a		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
27	図 48–469	上越市東雲町	至徳寺遺跡	第 633 号遺構		29		0.6			b		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
28	図 55–678	上越市東雲町	至徳寺遺跡		7.5	17.8	9.6	0.7	42	54	b		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
29	図 55–679	上越市東雲町	至徳寺遺跡		8.5	19.8	7.5	0.6	43	38	c		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
30	図 55–680	上越市東雲町	至徳寺遺跡			17.6		0.7			c		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
31	図 55–681	上越市東雲町	至徳寺遺跡			18.7		1			c		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
32	図 55–682	上越市東雲町	至徳寺遺跡			21.8		0.8			c		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
33	図 55–684	上越市東雲町	至徳寺遺跡			29.2		1			c		水澤・鶴巻 2003	Ⅰ期
34	図 78–480	上越市木田	木田遺跡	SD279		20.4		0.6			e		北村 2001	Ⅰ期
35	図 78–482	上越市木田	木田遺跡	SD279		27.9		0.9			e		北村 2001	Ⅰ期
36	図 29–146	上越市向橋	海道遺跡	SE430		28		0.9			a		高橋 2005	Ⅰ期
37	図 30–167	上越市向橋	海道遺跡	SE560								回転	高橋 2005	Ⅰ期
38	図 30–168	上越市向橋	海道遺跡	SE560		21.2		0.8			b		高橋 2005	Ⅰ期
39	図 31–185	上越市向橋	海道遺跡	SE1719	10.4	24.5	10.6	0.8	42	43	c	静止	高橋 2005	ⅠかⅡ期

第８表　上越市内出土の珠洲焼Ⅰ期の片口鉢計測表

が 12 世紀後半に比定されている［水澤・鶴巻 2003］。鉄砲町遺跡 SE54 出土（173）は、報告書では 12 世紀前半に、春日真実氏の論考では 11 世紀中葉から末前後に比定されている［春日 1997］。寺町遺跡 29 号井戸出土は、12 世紀に比定されている。法花廃寺出土（18・19）は、11 世紀後半から 12 世紀前半頃の事例として掲げられている［品田 1991・八峠 2001］。木田遺跡 SD279 出土（57）は、12 世紀後半に比定されている［北村 2001］。海道遺跡 SE420 出土（137）は、報告書では 13 世紀初頭頃に比定されている。本遺跡周辺の柱状高台の土師質土器皿は 11 世紀前半から 12 世紀後半にかけて多くはないが認められるようである。本遺跡出土の土師質土器皿 37 は、法量や器形から至徳寺遺跡第 222 号遺構出土（181）・第 566 号遺構出土（186）が類例と思われ、時期は 12 世紀前半頃と推定される。

SE3 出土の珠洲焼の片口鉢 31 は、口径 28.6cm、底径 9.9cm、高さ 12.9cm で、吉岡康暢氏の形態分類では高口指数（器高÷口径× 100）45 で標準型、底口指数（底径÷口径× 100）35 で口径に対する底径が比較的小さいタイプとなる。口縁端部が面取りされた外傾口縁で、内面には卸し目が認められない。珠洲焼編年Ⅰ期のものである。

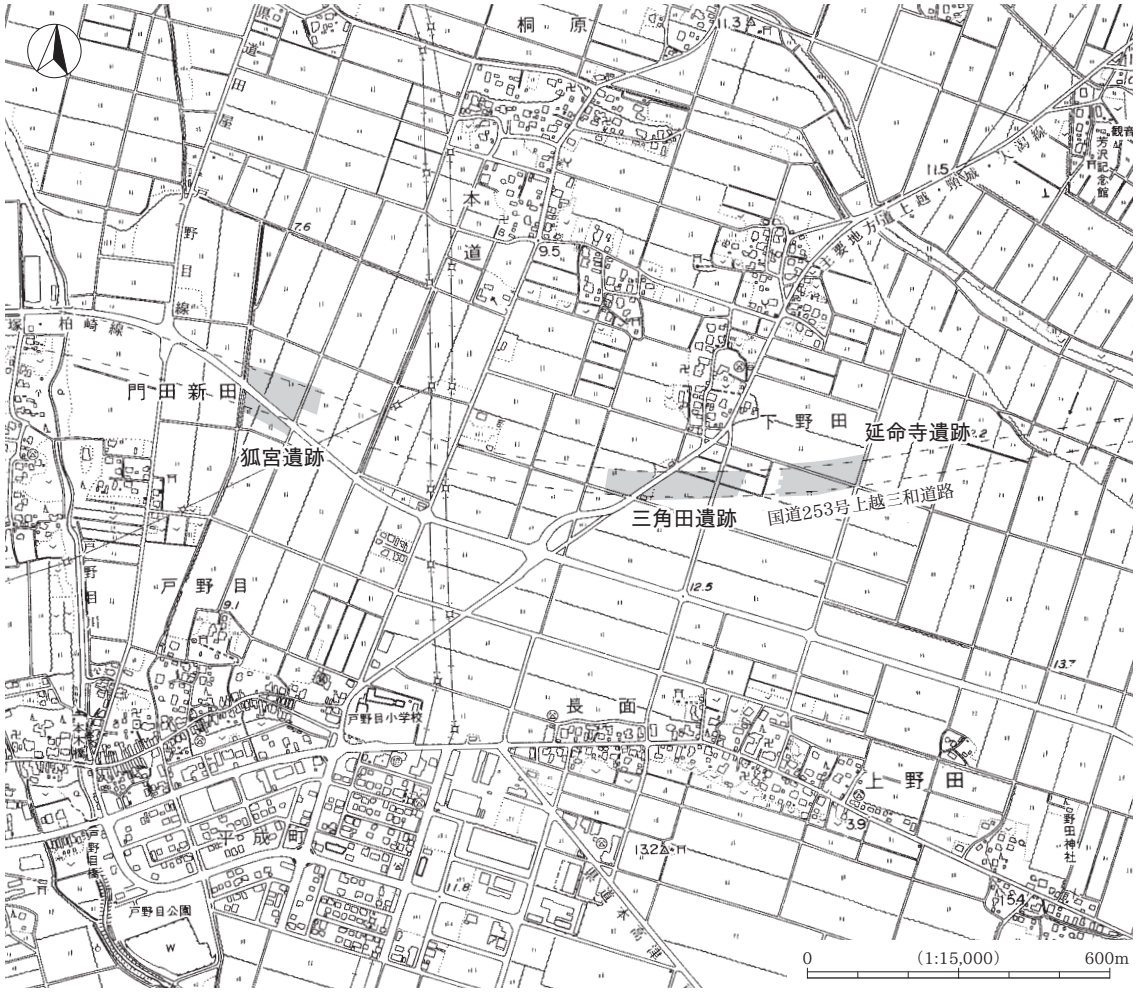
本遺跡周辺で、Ⅰ期（一部Ⅱ期を含む）として報告されている片口鉢を第 8 表に示した。法量には推定値が多く含まれていると思われるが、吉岡氏による形態分類に当てはめると、高口指数 41 以上の標準型ないし腰高型（Ⅰ類）が 5 点、40 以下の低平型（Ⅱ類）が 5 点認められる。底口指数 41 以上の口径に対する底径が大きいものが 6 点、40 以下の比較的小さいタイプが 5 点ある。口径 28cm 以上の 1 類は 11 点、20 ～ 27cm 台の 2 類は 18 点、20cm 以下の 3 類は 8 点ある。口縁形態の分類［吉岡 2003］は実測図からは判断しづらいが、内端が嘴頭状に突出した外傾口縁 a 類が 8 点、方頭の外傾口縁 b 類が 15 点、方頭の水平口縁 c 類が 9 点、円頭の口縁 e 類が 5 点ある。吉岡氏の分類にはないが、口縁部厚が 0.6 ～ 0.7mm の薄いものは 18 点、0.8 ～ 0.9mm のものは 13 点、1.0 ～ 1.2mm の厚いものは 6 点ある。底部の切り離しは、静止糸切りが 5 点、回転糸切りが 1 点ある。内面に卸し目があるものは報告されていない。23（第 8 表）の口縁端部と体部外面には波状文が施される。Ⅰ期はさらにⅠ 1 ～Ⅰ 3 期に細分されているが、細分時期が示されたのは 23 のみでⅠ 3 期とされる。以上の形態分類の中に時期細分の指標となりそうなものがあると思われるが、今回は確認できなかった。今後の課題としたい。

第Ⅳ章　延命寺遺跡Ⅱ

1　遺跡の立地と周辺の微地形（第 18 図）

延命寺遺跡は、高田平野の中央部、高田市街から東 4.5km に位置する。2011（平成 23）年度調査区は上越市下野田字延命寺に所在し、2006・2007（平成 18・19）年度調査区の東側にある。遺跡は、高田平野を北流する関川と、飯田川の間を流れる重川左岸の低地に立地する。下野田集落の南に位置し、遺跡周辺には水田が広がる。東 2km に下割遺跡、西 1km に狐宮遺跡、西隣に三角田遺跡がある。

8 世紀初頭～前葉の生活面の標高は、2004（平成 16）年度調査の三角田遺跡の東側で 10.0 ～ 10.1m、2006･2007（平成 18･19）年度調査の延命寺遺跡で 9.4 ～ 9.7m、本年度調査の水田面で 9.2 ～ 9.5 mで、わずかに起伏しながら東側へ緩やかに標高を下げている。なお、この生活面の上には、50cm 前後の洪水堆積層（無遺物層）が三角田遺跡の東側から延命寺遺跡全体に堆積しており、その上の包含層から 8 世紀中葉の土器が出土していることから、この洪水堆積層は 8 世紀前葉～中葉頃に堆積したと考えられる。



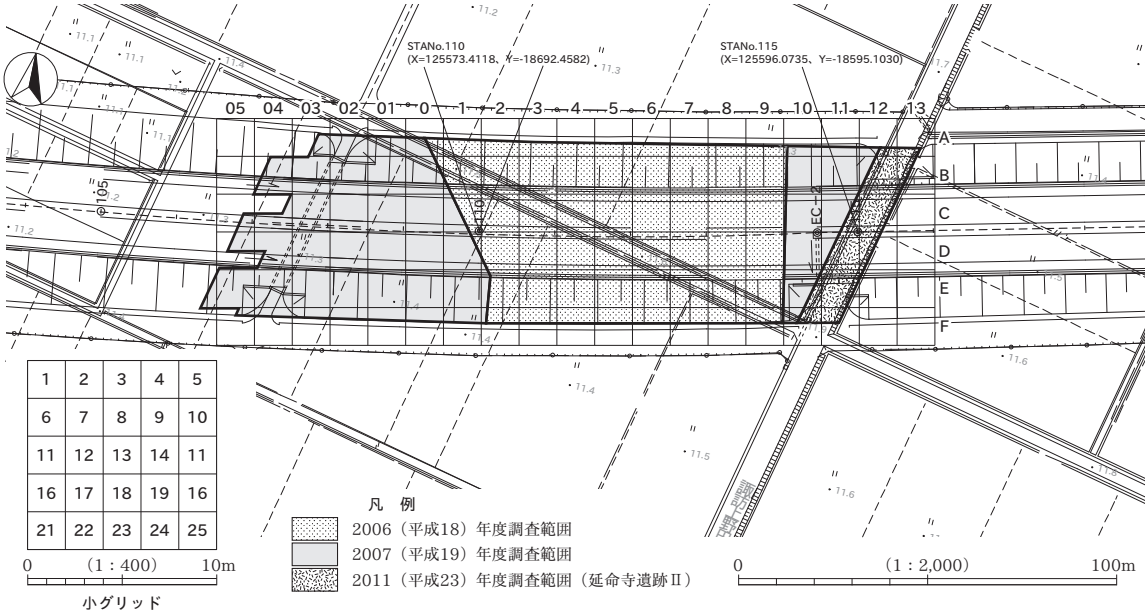
第 18 図　延命寺遺跡の位置と周辺の微地形

［上越市役所発行「上越市街図」1：10,000 原図］

2 グリッドの設定（第19図）

グリッドは、2006（平成18）年度調査の延命寺遺跡で設定したグリッドを東側に延長した。基準になっている横軸は、上越三和道路のセンター杭２点で、センター杭STA–No.110（世界測地系X=12552.7473、Y=-18441.6111）とSTA–No.115（世界測地系X=125245.4086、Y=-18314.2259）を結んだ線である。これに直交して基点（STA–No.110）を通る線を縦軸とする主軸を設定した。グリッド基準線の方位は、南北軸が真北から約13度西偏している。

この主軸をもとに、一辺が10mの方眼を組み大グリッドとした。大グリッドは東西軸を西から東に算用数字順、南北軸は北から南にアルファベット順とし、両者を組み合わせて表示し、例えば「10Ｅ・11D・12Ｃ・・・」などと呼称した。小グリッドはさらに各大グリッドを２m方眼に分け、北西隅を「１」に、南東隅を「25」になるように算用数字順に配列し、大グリッド表示の後に続けた。包含層出土遺物は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせ、例えば「11Ｅ25・12Ｂ14・13Ａ22・・・」などのようにして取り上げた。



第19図 延命寺遺跡 グリッド設定図

3 基 本 層 序（第20図）

基本層序は、2006・2007（平成18・19）年度調査とほぼ同様であり、Ⅰ～Ⅹ層に分け説明するが、細部については解釈が異なる可能性がある。

盛 土 調査範囲内に60～80cm堆積していた。

Ⅰ 層 10YR5/1 褐灰色粘土。表土、現水田耕作土。植物根を多く含む。

Ⅱ 層 N4/0 灰色粘土。

Ⅲ 層 N5/0 灰色粘土。灰白色石灰質粒子（菱鉄鉱？）を多く含む。

Ⅳ　層　5B3/1　暗青灰色粘土。調査区北側西壁から土師器片が少量出土している。

Ⅴ　層　7.5GY6/1　緑灰色粘土。暗青灰色粘土を少量、黄色中粒砂を多く含む。

Ⅵ上層　10YR6/1　褐灰色シルト。黄色中粒砂を多く含む。12C で上下に分かれる。洪水堆積層。

Ⅵ下層　10YR6/1　褐灰色粘土。黄色中粒砂を多く含む。洪水堆積層。

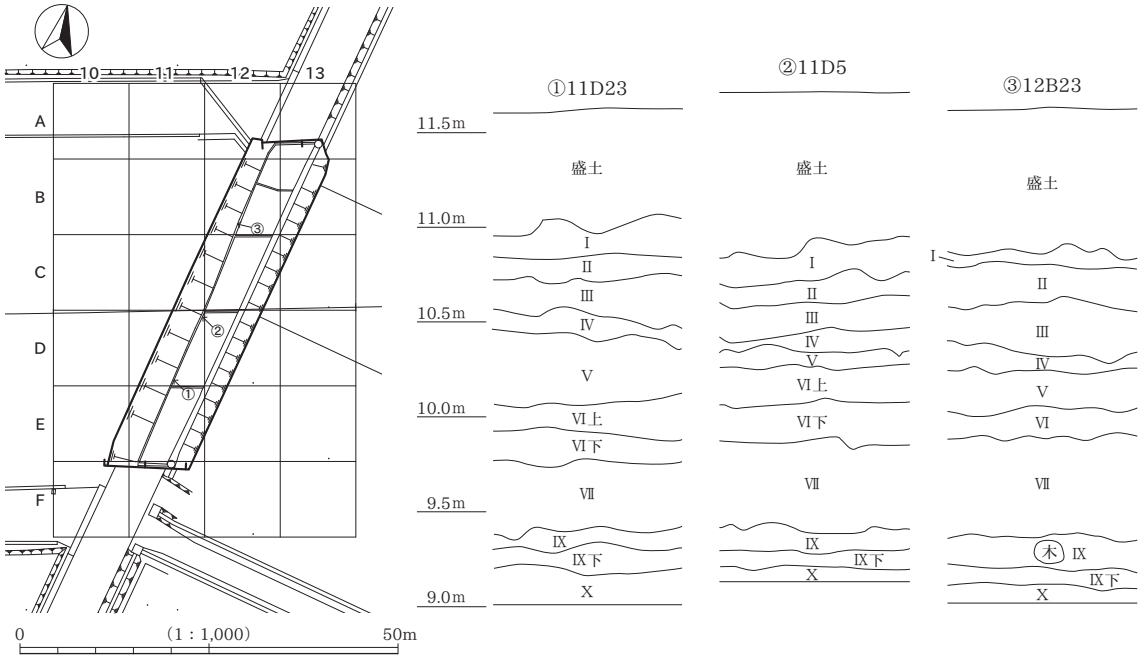
Ⅶ　層　緑色・黄色細粒～粗粒砂、褐灰色シルトの互層。洪水堆積層。

Ⅷ　層　N6/0　灰色シルト。調査区北側の水田区画に薄く堆積するのみである。

Ⅸ　層　N3/0　暗灰色粘土。上部は黒色を呈する。古墳時代・飛鳥時代の遺物包含層であり、また、奈良時代の水田耕作土である。

Ⅸ下層　N6/0　灰色粘土。暗灰色粘土を多く含む。

Ⅹ　層　N6/0　灰色砂質シルト。古墳時代～飛鳥時代の遺構検出面。



第 20 図　延命寺遺跡Ⅱ　基本層序

4　遺　　構

A　概　　要

下層の調査では土坑 1 基、ピット 10 基、溝 1 条、上層の調査では水田跡を検出した。遺構の時期は、下層が古墳時代前期と飛鳥時代頃、上層が奈良時代である。2006・2007（平成 18・19）年度の調査（図版 18）では、古墳時代の溝 2 条、土坑 1 基など、飛鳥時代の竪穴建物 4 棟、平地建物 4 棟、掘立柱建物 4 棟、井戸 4 基など、奈良時代の掘立柱建物 6 棟、井戸 8 基、畑跡、水田跡などを検出した。これらの遺構の分布は、古墳時代と飛鳥時代が調査区東側に多く、奈良時代の遺構は調査区全体に分布していた。本年度の調査では、下層・上層とも 2006・2007（平成 18・19）年度に検出した遺構・遺跡の東への広がりを確認できた。

B 記 述 方 法

遺構の説明と呼称は、前述の二反割遺跡の報告に準ずる。遺構番号は、2006・2007（平成 18・19）年度調査に続く連番とし、調査の進行に合わせて 4001 から 4012 までの通し番号を付けた。遺構の形態及び計測値は、遺構検出面での数値である。

C 遺 構 各 説

1）古墳・飛鳥時代の遺構

下層の調査は、上層の調査が終了した後、遺物包含層（Ⅸ層）を 15 ～ 20cm 掘り下げ、Ⅹ層を遺構検出面として行った。遺構検出面の標高は 9.0 ～ 9.3 m で、南から北へ緩やかに傾斜している。遺構の分布は、調査区中央からやや北側の 12C に集中していた。

a 土　　坑

SK4001（図版 19 ～ 21・41・42）

12C18・23 に位置するもので、東側は暗渠に切られている。平面形は楕円形であったと考えられ、長径 174cm、短径 70cm 以上、深さ 63cm、断面形は台形状である。埋土は 4 層に分層され、レンズ状に堆積する。埋土の第 2 層には炭化物を多量に含んでいた。遺物は埋土の上層から中層にかけて土師器片が 10 点出土した。

b 柱　　穴

P4005（図版 19 ～ 21・42）

12C12･13 に位置する。平面形は円形で、長径 57cm、短径 55cm、深さ 53cm、断面形は U 字状である。柱穴内には柱根が残っていた。埋土は 4 層に分層される。柱根は柱穴の底面より 12cm 低くなっているが、このピットのある場所は基本土層Ⅹ層の下が今も水が湧き上がる砂地となっており、長い年月の経過により沈んだ可能性がある。遺物は出土していない。

P4012（図版 19 ～ 21・42）

12C8・9 に位置する。平面形は中央部がくびれる楕円形で、長径 122cm、短径 69cm、深さ 54cm、断面形は台形状である。柱穴内には柱根が残っていた。柱根は柱穴の底面より 16cm 低くなっている。埋土は 4 層に分層される。遺物は出土していない。東北東 3m にある上述の P4005 と同一の建物を構成していた可能性がある。

P4003（図版 19 ～ 21・42）

12C14 に位置するもので、東側は暗渠に切られている。長径 60cm、短径 25cm 以上、深さ 62cm、断面形は U 字状である。埋土は 3 層に分層され、水平状に堆積する。遺物は出土していない。

P4004（図版 19 ～ 21・42・43）

12C8･13 に位置する。平面形は円形で、長径 49cm、短径 41cm、深さ 44cm、断面形は U 字状である。埋土は 4 層に分層される。遺物は出土していない。

P4007（図版 19 ～ 21・42・43）

12C13･14 に位置する。平面形は楕円形で、長径 87cm、短径 60cm、深さ 70cm、断面形は台形状である。

埋土は４層に分層される。遺物は土師器小片が１点出土した。

P4008（図版 19 ～ 21・42・43）

12C18 に位置する。平面形は楕円形で、長径 71cm、短径 42cm、深さ 33cm、断面形は弧状である。埋土は２層に分層される。遺物は出土していない。

P4002（図版 19 ～ 21・42）

12C13・14 に位置する。平面形は円形で、長径 33cm、短径 29cm、深さ 24cm、断面形はＵ字状である。埋土は３層に分層される。遺物は土師器小片が１点出土した。

P4006（図版 19 ～ 21・42）

12C22 に位置する。平面形は円形で、長径 26cm、短径 23cm、深さ 26cm、断面形は弧状である。埋土は２層に分層される。遺物は出土していない。

P4010（図版 19 ～ 21・40）

11D15 に位置する。平面形は円形で、長径 24cm、短径 22cm、深さ 36cm、断面形はＵ字状である。埋土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

P4011（図版 19 ～ 21・42）

12C13 に位置する。平面形は円形で、長径 18cm、深さ 28cm、断面形はＵ字状である。埋土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

c　溝

SD4009（図版 19 ～ 21・42）

12C17・18 に位置し、東側に P4008 が接する。長さ 84cm、幅 23cm、深さ 13cm、断面形は半円状である。埋土は暗灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。この溝は P4008 から延びているものと考えられる。

2）古 代 の 遺 構

a　水　田　跡

上層の調査は、砂層を主体とするⅦ層を重機により慎重に掘り下げた後、Ⅸ層上面を遺構検出面として調査を行った。本年度の調査範囲は、すべて水田跡であった。水田跡は小畦畔５条とそれらに区画された水田区画６枚、水田跡に関連すると思われる性格不明遺構１基を検出した。また、水田跡全域にわたってヒトの足跡と思われる痕跡が認められた。調査範囲の標高は、9.2 ～ 9.5m で、南から北へ緩やかに傾斜している。水田跡に伴う確実な遺物は小畦畔③から出土した曲物底板のみである。水田跡の時期は奈良時代である。なお、2007（平成 19）年度調査範囲と合わせた水田跡の構造等については第Ⅶ章Ａでふれることとする。

i　小　畦　畔

小 畦 畔 ①（図版 22 ～ 24・43・44）

11D・E 位置するもので、2007（平成 19）年度に検出した 10E ～ 11C に形成された小畦畔（図版 22）に続くものである。本年度調査範囲では、直線的に北北西－南南東方向に形成されている。断面形は台形状で、下端の幅は 45 ～ 55cm、水田面からの高さは５～ 10cm で、北側がわずかに高い。小畦畔の層位は、しまりの強い黒色土の１層とⅨ層の灰色粘土を小ブロック状に多く含む暗灰色粘土の２層に分層できる。

小 畦 畔 ②（図版 22 ～ 24・43・44）

11・12D に位置するもので、直線的に西－東方向に形成されている。断面形は弧状で、下端の幅は 45 ～ 60cm、水田面からの高さは 7cm ほどである。層位は小畦畔①と同様である。

小 畦 畔 ③（図版 22 ～ 24・43・44）

12C に位置するもので、2007（平成 19）年度に検出した 11B に形成された小畦畔（図版 22）に続くものである。本年度調査範囲では、直線的に北西－南東方向に形成されている。断面形は台形状で、下端の幅は 60 ～ 70cm、水田面からの高さは 3 ～ 9cm で、北側がわずかに高い。小畦畔の層位は 2 層に分層でき、1 層が灰黄褐色土で、植物遺体（第Ⅳ章 6 参照。）が意識的に敷かれた状況が本小畦畔全体で認められた。遺物は小畦畔中から曲物底板（図版 25-16）が出土した。

小 畦 畔 ④（図版 22 ～ 24・41・44）

12・13B に位置するもので、北東部で小畦畔⑤と合流する。調査範囲内では、直線的に南西－北東方向に形成されている。断面形は弧状で、下端の幅は 45 ～ 60cm、水田面からの高さは 3 ～ 9 cm ほどである。層位は小畦畔①と同様である。

小 畦 畔 ⑤（図版 22 ～ 24・41・44）

12AB・13B に位置するもので、北西－南東方向に形成される。断面形は南側がやや高い台形状で、下端の幅は 50 ～ 60cm、水田面からの高さは北側で 4 ～ 9cm ほどで、南側がわずかに低い。小畦畔の層位は 2 層に分層でき、1 層が黒色土で、炭化物をまばらに、黄色細粒砂を筋状に含む。

ii　区　　画（図版 22 ～ 24・43）

区画としたが、調査範囲が限られているため各区画の形態や面積は不明である。2007（平成 19）年度の調査範囲（図版 22）とともに見ると、北西－南東方向の小畦畔により大きく区画され、本年度の調査範囲内で、西－東方向の小畦畔により南北に区画されるようである。水田面の標高は、小畦畔①以南が 9.34 ～ 9.47m、小畦畔①－②が 9.39 ～ 9.45m、小畦畔②－③が 9.33 ～ 9.41m、小畦畔③－④が 9.28 ～ 9.36m、小畦畔④－⑤が 9.26 ～ 9.29m、小畦畔⑤以北は 9.18 ～ 9.22m で、本調査範囲内では南から北へ緩やかに傾斜している。小畦畔④－⑤の区画内は南東隅が 3cm ほど窪んでいた。水田耕作土は基本層序のⅨ層と同じで、小畦畔と同様に上部が黒色を呈するが、分層はできなかった。この水田耕作土には古墳時代から飛鳥時代の細かい土器片が多く含まれていた。水田造成時にこれらの土器片を含む土壌が周辺から持ち込まれた可能性がある。また、水田面には、小畦畔上を含めヒトの足跡が多く認められた。

iii　性格不明遺構（図版 21 ～ 23）

12B18 ～ 20・23 ～ 25 に位置する。2006・2007（平成 18・19）年度に調査された SX3915 と同一の遺構と考えられる。包含層（Ⅸ層上部）を掘削中に検出され、明確な平面プランや掘り込みは確認できなかった。また、畦畔の芯材かと思われたが、西壁の断面では確認できなかった。細い木を東西方向に 2 本単位で並べたようで、各木は枝がとられていて、杭状に加工されたものも認められた。2006・2007 年度の調査では古墳時代の遺構とされたが、検出層位がⅨ層上部であることやその層が本年度調査区では水田耕作土であることから、奈良時代の遺構としたい。

5 遺　　物

A 概　　要

出土した遺物には、土器・石製品・木製品がある。遺物の年代は、古墳時代前期、飛鳥時代にまとまる。出土量は平箱で5箱である。遺物の出土は、上層の畦畔・水田耕作土と共通するⅨ層の上部と下層の遺構内にほぼ限定される。出土土器のグリッド別点数は、北から12Aで2点、13Aで3点、12Bで296点、13Bで84点、12Cで213点、11Dで170点、12Dで87点、11Eで1128点、11Fで33点である。北側に古墳時代、南側に飛鳥時代の土器がやや目立つがはっきりとした分布の違いは認められなかった。土器の破片はいずれも小さく、また接合できるものは少なかった。

B 遺 物 各 説

1）古墳時代の遺物

a 土　　器（図版25・45-1～7）

ここでは、Ⅸ層出土の古墳時代の土師器について説明する。すべて破片資料のため、法量は推定値のものがほとんどである。また、器面が摩耗しているものが多く、調整不明や判然としないものが多い。胎土には砂粒を多く含んでいる。出土位置は、実測図の報告番号の横に（　）で示した。

1・2は甕で、口縁部が「く」の字状で端部が丸い。1は口径20.2cmで、外面がヨコナデ・ハケ、内面がヨコナデ・ナデ調整である。色調は橙色・褐灰色を呈する。2は口径13.4cmで、内外面ともヨコナデ・ハケ調整である。色調はにぶい橙色・褐灰色を呈する。3～5は壺で、3・4が口縁部、5が底部である。3は長頸広口壺で、外傾する端部に面を持つ。口径10.8cmで、内面がハケ・ナデ調整である。色調はにぶい橙色を呈する。4は口縁部が短い広口壺で、端部が丸い。口径15.4cmで、外面がヨコナデ・ミガキ、内面がヨコナデ・ナデ調整である。色調はにぶい橙色を呈する。5は底径10.2cmで、外面がミガキ、内面がハケ・ミガキ調整である。色調はにぶい黄橙色を呈する。6・7は高杯である。6は脚部で、外面がハケ・ミガキ、杯部内面がナデ調整で、脚部内面には輪積痕が残る。色調は黒褐色・にぶい橙色を呈する。7は直線的に外へ開く杯部と、柱状中空で裾部が短く「ハ」の字に開く脚部からなる器形である。口径14.0cm、裾部径7.9cm、器高13.7cmで、杯部外面がヨコナデ・ケズリ・ミガキ、同内面がナデ、脚部外面がミガキ・指オサエ、同内面がナデ調整である。色調はにぶい橙色を呈する。

2）古 代 の 遺 物

a 土　　器（図版25・45-8～12）

ここでは、Ⅸ層出土の飛鳥時代の土師器について説明する。なお、Ⅳ層、Ⅶ～Ⅷ層でも土器片がごく少量出土しているが、図示できるものはなかった。古墳時代の土器と同様に、すべて破片資料のため、法量は推定値である。また、器面が摩耗しているものが多く、調整不明のものが多い。胎土には砂粒を多く含んでいる。出土位置は、実測図の報告番号の横に（　）で示した。

8は甕の口縁部～体部である。口径16.8cmで、外面は口縁部がヨコナデ、体部がハケ、内面がハケ・ナデ調整である。色調はにぶい黄橙色を呈する。9は平底の杯身で、口径14.1cm、底径9.2cm、器高3.1cmである。外面はヨコナデ後ミガキ調整で、底部付近に2本の沈線が巡る。内面はミガキ調整で、内面と

口縁部外面に黒色処理を施す。10 は鉢で、口径 13.7cm である。内外面ともハケ・ナデ調整である。色調はにぶい黄橙色を呈する。11 は鉢で、口径 11.0cm である。外面は口縁部がヨコナデ、体部がナデ、内面は口縁部がヨコナデ後ミガキ、体部がミガキ調整で、内面に黒色処理を施す。色調は外面がにぶい黄橙色である。12 は口縁部が大きく外反する、高杯の杯部である。口径 21.8cm で、外面がヨコナデ・ミガキ、内面がミガキ調整である。内面と口縁部外面に黒色処理を施す。体部外面はにぶい橙色を呈する。

b　石　製　品（図版 25・45–13）

砥石 1 点のみで、12C21・Ⅸ層から出土している。両端は欠損するが、長軸に沿って 6 面の砥面が認められる。したがって、横断面は 6 角形を呈する。砥面はいずれも湾曲し、細かい擦痕が見られることから、よく使い込まれている様子がうかがえる。砥石の大きさや砥面の幅から刀子などの小型の刃物類の研磨に使用したものと考えている。現存値は長さ 60.2mm、幅 25.6mm、厚さ 24.6mm、重さ 42.1g を測る。凝灰岩製。

c　木　製　品（図版 25・45–14 ～ 18）

Ⅸ層出土の 14・15、畦畔③出土の 16、P4012 出土の 17、P4005 出土の 18 を古代の木製品として説明する。14 は薄板状のものである。長さ 12.3cm、幅 2.9cm、厚さ 0.4cm で、断面形は台形状を呈する。木取りは柾目で、樹種はスギである。15 は割材を断面三角形状に加工した杭と考えられる。現存長 10.3cm、幅 5.5cm、厚さ 3.6cm で、樹種はトネリコ属である。先端には炭化物が付着していた。16 は円形曲物の底板である。直径 18.4cm、厚さ 1.4cm、断面形は長方形の板状で、縁辺部に向けてやや細くなっていく。木釘は 2 か所で認められる。木取りは柾目で、樹種はスギである。2006・2007（平成 18・19）年度調査の報告書では円形曲物の底板が 34 点報告されており、直径が計測可能であった 20 点は 9 ～ 19cm の間にあったことから、本例はその中で大きい方に入る。17 は割材を使用し、下端部を二面加工によりやや偏った逆三角形に仕上げている。現存長 42.4cm、幅 22.8cm、厚さ 16cm で、樹種はトネリコ属である。18 は割材を使用し、断面を長方形状に仕上げたもので、下端部は二面加工により逆三角形を呈する。現存長 25.2cm、幅 22cm、厚さ 16.4cm で、樹種はトネリコ属である。遺構の検出層位などから、16 が奈良時代、17・18 が飛鳥時代のものと考えられる。

6　自然科学分析

A　は　じ　め　に

延命寺遺跡Ⅱの発掘調査では、集落の縁辺部に奈良時代の畦畔を伴う水田跡、古墳時代や飛鳥時代の柱根を伴うピットや土坑が検出された。本報告では、出土木材（柱根）の年代測定、出土木製品や柱根、畦畔上から出土した植物遺体の樹種同定、水田層から検出された種実の同定を行い、遺構の年代と、生業を知る情報の抽出と検討を試みた。

B　試　　料

年代測定試料は、P4005 と P4012 から出土した柱根 2 点、樹種同定試料は、出土した曲物底板、板状木製品、杭、柱根、畦畔上の植物など木 1 ～木 7 の 7 点である。種実同定試料は、Ⅸ層、水田層など

試料番号		報告番号	器種・等	木取り・等	出土位置					備考
					遺構番号	層位	グリッド			
年代測定・樹種同定	木１	16	曲物底板	柾目取り	小畦畔③	1	12	C	13	
	木２	14	板状木製品	柾目取り		Ⅸ	11	E	23	
	木３	15	杭	みかん割		Ⅸ	11	D	25	
	木４		粗朶？	丸太材	SX3915	Ⅸ	12	B	23	
	木５	18	柱根	丸太材	P4005		12	C	12	年代測定試料
	木６	17	柱根	丸太材	P4012		12	C	9	年代測定試料
	木７		畦畔上の植物	木片状	小畦畔③		12	C	8	①～③に分かれる

試料番号		報告番号	器種・等	木取り・等	出土位置					備考
					遺構番号	層位	グリッド			
種実同定	種１					Ⅸ	11	D	10	
	種２					Ⅸ	11	D	15	
	種３					Ⅸ	12	E	5	
	種４					Ⅸ	12	B	15	
	種５					Ⅸ	12	B	20	
	種６					Ⅸ	12	C	13	
	種７					Ⅸ	12	C	23	
	種８				小畦畔③	1	12	C		
	種９				小畦畔②	1	12	D	1	
	種10					Ⅸ	13	B	6	

第９表　延命寺遺跡Ⅱ　試料一覧

から水洗選別された種１から種10の10点である。第９表に試料一覧を示す。

C　放射性炭素年代測定

1）方　　法

測定試料の情報、調製データは第９表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

2）測　定　結　果

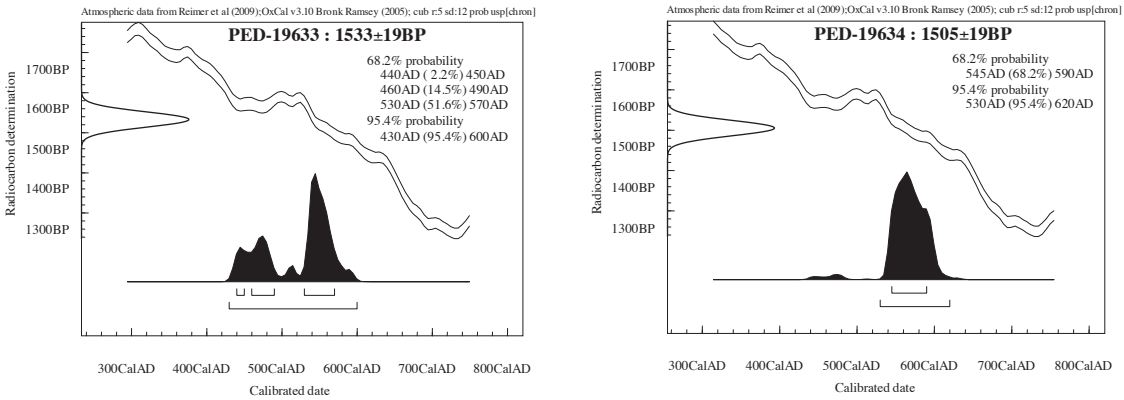
第10表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第21図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ:IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦

試料名	測定No.（PED-）	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（年BP±１σ）	^{14}C年代（年BP±１σ）	暦年代（西暦）１σ（68.2%確率）	暦年代（西暦）２σ（95.4%確率）
木５	19633	-27.57±0.14	1533±19	1535±20	AD440-450（2.2%） AD460-490（14.5%） AD530-570（51.6%）	AD430-600（95.4%）
木６	19634	-27.54±0.14	1505±19	1505±20	AD545-590（68.2%）	AD530-620（95.4%）

BP：Before Physics（Present），AD：紀元後

第10表　測定結果



第21図　暦年較正結果

年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

3）所　　見

加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定の結果、P4005 から出土した柱根（木５）では、1535 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD430 ～ 600 年）、P4012 から出土した柱根（木６）では、1505 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD530 ～ 620 年）の年代値が得られた。

D　樹　種　同　定

1）方　　法

方法は、カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質及び現生標本との対比によって行った。

2）結　　果

第 11 表に結果を示し、以下に記載を行う。木 10 の畦畔上の植物は、複数点含まれていたので、枝番号①～③を付して示した。主要な分類群の顕微鏡写真を第 22・23 図に示した。

・スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　：木１、木２　　写真１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 13 細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の形質からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40m、径 2m に達する。材はやや軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

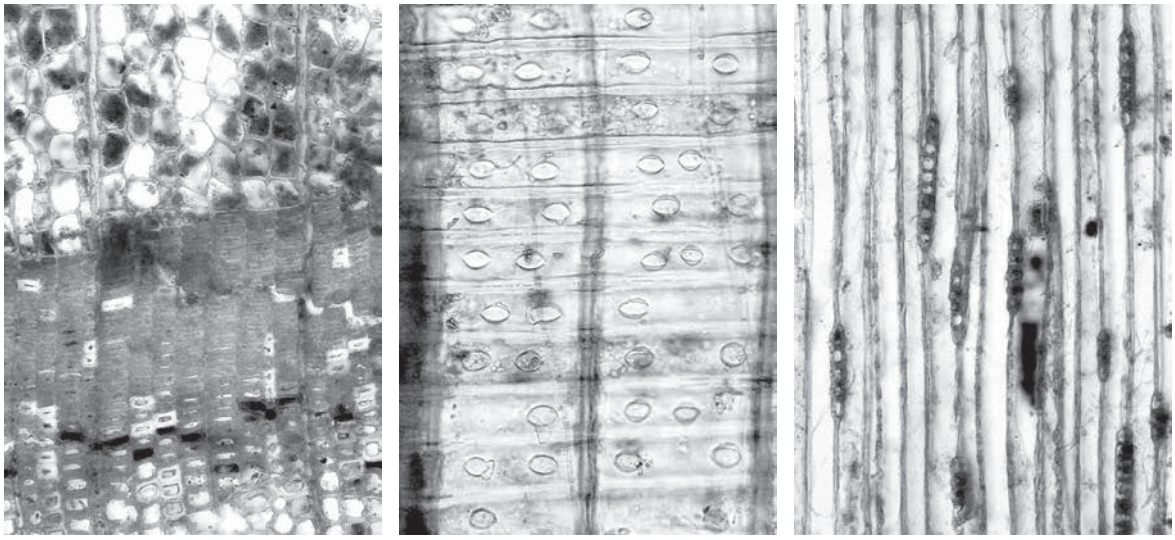
・ニレ属　*Ulmus*　ニレ科　　：木４　　写真２

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して、花束状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径はやや急に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、平伏細胞からなる。

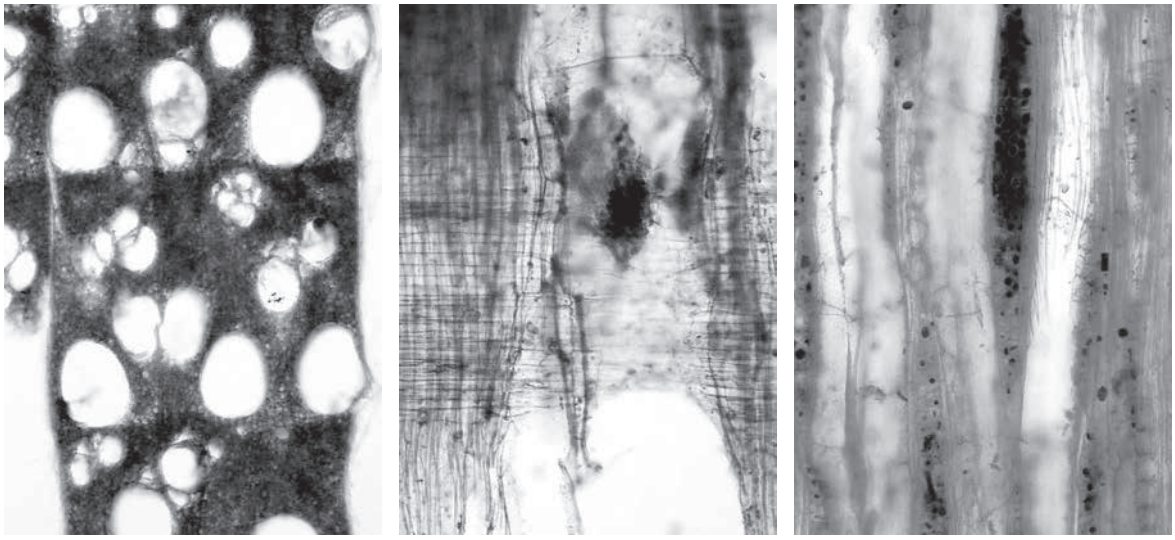
試料番号	報告番号	機種・等	木取り等	出土位置					結　果	
				遺構番号	層位	グリッド			和名	学名
木１	16	曲物底板	柾目取り	小畦畔③	1	12	C	13	スギ	*Cryptomeria japonica* D.Don
木２	14	板状木製品	柾目取り		Ⅸ	11	E	23	スギ	*Cryptomeria japonica* D.Don
木３	15	杭	みかん割		Ⅸ	11	D	25	トネリコ属	*Fraxinus*
木４		粗朶？	丸太材	SX3915	Ⅸ	12	B	23	ニレ属	*Ulmus*
木５	18	柱根	丸太材	P4005		12	C	12	トネリコ属	*Fraxinus*
木６	17	柱根	丸太材	P4012		12	C	9	トネリコ属	*Fraxinus*
木７-① 木７-② 木７-③		畦畔上の植物	木片状	小畦畔③		12	C	8	環孔材（ブドウ属、ノブドウ属などのつる性木本） 散孔材（スノキ属、ツツジ属、ガマズミ属など）	Ring-popous wood diffuse-porous wood diffuse-porous wood

第 11 表　延命寺遺跡Ⅱ　樹種同定結果



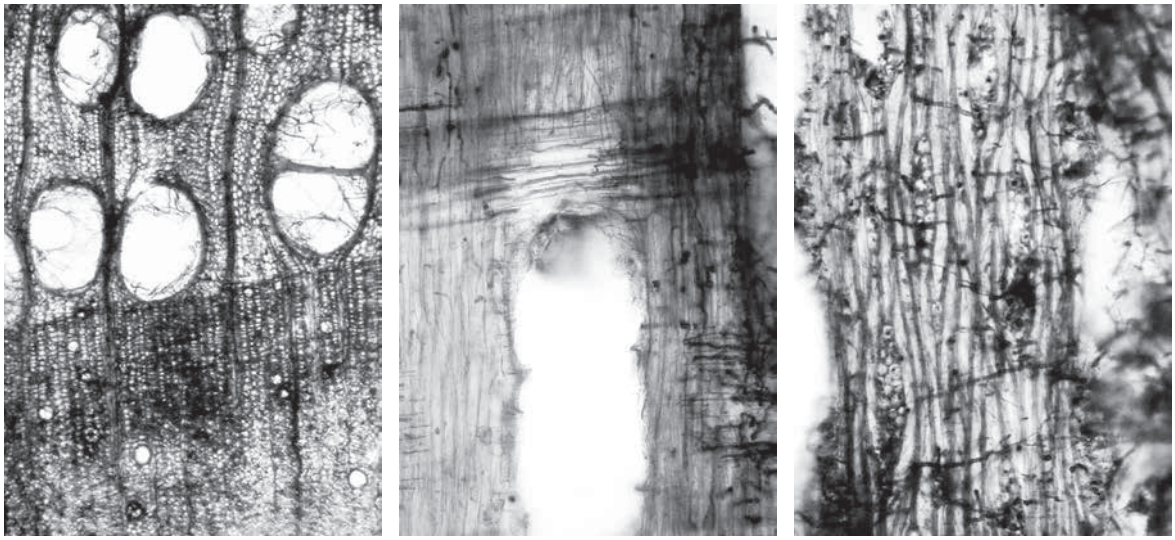
横断面 :0.2mm　放射断面 :0.05mm　接線断面 :0.2mm

1. 木1　曲物底板　スギ



横断面 :0.5mm　放射断面 :0.2mm　接線断面 :0.2mm

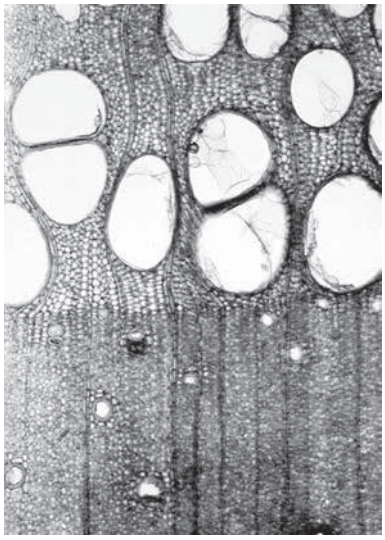
2. 木4　ニレ属



横断面 :0.5mm　放射断面 :0.2mm　接線断面 :0.2mm

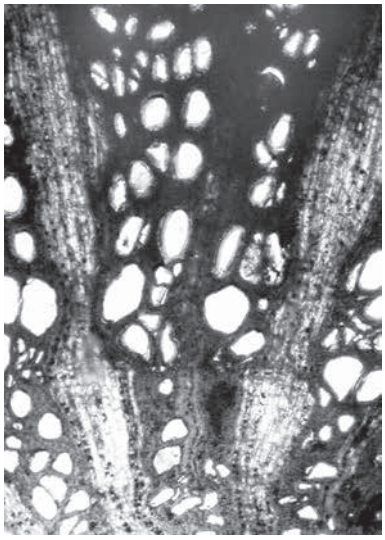
3. 木5　柱根　トネリコ属

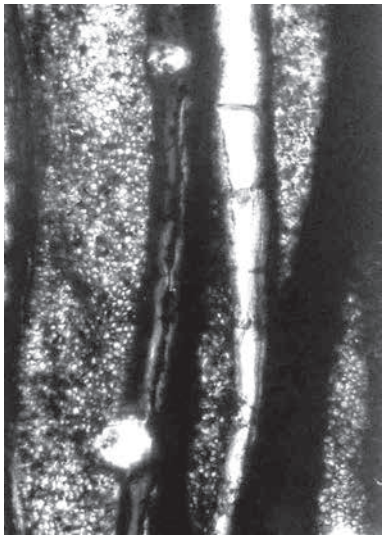
第 22 図　延命寺遺跡Ⅱの木材（1）



横断面 :0.5mm　放射断面 :0.2mm　接線断面 :0.2mm

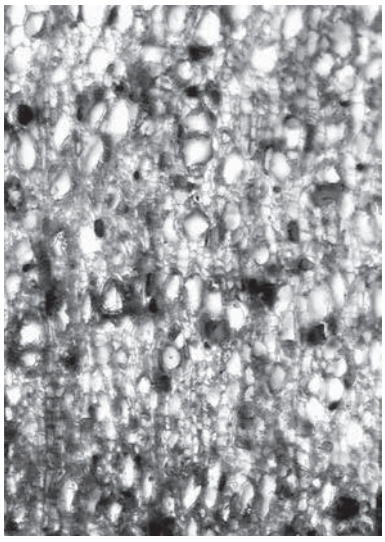
4. 木6　柱根　トネリコ属





横断面 :0.5mm　放射断面 :0.2mm　接線断面 :0.5mm

5. 木7-①　畦畔上の植物　環孔材



横断面 :0.2mm　放射断面 :0.1mm　接線断面 :0.2mm

6. 木7-②　畦畔上の植物　散孔材

第 23 図　延命寺遺跡Ⅱの木材（2）

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～５細胞幅ぐらいである。

以上の形質からニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具類などに用いられる。

・トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科　　：木３、木５、木６　　写真３・４

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で数列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状､晩材部では周囲状から翼状である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の形質からトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモ、シオジなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は強靱で堅硬であり、建築など広く用いられる。なお本試料は道管径が 300 μを超えるものが多く存在することから、ヤチダモ、シオジのいずれかと考えられる。

・環孔材　ring-popous wood　（ブドウ属、ノブドウ属などのつる性木本）　木 7-①　　写真５

横断面:大型の道管が年輪のはじめに配列するし、早材から晩材にかけて道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、多列幅で高さ 3mm を超える大型のものが存在する。

以上の形質からブドウ属、ノブドウ属などのつる性の樹種に類似するが、試料の保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であり、環孔材の同定にとどまる。

・散孔材　diffuse-porous wood　（スノキ属、ツツジ属、ガマズミ属など）　：木 7-②③写真６

横断面：小型で角張った道管が散在する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数が 30 本前後のものが存在する。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で、１～３細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質からスノキ属、ツツジ属、ガマズミ属などの樹種に類似するが、試料の保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であり、散孔材の同定にとどまる。

3）同定された樹種の特徴と考察

同定の結果、木１（曲物底板）、木２（板状木製品）はスギ、木４（丸太材）はニレ属、木３（杭）、木５（柱根）、木６（柱根）はトネリコ属、木 7-①（畦畔上の植物）は環孔材（ブドウ属、ノブドウ属などのつる性木本）、木 7-②③（畦畔上の植物）は散孔材（スノキ属、ツツジ属、ガマズミ属など）であった。スギは曲物底板、板状木製品に使用されているが、古墳時代以降は板材によく使われる材であり、加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。ニレ属は種類により材質が異なる。トネリコ属は、杭、柱根に使用されており、概して強靭で堅硬な材である。

これらの樹種の分布では、スギは積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する常緑高木であり、トネリコ属は沢沿いなどの湿原や水湿のある低地に生育する主に落葉高木である。これら２種類は本遺跡周辺に比較的多かった森林要素とみなされる。ニレ属は種類により多様に分布する。いずれの樹種も本遺跡の周囲や周辺地域に分布する樹木である。

木７の畦畔上の植物遺体は、環孔材（ブドウ属、ノブドウ属などのつる性木本）と散孔材（スノキ属、ツツジ属、ガマズミ属など）であり、つる性木本ないし低木である。畦畔上に生育していたとも考えられるが、木片状で保存が悪く、畦畔の補強に用いられた可能性も考えられる。

E　種　実　同　定

1）方　　法

方法は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本を参考にして同定を行った。分類は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

2）結　　果

樹木３分類群が同定され、学名、和名および粒数を第 12 表に、主要な分類群の写真を第 24 図に示した。以下に形態的特徴の記載を行い、写真に示したもののサイズを第 13 表に示す。

試料番号	出土位置					分類群		部位	個数
	遺構番号	層位	グリッド			学名	和名		
種１		Ⅸ	11	D	10	*Prunus persica* Batsch	モモ	核＊	1
種２		Ⅸ	11	D	15	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核片	2
種３		Ⅸ	12	E	5	*Camellia japonica* L.	ヤブツバキ	幼果	1
種４		Ⅸ	12	B	15	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1
種５		Ⅸ	12	B	20	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核片	1
種６		Ⅸ	12	C	13	*Prunus persica* Batsch	モモ	核＊	1
種７		Ⅸ	12	C	23	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核＊	2
種８	小畦畔③	1	12	C		*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核	1
種９	小畦畔②	1	12	D	1	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核片	2
種 10		Ⅸ	13	B	6	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核片	1

＊齧歯類の齧り痕有り

第 12 表　延命寺遺跡Ⅱ　種実同定結果

オニグルミ核				モモ核			
試料	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	試料	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）
種７	30.03	28.05	32.54	種１	18.54	16.39	14.37
	29.49	―	24.92	種４	25.02	19.66	16.19
種８	30.05	―	24.19	種６	24.90	18.34	15.50

第 13 表　延命寺遺跡Ⅱ　種実計測値

・オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.

核　クルミ科　：種２（Ⅸ層）破片２、種５（Ⅸ層）破片１、種７（Ⅸ層）２、種８（小畦畔③）１、種９（小畦畔②）破片２、種 10（Ⅸ層）破片１

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。齧歯類の咬み痕が見られた。

・モモ　*Prunus persica* Batsch　核　バラ科　：種１（Ⅸ層）１、種４（Ⅸ層）１、

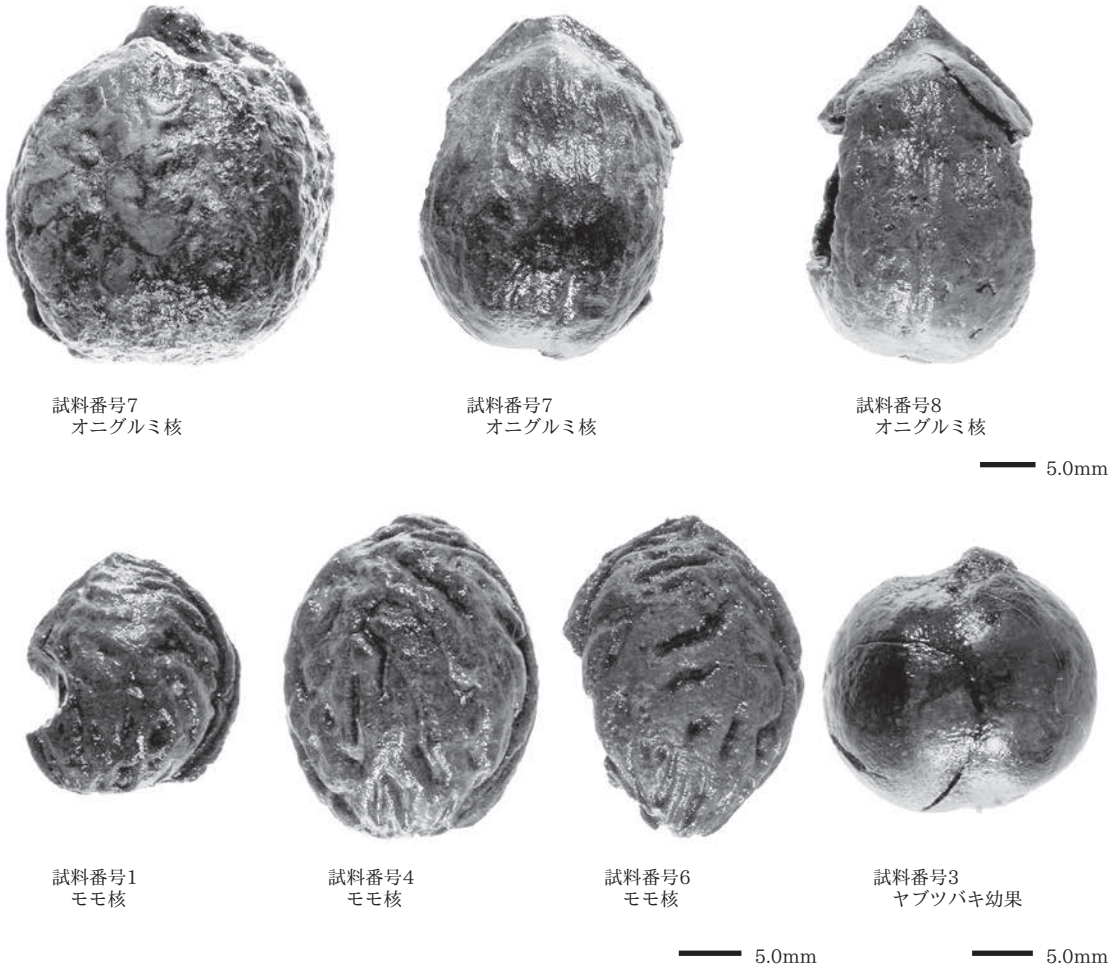
黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。齧歯類の咬み痕が見られた。

・ヤブツバキ　*Camellia japonica* L.　幼果　ツバキ科　：種３（Ⅸ層）１

幼果は黒色で球形を呈す。表面はやや粗い。

3）出土種実の特徴と考察

同定の結果、種２（Ⅸ層）、種５（Ⅸ層）、種７（Ⅸ層）、種８（小畦畔③）、種９（小畦畔②）、種 10（Ⅸ層）はオニグルミ核、種１（Ⅸ層）、種４（Ⅸ層）はモモ核、種３（Ⅸ層）はヤブツバキ幼果であった。オニグルミは沢沿いなどの適潤地に生育し、食用となる有用植物でもある。モモは食用となり、いずれも大型果実の遺体であり、大型のものが選別されたと見られる。オニグルミは流路沿いや湿地など水際に生育する高木で、モモは栽培植物である。これらは食用とされた残滓と推定される。他に、オニグルミは完形の核があり利用されていないものもあり、周囲や水田層の下部に湿地が分布する場合、そこに由来する可能性も考えられる。ヤブツバキは幼果であり、周囲に生育していたと考えられる。暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素であり、海岸から河川の沿岸に多く、やや温暖な環境が示唆される。



第 24 図　延命寺遺跡Ⅱの種実

F　ま　と　め

延命寺遺跡Ⅱでは、集落の縁辺部の畦畔を伴う奈良時代の水田跡や柱根を伴う古墳時代や飛鳥時代のピットなどから出土・検出された木質遺物の年代測定、樹種同定及び種実同定を行った。木質遺物の年代値は、木５（P4005 から出土した柱根）は、1535 ± 20 年 BP（2 σの暦年代で AD430 ～ 600 年）、木６（P4012 から出土した柱根）は、1505 ± 20 年 BP（2 σの暦年代で AD530 ～ 620 年）であった。それぞれの樹種は、木１（曲物底板）、木２（板状木製品）はスギ、木４（丸太材）はニレ属、木３（杭）、木５（柱根）、木６（柱根）はトネリコ属、木 7– ①（畦畔上の植物）は環孔材（ブドウ属、ノブドウ属などのつる性木本）、木 7– ②③（畦畔上の植物）は散孔材（スノキ属、ツツジ属、ガマズミ属など）で、いずれの樹種も本遺跡の周囲や周辺地域に分布する樹種であった。特にトネリコ属は堅硬な木材であり、柱材に適する用材である。木７の畦畔上の植物遺体は、つる性木本ないし低木であり、畦畔上に生育していたほかに、木片状で保存が悪いことから畦畔の補強に用いられた木質である可能性も考えられた。種実では、種 2（Ⅸ層）、種 5（Ⅸ層）、種 7（Ⅸ層）、種８（畦畔③）、種９（畦畔③）、種 10（Ⅸ層）はオニグルミ核、種１（Ⅸ層）、種４（Ⅸ層）はモモ核、種３（Ⅸ層）はヤブツバキ幼果であった。オニグルミや栽培植物であるモモは食用とされた残滓と推定されたが、オニグルミは完形の核もあり、周囲や下部の湿地等に生育していたものである可能性も考えられた。照葉樹であるヤブツバキは幼果であるため、近隣での生育が考えられ、当時はやや温暖な環境が示唆された。

参 考 文 献

Bronk Ramsey C. 1995　Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37（2），425-430.

Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A），355-363.

Paula J Reimer et al., 2004　IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

尾嵜大真　2005　「INTCAL98 から IntCal04 へ」『学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア No.3 －炭素年代測定による高精度編年体系の構築－』14-15.

中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代,』3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009） IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

佐伯　浩・原田　浩　1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版　p.20-48.

佐伯　浩・原田　浩　1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版　p.49-100.

島地　謙・伊東隆夫　1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣　p.296.

山田昌久　1993　『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成　植生史研究特別第１号』 植生史研究会　p.242.

金原正明　1996　「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル No.409』 ニューサイエンス社　p.15-19.

南木睦彦　1991　「栽培植物」『古墳時代の研究　第４巻　生産と流通Ⅰ』 雄山閣出版株式会社　p.165-174.

南木睦彦　1992　「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル No.355』 ニューサイエンス社　p.18-22.

南木睦彦　1993　「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編　第四紀試料分析法』 東京大学出版会　p.276-283.

7 ま と め

A 遺構・遺物から見た遺跡の位置付け

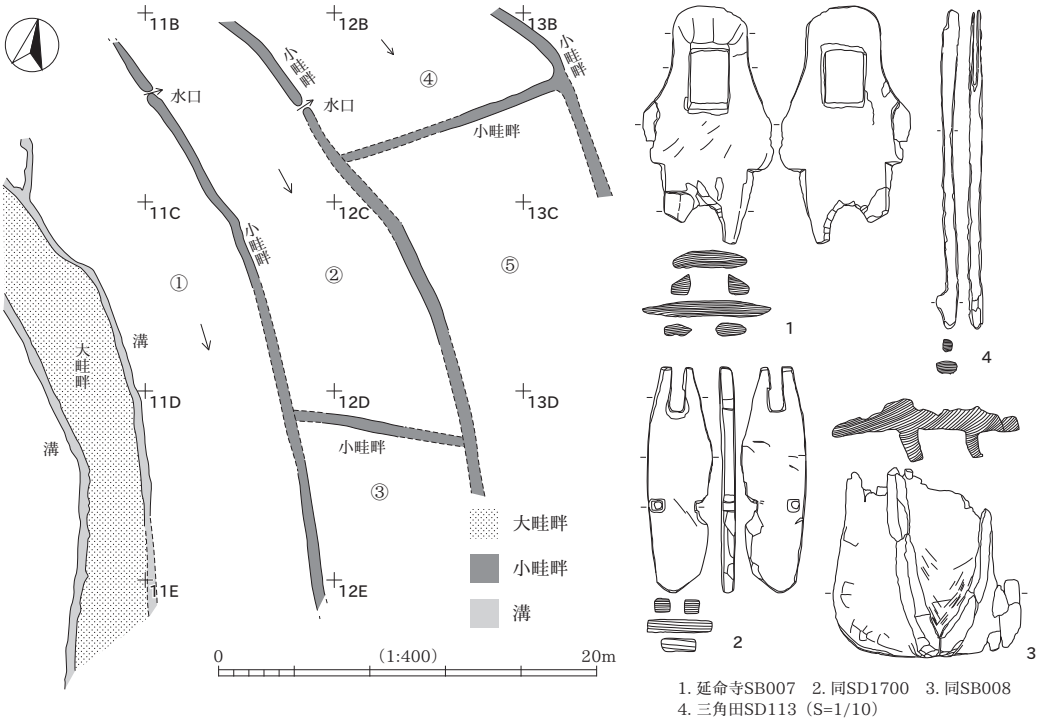
第Ⅰ章 B2）でふれたように、2006･2007（平成 18･19）年度の調査では、7 世紀、8 世紀の多様な遺構、遺物を豊富に検出し、貴重な調査成果となった。本年度の調査範囲は、2006・2007 年度調査範囲の東側に位置している。集落の中心となる建物群から外れていく場所を調査することとなったが、下層、上層とも遺跡の東への広がりを確認できた。

下層の調査では、土坑 1 基、ピット 10 基、溝 1 条を検出した。遺構の分布は調査区中央からやや北寄りの 12C に集中していた。そのうち P4005 と P4012 には柱根が残っていた。この 2 基の柱穴間は 3m で、同一の建物を構成していた場合、2007 年度に調査された、飛鳥時代の SB010（図版 1–8・9CD）と同規模の建物であった可能性がある。SB010 は周溝を持つ建物で、桁行 4 間、梁行 2 間で、方位は北西－南東方向を指している。P4005・P4012 が梁行であった場合、柱穴間の長さと方位がほぼ一致することになる。SB010 と位置も近いことから、飛鳥時代の建物の柱穴であった可能性がある。

上層の調査では、水田跡を検出した。2007 年度と 2011 年度の調査範囲を合わせて、水田区画①～⑤を設定し（第 25 図）、若干の考察を行いたい。区画①は幅 7 ～ 8m、長さ 30m 以上の区画で、北西（標高 9.6m）から南西（標高 9.3m）に緩やかに傾斜している。西に平行する大畦畔の側溝から取水したようである。区画②は幅 5 ～ 8m、長さ 23m 以上の区画で、北西（標高 9.6m）から南東（標高 9.3m）に緩やかに傾斜し

ている。区画①から水口を通し取水したようである。区画③は幅8m、長さ10m以上の区画で、標高は9.4mである。区画④は幅10～12m、長さ9m以上の区画で、北西（標高9.5m）から南東（標高9.3m）に緩やかに傾斜している。区画②から水口を通し取水したようである。区画⑤は幅10～11m、長さ10m以上で、標高は9.3～9.4mである。以上から地形的には南から北へはごく緩やかに、北西から南東へは緩やかに傾斜していることがわかる。各区画の形態は、幅10m前後、長さ10～30m以上の湾曲する区画で、手元の資料は限られるが、当時の一般的な形態ではないようである。長岡市（旧和島村）門新遺跡からは、古墳時代の幅2～3m、長さ40mほどの水田区画が13枚検出された。「本来直行する畔も存在するはずであるが貧弱なものであったのか、本遺跡では確認されなかった」［丸山2005］とされた。工楽善通氏によれば、縦方向の小畦畔のみのものは、横方向の小畦畔作りを行う直前の状況と理解されている［工楽1991］。本遺跡検出例のような細長い区画が当時の水田の一形態であったのか、あるいは横方向に区画する直前の状況であったのかは、今後も類例にあたり検討を続けたい。

水田耕作に関連する遺物は、今回の調査では出土しなかったが、2006・2007年度の調査で鍬身（第25図1）・田下駄（同2・3）などが、西に隣接する三角田遺跡からは2004（平成16）年度の調査で、鉄鎌の柄（同4）が出土した。2は「大足」の足板の可能性がある。3は足を載せるU字状の枠があり、民具の「ナンバ」に似ている。周辺では福島県会津若松市門田条里制跡（9～10世紀）［平野ほか1990］で形態のよく似たものが出土しているほか、横長のものとしては上越市柿崎区新保遺跡（15世紀）［石川ほか2001］、新潟市南区馬場屋敷下層遺跡（13～14世紀）［遠藤1984］出土例などがある。民具の「ナンバ」は、昭和時代前半まで、静岡県浮島ヶ原地域など東海～関東地方では方形状や横長のものを深田の稲刈りなどに、福島県猪苗代地域では横長のものを田植え前の代踏みに使用していた［佐々木1994］。延命寺遺跡出土のものは隅丸方形状であり、民具例に照らせば稲刈り用の田下駄と言えそうである。2006・2007年度調査範囲での水田跡の自然科学分析では、イネ属の植物珪酸体の含量が既存の調査に比べ下回ってい



第25図　延命寺遺跡　水田跡概念図（左）と出土した主な木製農具（右）

たという。縦長の区画が特徴的な本水田が、横方向の小畦畔作りを行う直前の状況だった可能性や、稲刈りに関係しそうな田下駄、鎌柄の出土、そしてイネ属の植物珪酸体が比較的少なかったことなどから、洪水により埋没した時期は稲の収穫後から田植え前の時期であった可能性がある。

土器は、古墳時代前期後半と飛鳥時代の土師器が少量出土した（図版 25）。古墳時代前期後半の土器は、川村浩司氏による上越市関川右岸下流域編年の 5 ～ 7 段階［川村 2000］頃に位置付けられる。この段階の本遺跡周辺の主な遺跡としては、上越市津倉田遺跡［笹澤ほか 1999］・同前田遺跡［小島・滝沢 2003］・同下割遺跡［山崎ほか 2004］などがある。飛鳥時代の土器は、2006・2007 年度の調査で、竪穴建物・平地建物･掘立柱建物などから土師器･須恵器が多く出土している。報告書では陶邑編年の TK209 型式期、春日真実氏の編年Ⅰ 1 期［春日 2006］、年代にすると 7 世紀前半の土器とされた。上越市内では、一之口遺跡［鈴木・春日 1994］・山畑遺跡［小島 1979］・荒町南新田遺跡［金内ほか 2010］・北新田遺跡［金内ほか 2008］・津倉田遺跡［笹澤ほか 1999］で 7 世紀代の土器がややまとまって出土している。本年度の調査で出土した､9 のような内面黒色処理された浅身で平底の杯身は､2006･2007 年度の調査では杯 B 類、同 C 類として 10 点報告されている。周辺では一之口遺跡で 1 点､津倉田遺跡で 8 点ほど報告されている。春日氏の論考［春日 2006］では、杯 A3 類、同 A5 類と分類されるもので、Ⅰ 3 期頃が主体となるようである。延命寺遺跡で内面黒色処理された平底の杯身が多いことは、遺跡の性格によるものなのか、ある時期を示す指標となるものなのか、今後の事例の追加を待ちたい。

以上のように、2006・2007 年度の豊富な調査成果への追加、補足的な考察がほとんどできなかった。当時の有力な集落であったという遺跡全体の性格、遺構では周溝付き建物や水田跡など、遺物では 7 世紀の土師器、須恵器、8 世紀の木簡や祭祀具、農具といった木製品など今後も検討が続けられることが望まれる。

要　　約

二反割遺跡

1　二反割遺跡は、新潟県上越市三和区大字岡木字二反割 1,013 番地ほかに所在する。遺跡は飯田川右岸の自然堤防上に立地し、調査前の現況は杉林である。標高は 15m を測る。

2　発掘調査は一般国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、2011（平成 23）年 6 月 27 日～ 9 月 15 日にかけて実施した。調査面積は、2,700m^2 である。

3　調査の結果、古墳時代（5 ～ 6 世紀）、中世（12 世紀）の遺構・遺物を検出した。このほかに古代（8 ～ 9 世紀）の土器が少量出土した。

4　古墳時代の遺構は、土坑 1 基と土器をやや多く含む自然の落ち込み 2 か所である。土器は中期～後期の土師器、後期の須恵器である。遺構・遺物はともに調査区の北西部に分布が限定され、調査区外に延びる。遺構・遺物から古墳時代の集落の縁辺部と考えられ、本遺跡の南東 1km に位置する稲原大野古墳群（5 世紀後半～ 6 世紀前半）と何らかの関係があったものと思われる。

5　中世の遺構は掘立柱建物 10 棟、井戸 5 基、土坑 8 基、溝 2 条、性格不明遺構 1 基を検出した。これらの時期は 12 世紀代で、掘立柱建物の重複関係から 2 回の建て替えまたは 3 期に分かれる。また掘立柱建物の規模や柱穴配置、柱穴の規模や柱痕の有無から階層差（有力者の存在）や用途（倉庫の存在）などが推定できる。集落を構成する遺構は、規模の異なる建物、倉庫、井戸、土坑を基本とし、これを大規模な堀（溝）で内と外を区画する中世集落の 1 形態が明らかとなった。遺物は珠洲焼、白磁、土師質土器のほか、土師質土器を円盤状に加工した土製品、敲石、砥石が出土した。珠洲焼はすべて珠洲編年Ⅰ期に限定でき、ほかの遺物も 12 世紀代に相当する。

延命寺遺跡Ⅱ

1　延命寺遺跡は、新潟県上越市大字下野田字延命寺（市道諏訪上野田線下）に所在する。遺跡は重川左岸の沖積地に立地し、調査前の現況は道路である。標高は 11m を測る。

2　発掘調査は一般国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、2011（平成 23）年 7 月 25 日～ 9 月 15 日にかけて実施した。2006・2007（平成 18・19）に実施した発掘調査の第 2 次調査で、調査面積は 800m^2 である。

3　調査の結果、2 層の遺構検出面が明らかとなった。下層が古墳時代前期と飛鳥時代、上層が奈良時代である。

4　下層の調査では土坑 1 基、ピット 10 基、溝 1 条を検出した。ピット 10 基のうち、2 基には柱根が残り、2006・2007 年度の調査結果に照らし合わせると飛鳥時代の掘立柱建物の可能性がある。遺物は古墳時代前期と飛鳥時代にまとまる。古墳時代の遺物は甕、壺、高杯などの土師器が、飛鳥時代の遺物は甕、杯身、鉢、高杯などの土師器や柱根、砥石などが出土している。遺構・遺物から飛鳥時代では集落の縁辺部と推定される。

5　上層の調査では水田跡を検出した。2006・2007 年度の調査で検出された畦畔に連続するものであり、水田区画が復元できた。区画は幅 10m 前後、長さ 10 ～ 30m 以上を測り、地形に沿って緩やかに湾曲する細長い形態である。遺物は畦畔中から曲物底板、畦畔上に意識的に敷かれた植物遺体（環孔材、散孔材）が出土した。また水田跡のいたるところから人の足跡と思われる痕跡が認められた。遺構・遺物から奈良時代の集落の周辺に広がる水田跡である。

引用・参考文献

青木　学　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第218集 下新保高田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史・加藤　学　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第153集 大坪遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯坂盛秦ほか 2007　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか 2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

遠藤孝司　1984　「Ⅵ 馬場屋敷下層遺跡 3. 遺物」『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』 白根市教育委員会

大平理恵　2001　『板倉町埋蔵文化財調査報告 第2集 南原遺跡』 板倉町教育委員会

近江屋成陽　2003　『三和村埋蔵文化財調査報告書 第17集 畑田・古屋敷遺跡発掘調査報告書―県営ほ場整備事業（上江保倉地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』 新潟県中頚城郡三和村教育委員会

岡本郁栄　1999　「新潟県の地形概観」『新潟県の考古学』 高志書院

小黒智久　1999　「第3章 弥生時代・古墳時代 第5節 墓制 第3項 横穴式石室」『新潟県の考古学』 高志書院

尾崎高宏　2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第111集 黒田古墳群』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2003　「上越地内（米岡地区･下割遺跡隣接地）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成14年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

尾崎高宏　2004　「上越地内（戸野目～北田中地区）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成15年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1997　「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究 第7号』 北陸古代土器研究

春日真実　2006　「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古 第17号』 新潟県考古学会

加藤　学　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集 用言寺遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金内　元ほか 2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第197集 北前田遺跡Ⅰ・北新田遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金内　元ほか 2010　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第210集 荒町南新田遺跡』 新潟県教育委員会･財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男ほか 1979　『水科古墳群発掘調査報告書』 新潟県中頚城郡三和村教育委員会

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究　第5号』 新潟県上越市

川村浩司・笹沢　浩ほか　2003　「12 中島廻り遺跡（No.68）」『上越市史 資料編2 考古』 上越市

北澤卓哉　2009　『池島遺跡・観音山2号墳』 上越市教育委員会

北村　亮・高橋　保ほか　1992　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第28集 木崎山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

北村　亮　2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第105集 木田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

桐原雅史　2007　「2 遺跡周辺の地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 171 集 狐宮遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

工楽善通　1991　『水田の考古学』 東京大学出版会

建設省北陸地方建設局　高田工事事務所　2000 『上越魚沼地域振興快速道路　一般国道 253 号　上越三和道路パンフレット』 建設省北陸地方建設局　高田工事事務所

小島幸雄　1979　「Ⅱ 山畑遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』 上越市教育委員会

小島幸雄ほか 1984　『新潟県上越市 本長者原廃寺確認調査概要』 上越市教育委員会

小島幸雄・滝沢規朗　2003 「9 前田遺跡（No.57)」『上越市史 資料編 2 考古』 上越市

小島幸雄　2004　「第 4 章 古墳とその時代 第 1 節 古墳の成立と展開」『上越市史 通史編 1 自然・原始・古代』 上越市

小林昌二　1996　「越地域における部民分布の再検討」『越と古代の北陸』 名著出版

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2002 「2. 分布調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 13 年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

坂井秀弥ほか 1982　『栗原遺跡 第 4 次・5 次発掘調査概報』 新潟県教育委員会　新井市教育委員会

坂井秀弥　1983　「越後における七･八世紀の土器様相と画期について－新井市栗原遺跡出土土器をめぐって－」『信濃』第 35 号第 4 巻　信濃史学会

坂井秀弥ほか 1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 35 集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

佐々木長生　1994　「福島県内の湿田農具」『福島県立博物館紀要』第 8 号　福島県立博物館

笹澤正史ほか 1999　『津倉田遺跡』 新潟県上越市教育委員会

笹澤正史・水澤幸一　2001 「伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半を中心として～」『上越市史研究　第 6 号』 上越市史専門委員会

笹澤正史　2003　「越前遺跡」『上越市史 資料編 2 考古』上越市

澤田敦・細井佳浩ほか　2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 154 集 三角田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

品田高志　1991　「越後の中世土師器－編年的研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報 第 8 号』 新潟考古学談話会

品田高志　2003　「3 北割遺跡（No.12)」『上越市史 資料編 2 考古』 上越市

島田美佐子　1994　「第Ⅳ章 5 墓」『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺構編)』 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

鈴木俊成・春日真実　1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 60 集 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

狭川真一　2011　『中世墓の考古学』 高志書院

高田平原団体グループ　1962 「高田平原の沖積層について－高田平原の団体研究・そのⅣ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第 7 号　新潟大学教育学部高田分校

高田平野団体研究グループ　1981 「高田平野の第四系と形成史－新潟県の第四系・そのXXⅣ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第 25 号　新潟大学教育学部高田分校

高野武男　2002　「第 1 章 地形・地質 第 2 節 上越市周辺地域の地形 1 沖積平野の地形」『上越市史 資料編 1 自然』 上越市

髙橋　保ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 125 集 下沖北遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋　保　2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 150 集 海道遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋　保　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 157 集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋　勉ほか 1984　『栗原遺跡 第 7 次・第 8 次発掘調査報告書』 新井市教育委員会

高橋　勉ほか 1996　『新井市埋蔵文化財報告書 第19集 高床山遺跡群 倉田遺跡 栗原遺跡 高柳地区五反田』 新井市教育委員会
高橋與衛門 2003　「中世の建物跡」『戦国時代の考古学』 高志書院
高橋與衛門 2004　「掘立柱建物と言う名の建物」『第17回 北陸中世考古学研究会 資料集 掘立柱建物から礎石建物へ』 北陸中世考古学研究会
滝沢規朗　2003　「14 今池遺跡（No.81）」『上越市史 資料編2 考古』 上越市
鶴巻康志　1992　「越後における中世土師器の動向」『第5回 北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器･陶磁器･漆器』 北陸中世土器研究会
田海義正　2110　「上越市三和区岡木地内試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成21年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　2010 『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』 文化庁文化財部記念物課
戸根与八郎 2003　「第1章 中世 第1節 時代概説」『上越市業書8 考古－中・近世資料－』 上越市
土橋由理子 2011　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第221集 古渡路遺跡』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県　1983　『新潟県史 資料編1 原始・古代一 考古編』
農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所　2001 『新版標準土色帖』
野水晃子・矢部英生・長沼吉嗣・今井昭俊ほか　2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集 狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
秦　繁治ほか 1976　『宮口古墳群』 牧村教育委員会
秦　繁治ほか 1990　『岡嶺遺跡発掘調査報告書』 清里村教育委員会
秦　繁治・坂井秀弥　1990 『法花寺遺跡（廃寺）他発掘調査報告書』 新潟県中頸城郡三和村教育委員会
秦　繁治ほか 1994　『寺町遺跡第一次発掘調査報告書』 吉川町教育委員会
秦　繁治ほか 2000　『菅原古墳群発掘調査報告書 第6・15・16・28号墳』 清里村教育委員会
秦　繁治ほか 2002　『三和村史 自然・考古編〈考古編〉』 三和村
平野幸伸ほか 1990　『門田条里制跡発掘調査報告書』 会津若松市建設事務所・会津若松市教育委員会
丸山一昭　2005　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第17集 門新遺跡谷地地区Ⅱ』 新潟県和島村教育委員会
水澤幸一　2003　「2 横曽根遺跡」『上越市業書8 考古－中・近世資料－』 上越市
水澤幸一・鶴巻康志　2003 「9 至徳寺遺跡（至徳寺館跡・至徳寺跡）」『上越市史叢書8 考古－中・近世資料－』 上越市
望月精司　2009　「南加賀窯跡における在地窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会々誌 第52号』 石川県考古学会
八峠　興　2001　「柱状高台考」『中世土器研究論集』 中世土器研究会
山崎忠良ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 下割遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会･財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか 2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集 延命寺遺跡』 新潟県教育委員会･財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山森伸正　1992　『富山県小矢部市臼谷岡ノ城北遺跡発掘調査概要』 小矢部市教育委員会
横田　浩ほか 1995　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第65集 鉄砲町遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉岡康暢　1984　「Ⅱ 須恵器の源流 北陸地方」『日本陶磁の源流－須恵器出現の謎を探る』 柏書房
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉岡康暢　2003　「珠洲焼概論」『平成15年度 埋蔵文化財専門職員実務研修①「講義」･「事例報告」資料集』 新潟県教育庁文化行政課

二反割遺跡　遺構観察表

古墳時代

土坑（SK）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	備考
108	1E15・20	楕円形	弧状	124	86	14	

中　世

掘立柱建物（SB）

SB121	位置		桁行		梁行		方位	床面積	構造
	7C		3 間（8.2m）		3 間（6.1m）		N-4°-E	50.0㎡	総柱建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
17	円形	漏斗状	51	46	60	14.23	○	20	
6	楕円形	U 字状	58	49	62	14.24	○	16	
7	円形	箱状	45	42	54	14.28	○	14	
8	円形	U 字状	47	39	48	14.30	○	15	
9	楕円形	台形状	59	46	57	14.33	○	23	
55	円形	U 字状	(56)	–	55	14.38	×	–	
19	円形	U 字状	56	48	66	14.15	○	22	
36	楕円形	台形状	80	52	46	14.33	○	19	
54	円形	階段状	57	–	36	14.27	○	13	
56	楕円形	U 字状	65	59	(32)	14.44	×	–	
59	円形	U 字状	(57)	–	80	14.00	○	18	P57 に切られる
5	円形	半円状	66	64	39	14.44	○	17	
10	楕円形	漏斗状	(59)	59	78	14.08	○	20	P34 に切られる
21	円形	U 字状	49	–	40	14.41	○	19	
4	楕円形	U 字状	46	36	56	14.46	○	16	

SB122	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	7C		4 間（7.5m）		2 間（4.2m）		N-85°-W	31.5㎡	側柱建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
15	円形	V 字状	30	26	56	14.23	○	15	
74	円形	U 字状	32	28	31	14.49	○	13	
76	円形	U 字状	30	28	56	14.33	○	13	
78	円形	U 字状	30	29	51	14.21	×	–	
38	楕円形	U 字状	40	26	31	14.54	○	11	
52	円形	U 字状	32	–	90	13.87	×	–	
53	円形	半円状	32	28	13	14.69	○	7	
56	楕円形	U 字状	65	58	(32)	14.44	×	–	
57	円形	U 字状	41	33	40	14.24	×	–	P59 を切る
75	円形	U 字状	26	–		14.50	○	12	

SB123	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	7C		2 間（4.1m）		2 間（3.7m）		N-84°-W	15.2㎡	総柱建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
35	円形	U 字状	41	38	55	14.06	○	15	
31	円形	半円状	24	22	18	14.66	×		
32	円形	箱状	25	–	23	14.51	×		
73	円形	V 字状	25	23	34	14.51	×		
51	円形	V 字状	36	–	26	14.66	×		
34	楕円形	U 字状	(64)	59	93	13.93	○	16	P10 を切る
33	円形	U 字状	24	22	28	14.60	○	13	

SB124	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	5F		2 間（3.3m）		1 間（1.8m）		N-9°-W	5.9㎡	側柱建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
113	円形	U 字状	28	22	42	14.03	×		
115	円形	漏斗状	31	28	24	14.33	×		
116	円形	U 字状	20	–	50	14.07	×		
114	円形	U 字状	22	21	38	14.10	×		
112	円形	U 字状	22	20	34	14.17	×		

SB125	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	5E・D		2 間（3.8m）		2 間（3.1m）		N-82°-E	11.8㎡	総柱建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
29	円形	台形状	20	–	46	14.14	×		
28	円形	半円状	20	18	10	14.50	×		
27	円形	箱状	27	22	34	14.14	×		
26	円形	半円状	18	14	6	14.54	×		
25	円形	U 字状	20	17	46	14.14	×		
20	円形	U 字状	20	17	17	14.43	×		
24	円形	U 字状	22	18	68	13.92	×		
41	円形	U 字状	30	24	16	14.44	×		

SB126	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	4D		3 間（5.0m）		2 間（2.4m）		N-3°-E	12.0㎡	二面庇付建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
61	円形	U 字状	21	20	16	14.34	×		
62	円形	U 字状	20	–	18	14.32	×		
63	円形	半円状	19	–	12	14.41	×		
64	円形	U 字状	23	–	11	14.39	×		
50	円形	U 字状	21	20	41	14.13	×		
49	円形	U 字状	24	20	20	14.30	×		
48	円形	U 字状	23	22	21	14.33	×		
68	円形	U 字状	22	20	60	14.36	×		
46	円形	箱状	21	–	26	14.30	×		
70	円形	半円状	22	(18)	10	14.40	×		
69	円形	U 字状	30	26	18	14.32	×		
65	円形	半円状	18	–	15	14.35	×		
66	円形	U 字状	23	20	25	14.25	×		
45	円形	U 字状	21	19	39	14.14	×		
47	円形	U 字状	16	–	20	14.29	×		

SB127	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	4D		2 間（4.1m）		1 間（1.9m）		N-4°-E	7.8㎡	三面庇付建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
161	楕円形	U 字状	32	30	24	14.31	×		
158	円形	U 字状	29	24	25	14.20	×		
156	円形	U 字状	30	27	20	14.28	×		
164	楕円形	U 字状	25	22	16	14.32	×		
166	楕円形	U 字状	28	20	13	14.37	×		
165	楕円形	台形状	30	22	10	14.40	×		
160	長方形	U 字状	25	20	25	14.24	×		
159	円形	U 字状	22	18	23	14.22	×		
157	円形	台形状	24	20	9	14.12	×		
155	円形	U 字状	36	34	28	14.17	×		
168	円形	U 字状	23	–	24	14.23	×		
167	円形	半円状	24	–	12	14.23	×		
162	楕円形	U 字状	31	28	28	14.28	×		

SB261	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積	構造
	3F・4F		5 間（9.5m）		4 間（7.7m）		N-84°-W	73.2㎡	二面庇付建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
207	円形	U 字状	28	26			×		
187	円形	U 字状	(23)	–	31	14.01	×		P188 に切られる
185	楕円形	漏斗状	50	31	33	14.10	×		
183	楕円形	U 字状	32	27	49	14.06	×		
179	円形	U 字状	28	–	20	14.26	×		
174	円形	U 字状	32	24	32	14.17	×		
224	円形	台形状	24	22	11	14.35	×		
122	円形	U 字状	22	20	24	14.34	×		
217	円形	半円状	33	30	14	14.33	×		
131	円形	U 字状	27	–	24	14.18	×		
134	円形	U 字状	25	24	31	14.07	×		
195	楕円形	半円状	57	35	26	14.20	×		
117	楕円形	漏斗状	37	28	24	14.11	×		
198	円形	U 字状	32	30	29	14.06	×		
201	円形	V 字状	28	–	30	14.10	×		
203	楕円形	U 字状	42	36	33	14.06	×		
205	円形	U 字状	28	26	22	14.12	×		
189	円形	U 字状	24	20	23	13.81	×		
242	円形	U 字状	23	22	30	14.07	×		
177	円形	U 字状	30	27	29	14.17	×		
138	楕円形	U 字状	36	28	48	13.96	×		
136	円形	U 字状	29	–	20	14.24	×		
135	円形	U 字状	38	35	30	14.00	×		
197	円形	U 字状	25	23	39	14.01	×		
194	円形	U 字状	30	–	38	14.03	×		
193	円形	半円状	29	24	12	14.08	×		
192	円形	U 字状	28	27	49	13.90	×		
139	円形	U 字状	30	25	24	14.16	×		

SB262	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）	構造
	3F・4E・4F		4 間（7.5m）		3 間（5.8m）		N-79°-W	43.5㎡	二面庇付建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
204	円形	U 字状	32	28	26	14.10	×		
190	円形	U 字状	22	16	22	14.11	×		
176	円形	漏斗状	29	–	28	14.08	×		
180	楕円形	半円状	30	28	25	14.19	×		
181	円形	U 字状	31	30	26	14.07	×		
213	円形	U 字状	34	–	23	14.22	×		
225	円形	半円状	20	18	10	14.36	×		
173	楕円形	U 字状	35	26	24	14.18	×		
133	円形	U 字状	(24)	–	44	13.98	×		P132 に切られる
151	円形	U 字状	29	25	38	14.03	×		
150	円形	U 字状	26	23	20	14.00	×		
214	円形	U 字状	28	23	22	14.16	×		
153	円形	U 字状	31	–	20	14.18	×		
258	円形	U 字状	25	23	23	14.12	×		
199	円形	U 字状	29	27	41	14.03	×		
202	円形	U 字状	28	22	38	14.00	×		
140	円形	U 字状	41	32	30	14.11	×		
210	円形	半円状	28	29	12	14.28	×		
137	円形	U 字状	29	–	42	13.98	×		
152	円形	U 字状	33	–	42	14.00	×		
141	円形	U 字状	29	22	24	14.14	×		

SB263	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）	構造
	4F		2 間（4.3m）		1 間（2.0m）		N-10°-E	8.6㎡	側柱建物
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高(m)	柱あたり	柱痕推定径（cm）	切り合い
142	円形	弧状	36	33	11	14.29	×		
129	円形	U 字状	30	23	22	14.20	×		
172	円形	U 字状	28	–	23	14.22	×		P133 を切る
132	円形	U 字状	30	26	35	14.04	×		
128	円形	U 字状	19	18	16	14.23	×		
146	円形	U 字状	25	22	24	14.21	×		
148	円形	U 字状	23	–	26	14.18	×		
149	円形	U 字状	24	22	25	14.18	×		
143	円形	U 字状	23	–	14	14.30	×		

井戸（SE）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	形態	備考
3	5E3･4	円形	箱状	191		174	素掘り	
79	7B1･2･6･7	円形	U 字状	226		155	素掘り	調査区外へ続く
83	4D17･22	楕円形	箱状	194	162	164	素掘り	
110	4E1･2･7	円形	台形状	230		164	素掘り	
169	3E4･5　3F24･25	円形	U 字状	208		152	素掘り	

土坑（SK）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	方位	備考
1	5E25	楕円形	弧状	(77)	71	21	N-12°-E	
2	5E20･25	楕円形	弧状	134	82	7	N-8°-W	
30	5D2･5E22	楕円形	弧状	233	78	15	N-5°-W	
44	5E19･20･24･25	楕円形	階段状	236	160	34	N-80°-E	
111	5F18･23	楕円形	弧状	200	80	22	N-15°-W	
255	3E18・23・24	楕円形	台形状	255	148	40	N-10°-W	

溝（SD）

遺構名	グリッド	断面形	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）	備考
84	2G･2F･4A･4B	V 字・台形・半円状	(65.0) 以上	4.0	202	遺跡の南北に縦断
260	3G11・16・17	弧状	(2.2)	0.13	5	

性格不明遺構（SX）

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	備考
130	3G14・15	楕円形	弧状	334	220	18	

二反割遺跡　遺物観察表

土器・陶磁器

胎土の混入物…◎：多量、○：多い、△：少量

番号	種類	器種	出土地点			法量（cm）			色調	調整・文様等			胎土の混入物	備考
			グリッド	遺構	層	口径	底径	器高		内面	外面	底部外面		
1	土師器	壺	1F25	SX101	1				浅黄橙				砂・礫◎	
2	土師器	壺	0E5，0E10	SX102	1				浅黄橙				砂・礫◎	
3	土師器	壺	OE5	SX102	1		8.5		浅黄橙		ナデ	ナデ	砂・礫◎	2と同一個体
4	土師器	甕	1F21	SX102	1	16.9			にぶい赤褐	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ		砂○	
5	土師器	高杯	OE5，1E1	SX102	1	16	10	13	橙	ハケ・ミガキ・ナデ	ハケ・ヨコナデ・ミガキ		砂・礫◎	
6	土師器	壺	1E　1	SX102	1	9.3		12	浅黄橙	ミガキ・ナデ	ミガキ		砂○	外面・口縁部内面赤彩
7	土師器	高杯	1F16	SX102	1				橙				砂◎	
8	土師器	高杯	1F16	SX102	1				橙	ナデ	ハケ・ミガキ		砂○	
9	土師器	高杯	1F16	SX102	1				にぶい橙	ミガキ・ナデ	ミガキ		砂○	
10	土師器	小型器台	1F21	SX102	1				にぶい赤褐	ナデ	ミガキ		砂△	
11	土師器	壺	OE5	SX102	1	12.7			にぶい赤褐		ヨコナデ		砂・礫○	
12	土師器	甕	1F12	SX102	1	14.1			にぶい褐	ナデ	ヨコナデ・ハケ		砂・礫○	
13	土師器	杯身	1F22	SX102	1	13.2			体部外面：橙	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ		砂○	内面・口縁部外面黒色処理
14	土師器	有孔鉢	1F16	SX102	1		5.5		赤褐・褐灰	ハケ	ナデ		砂・礫◎	
15	土師器	杯身	1D1		攪乱				外：にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ			内面黒色処理
16	土師器	鉢	1D2		攪乱		6.6		橙				砂○	
17	土師器	高杯	2G19	SD84	下		8.9		浅黄橙・褐灰				砂◎	
18	須恵器	杯身	4B7	SD84	下	12			灰	ロクロナデ	ロクロナデ		砂△	
19	須恵器	壺	4B12	SD84	下				灰	ロクロナデ	カキ目・タタキ・ロクロナデ		黒色砂○ 白色砂○	
20	須恵器	甕	3D18	SD84	中・下				灰白・灰	同心円文	タタキ		白色砂◎	
21	須恵器	甕	2F4	SD84	中				灰・灰白	ナデ？	タタキ		砂△	
22	須恵器	杯蓋	4B17	SD84	下	15.7			灰・灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	天：ヘラ切り	砂○	
23	須恵器	有台杯	3C3	SD84	上	13			灰	ロクロナデ	ロクロナデ		砂△	
24	須恵器	有台杯	2E　15	SD84	中		6.9		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	砂○	
25	須恵器	有台杯	4B1	SD84	下		9		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	礫○	
26	須恵器	甕	4B23	SD84	中	16.8			灰・暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ		砂・礫◎	
27	須恵器	甕	3E　16	SD84	上・中	24.3			灰	ロクロナデ	ロクロナデ タタキ		砂・礫◎	
28	須恵器	甕	3B11	SD84	上				灰白・灰	同心円文	タタキ		白色砂○	
			3C25	SD84	下									
29	珠洲焼	甕	7C3	SB121	1				灰	ヨコナデ・円形押圧	ヨコナデ・タタキ		砂○	P59
30	珠洲焼	甕	7C3	SB121	1				灰	ヨコナデ・円形押圧	ヨコナデ・タタキ		砂○	P59
31	珠洲焼	片口鉢	5E3・4	SE3	3～5	28.6	9.9	12.9	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り	砂○	
			4B1，2F19	SD84	上									
32	珠洲焼	壺R種	5E3・4	SE3	3～5		7.9		灰	ロクロナデ・指ナデ	ロクロナデ	回転糸切り	砂・礫◎	
			2E5，3E16	SD84	中						ケズリ・ナデ			
33	珠洲焼	甕か壺	5E　20	SK44	2				灰褐・灰		タタキ		砂○	
34	白磁	瓶	3E4・5， 3F24・25	SE169	中									
35	土師器	皿	3E4・5， 3F24・25	SE169	中	8.4	5.1	1.9	灰褐・にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	砂◎	
36	土師器	皿	3E4・5， 3F24・25	SE169	上～中	8.6	5.4	2	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	砂○	
37	土師質土器	皿	4D17・22	SE83	上	9.5	4.8	2.5	褐灰・にぶい橙	ロクロナデ	ナデ・ヨコナデ	回転糸切り	赤褐粒○	
38	珠洲焼	甕	7C2	SB121	1				褐灰・灰	円形押圧	タタキ			P17
39	土師質土器	皿	7C22	SB123	1		6		にぶい褐・灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ		砂○	P31
40	土師質土器	皿	3F5	SB261	1	10.2	5	2.9	橙				赤褐粒◎	P203
41	白磁	碗	4A15	SD84										碗Ⅱ類
42	白磁	碗	4A15	SD84			5.2							碗Ⅳ類
43	珠洲焼	甕	3D6	SD84	中				褐灰・暗褐・灰	ヨコナデ・円形押圧	ヨコナデ・タタキ		砂○	
44	珠洲焼	甕	4A24	SD84	中				灰	円形押圧	タタキ		白色砂○	
45	珠洲焼	片口鉢	2F14	SD84	中	28.2			灰	ロクロナデ	ロクロナデ		砂○	
46	珠洲焼	片口鉢	4A8	SD84	下	29			灰	ロクロナデ	ロクロナデ		白色砂◎	
47	珠洲焼	片口鉢	4B6	SD84	中	27.1			灰	ロクロナデ	ロクロナデ		砂◎	46と同一個体
48	珠洲焼	片口鉢	2F4	SD84	下	25.6			灰	ロクロナデ	ロクロナデ		砂◎	
49	珠洲焼	壺か瓶	4B23	SD84	中				灰	ロクロナデ	ロクロナデ 突帯・波状文		砂・礫△	
50	珠洲焼	壺	4A8	SD84	中				暗紫灰・灰	ナデ	タタキ		砂・礫◎	
51	土師質土器	皿	3D7	SD84	中	7.6	4.6	1.8	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	砂◎	
52	土師質土器	皿	4B1	SD84	下		5.9		にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	白色砂○	

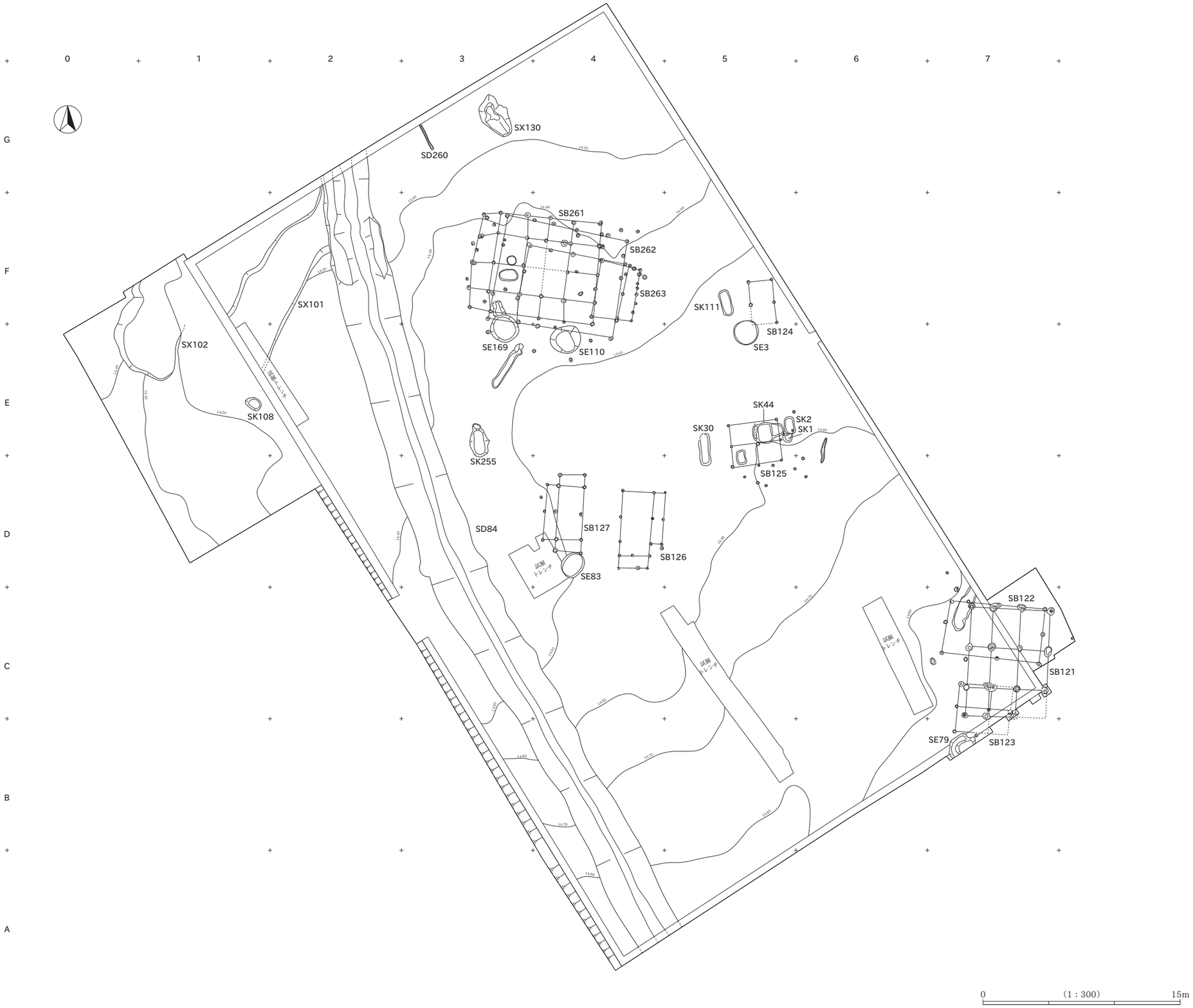
石製品・鉄製品

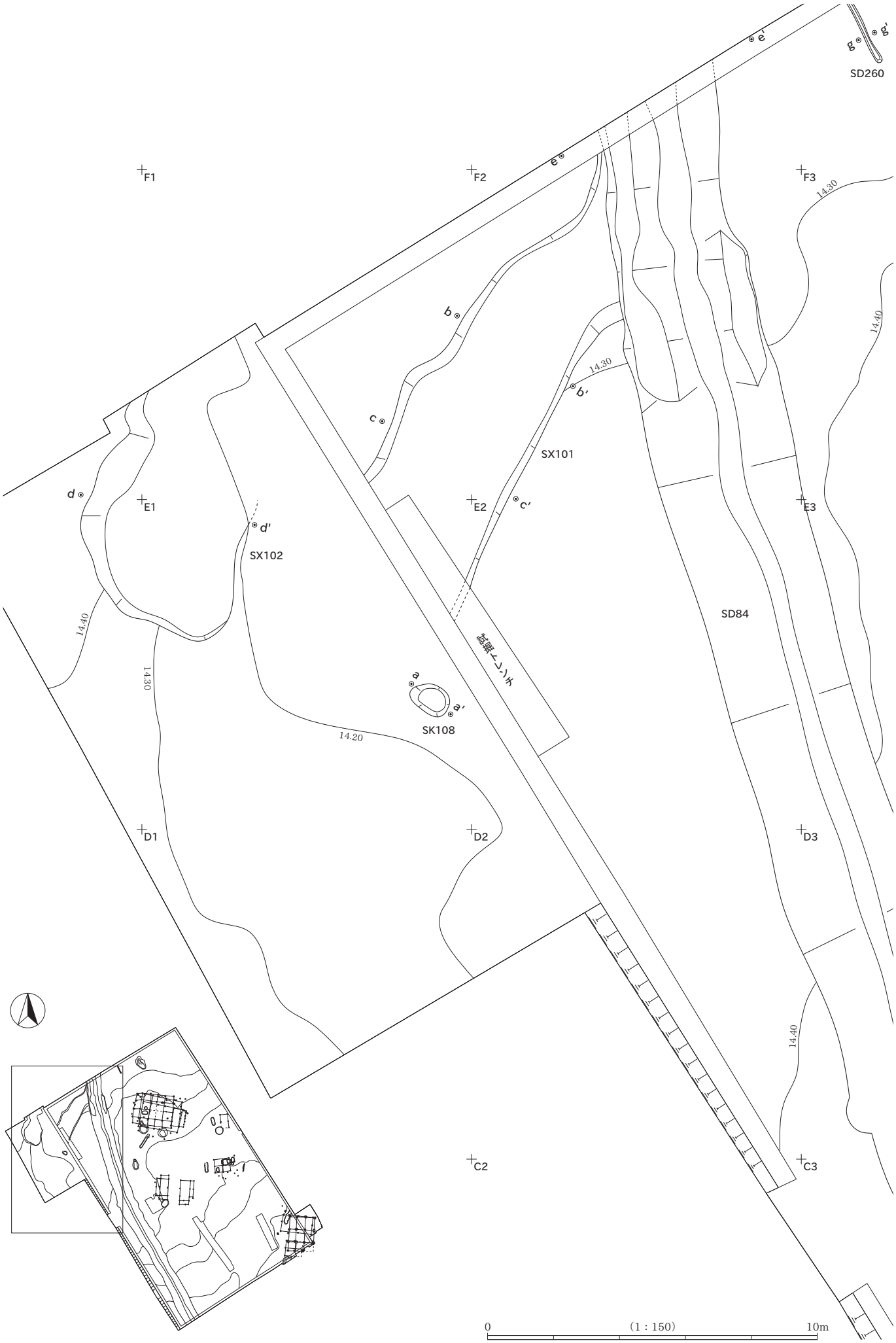
番号	種類	器種	出土地点			石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
			グリッド	遺構	層						
54	石製品	敲石	4B12	SD84	埋土下層	安山岩	11.3	7.9	7.3	717.5	両端・3側面に敲打痕あり。正面の一部、使用により剥落する。
55	石製品	敲石	2E15	SD84	埋土下層	安山岩	8.0	6.3	5.3	381.5	両端・3側面に敲打痕あり。正面の一部、使用により剥落する。被熱。
56	石製品	敲石		SD84	埋土下層	安山岩	6.3	6.1	5.4	311.9	両端・1側面に敲打痕あり。右側面の一部、使用により剥落する。被熱。
57	石製品	砥石	3D	SD84	埋土下層	凝灰岩	10.6	9.9	7.9	964.7	置砥石。正裏面・3側面に砥面あり。被熱。下端欠損。
58	石製品	砥石	4F6	P199（SB262）	埋土下層	砂岩	8.3	8.5	3.6	256.1	置砥石。正裏面・右側面に砥面あり。下端欠損。
59	鉄製品	不明	3C9	SD84	埋土中層	―	3.30	4.75	0.72	13.9	鋳造品の破片。

図　　版

二反割遺跡　遺構全体図

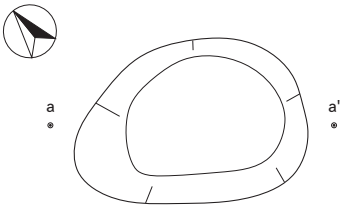
図 版 1

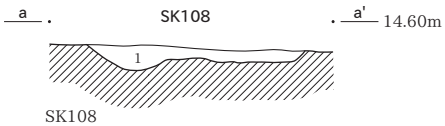



SD260
g
g′
e′
e
F1
F2
F3
14.30
14.40
b
b′
c
c′
SX101
d
d′
E1
E2
E3
SX102
SD84
14.40
14.30
a
a′
SK108
14.20
D1
D2
D3
14.40
C2
C3
0
(1：150)
10m

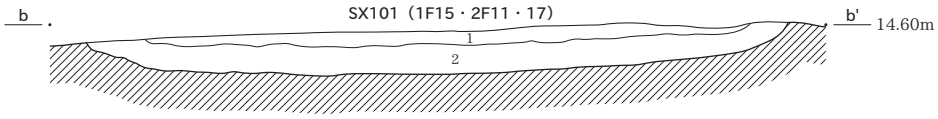
古墳時代の遺構

SK108

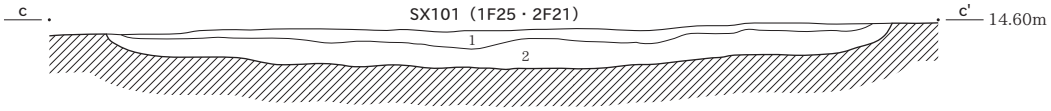




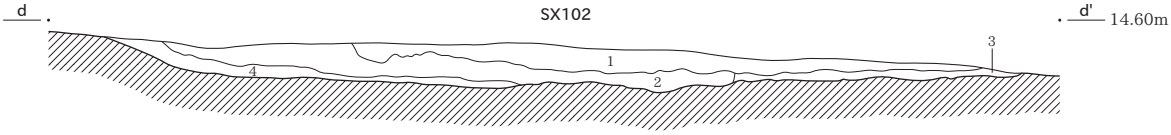
SK108
1 黒褐色シルト　Ⅱ層に近似。黄褐色土を多量に含む。



SX101（1F15・2F11・17）
1 黒褐色シルト　　Ⅲ層に相当する。
2 にぶい黄褐色シルト　Ⅳ層に相当か。

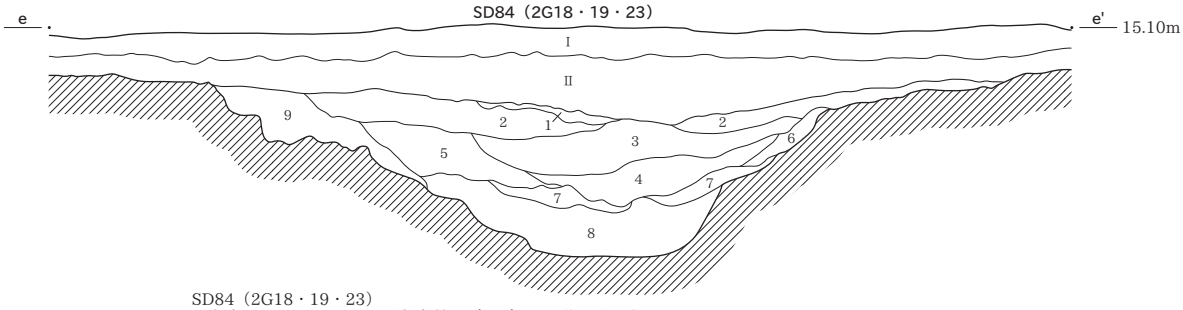


SX101（1F25・2F21）
1 黒褐色シルト　　Ⅲ層に相当する。
2 にぶい黄褐色シルト　Ⅳ層に相当か。

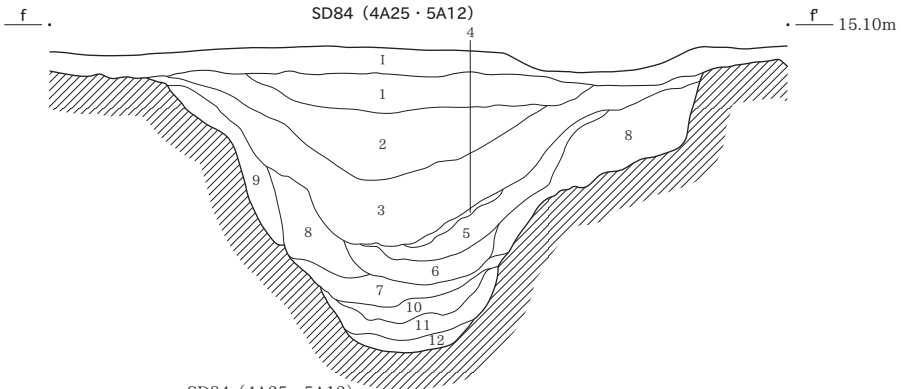


SX102
1 黒褐色シルト　　Ⅲ層に相当。土師器を多量に含む。
2 灰黄褐色シルト
3 にぶい黄褐色粘土
4 灰黄褐色シルト

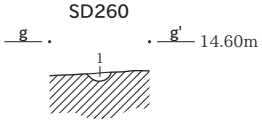
中世の遺構



SD84（2G18・19・23）
1 褐色シルト　　灰褐色粘土が小ブロック状に混入する。
2 暗褐色シルト　　Ⅱ層に近似するが、Ⅱ層よりやや明るく締まっている。
3 暗褐色シルト　　2層にⅤ層が少量混入する。
4 暗褐色シルト　　2層に近似する。褐色粘土が小ブロック状に少量混入する。
5 にぶい黄褐色シルト　2層にⅤ層が少量混入する。3層より混入量は多い。
6 にぶい黄褐色シルト　Ⅳ層の崩落土。Ⅱ層が少量混入する。
7 にぶい黄褐色シルト　Ⅱ・Ⅳ層の混合土。
8 灰黄褐色シルト質粘土　下層には炭化粒が多く混入する。底面、壁面には鉄分が多く沈着する。
9 にぶい黄褐色シルト　Ⅱ・Ⅳ層の混合土。



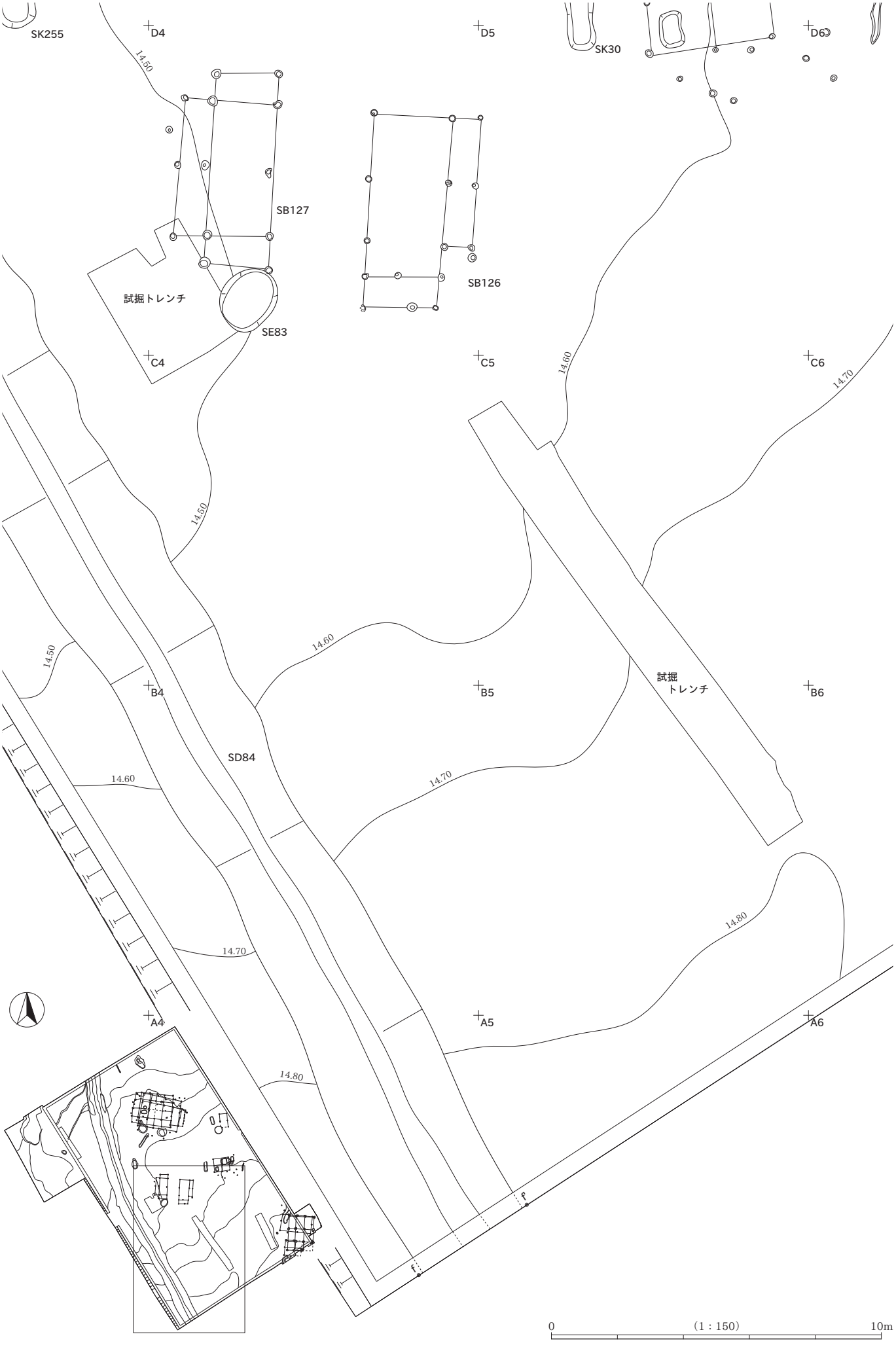
SD84（4A25・5A12）
1 にぶい黄褐色シルト　　Ⅱ層に近似する。炭化粒を少量含む。
2 にぶい黄褐色シルト　　Ⅴ層が少量混入する。炭化粒を少量含む。
3 暗褐色シルト　　褐灰色粘土が混入する。炭化粒を少量含む。
4 黒褐色シルト　　Ⅱ層に近似する。炭化粒を少量含む。
5 暗褐色シルト　　Ⅴ層が少量混入し、炭化粒を少量含む。
6 灰黄褐色粘土　　炭化粒を少量含む。
7 褐灰色粘土　　炭化粒を少量含む。
8 褐色シルト　　1・Ⅴ層の混合土。
9 にぶい黄褐色シルト　　Ⅴ層の崩落土。
10 灰褐色粘土と砂の混合土　炭化粒が多く混入し、鉄分が多く沈着する。
11 褐色粘土と砂の混合土　炭化粒が多く混入し、鉄分が多く沈着する。
12 灰黄褐色粘土　　炭化粒が多く混入する。



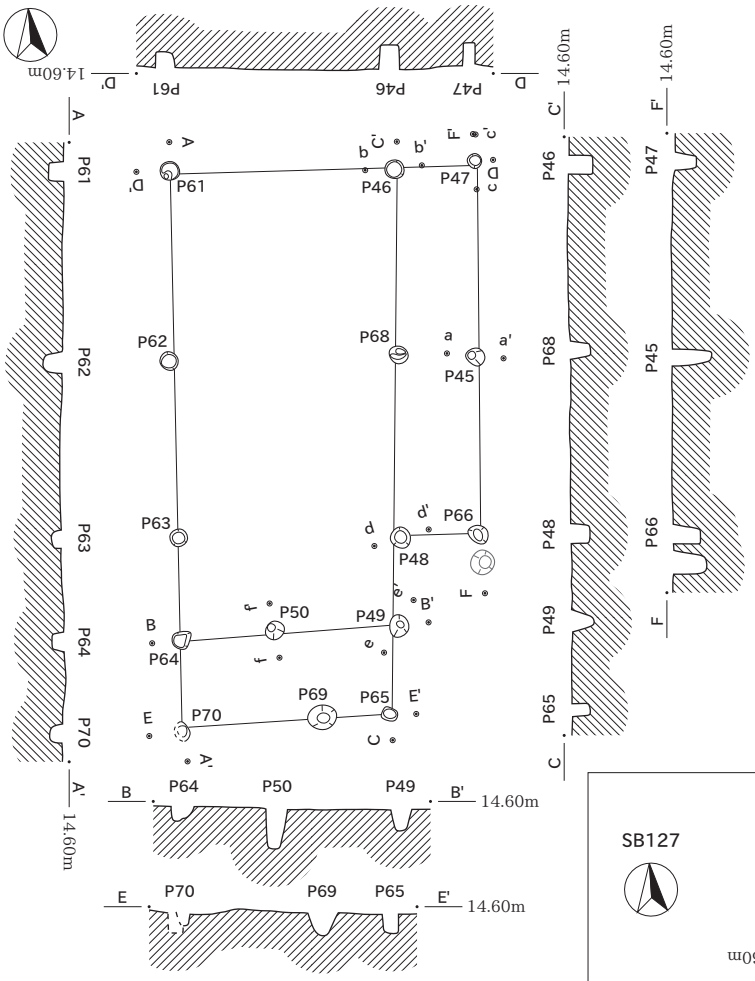
SD260
1 黒褐色シルト　炭化物・Ⅴ層を多量に含む。
　　土師器を1点含む。

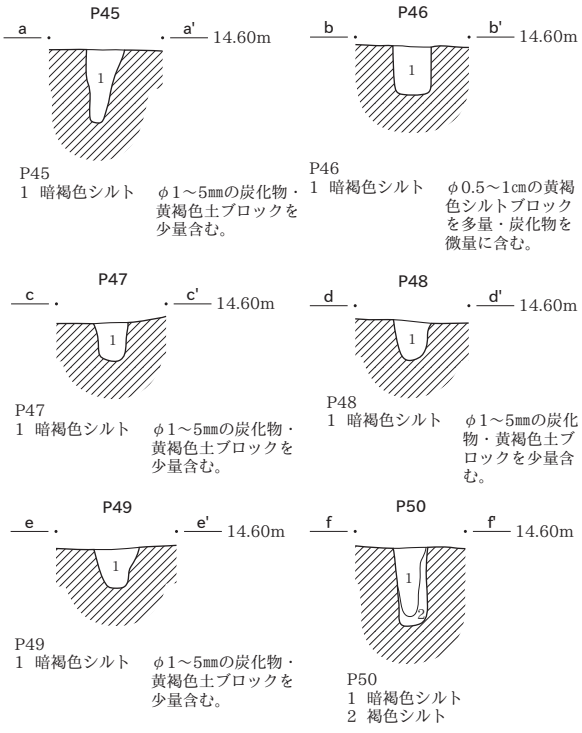
0　平面図・エレベーション図（1：40）　2m

0　SD84（1：50）　2.5m


SK255
D4
D5
SK30
D6
14.50
SB127
SB126
試掘トレンチ
SE83
C4
C5
C6
14.60
14.70
14.50
14.50
14.60
B4
B5
試掘
トレンチ
B6
SD84
14.60
14.70
14.80
14.70
A4
A5
A6
14.80
0
(1：150)
10m

SB126





P45
1 暗褐色シルト　φ1～5㎜の炭化物・黄褐色土ブロックを少量含む。

P46
1 暗褐色シルト　φ0.5～1㎝の黄褐色シルトブロックを多量・炭化物を微量に含む。

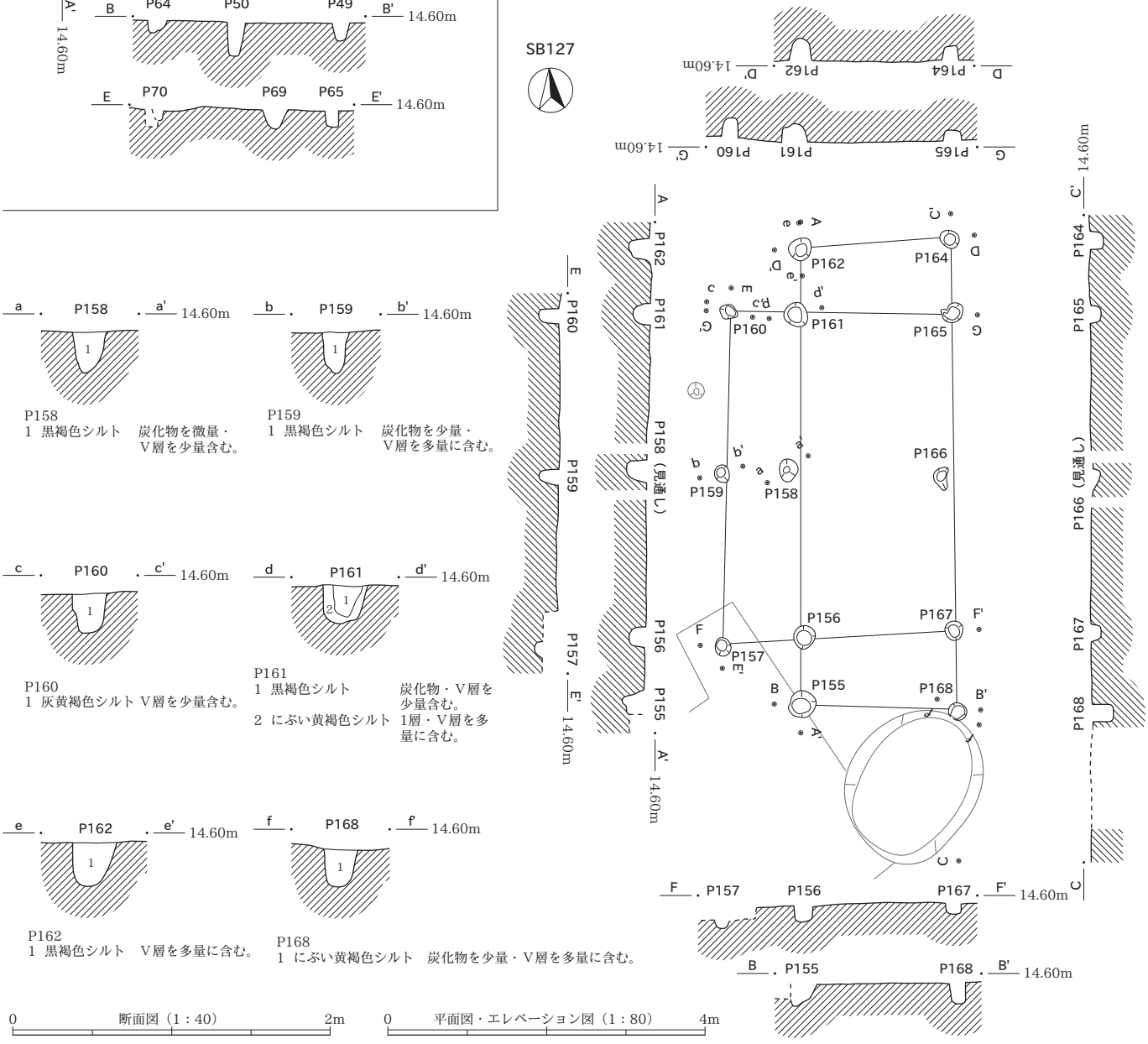
P47
1 暗褐色シルト　φ1～5㎜の炭化物・黄褐色土ブロックを少量含む。

P48
1 暗褐色シルト　φ1～5㎜の炭化物・黄褐色土ブロックを少量含む。

P49
1 暗褐色シルト　φ1～5㎜の炭化物・黄褐色土ブロックを少量含む。

P50
1 暗褐色シルト
2 褐色シルト

SB127



P158
1 黒褐色シルト　炭化物を微量・V層を少量含む。

P159
1 黒褐色シルト　炭化物を少量・V層を多量に含む。

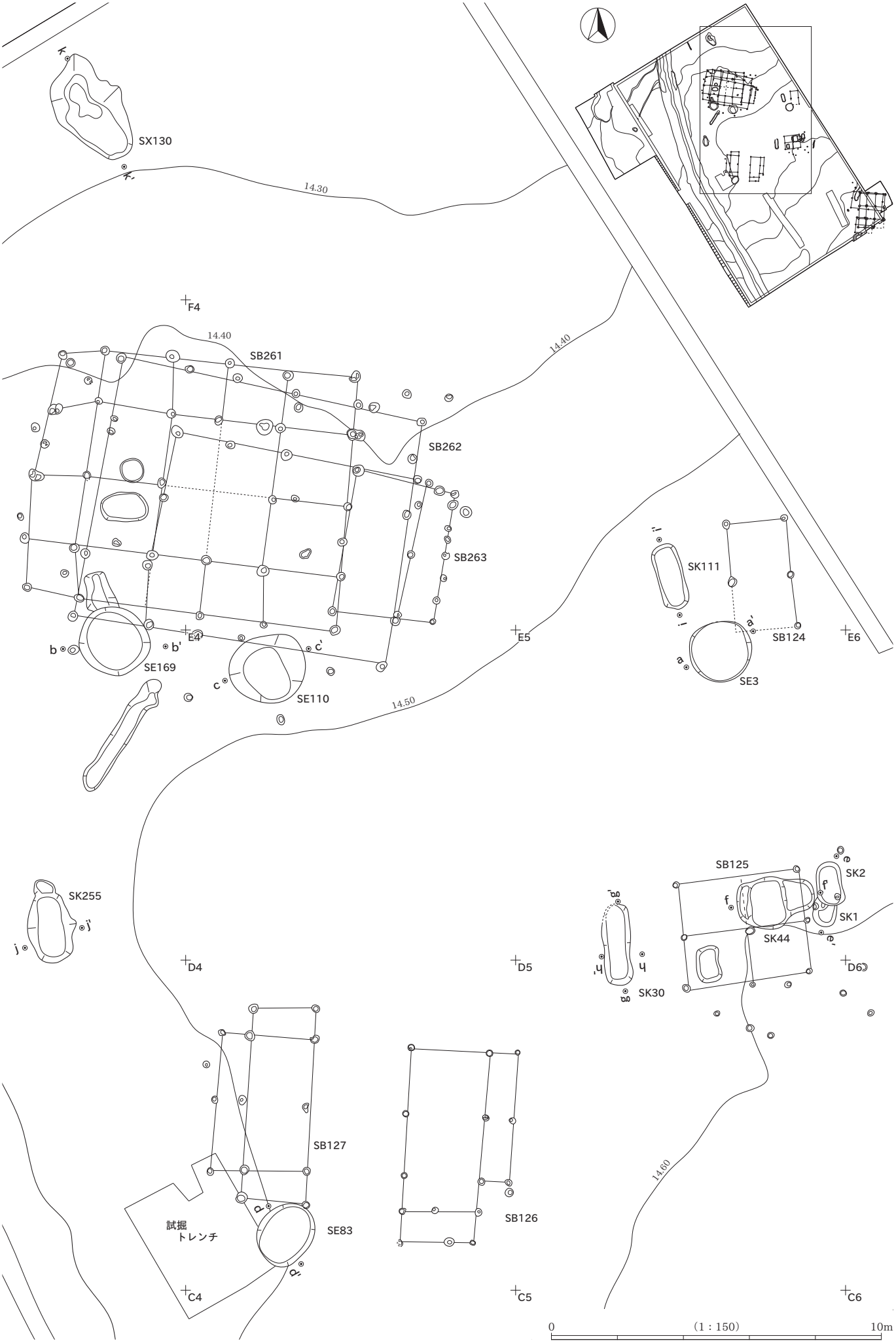
P160
1 灰黄褐色シルト V層を少量含む。

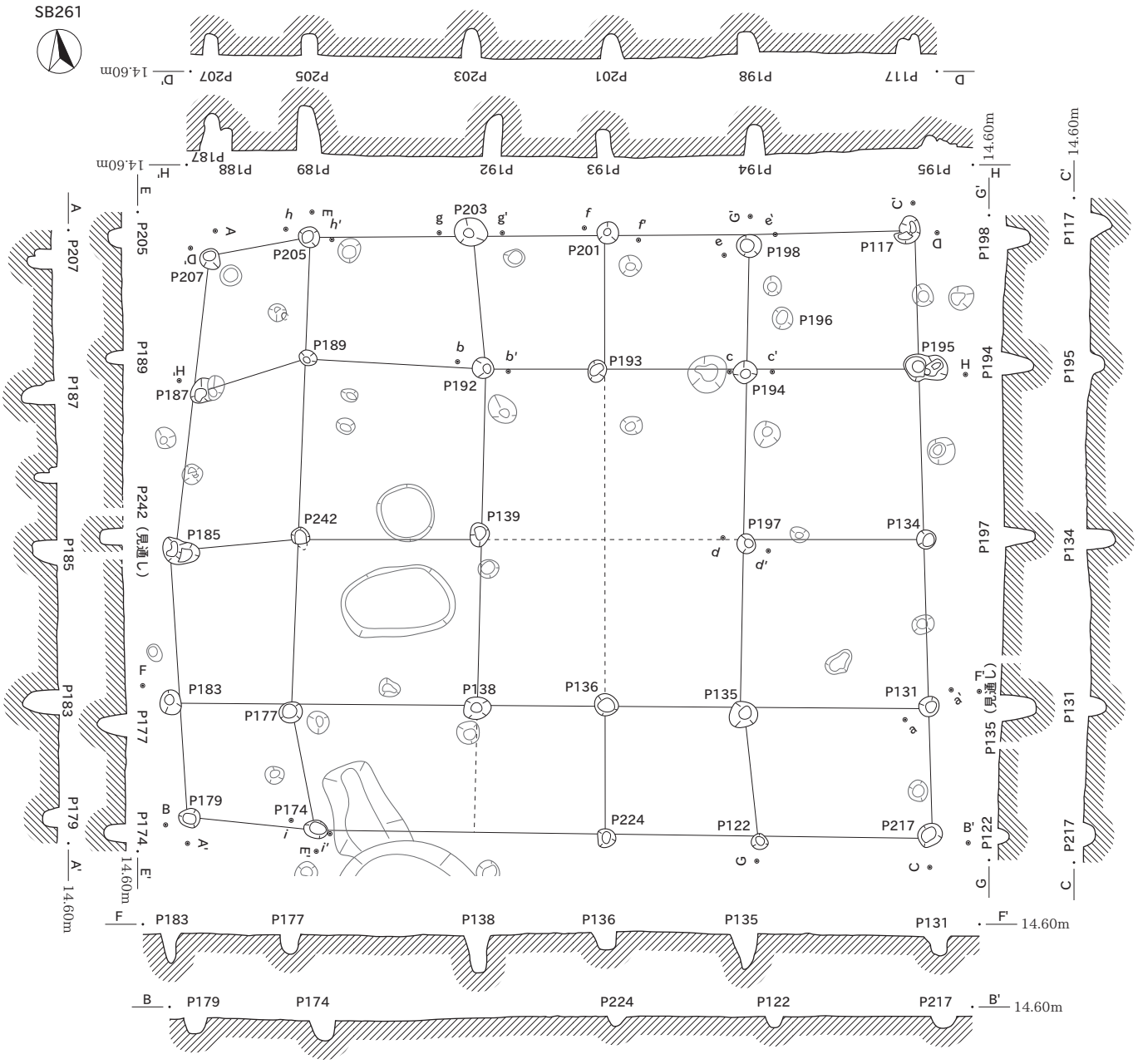
P161
1 黒褐色シルト　炭化物・V層を少量含む。
2 にぶい黄褐色シルト　1層・V層を多量に含む。

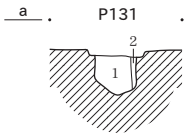
P162
1 黒褐色シルト　V層を多量に含む。

P168
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を少量・V層を多量に含む。

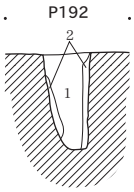
0　断面図（1：40）　2m　　0　平面図・エレベーション図（1：80）　4m


SX130
14.30
F4
14.40
SB261
14.40
SB262
SB263
SK111
SB124
E6
E4
E5
SE169
SE110
SE3
14.50
SK255
D4
D5
SB125
SK2
SK1
SK44
SK30
D6
SB127
SE83
試掘
トレンチ
SB126
14.60
C4
C5
C6
0
(1：150)
10m

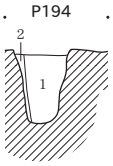




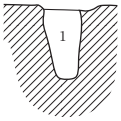
P131
1 黒褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。
2 明黄褐色シルト　V層・1層を多量に含む。



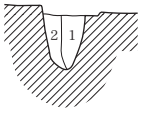
P192
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を少量含む。
2 褐色シルト



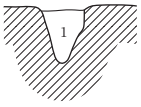
P194
1 にぶい黄褐色シルト　V層ブロックを多量に含む。
2 褐色シルト　1層土を少量含む。



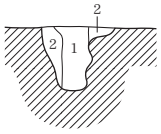
P197
1 黒褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。



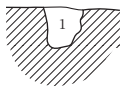
P198
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・V層を少量含む。
2 褐色シルト　炭化物を微量・V層を中量含む。



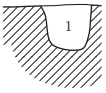
P201
1 黒褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。



P203
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。
2 褐色シルト　炭化物を微量・V層を多量に含む。



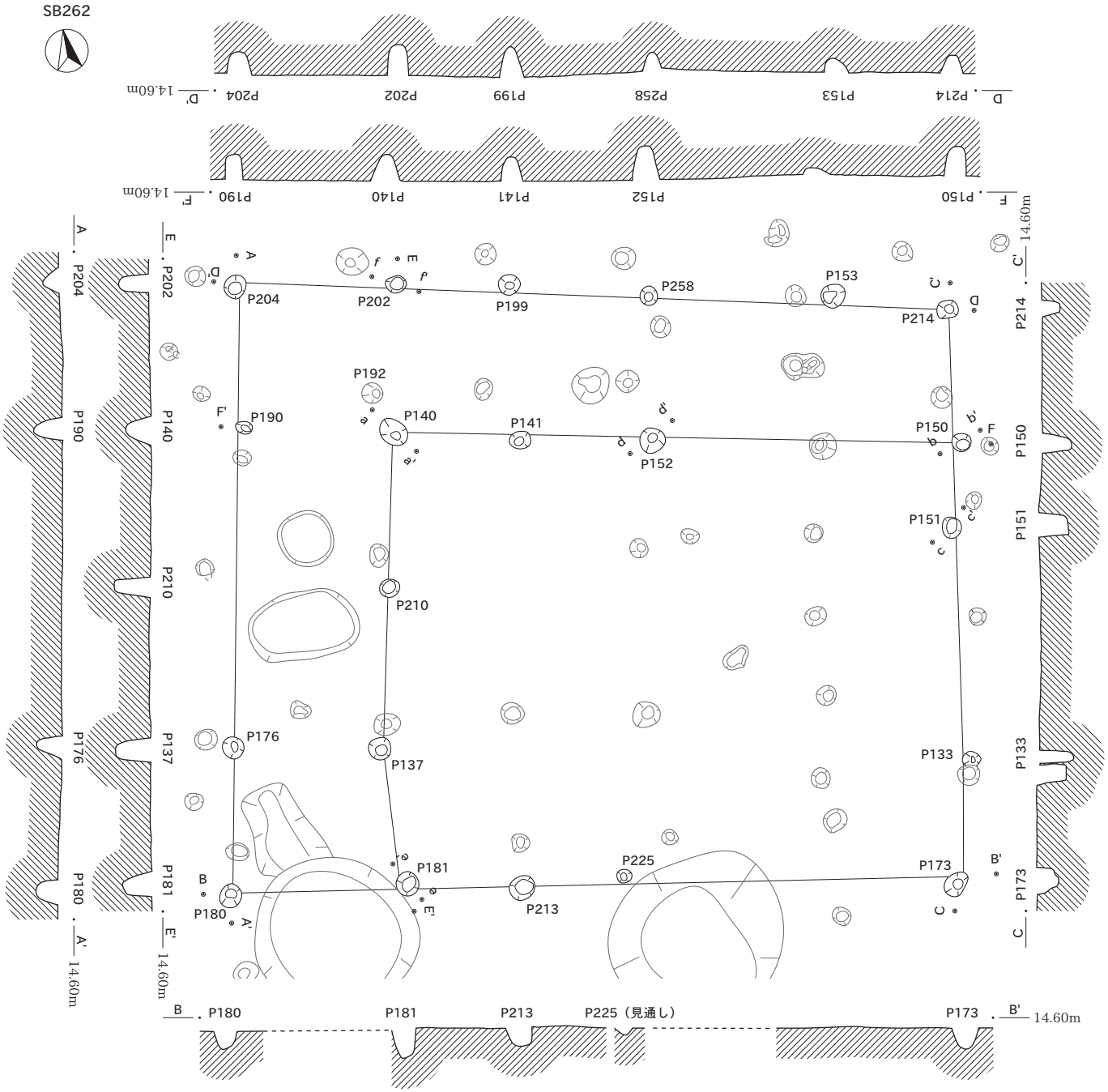
P205
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。

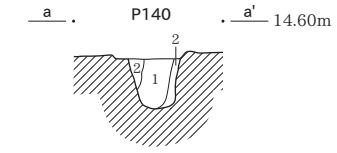


P174
1 黒褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。

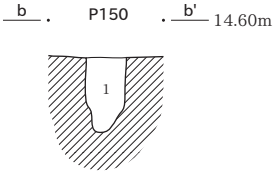
0　断面図（1：40）　2m

0　平面図・エレベーション図（1：80）　4m

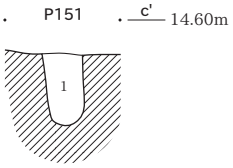




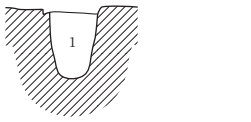
P140
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を微量・Ⅴ層を少量含む。
2 褐色シルト　炭化物を微量・1層・Ⅴ層を少量含む。



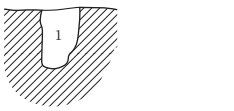
P150
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を少量・Ⅴ層を多量に含む。



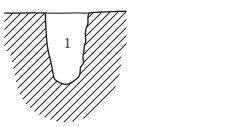
P151
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・Ⅴ層ブロックを少量含む。



P152
1 黒褐色シルト　炭化物を少量・Ⅴ層ブロックを多量に含む。



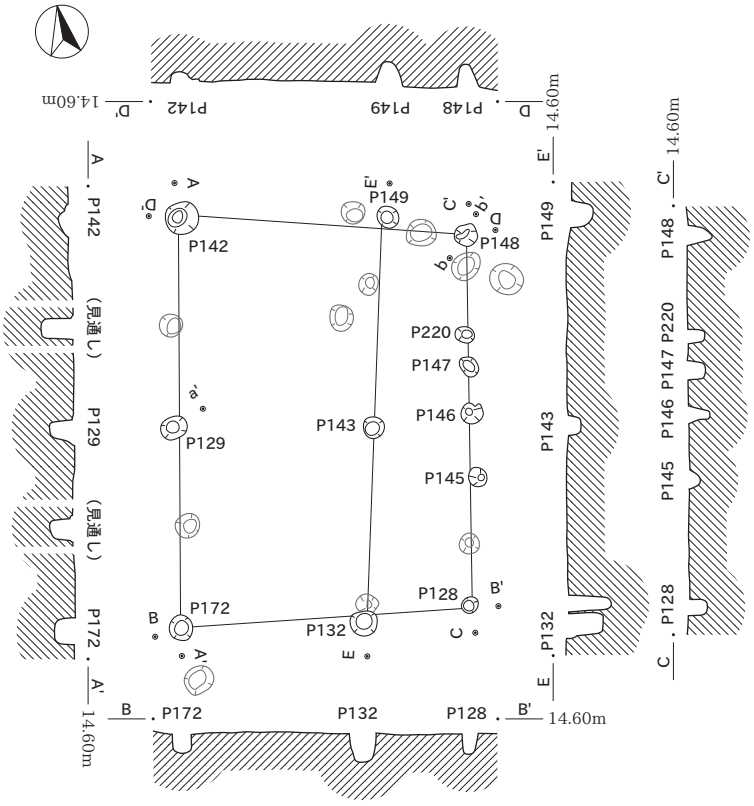
P181
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を少量・Ⅴ層を微量に含む。

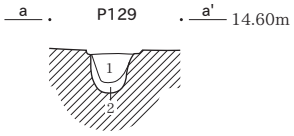


P202
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を多量・Ⅴ層を少量含む。

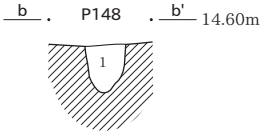
0　断面図（1：40）　2m　　0　平面図・エレベーション図（1：80）　4m

SB263



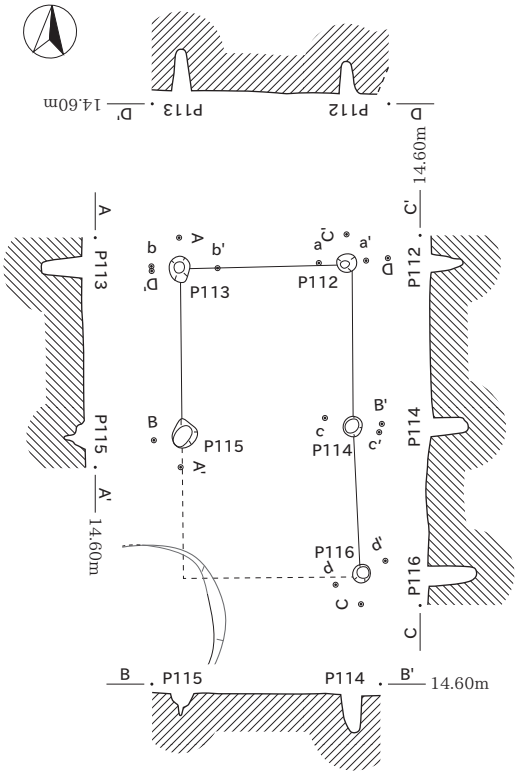


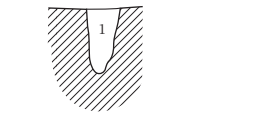
P129
1 灰黄褐色シルト　炭化物を少量・V層を中量含む。
2 明黄褐色シルト　1層を少量・V層を多量に含む。



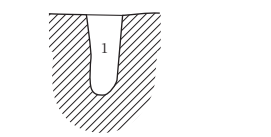
P148
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・V層を少量含む。

SB124

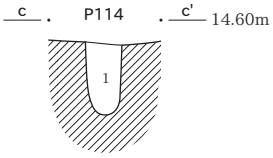




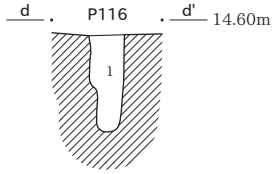
P112
1 褐灰色シルト　1㎜大の炭化物を多量・V層を中量含む。



P113
1 黒褐色シルト　2～5㎜大の炭化物を多量・V層を少量含む。

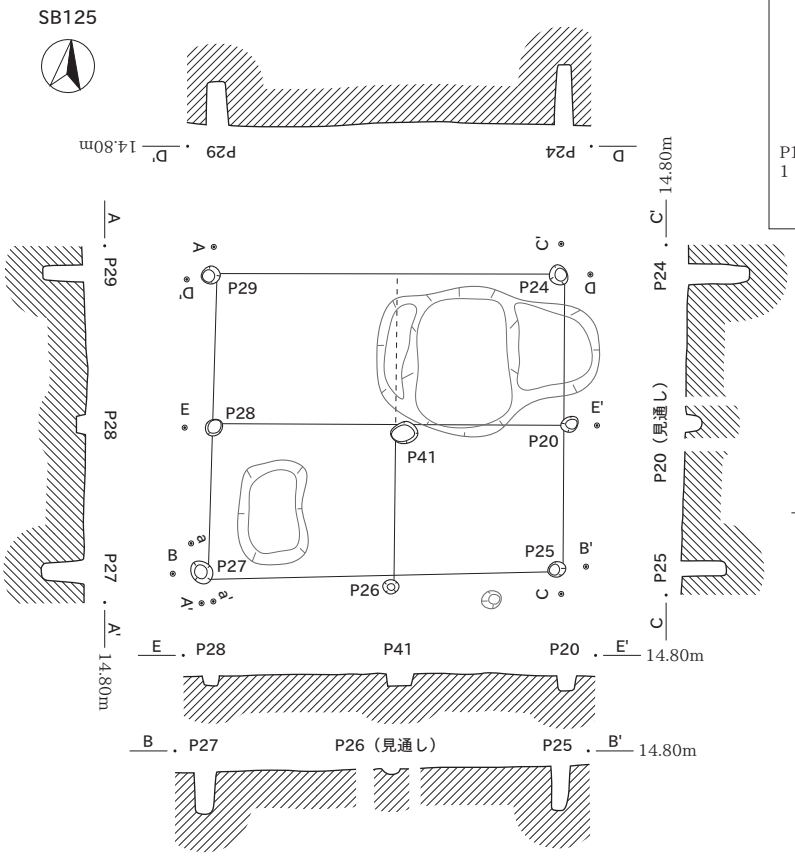


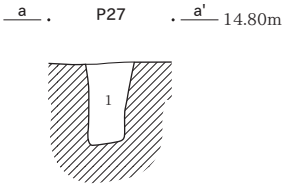
P114
1 黒褐色シルト　1㎜大の炭化物を多量・V層を少量含む。



P116
1 黒褐色シルト　炭化物・V層を多量に含む。

SB125



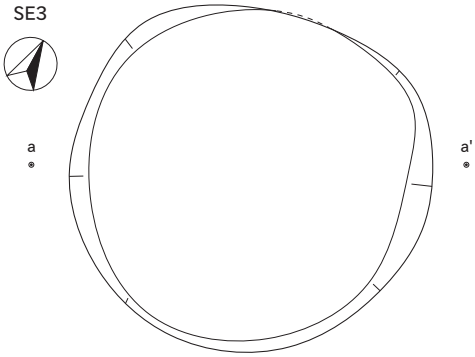


P27
1 暗褐色シルト　φ1～10㎜の黄褐色土ブロックを多量・炭化物を少量含む。

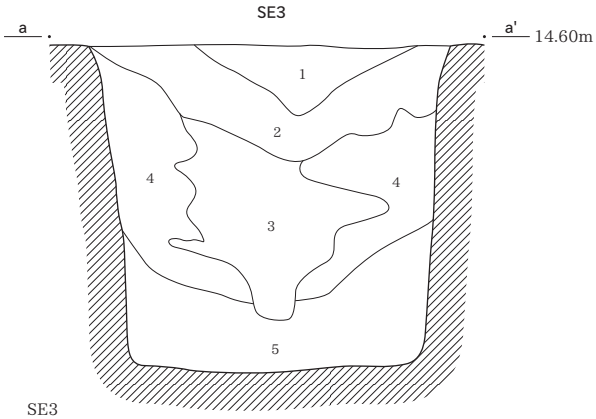
0　断面図（1：40）　2m

0　平面図・エレベーション図（1：80）　4m

SE3

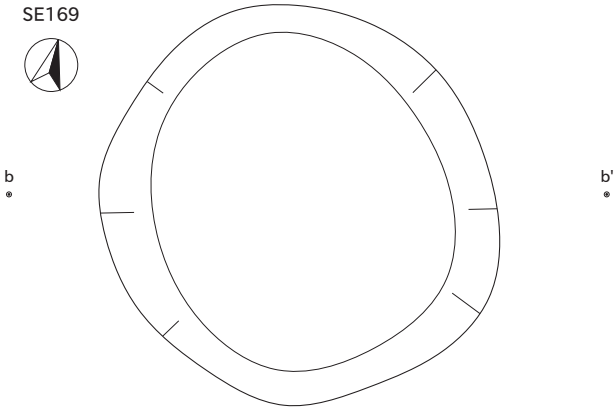


SE3

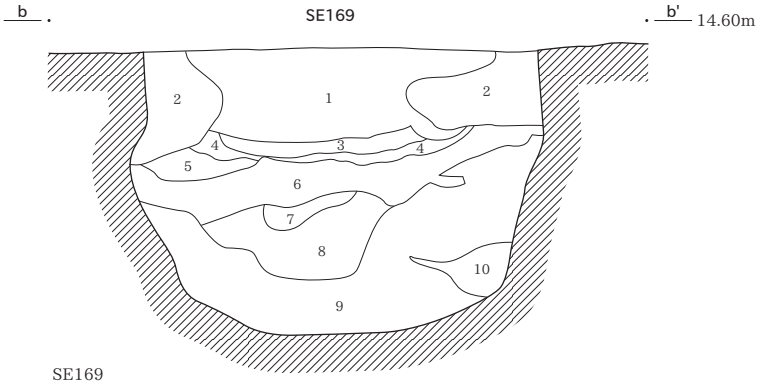


SE3
1 暗褐色シルト　φ5㎜の炭化物と土師質土器の細片を少量含む。
2 暗褐色シルト　φ5～10㎜の炭化物・褐色土ブロックを少量含む。
3 暗褐色シルト　φ0.5～3.0㎝の褐色土ブロックを多量に含む。
4 黄褐色シルト　暗褐色土を少量含む。　崩落土。
5 褐色シルト　灰黄色砂質シルトを多量に含む。4層よりも色が黒く、砂質が強い。

SE169

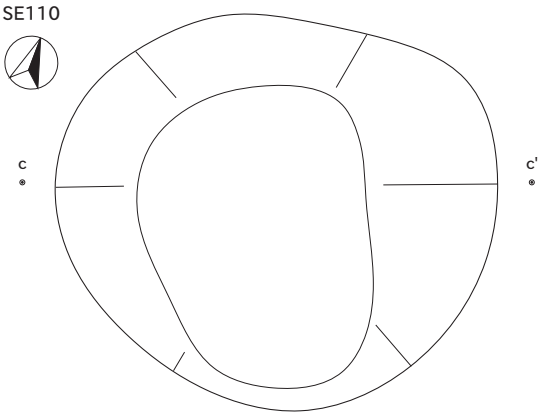


SE169

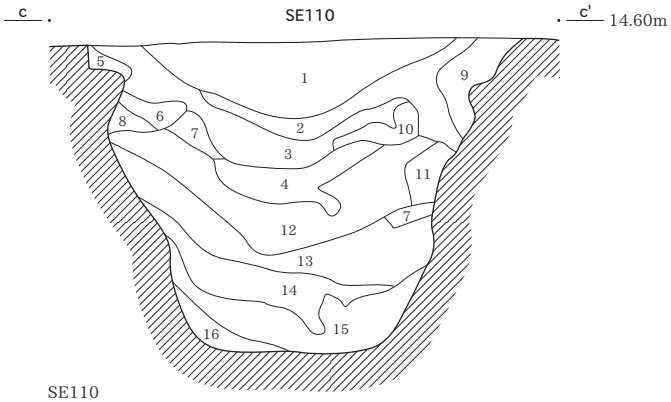


SE169
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・Ⅴ層ブロックを多量に含む。埋土がキレイに堆積してないので埋め戻した可能性あり。
2 にぶい黄橙色シルト　炭化物を少量・Ⅴ層を多量に含む。崩落土。
3 褐灰色シルト　炭化物を多量・Ⅴ層を少量含む。
4 にぶい黄褐色シルト　炭化物微量・3層が少量混入する。
5 黒褐色シルト　炭化物・Ⅴ層を少量含む。
6 黒色粘土　炭化物を多量・Ⅴ層を少量含む。溶けた土器多数含む。
7 褐灰色粘土　炭化物微量・Ⅴ層を多量に含む。
8 にぶい黄褐色シルト　灰白色粘土を少量含む。
9 にぶい黄褐色シルト
10 灰白色粘土

SE110

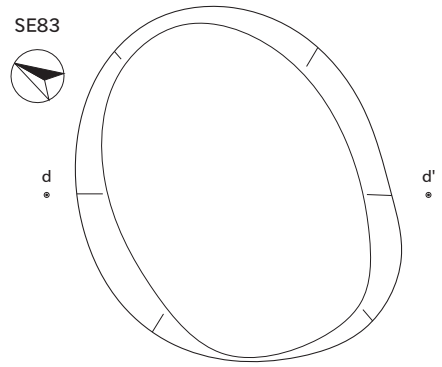


SE110

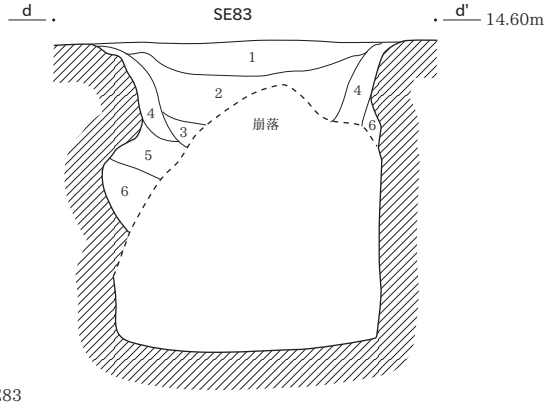


SE110
1 暗褐色シルト　Ⅱ層に近似する。炭化粒を少量含む。
2 黒褐色シルト　Ⅲ層に近似する。炭化粒を少量含む。
3 暗褐色シルト　Ⅴ層が少量混入する。炭化粒を少量含む。
4 黒褐色シルト　Ⅴ層が少量混入する。炭化粒を少量含む。
5 にぶい黄褐色シルト　Ⅴ層崩落土。暗褐色シルトを少量含む。
6 にぶい黄褐色シルト　Ⅴ層崩落土。
7 にぶい黄褐色シルト　Ⅴ層崩落土。暗褐色シルトを少量含む。
8 にぶい黄褐色シルト　Ⅴ層崩落土。
9 5層に同じ。
10 7層に同じ。
11 6層に同じ。
12 にぶい黄褐色シルト質粘土　上層に比べ粘性が強くなる。Ⅴ層崩落土。
13 にぶい黄褐色シルト質粘土　12層より粘性が強くなる。
14 褐灰色粘土
15 にぶい黄褐色粘土　鉄分の沈着がやや多い。
16 にぶい黄褐色砂質シルト　Ⅵ層崩落土。

SE83



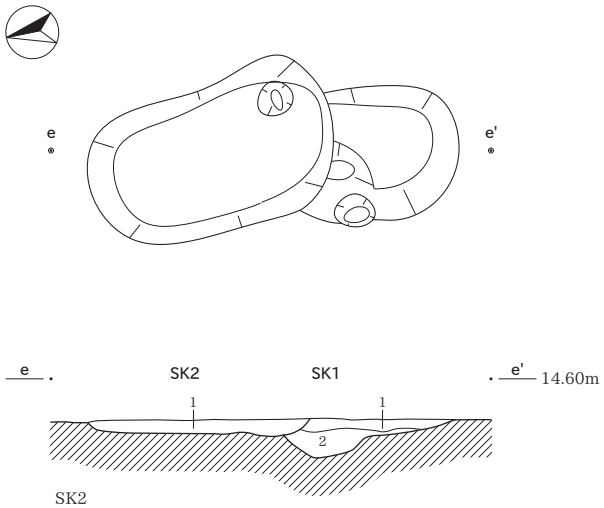
SE83



SE83
1 暗褐色シルト　Ⅱ層に近似する。
2 暗褐色シルト　Ⅱ層に近似する。Ⅴ層が少量混入するため、1層より明るい。
3 暗褐色シルト　2層にⅢ層に近似した土が混入する。したがって、2層より暗い。
4 褐色シルト　Ⅱ～Ⅴ層の混合土。
5 にぶい黄褐色シルト　Ⅴ層にⅡ層が混入する。
6 黄褐色シルト　Ⅴ層の崩落土。

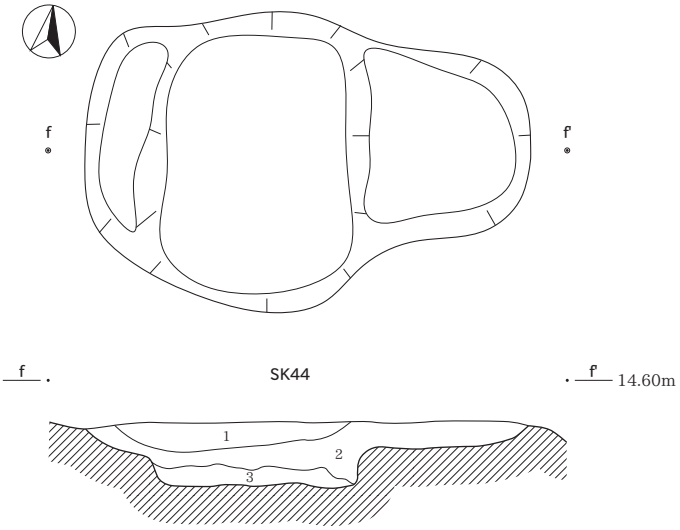
0　(1：40)　2m

SK1・SK2



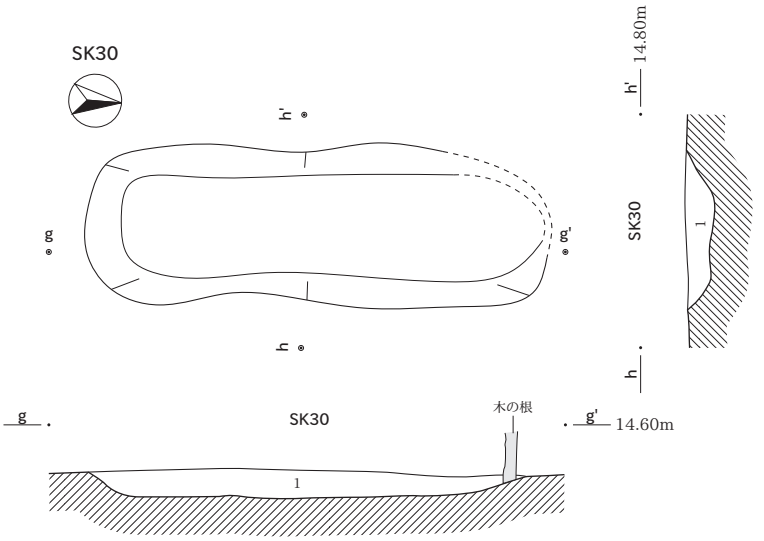
SK2
1 にぶい黄褐色シルト　黄褐色土ブロックを多量・炭化物を少量含む。
2 1層と同じ。　φ1.0㎝の黒褐色土ブロックを少量含む。
SK1
1 SK2層と同じ。　φ1.0㎝の黒褐色土ブロックを多量、炭化物を少量含む。
2 1層と同じ。　黒褐色土ブロックを少量含む。

SK44



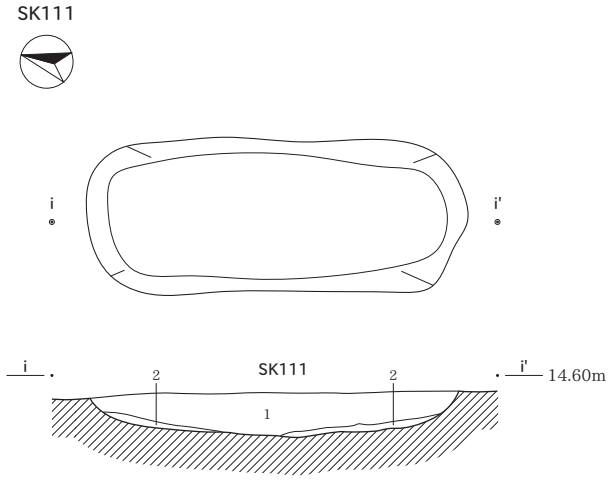
SK44
1 暗褐色シルト　φ1～10㎜の炭化物を少量含む。
2 暗褐色シルト　黄褐色土ブロック（φ1～10㎜）を多量に含む。
3 暗褐色シルト

SK30



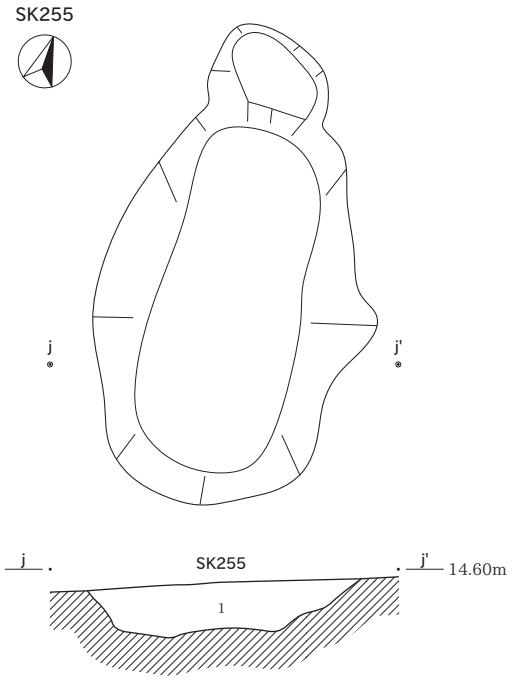
SK30
1 暗褐色シルト　φ5㎜の炭化物・土師質土器細片・φ1～10㎜の褐色土ブロックを多量に含む。

SK111



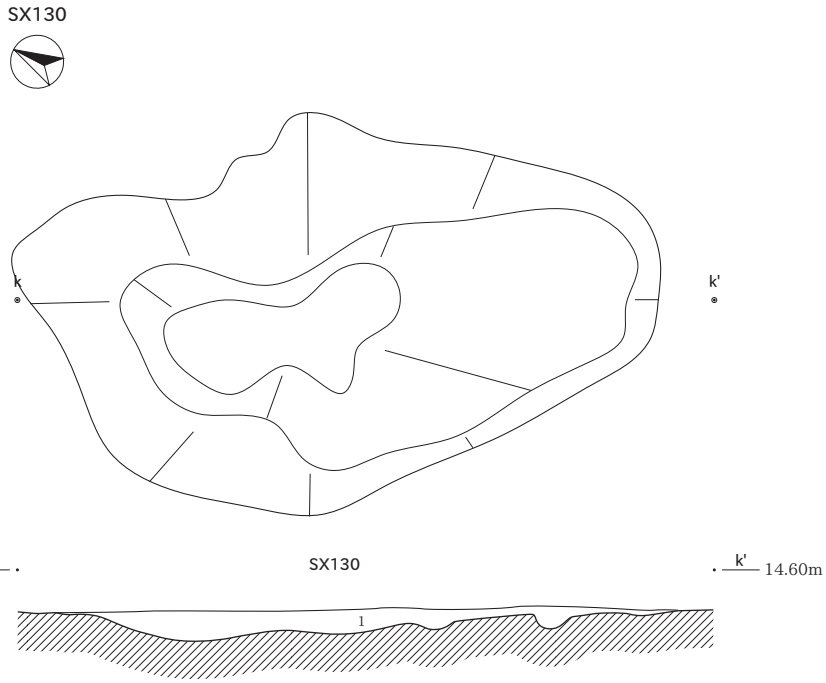
SK111
1 明黄褐色シルト　1～3㎜大の炭化物・黒褐色土・Ⅴ層をマーブル状に多量に含む。
2 黄橙色シルト　1層・炭化物を少量含む。

SK255



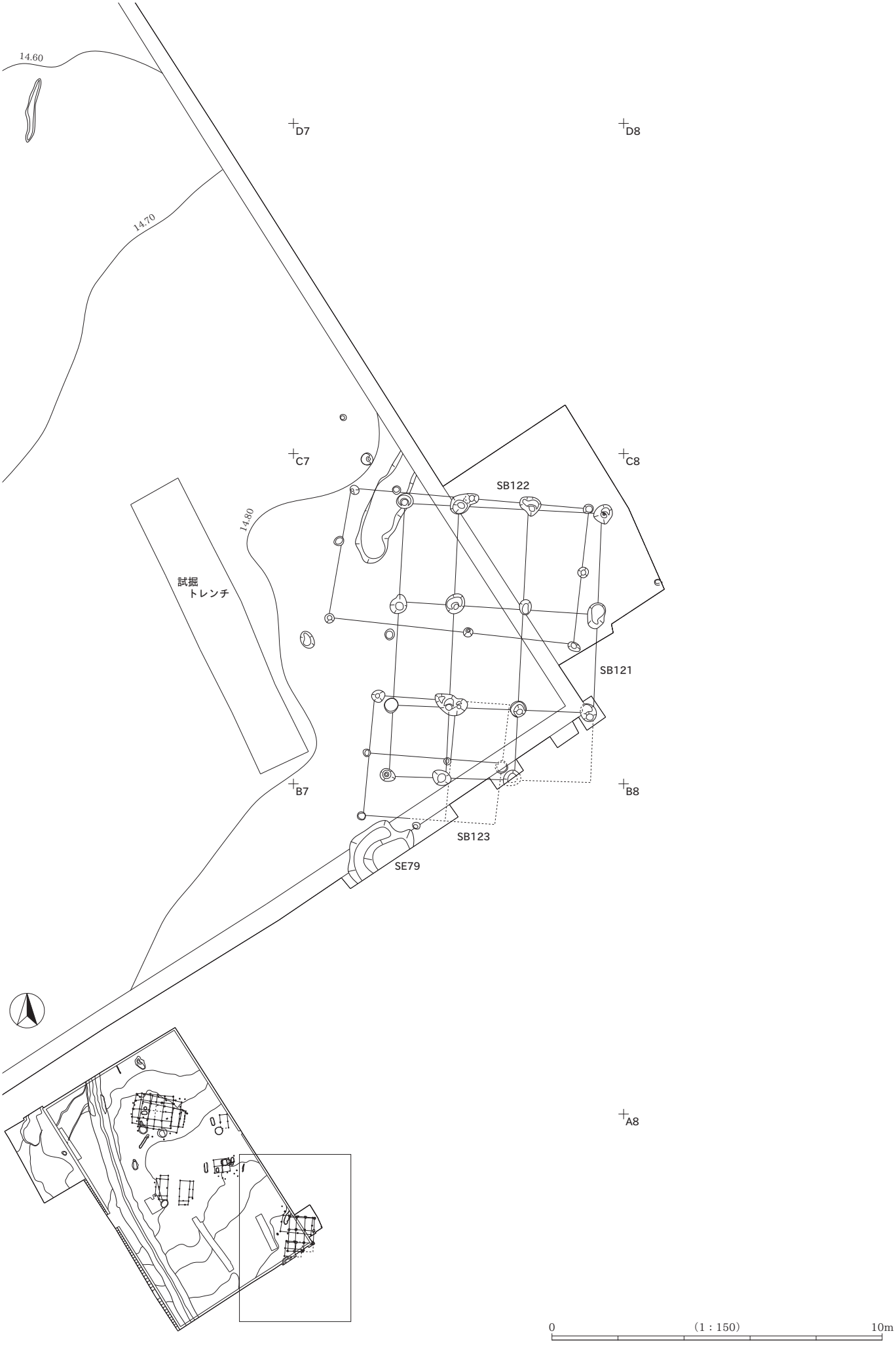
SK255
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・Ⅴ層を多量に含む。

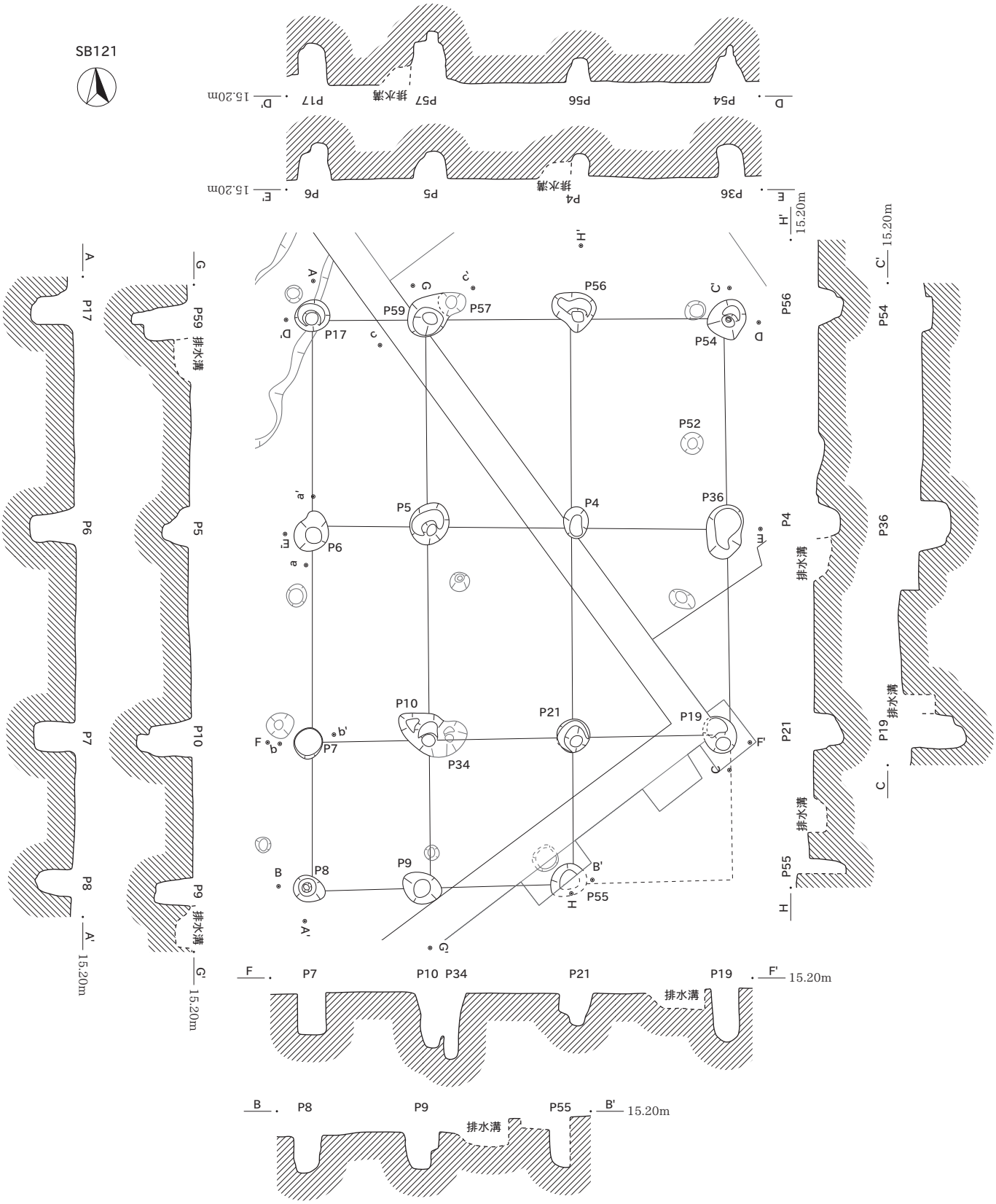
SX130

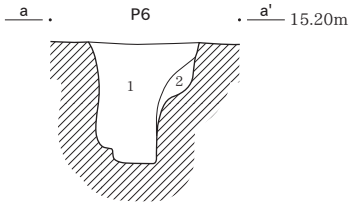


SX130
1 灰黄褐色シルト　炭化物・黒褐色土・Ⅴ層を多量に含む。

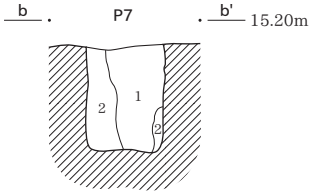
0　(1：40)　2m


14.60
14.70
14.80
D7
D8
C7
C8
B7
B8
A8
SB122
SB121
SB123
SE79
試掘
トレンチ
0
(1：150)
10m

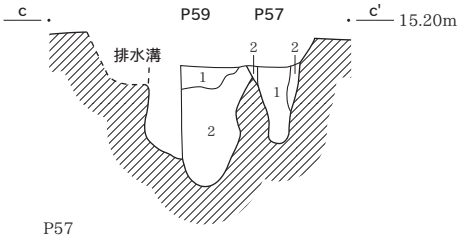




P6
1 黒褐色粘シルト　炭化物を多量・V層を中量含む。
　　底に柱の当たりあり。
2 黄褐色粘シルト　1層を少量含む。



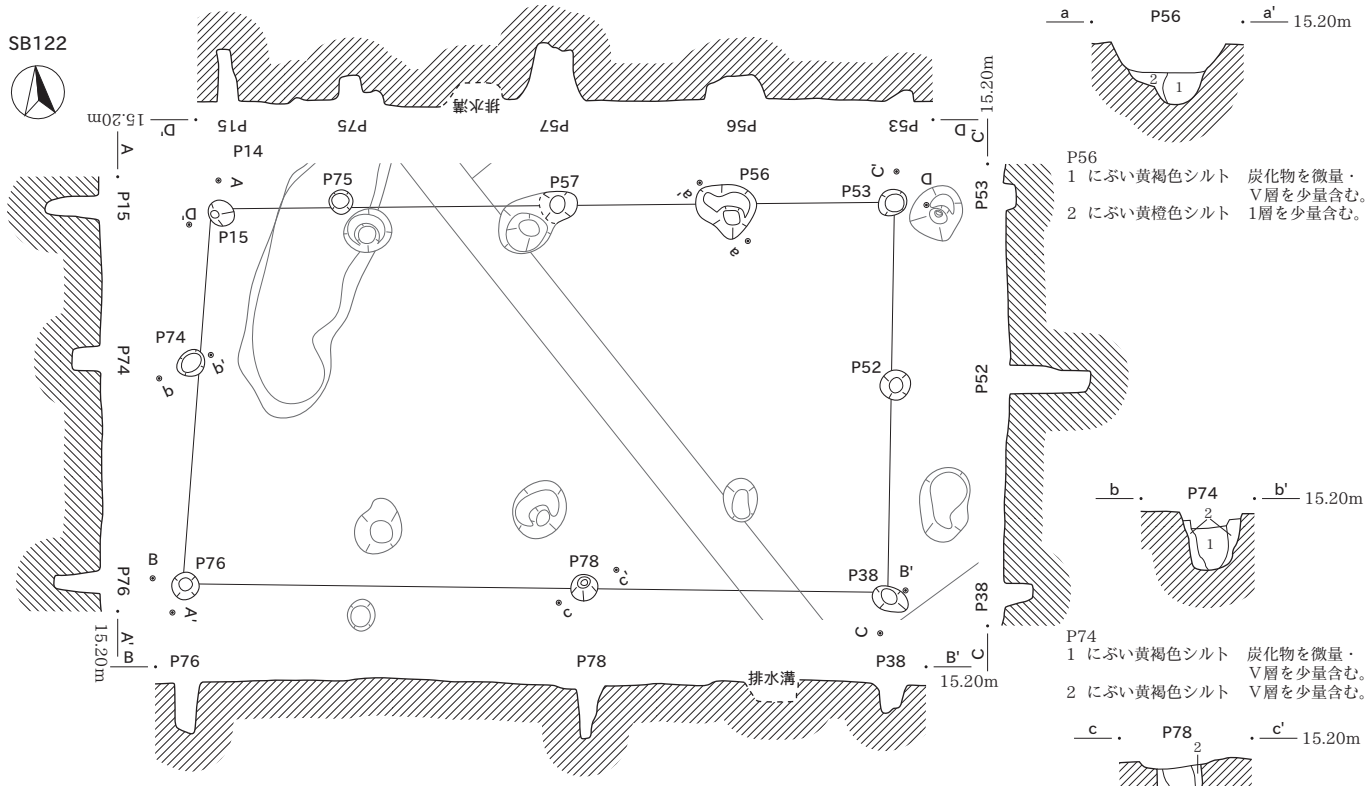
P7
1 黒褐色シルト　炭化物を多量に含む。底に柱の
　　当たりあり。
2 黄褐色シルト　炭化物・1層を少量含む。



P57
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・V層を少量含む。
2 にぶい黄橙色シルト　炭化物を微量・V層を少量含む。

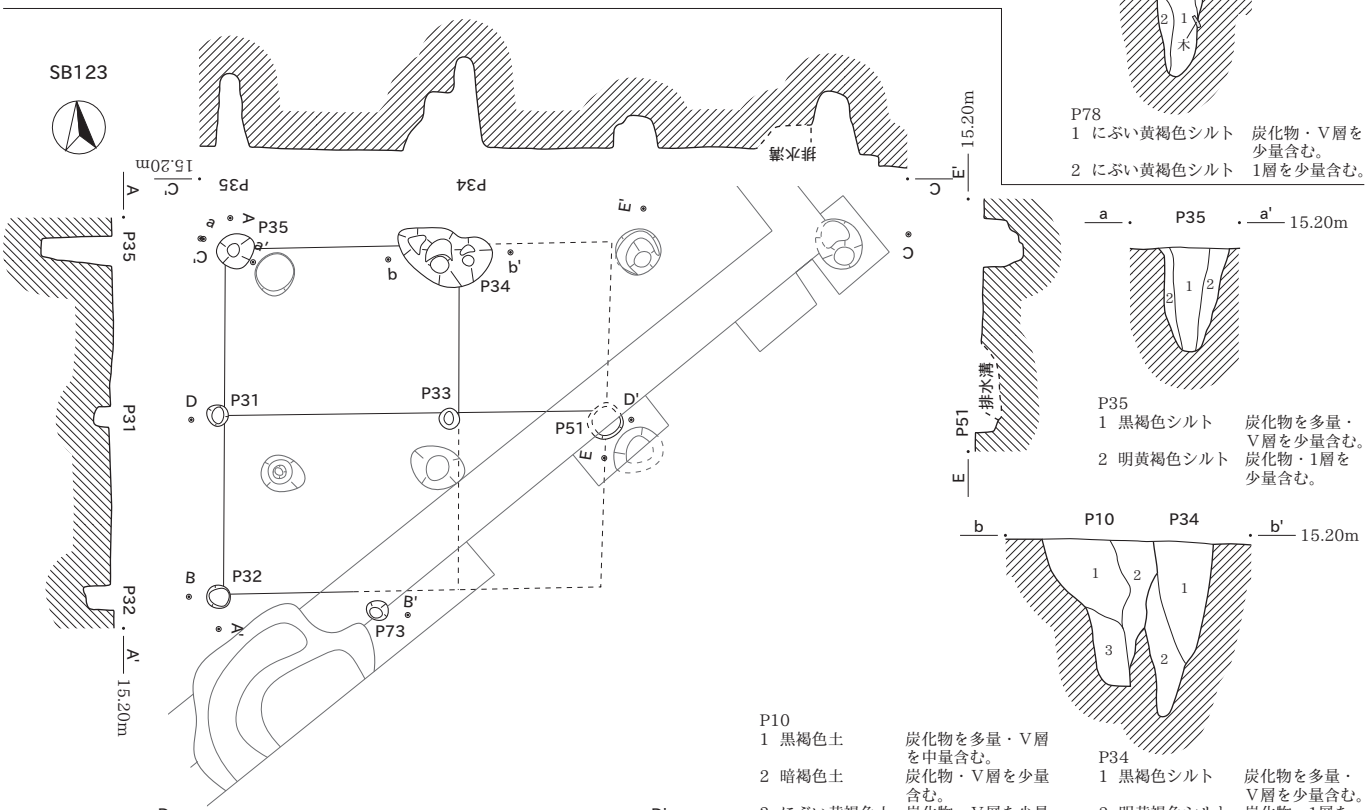
P59
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。
2 褐色シルト　炭化物を少量・1層をまばらに含む。

0　断面図（1：40）　2m　0　平面図・エレベーション図（1：80）　4m



P56
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を微量・V層を少量含む。
2 にぶい黄橙色シルト　1層を少量含む。

P74
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物を微量・V層を少量含む。
2 にぶい黄褐色シルト　V層を少量含む。

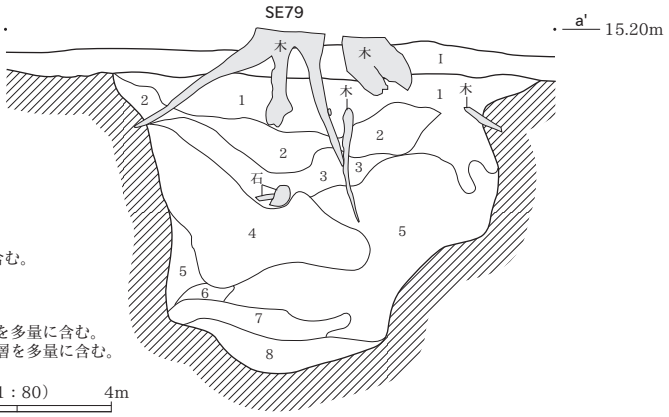


P78
1 にぶい黄褐色シルト　炭化物・V層を少量含む。
2 にぶい黄褐色シルト　1層を少量含む。

P35
1 黒褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。
2 明黄褐色シルト　炭化物・1層を少量含む。

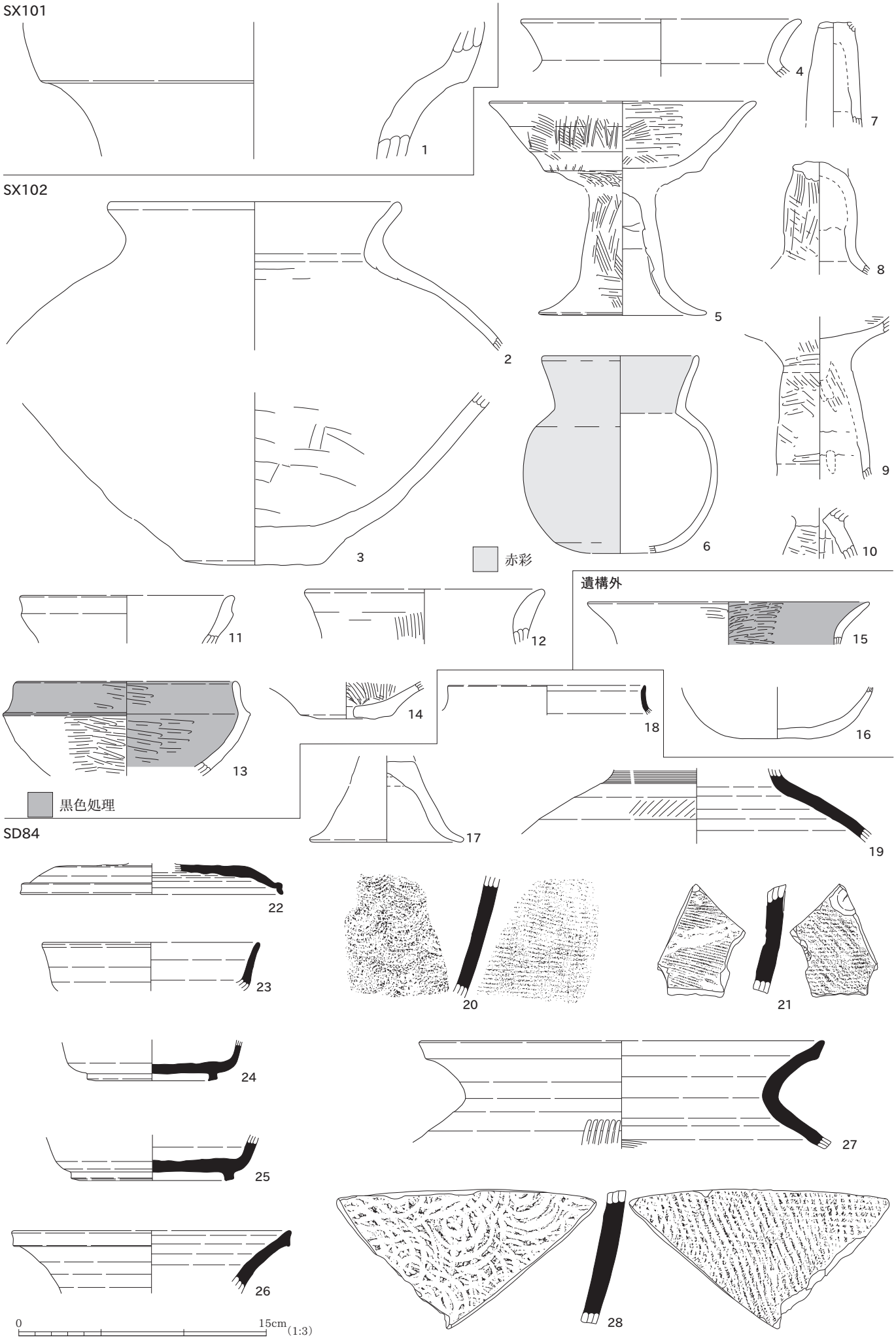
P10
1 黒褐色土　炭化物を多量・V層を中量含む。
2 暗褐色土　炭化物・V層を少量含む。
3 にぶい黄褐色土　炭化物・V層を少量含む。

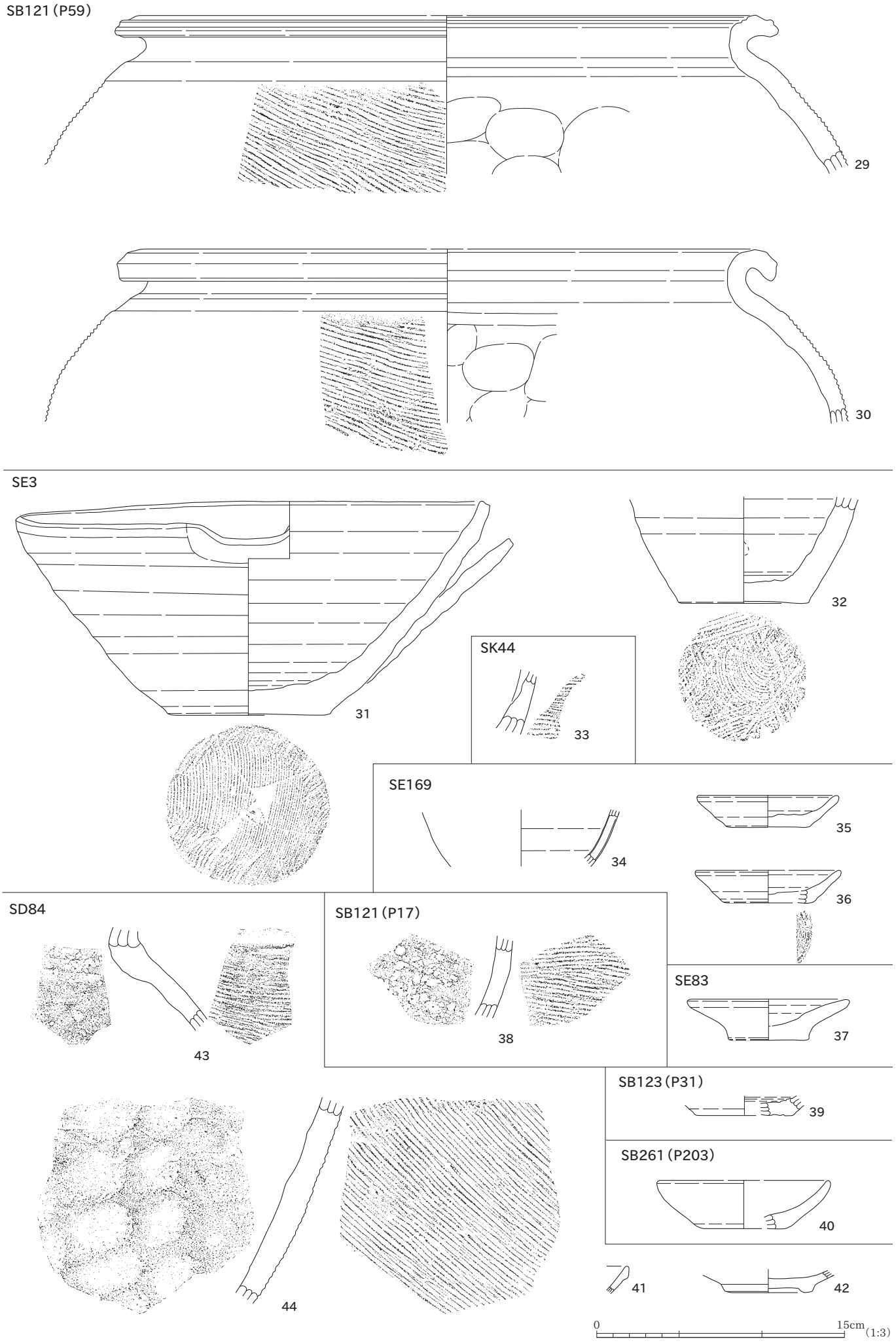
P34
1 黒褐色シルト　炭化物を多量・V層を少量含む。
2 明黄褐色シルト　炭化物・1層を少量含む。

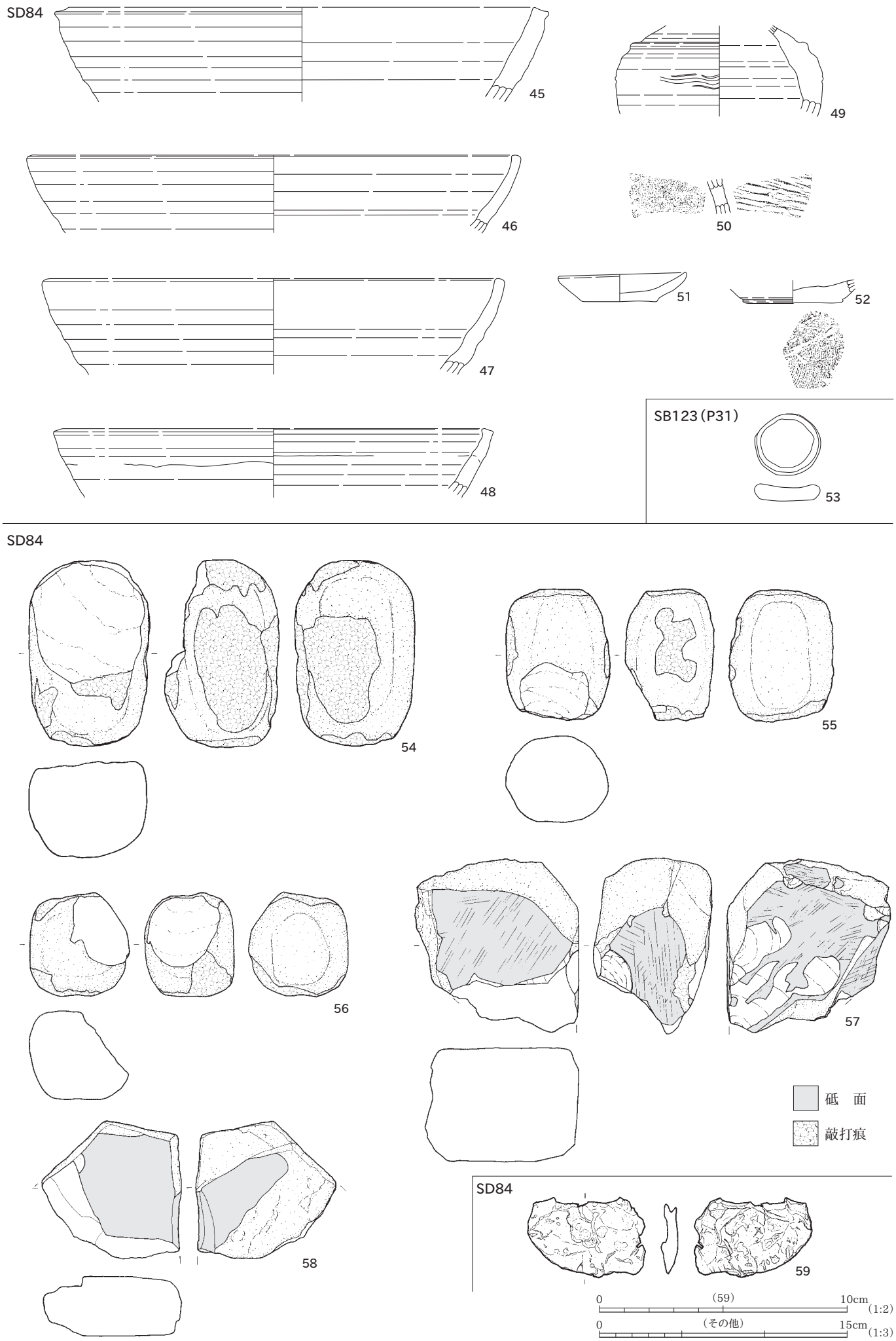


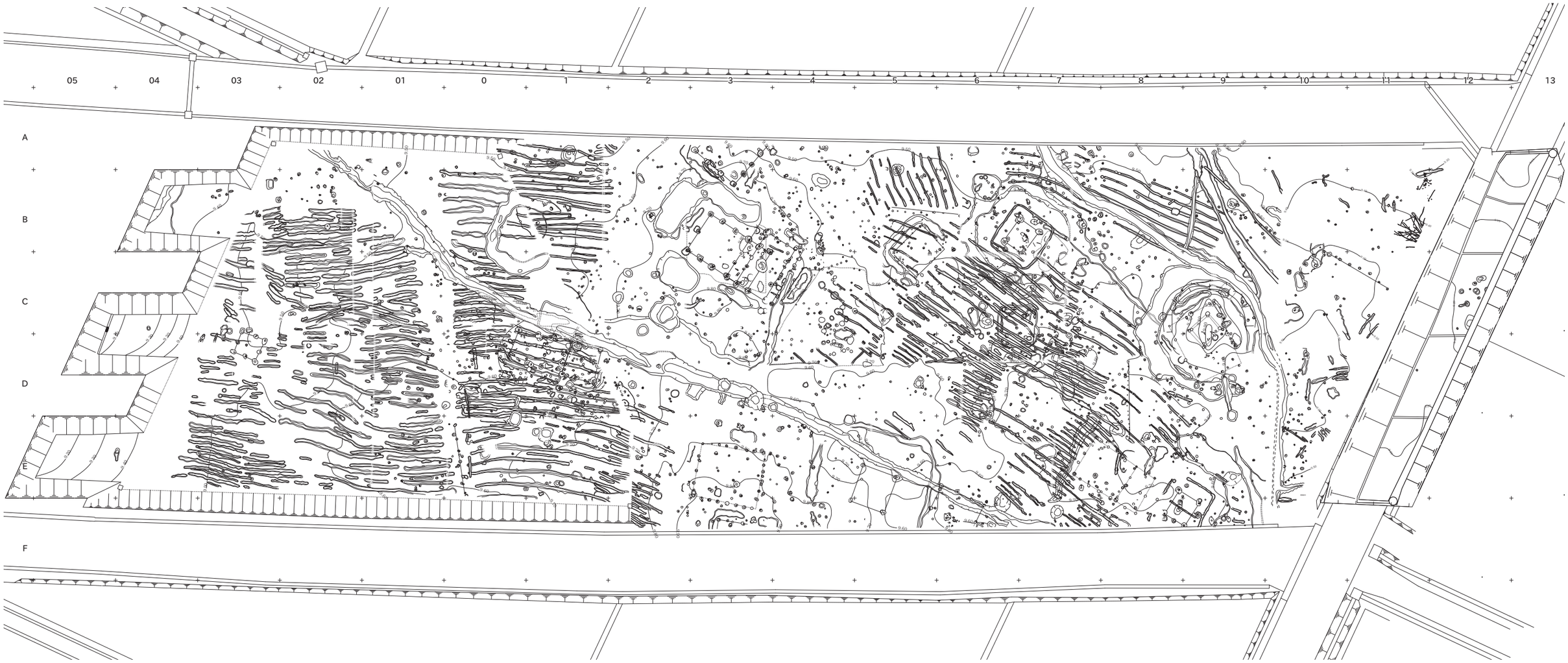
SE79
1 黒褐色シルト　炭化物・Ⅰ層を粒状に多量に含む。
2 灰黄褐色シルト　炭化物・V層を粒状に多量に含む。
3 にぶい黄褐色シルト　炭化物を少量・2層・V層をブロック状に多量に含む。
4 暗褐色シルト　炭化物・V層をブロック状に多量に含む。
5 明黄褐色シルト　崩落土と思われる。
6 にぶい黄橙色シルト　崩落土とマーブル状に混合。
7 黒色粘土　ラミナ状に堆積　V層・灰白色粘土・黒褐色粘土を多量に含む。
8 黒色粘土　ラミナ状に堆積　灰白色・黒褐色粘土を少量・V層を多量に含む。

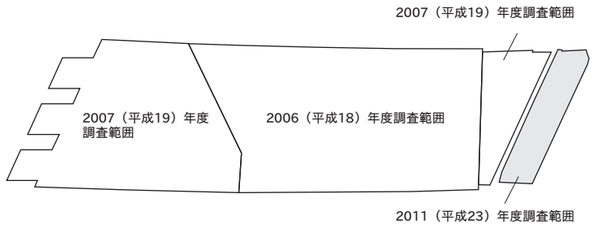
0　断面図（1：40）　2m　0　平面図・エレベーション図（1：80）　4m


SX101
SX102
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
赤彩
遺構外
11
12
13
14
15
16
17
18
19
黒色処理
SD84
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
15cm
(1:3)

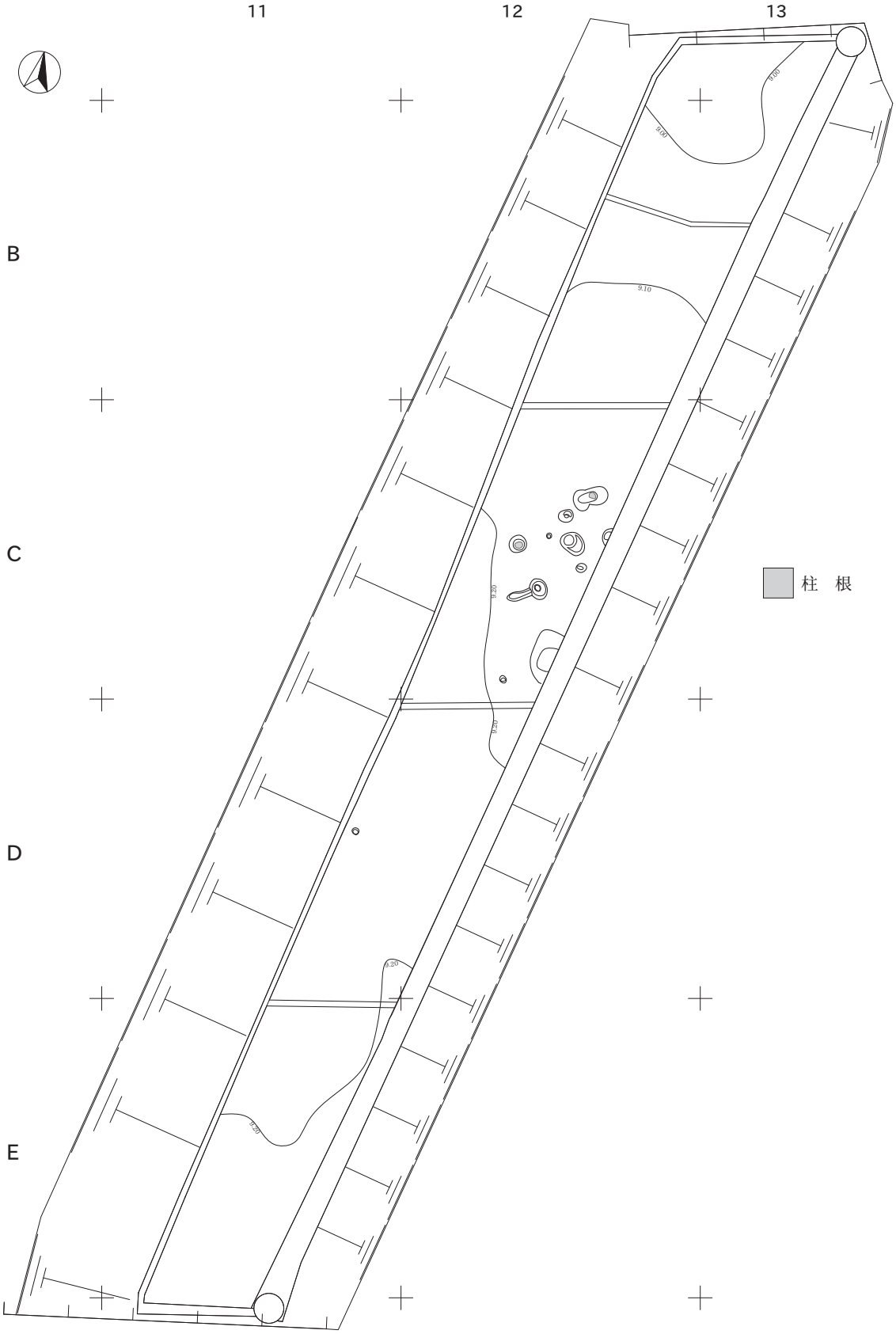

SB121（P59）
29
30
SE3
31
32
SK44
33
SE169
34
35
36
SD84
43
SB121（P17）
38
SE83
37
SB123（P31）
39
SB261（P203）
40
44
41
42
0
15cm
(1:3)


SD84
45
46
47
48
49
50
51
52
SB123（P31）
53
SD84
54
55
56
57
58
砥　面
敲打痕
SD84
59
0
（59）
10cm
(1:2)
0
（その他）
15cm
(1:3)


05
04
03
02
01
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
A
B
C
D
E
F


2007（平成19）年度調査範囲
2007（平成19）年度
調査範囲
2006（平成18）年度調査範囲
2011（平成23）年度調査範囲

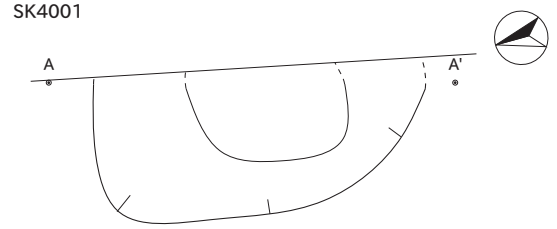
0　（1：500）　25m

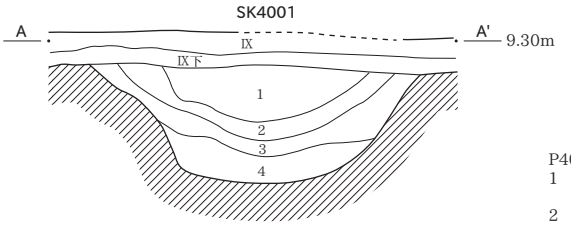


0　（1：200）　10m

延命寺遺跡Ⅱ　遺構分割図（Ⅹ層）

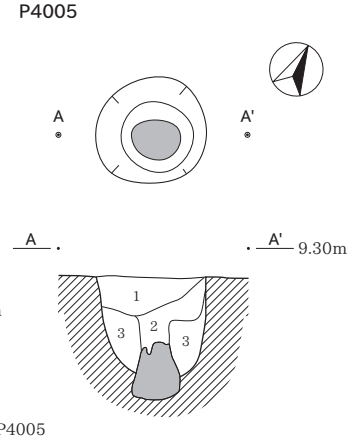
SK4001





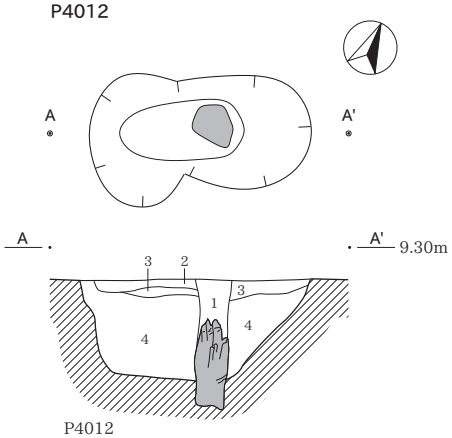
SK4001
1　暗灰色粘土　炭化物多く含む。
2　暗灰色粘土　炭化物多量含む。
3　灰色粘土
4　暗灰色粘土　炭化物多く含む。

P4005



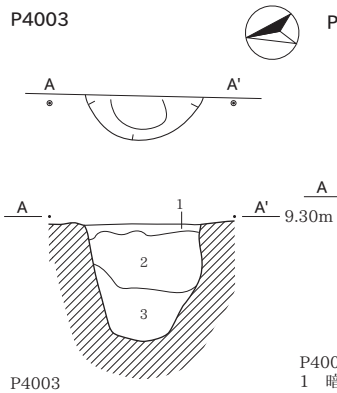
P4005
1　暗灰色粘土　炭化物・灰白色石灰質粒子少量含む。灰色粘土ブロック多量含む。
2　暗灰色粘土　灰色粘土ブロック少量含む。
3　灰色粘土　暗灰色粘土ブロック少量含む。

P4012



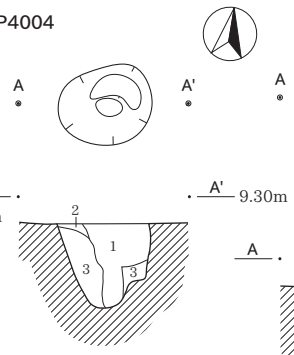
P4012
1　暗灰色粘土　灰色粘土小ブロック少量含む。
2　暗灰色粘土　灰色粘土ブロック多く含む。
3　暗灰色粘土　灰色粘土ブロック多量含む。
4　灰色粘土　暗灰色粘土ブロック少量含む。

P4003



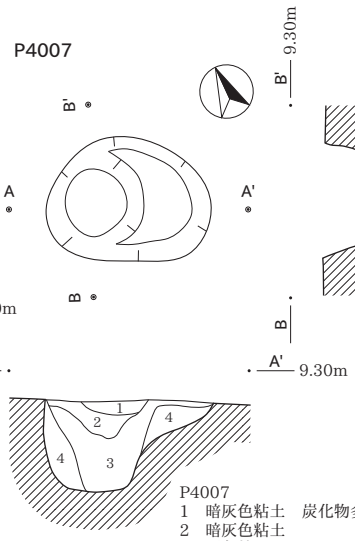
P4003
1　暗灰色粘土
2　暗灰色粘土　灰色粘土ブロック多量含む。
3　暗灰色粘土　灰色粘土ブロック多く含む。

P4004



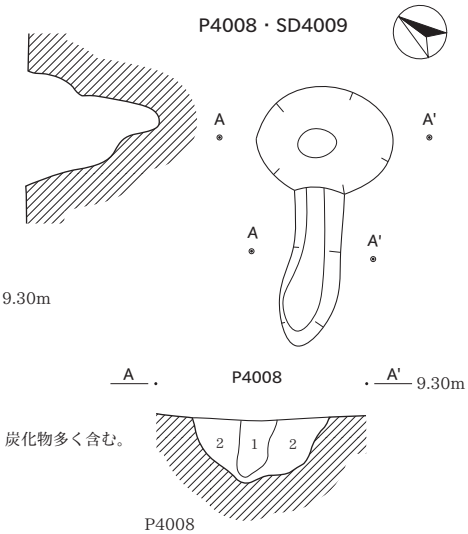
P4004
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。灰白色石灰質粒子少量含む。
2　暗灰色粘土　炭化物少量含む。灰色粘土小ブロック多く含む。
3　灰色粘土　暗灰色粘土ブロック少量含む。

P4007



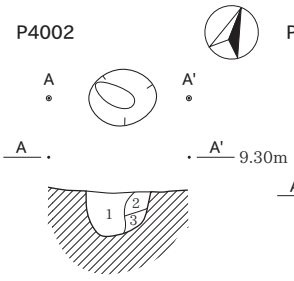
P4007
1　暗灰色粘土　炭化物多く含む。
2　暗灰色粘土
3　灰色粘土
4　灰色粘土

P4008・SD4009



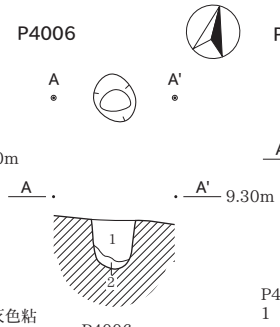
P4008
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。
2　暗灰色粘土　灰色粘土ブロック多量含む。

P4002



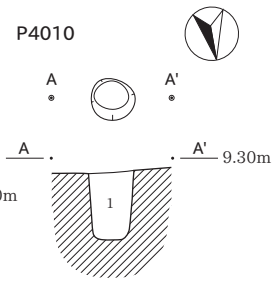
P4002
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。灰色粘土小ブロック多く含む。
2　暗灰色粘土　炭化物少量含む。灰色粘土ブロック多量含む。
3　灰色粘土

P4006



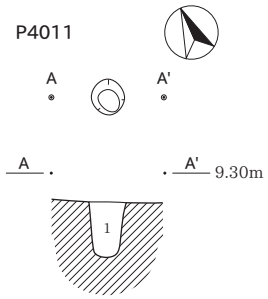
P4006
1　暗灰色粘土
2　灰色粘土

P4010



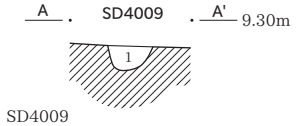
P4010
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。

P4011



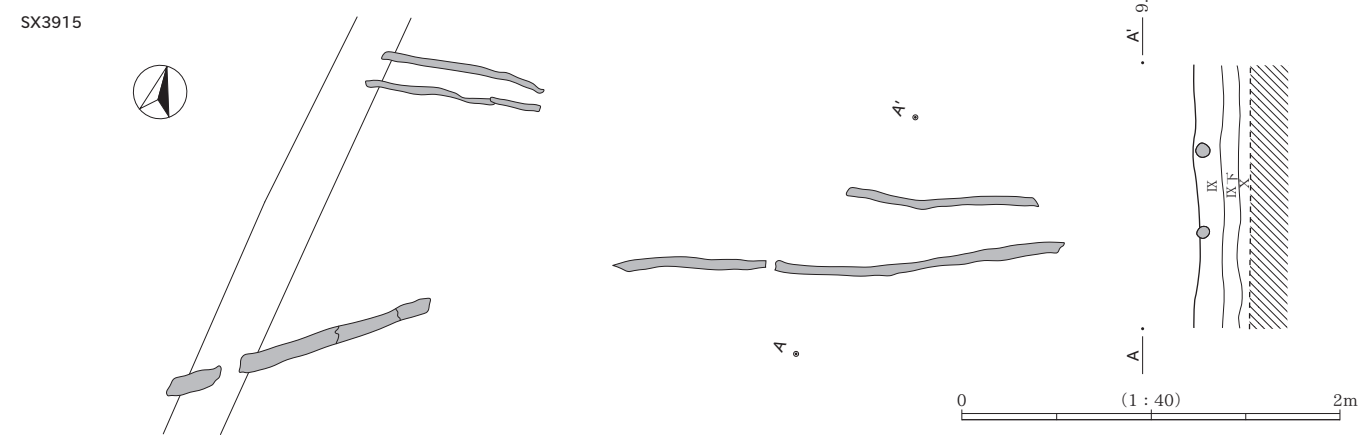
P4011
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。

SD4009

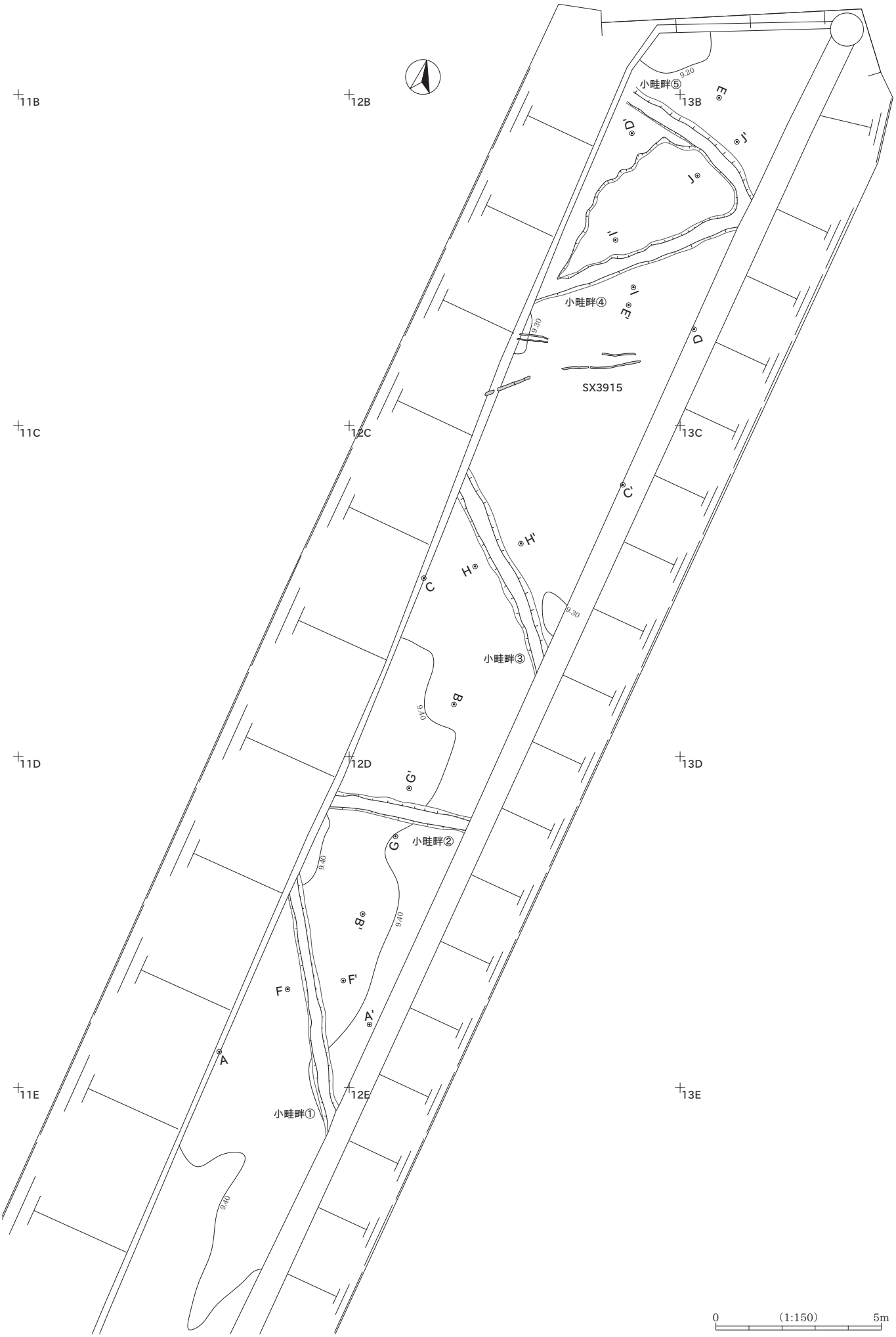


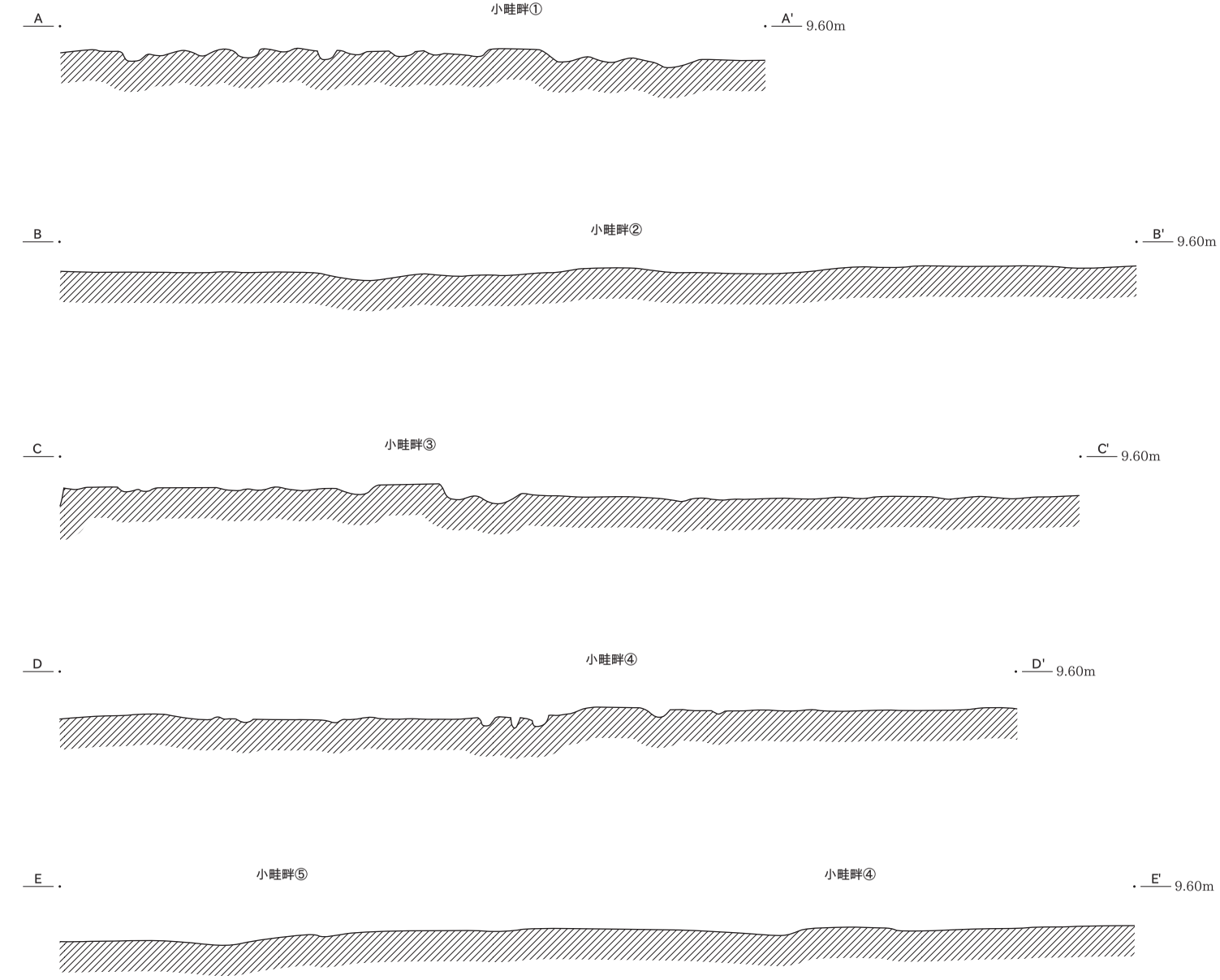
SD4009
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。灰色粘土ブロック多く含む。

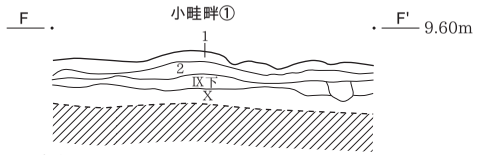
SX3915



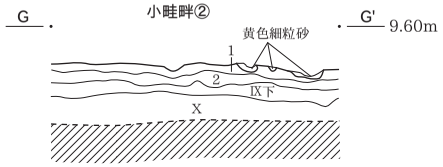
延命寺遺跡　2007・2011（平成 19・23）年度　遺構全体図（Ⅸ層上面）


11B
12B
13B
11C
12C
13C
11D
12D
13D
11E
12E
13E
小畦畔⑤
小畦畔④
小畦畔③
小畦畔②
小畦畔①
SX3915
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
J
J'
9.20
9.30
9.40
0
(1:150)
5m

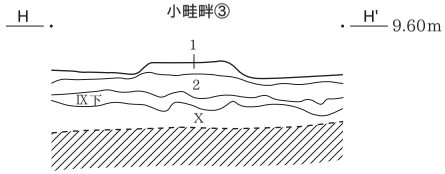




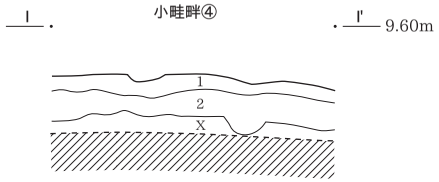
小畦畔1
1　黒色土
2　暗灰色粘土　灰色粘土小ブロック多く含む。



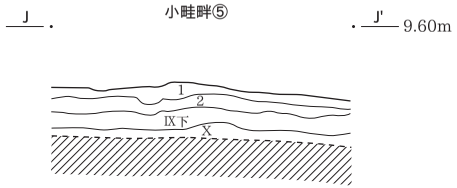
小畦畔2
1　黒色土　　灰色シルト、黄色細粒砂を少量ふくむ。
2　暗灰色粘土　灰色粘土小ブロック多く含む。



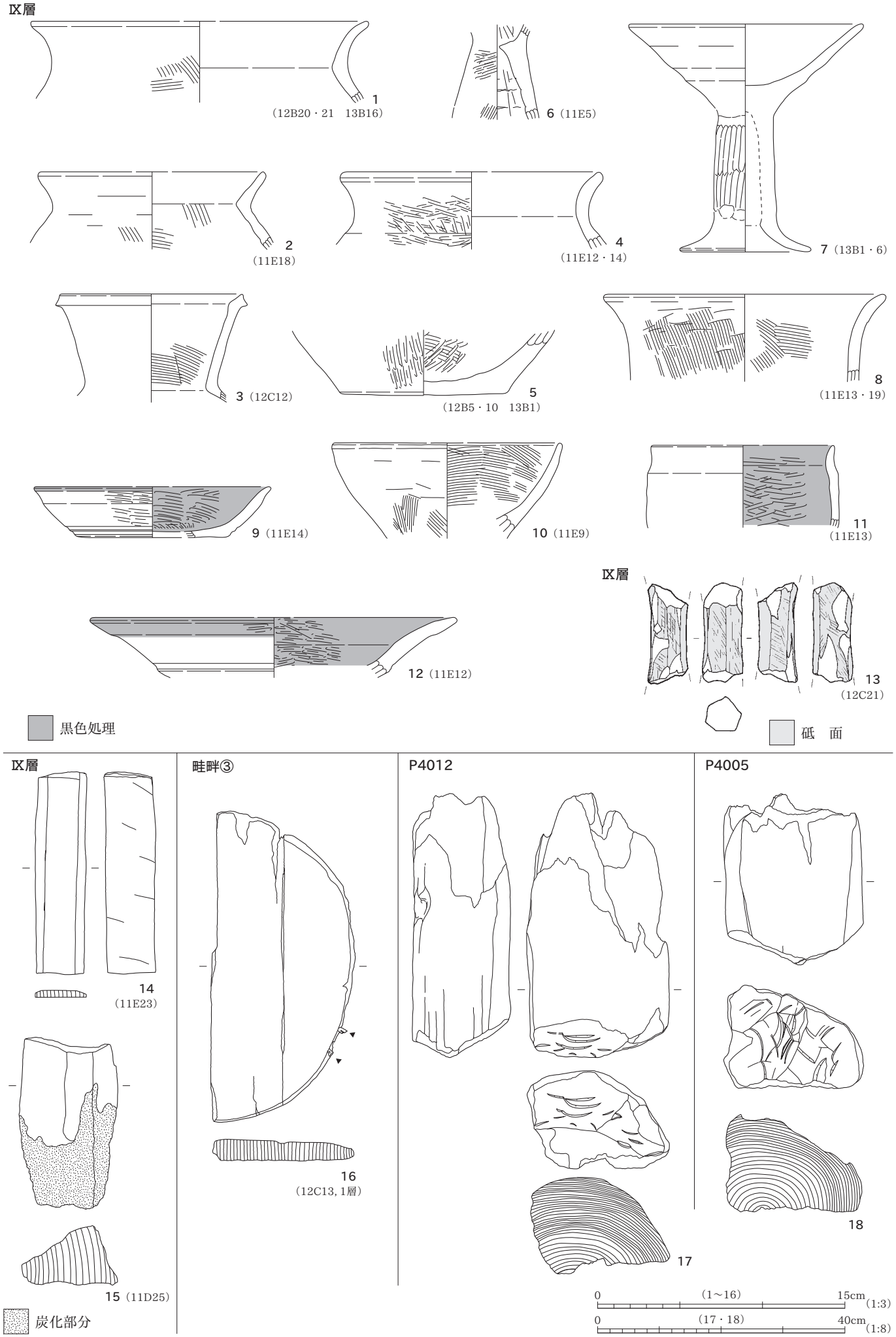
小畦畔3
1　灰黄褐色土　植物遺体多く含む。黄色細粒砂、
　　上部に多く含む。
2　暗灰色粘土　灰色粘土、小ブロック多く含む。



小畦畔4
1　黒色土
2　暗灰色粘土　灰色粘土小ブロック多く含む。



小畦畔5
1　黒色土　　炭化物を少量含む。
　　黄色細粒砂筋状に少量含む。
2　暗灰色粘土　灰色粘土小ブロック多く含む。


Ⅸ層
1
（12B20・21　13B16）
6（11E5）
7（13B1・6）
2
（11E18）
4
（11E12・14）
3（12C12）
5
（12B5・10　13B1）
8
（11E13・19）
9（11E14）
10（11E9）
11
（11E13）
12（11E12）
Ⅸ層
13
（12C21）
黒色処理
砥　面
Ⅸ層
14
（11E23）
15（11D25）
炭化部分
畦畔③
16
（12C13, 1層）
P4012
17
P4005
18
0　（1～16）　15cm　(1:3)
0　（17・18）　40cm　(1:8)

遺跡の位置と周辺の景観（米極東空軍　昭和 21 年 10 月 10 日撮影　空中写真）

遺跡全景（上空西から）

遺跡遠景（西から）

5G　基本層序（北西から）

3G　基本層序（南東から）

SK108　土層断面（西から）

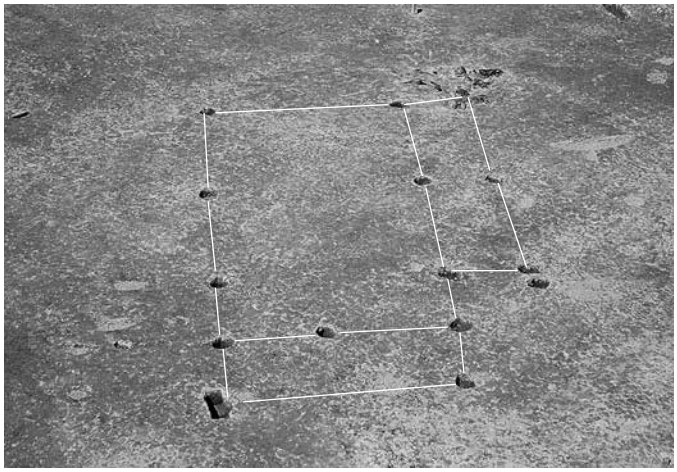
SX101　遺物出土状況（西から）

SX102　土層断面・遺物出土状況（西から）

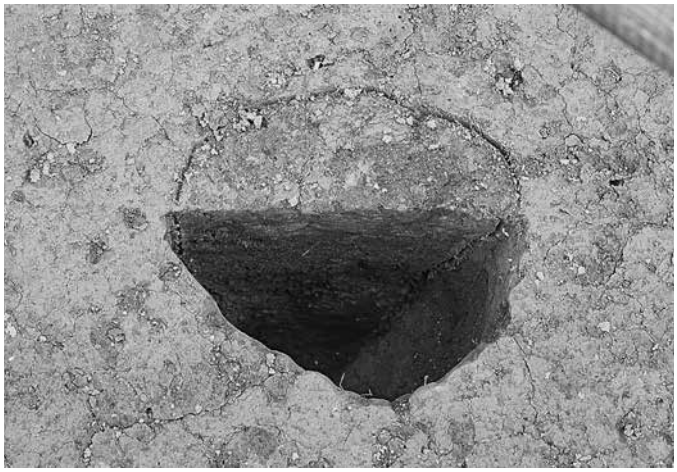
SD84（2G18・19・23）　土層断面（南から）

SD84（4A25・5A12）　土層断面（北から）

SD260　土層断面（南から）

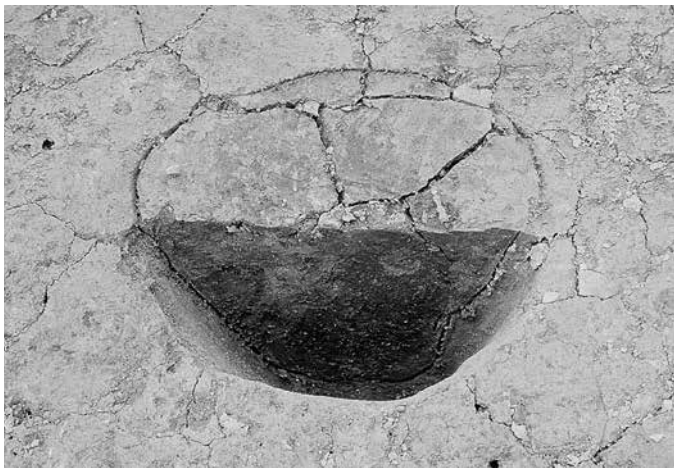


SB126　完掘（南から）

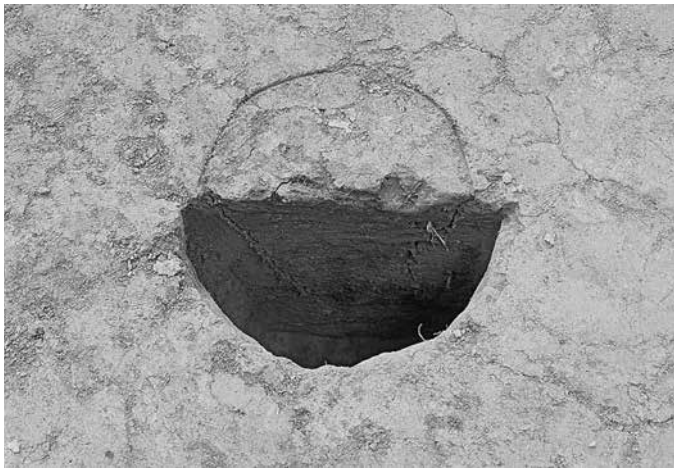


SB126-P45　土層断面（南から）

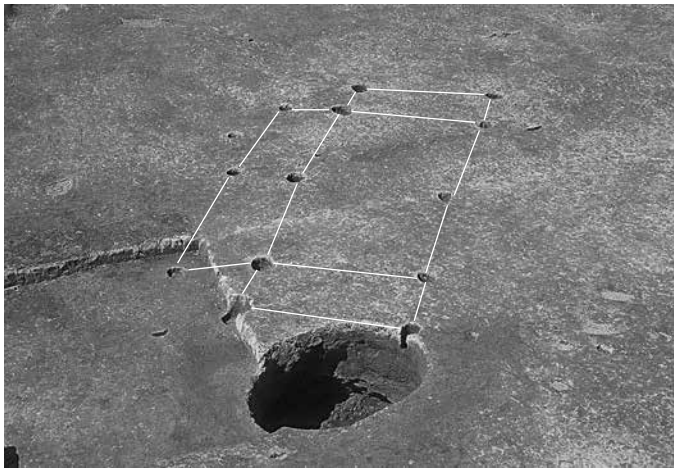
SB126-P48　土層断面（南から）



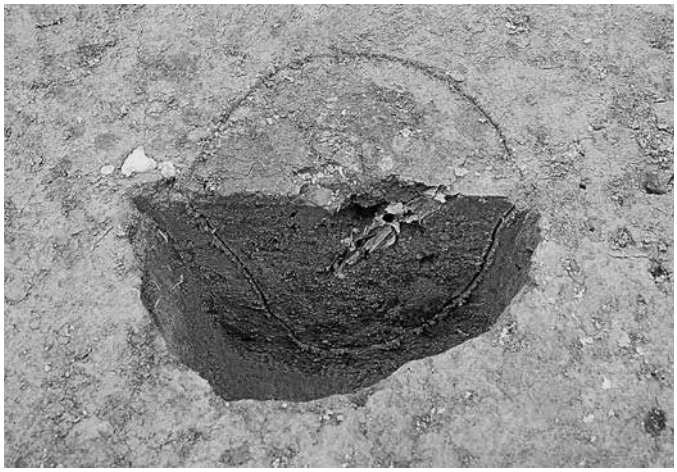
SB126-P49　土層断面（南東から）



SB126-P50　土層断面（東から）

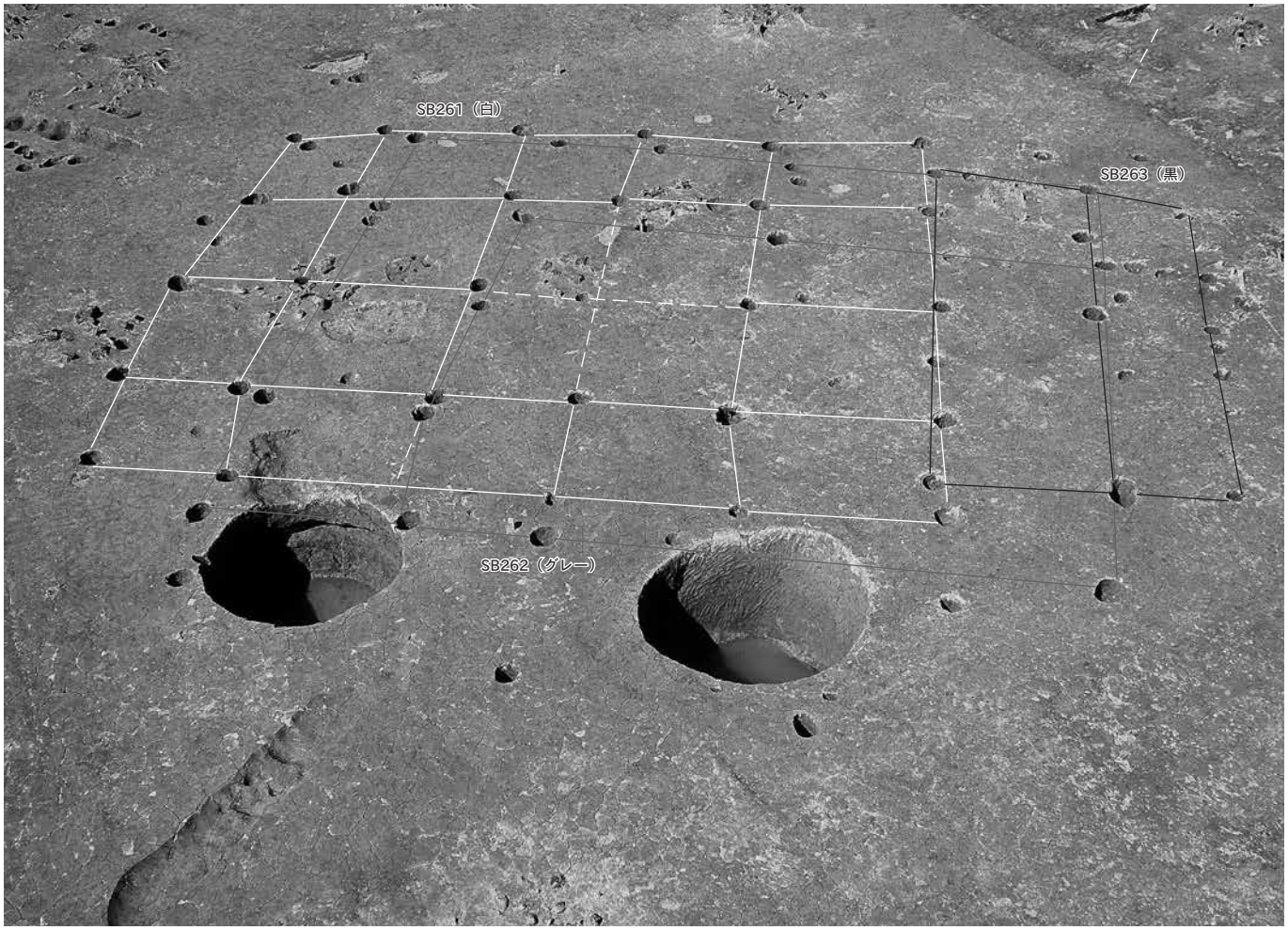


SB127　完掘（南から）



SB127-P158　土層断面（南から）

SB127-P159　土層断面（南から）

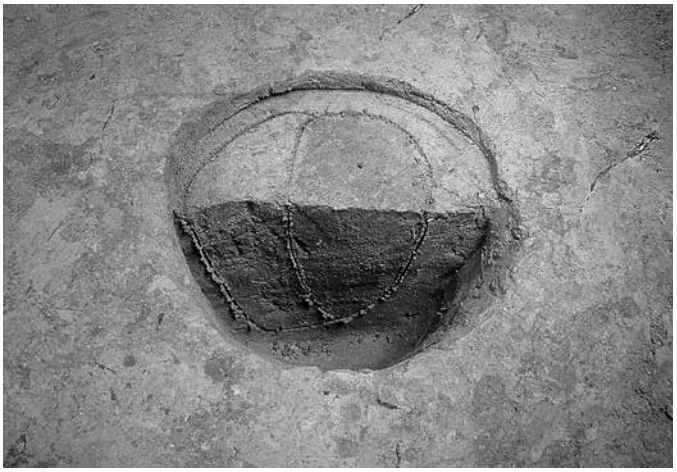


SB261・262・263　完掘（南から）

SB261-P192　土層断面（西から）

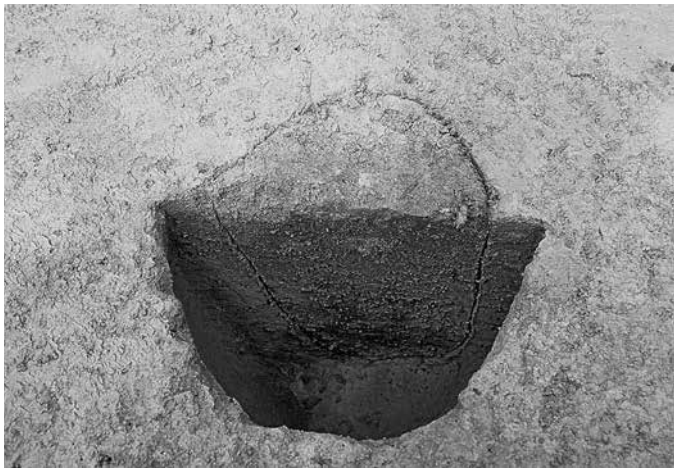
SB261-P194　土層断面（西から）

SB261-P197　土層断面（南から）



SB261-P198　土層断面（南から）

SB262-P140　土層断面（南から）

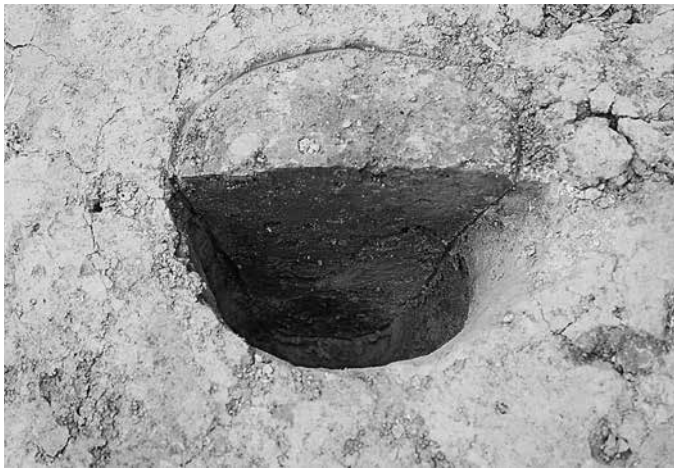


SB262-P151　土層断面（南から）

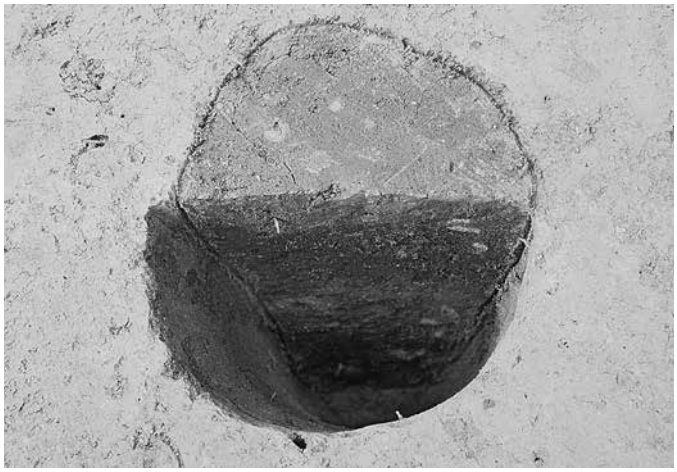
SB262-P152　土層断面（南から）

SB263-P129　土層断面（南から）

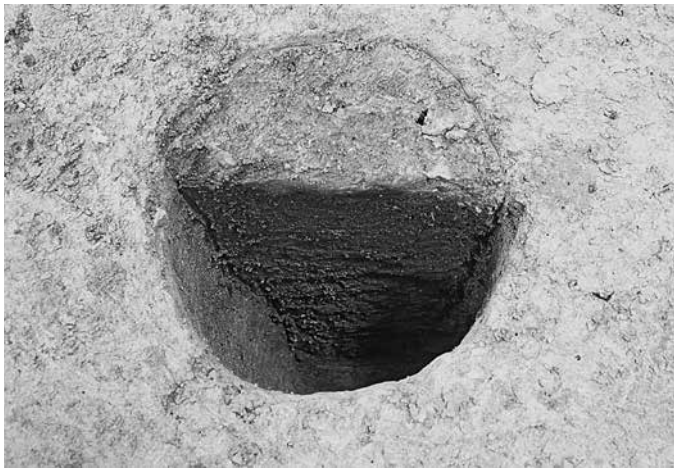
SB124　完掘（南から）



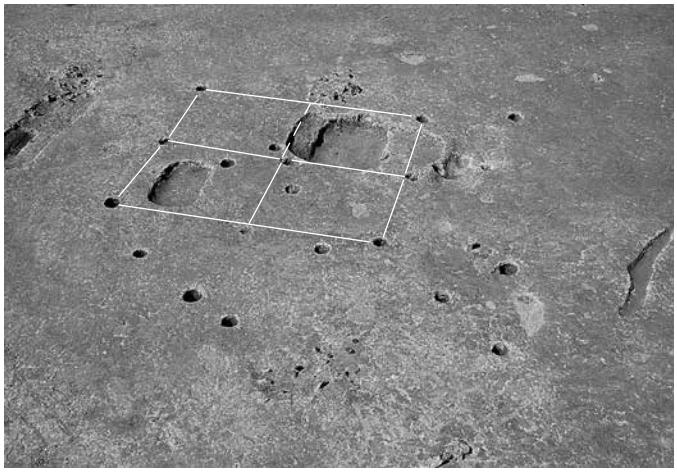
SB124-P112　土層断面（南から）



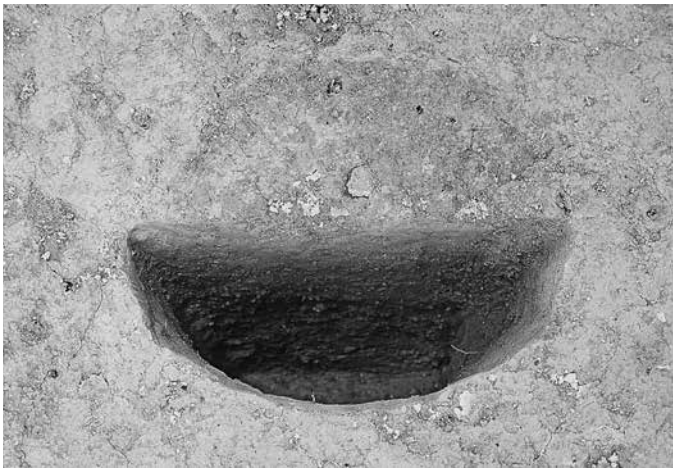
SB124-P113　土層断面（南から）



SB124-P116　土層断面（南から）

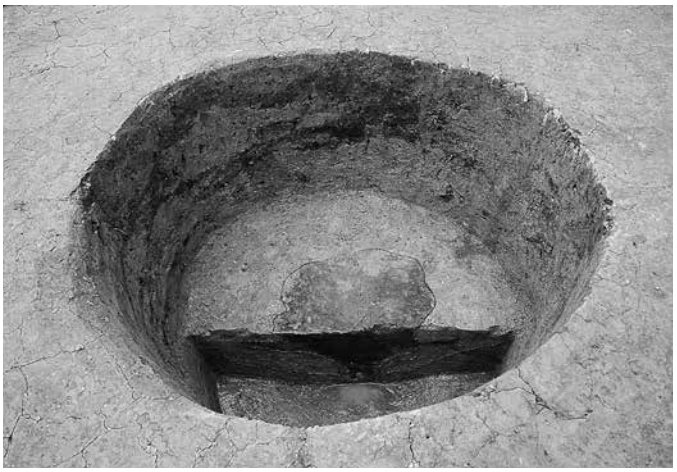


SB125　完掘（南から）



SB125-P27　土層断面（西から）

SE3　土層断面上部（南から）



SE3　土層断面下部（南から）

SE3　遺物出土状況（南から）

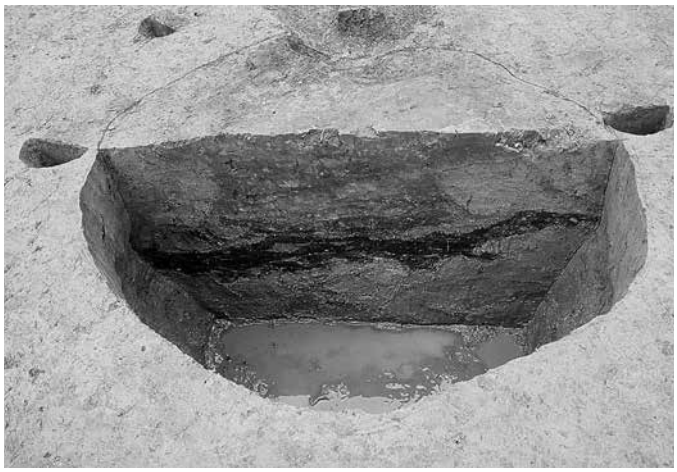
SE3　完掘（南から）

SE110　土層断面（南から）

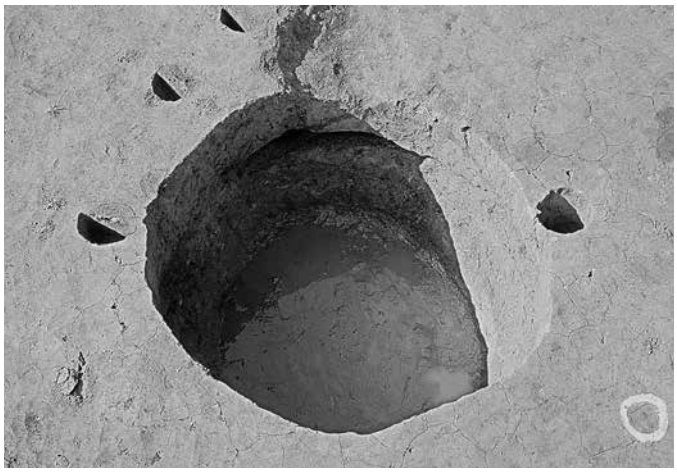
SE110　完掘（南から）

SE83　土層断面（西から）

SE83　完堀（西から）



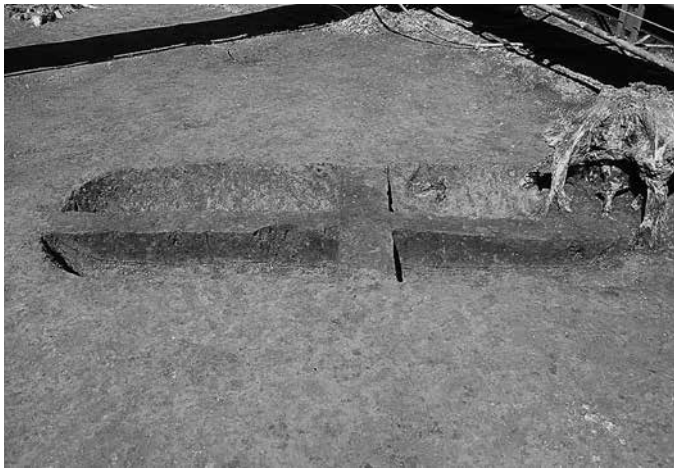
SE169　土層断面（南から）



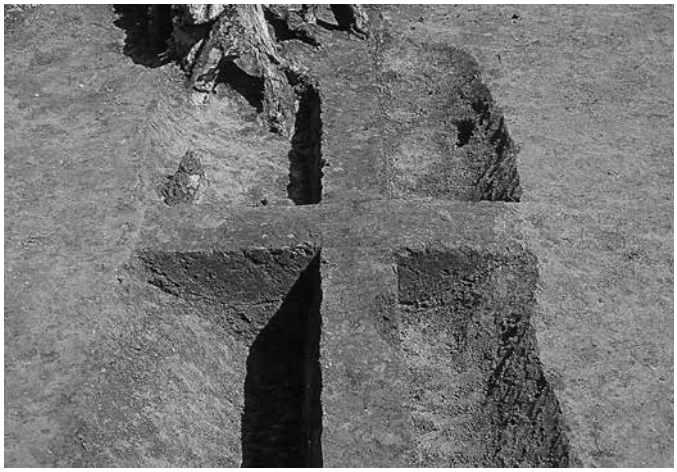
SE169　完掘（南から）

SK1・SK2　土層断面（西から）

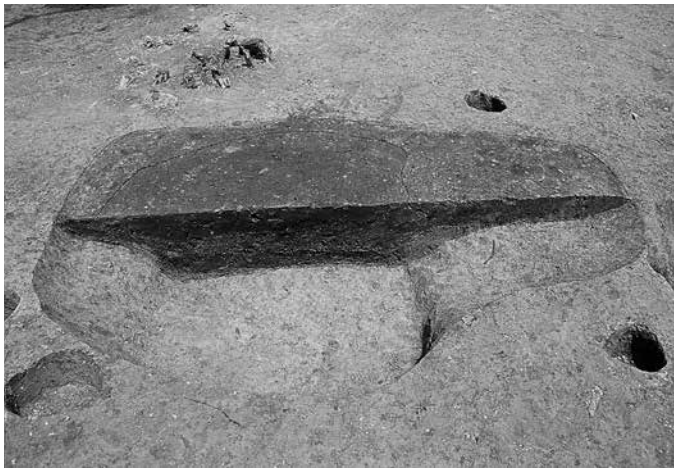
SK1・SK2　完掘（西から）



SK30　土層断面（東から）

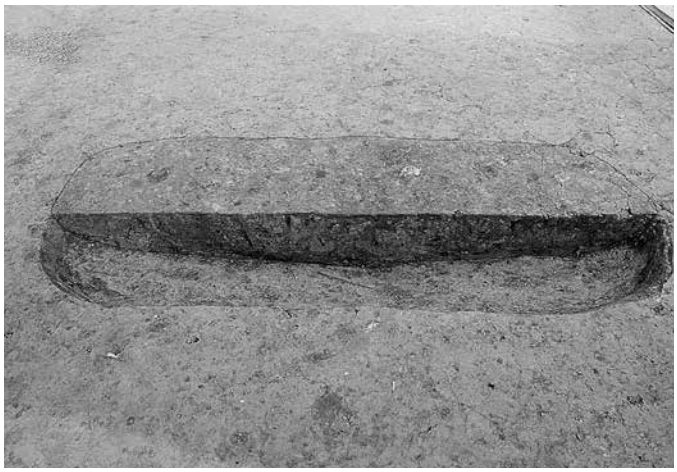


SK30　土層断面（南から）



SK44　土層断面（南から）

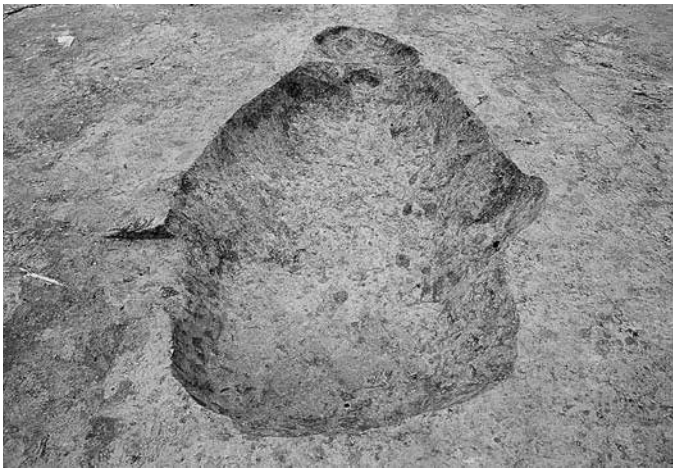
SK44　完掘（南から）



SK111　土層断面（西から）

SK111　完掘（西から）

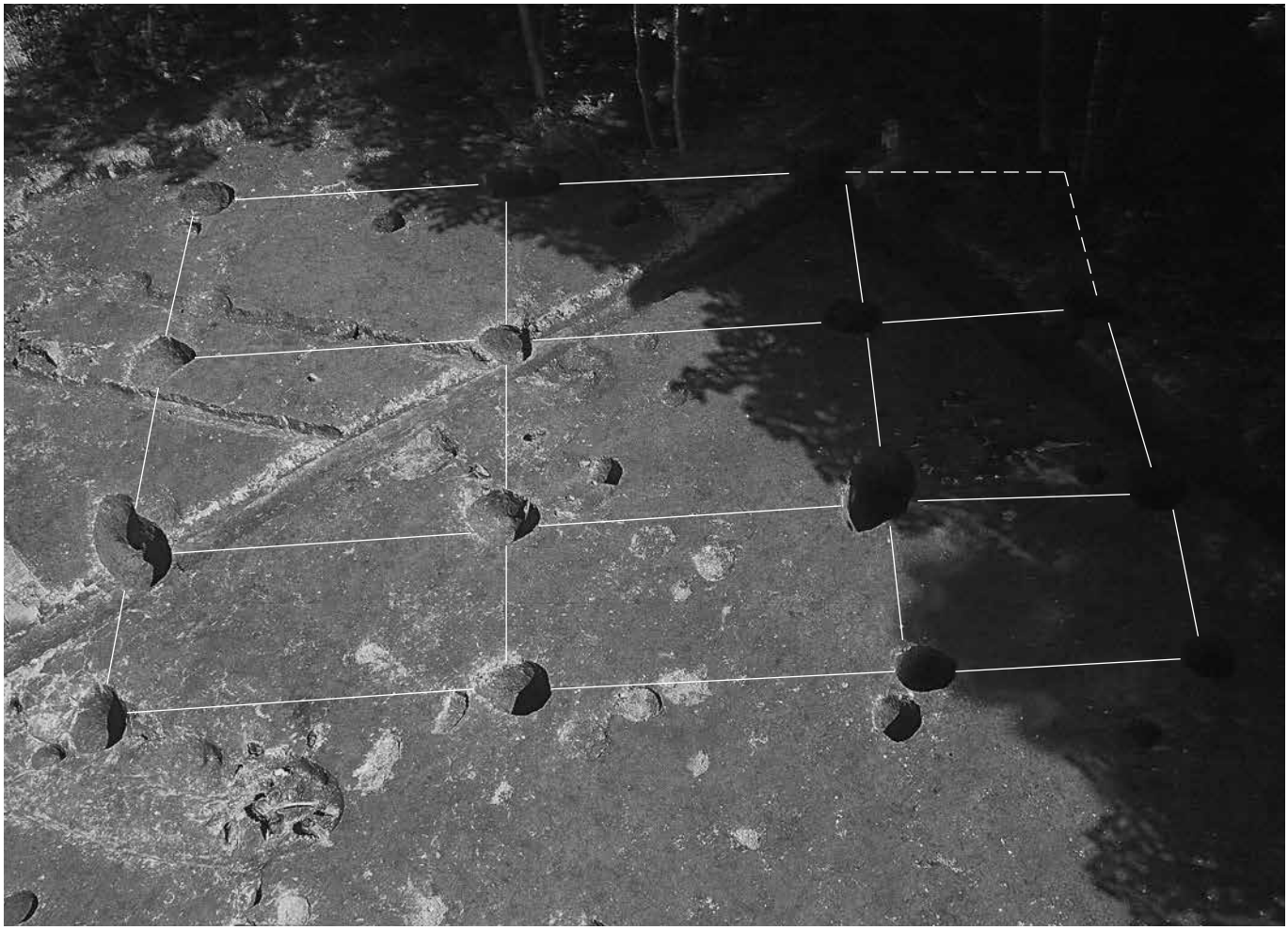
SK255　土層断面（南から）



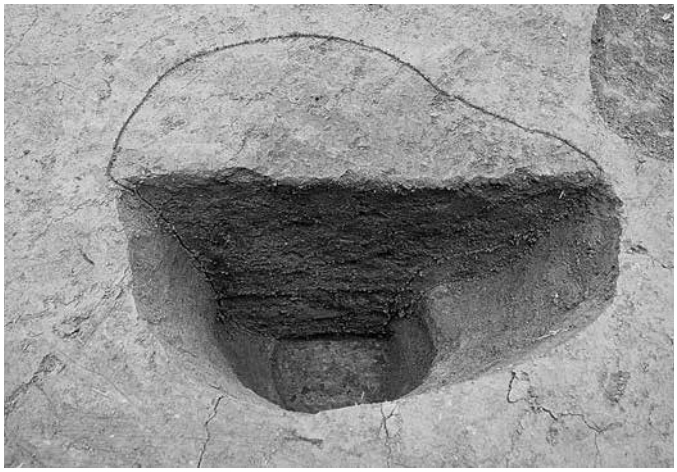
SK255　完掘（南から）

SX130　土層断面（南から）

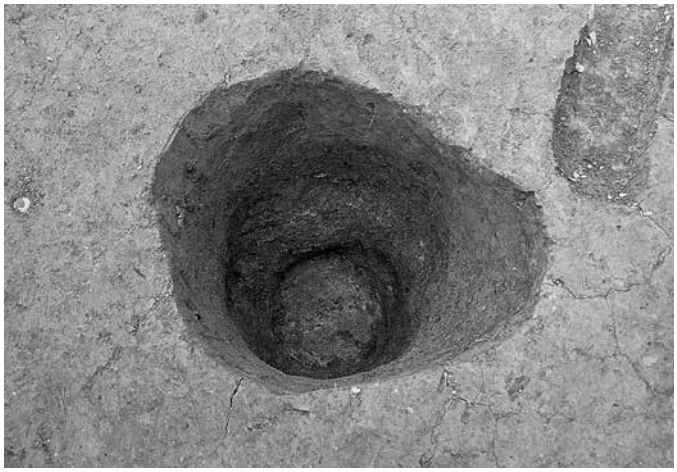
SX130　完掘（南から）



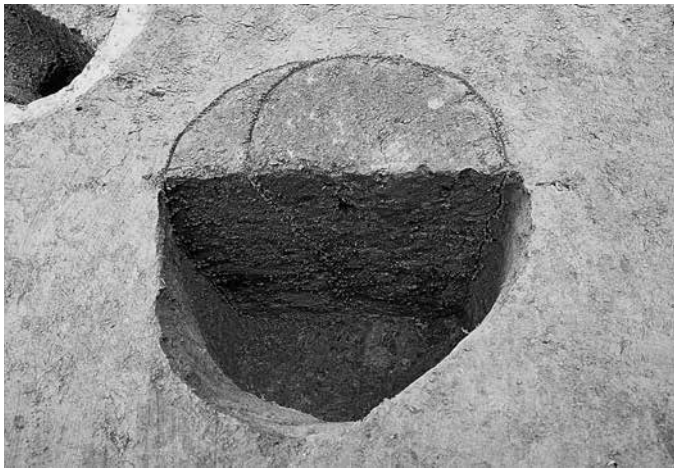
SB121　完掘（西から）



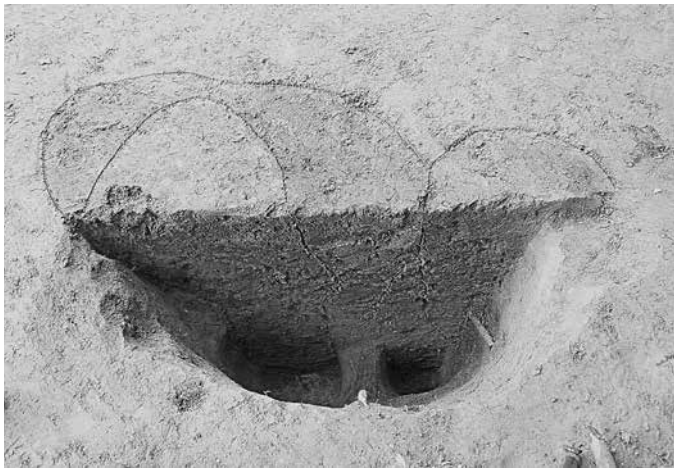
SB121-P6　土層断面（南から）



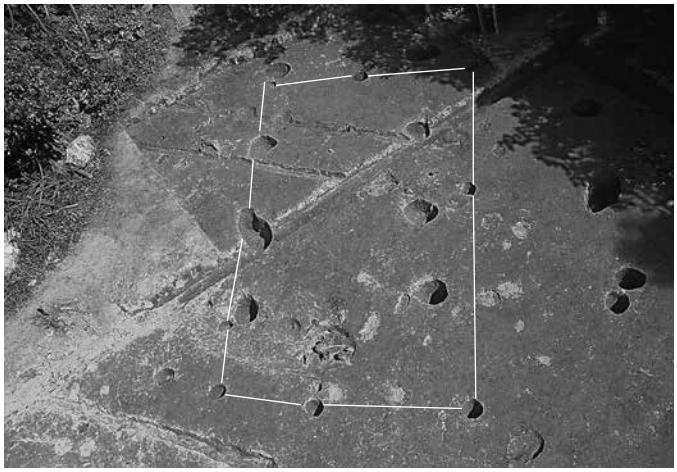
SB121-P6　完掘（南から）



SB121-P7　土層断面（南から）

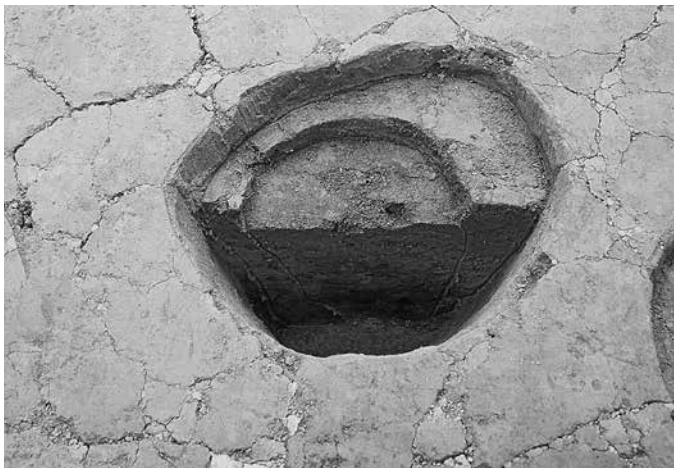


SB121-P10・SB123-P36　土層断面（南から）

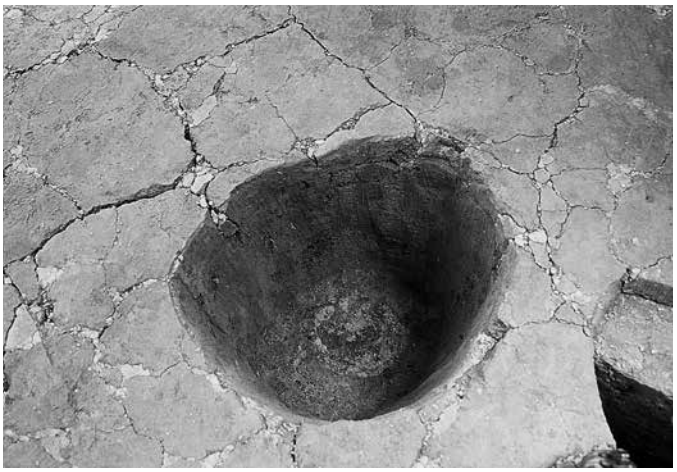


SB122　完掘（西から）

SB122-P56　土層断面（南から）



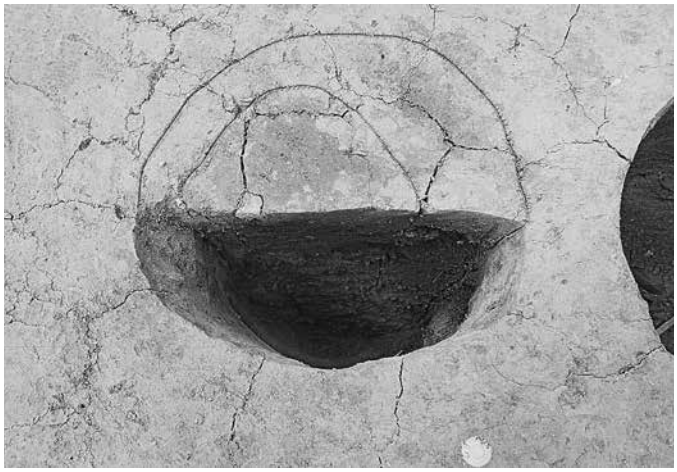
SB122-P74　土層断面（南から）



SB122-P74　完掘（南から）

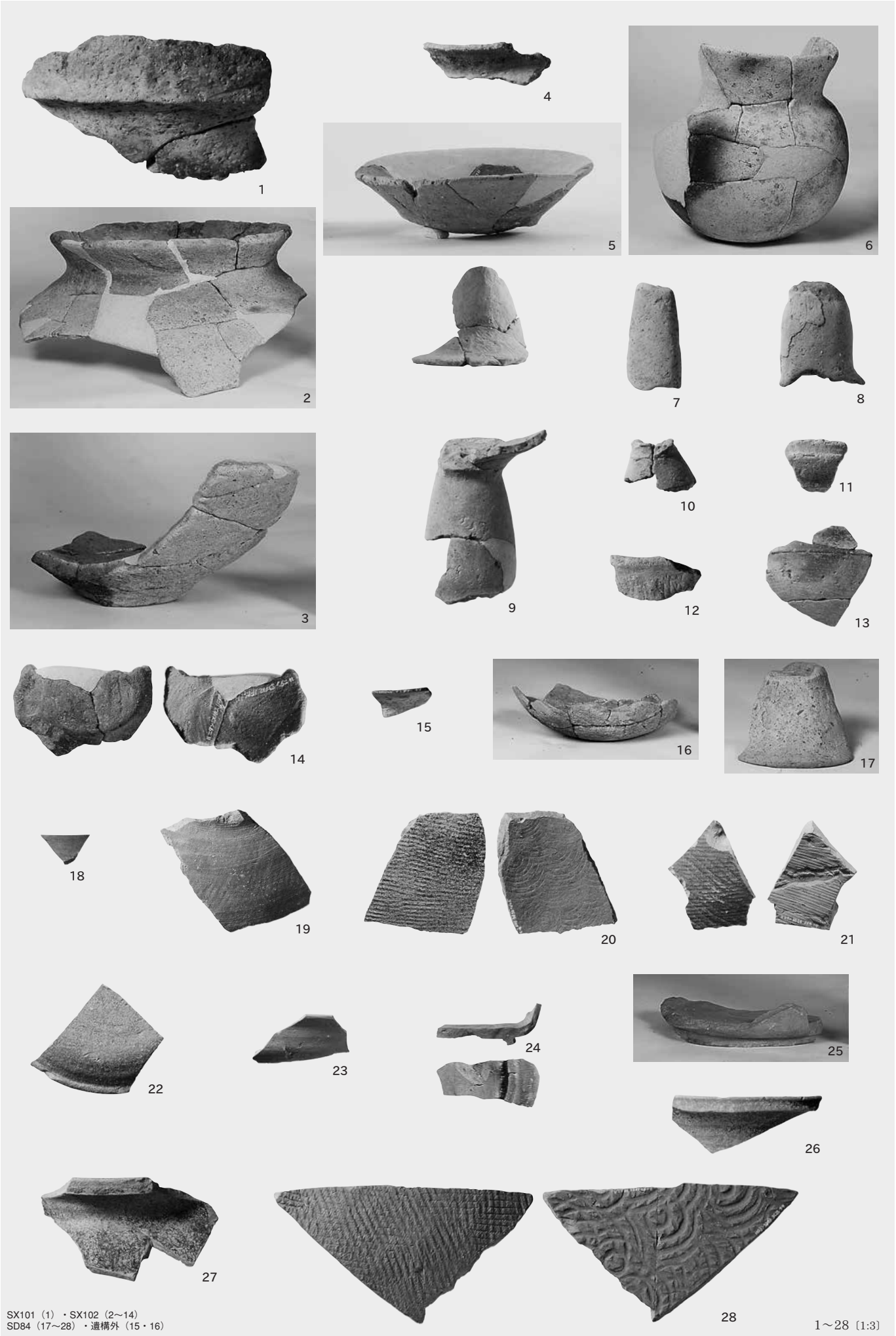
SB122-P78　土層断面（南から）

SB123　完掘（西から）



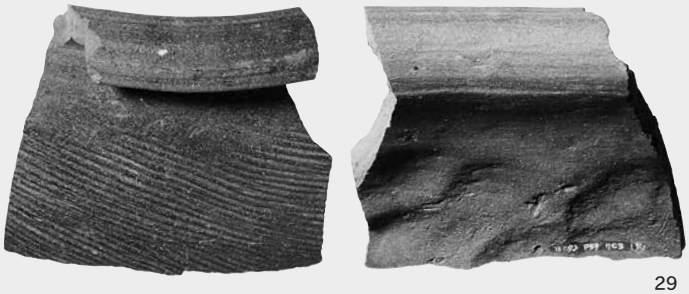
SB123-P35　土層断面（南から）

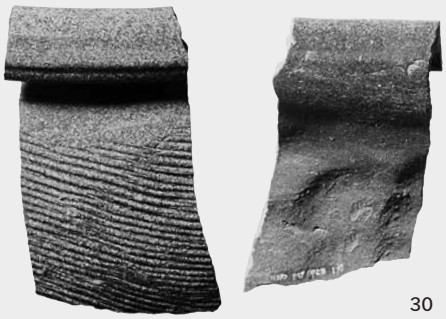
SE79　土層断面（南から）



SX101（1）・SX102（2～14）
SD84（17～28）・遺構外（15・16）

1～28〔1:3〕


29


30

31

32

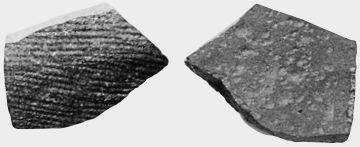
33

34

36

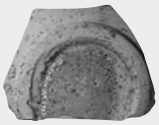
35

37


38

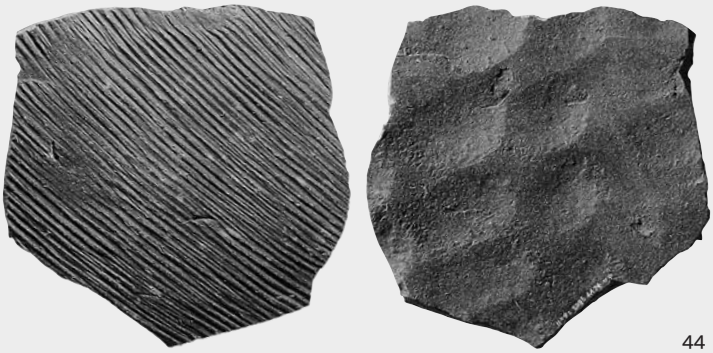
39

40


42

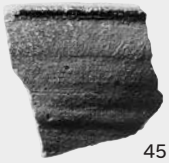
41

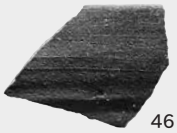
43

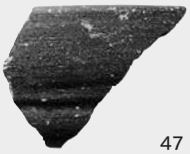

44

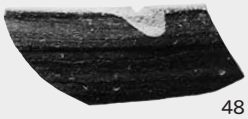
SE3（31・32）・SE83（37）・SE169（34～36）
SK44（33）・SB121-P17（38）・SB123-P31（39）
SB121-P59（29・30）・SB261-P203（40）・SD84（41～44）

29～44〔1:3〕

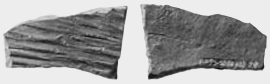

45


46


47


48

49


50

51

52

53

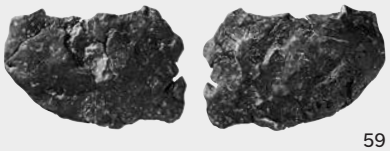
54

55

56

57

58


59

X線写真（S=1/1）

SD84（45～52・54～59）・SB123-P31（53）　　45～58〔1:3〕　59〔1:2〕

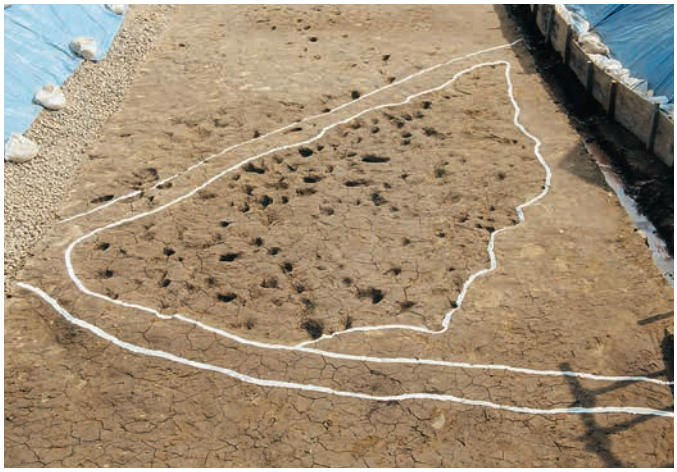
遺跡の位置と周辺の景観（米極東空軍　昭和 21 年 10 月 10 日撮影　空中写真）

遺跡全景（上空から）

遺跡近景（東から）

11D　基本層序（南東から）

SK4001　土層断面（西から）



畦畔④・⑤（北から）

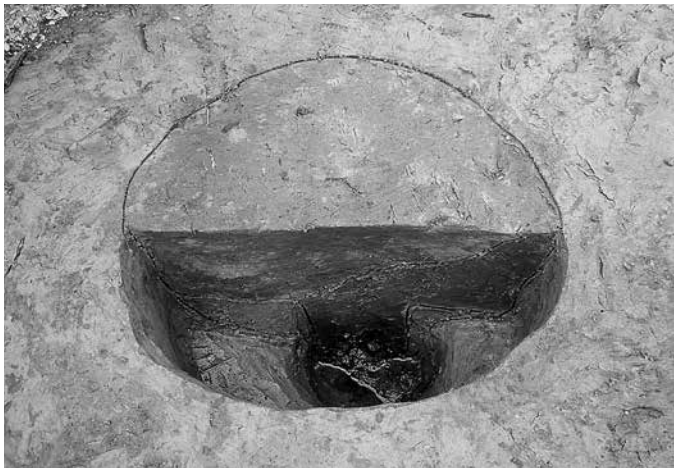
畦畔③　土層断面（南東から）

遺跡近景（西から）

12B　基本層序（東から）

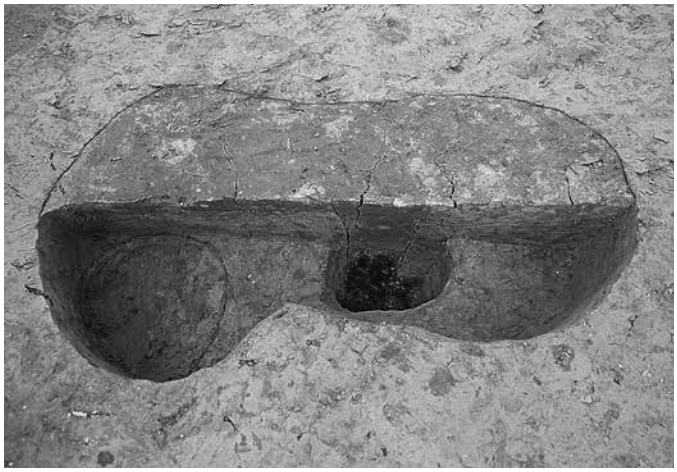
12C（Ⅹ層）完掘状況（西から）

P4003　土層断面（南から）



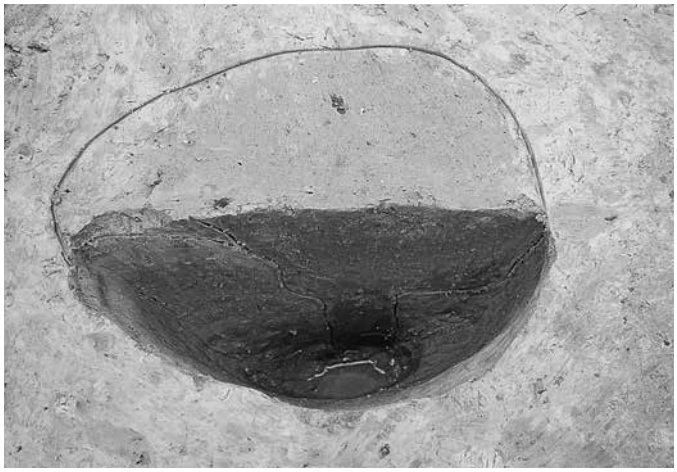
P4005　土層断面①（南から）

P4005　土層断面②（南から）



P4012　土層断面①（南から）

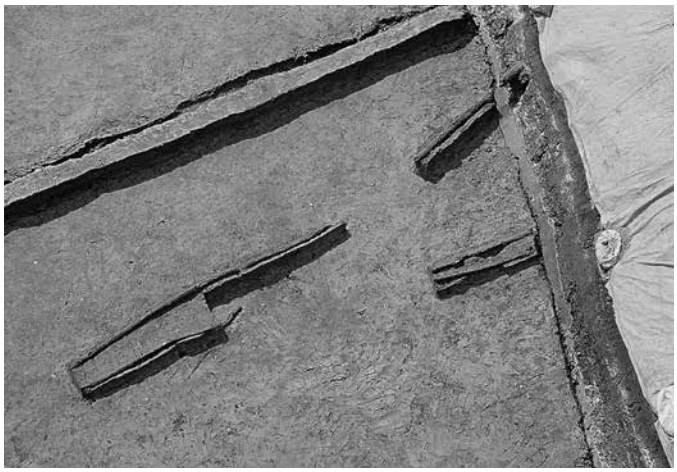
P4012　土層断面②（南から）



P4004　土層断面（南から）

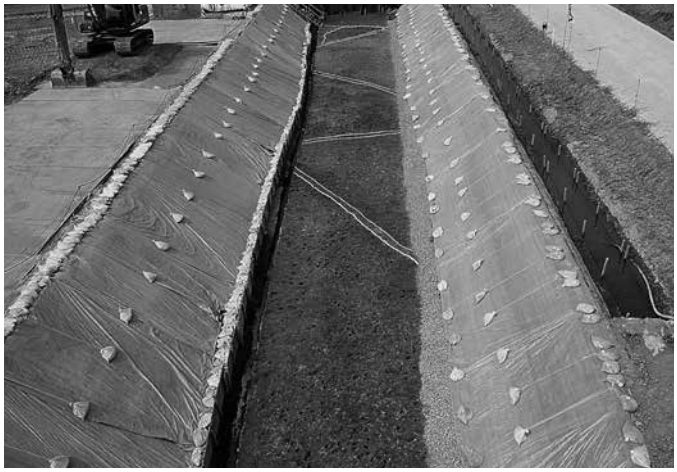
P4007　土層断面（南から）

P4008　土層断面（南から）



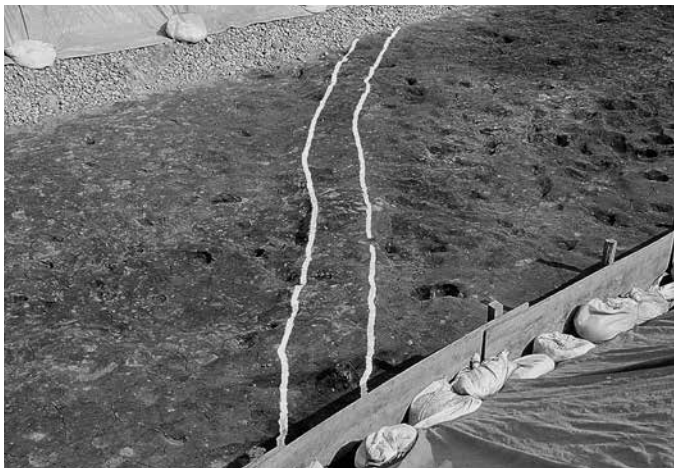
SX3915　検出状況（北から）

水田跡（Ⅸ層上面）全景（北から）



水田跡（Ⅸ層上面）全景（南から）

畦畔③（西から）



畦畔①（北から）

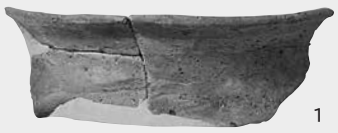
畦畔①　土層断面（南東から）

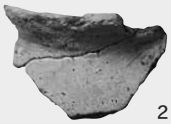
畦畔②　土層断面（東から）

畦畔④　土層断面（北東から）

畦畔⑤　土層断面（東から）

作業風景


1


2

3

4

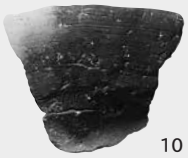
5

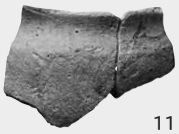
7

6

8

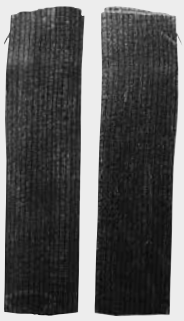
9


10


11

12

13


14

15

16

18

17

畦畔3（16）
P4005（18）・P4012（17）
Ⅸ層（1～15）

1～16〔1:3〕　17・18〔1:8〕

報告書抄録

ふりがな	にたんわりいせき・えんめいじいせき　に
書名	二反割遺跡・延命寺遺跡Ⅱ
副書名	一般国道 253 号上越三和道路関係発掘調査報告書
巻次	X
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 236 集
編著者名	細井佳浩・今井昭俊・山下 研（以上、株式会社吉田建設）、髙橋保雄（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、古環境研究所
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒 956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　TEL　0250（25）3981
発行機関	新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	西暦 2012（平成 24）年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
二反割遺跡（にたんわりいせき）	新潟県上越市三和区大字岡木字二反割1,013番地ほか（にいがたけんじょうえつしさんわくおおあざおかぎあざにたんわりばんちほか）	15222	1551	37° 08′ 10″	138° 19′ 21″	20110627 ～ 20110915	2,700	一般国道 253 号 上越三和道路建設
延命寺遺跡（えんめいじいせき）	新潟県上越市下野田字延命寺（市道諏訪上野田線下）（にいがたけんじょうえつしもの た あざえんめいじ しどうすわかみのたせんした）	15222	290	37° 07′ 43″	138° 17′ 38″	20110725 ～ 20110915	800	一般国道 253 号 上越三和道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二反割遺跡	集落	古墳時代中期～後期（5 ～ 6 世紀）	土坑 1 基、遺物が多く出土する自然の落ち込み 2 か所	土師器、須恵器	集落の縁辺部に相当する。
	散布地	古代（8 ～ 9 世紀）		須恵器	
	集落	中世（12 世紀）	掘立柱建物 10 棟、井戸 5 基、溝 2 条、土坑 8 基、性格不明遺構 1 基	珠洲焼、白磁、土師質土器、土師質土器を円盤状に加工した土製品、敲石、砥石	集落は規模の異なる掘立柱建物、倉庫、井戸、土坑で構成され、これを大規模な溝（堀）で区画する形態である。
延命寺遺跡	散布地	古墳時代前期	土坑 1 基、ピット10 基、溝 1 条	土師器	
	集落	飛鳥時代（7 世紀前半）		土師器、柱根、砥石	2 基の柱根は掘立柱建物の可能性がある。集落の東側縁辺部に相当する。
	水田跡	奈良時代（8 世紀前葉～中葉）	小畦畔 5 条（水田区画 6 枚）、性格不明遺構 1 基	曲物底板、畦畔上に敷かれた植物遺体	地形に沿って緩やかに湾曲する細長い水田区画が復元できた。人の足跡と思われる痕跡が認められた。集落周辺に広がる水田跡である。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 236 集

一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書X

二反割遺跡・延命寺遺跡Ⅱ

2012(平成24)年3 月 16 日印刷　編集・発行　新潟県教育委員会
2012(平成24)年3 月 30 日発行　〒 950－8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話 025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒 956－0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話 0250（25）3981　FAX 0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒 950－2022　新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025（233）0321　FAX 025（233）0322

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第236集　『二反割遺跡・延命寺遺跡Ⅱ』　正誤表

ページ	範囲	誤	正
例言	11	吉田建設埋蔵文化財部	吉田建設埋蔵文化財調査部
14	6行目	「1A・2B・3C…」	「A1・B2・C3…」
16	4行目	少ブロック	小ブロック
16	29行目	性格不明遺構、	「、」を取る
22	12行目	短径148	短径148cm
45	22行目	2）古代の遺構	2）奈良時代の遺構
60	7行目	飯坂盛秦	飯坂盛泰
62	3・4行目	高橋興衛門	高橋興右衛門